

七書

十一

竹簡

魏武



孫子

※この本は、現代に伝わる4種類の『孫子』の翻訳と解説です。

4種類の『孫子』は次のとおりです。

- ・竹簡本『孫子』
- ・『武経七書』所収『孫子』
- ・『十一家註孫子』
- ・『魏武帝註孫子』

現代に伝わる『孫子』は、基本的にこれらの派生形です。ですから、これらの『孫子』を学んでおけば、孫子の兵法を正しく使えるようになるでしょう。

目次

はじめに

第1章 竹簡本『孫子』を復元する

第2章 『武経七書』所収『孫子』と『十一家註孫子』を比較する

第3章 『魏武帝註孫子』を読む

はじめに

1972年4月、中国の山東省臨沂県さんとうしょう りんぎけんにある前漢時代の墓のなかから、大量の竹簡が発見されました。これを「銀雀山漢墓竹簡ぎんじゃくざんかんぼちくかん（銀雀山漢簡ぎんじゃくざんかんかん）」と言います。竹簡とは、文字を記すため、竹を細長く、平らに加工したものです。

これらの竹簡のなかには、『孫子』もありました。『孫子』は、世界的に有名な兵書（兵法を記した本）で、春秋時代（紀元前770年～紀元前403年）の中国で活躍した孫武の兵法が記されています。このとき発見された竹簡本『孫子』は、従来本『孫子』（『魏武帝註孫子』、『武經七書』所収『孫子』、『十一家註孫子』の3つ）と比べてみると、大半は同じですが、いくつか違ったところもあります。ですから、竹簡本『孫子』は、『孫子』を学ぶうえで、重要な資料となっています。

ただし、竹簡本『孫子』は、長いこと地中に埋もれていたことから、竹簡に多くの損傷があり、断片化してしまっています。そのために失われている文字もたくさんあります。そのままでは、非常に読みにくい状態にあります。

そこで、この本では、竹簡本『孫子』で失われているところについて、従来本『孫子』や他の中国古典を参考にして補うことで、竹簡本『孫子』を試みに復元し、文章として読みやすくしました。もちろん、本文のうち、どこが竹簡本『孫子』であり、どこが補ったところであるのかについては、明示しています。さらに、従来本『孫子』についても、あわせて紹介しています。ですから、これから『孫子』を学びたい人、語りたい人にとって、便利な一冊になるでしょう。

ところで、孫武や『孫子』について、よく知らない読者のため、簡単な説明を以下に掲

載しています。また、竹簡本『孫子』各篇の順序は、従来本『孫子』と異なっていますので、そのことについても簡単に説明しています。さらに現代に伝わる『孫子』は、全13篇を2つに分けているものあれば、3つに分けているものもありますので、そのことについても簡単に紹介しています。必要に応じて、参照してください。

1. 孫武の紹介

孫武の生きていた春秋時代の中国は、多くの国に分かれ、互いに争っていました。それらの国のなかで、とくに有力な12の国を「^{しゅんじゅうじゅうにれっこく}春秋十二列国」と言います。それは、^ろ魯国、^{えい}衛国、^{しん}晋国、^{てい}鄭国、^{そう}曹国、^{さい}蔡国、^{えん}燕国、^{せい}齊国、^{そう}宋国、^{ちん}陳国、^そ楚国、^{しん}秦国の12ヶ国です。

孫武は、もともと齊国に住んでいたのですが、内乱を避けて^ご呉国（南方の新興国）に移り住みます（『新唐書』『古今姓氏書辯證』）。呉国では、ひっそりと目立たないところで暮らしていました。しかし、^{ごししよ}伍子胥（呉国の大臣）は、孫武が軍事において有能であることを知り、孫武を^{こうりよ}闔閭（呉国の王）に推薦します（『呉越春秋』）。孫武は、闔閭に『孫子』13篇を献上し、さらに宮殿の女官たちをみごとに兵士として訓練して見せました。この結果、闔閭から呉国の将軍として取り立てられます（『史記』『呉越春秋』）。

ちなみに、『史記』では、闔閭が孫武に対して女官たちを兵士として訓練するように命じたことになっていますが、『呉越春秋』では、孫武が闔閭に対して女官たちを兵士として訓練させてほしいと願い出たことになっています。「銀雀山漢墓竹簡」でも、孫武が闔閭に願い出たことになっています。

当時の呉国は、小国で、大国の楚国から圧力を受けており、楚国を憎んでいました。で

すから、闔閭は、すぐにでも楚国を攻撃したかったのですが、孫武や伍子胥の意見に従って、まずは民力を養うことにします。十分に民力を養ってから、唐国と蔡国に使者を派遣して同盟を組み、楚国に戦争をしかけました（『史記』『呉越春秋』）。このとき孫武は、3万の兵力で、20万の兵力をもつ楚国と対戦したわけですが、その兵法によって、みごとに勝利します（『新序』）。その後、闔閭は越国との戦いで戦死しましたが、呉国の勢いは衰えませんでした。呉国は、夫差（闔閭の息子）が王位を継いだ後、中原（中国の先進地域）の強大国である斉国や晋国を威圧できるほどまでに成長します。しかし、夫差が遠征を繰り返したことから、呉国は国力が弱まっていき、ついには越国に攻め滅ぼされてしまいます（『史記』『呉越春秋』）。

ところで、孫武が死んだ時期は不詳ですが、孫武の子どもたちは、富春を領地として暮らしました。戦国時代の斉国で軍師として活躍した孫臏は、孫武の子孫です（『新唐書』『古今姓氏書辯證』）。また、孫武の活躍が目ざましかったことから、後世になると、世間では軍事を語るとき、だれもが『孫子』13篇の話をするようになります（『史記』）。

【孫武関連年表】（年は紀元前）

584 晋国の申公巫臣が、呉国に先進的な軍事技術を伝える

537 楚国が、陳国、蔡国、許国、徐国、越国と連合して呉国を攻める

呉国に先進的な軍事技術が根付いたからか、呉国は一部で反撃に成功する

532 斉国で内乱が起こり、孫武は難を避けるために呉国に移住する

515 呉国で闔閭が呉王に即位する

この間に孫武は呉国に仕官する

512 闔閭が楚国との開戦を決意する

孫武と伍子胥は、まず楚国を弱らせるため、ゲリラ戦を発案し、採用される

511 ゲリラ戦を開始する

楚軍は、呉軍にほんろうされ、疲弊していく

508 豫象の戦い。楚軍は、呉国を攻めるが、呉軍のワナにはまって敗北する

506 柏挙の戦い。呉軍は、蔡国、唐国の軍と連合して柏挙で楚軍を破る。

その後、呉軍は、勢いに乗って進軍し、楚国の首都を占領する

505 楚王は秦国に援軍をかて、しかも呉国内でクーデターが起こる

呉王は、楚国の占領をやめ、呉軍をひきいて呉国に戻る

越国は、呉国のスキについて攻める

496 槁李の戦い。呉国は越国を攻めるが、奇襲されて闔閭が戦死する

闔閭の死後、息子の夫差が呉王となる

494 夫椒の戦い。呉国は越国を攻め、会稽で越王を捕虜にする

この後、呉王は覇者をめざし、列国との戦争を繰り返すようになる

485 呉国の伍子胥は、越国の策略によって呉王にうとまれ、自殺を命じられる

孫武も、伍子胥に続いて自殺させられたという説もあり

484 艾陵の戦い。呉軍は、斉軍を大敗させる

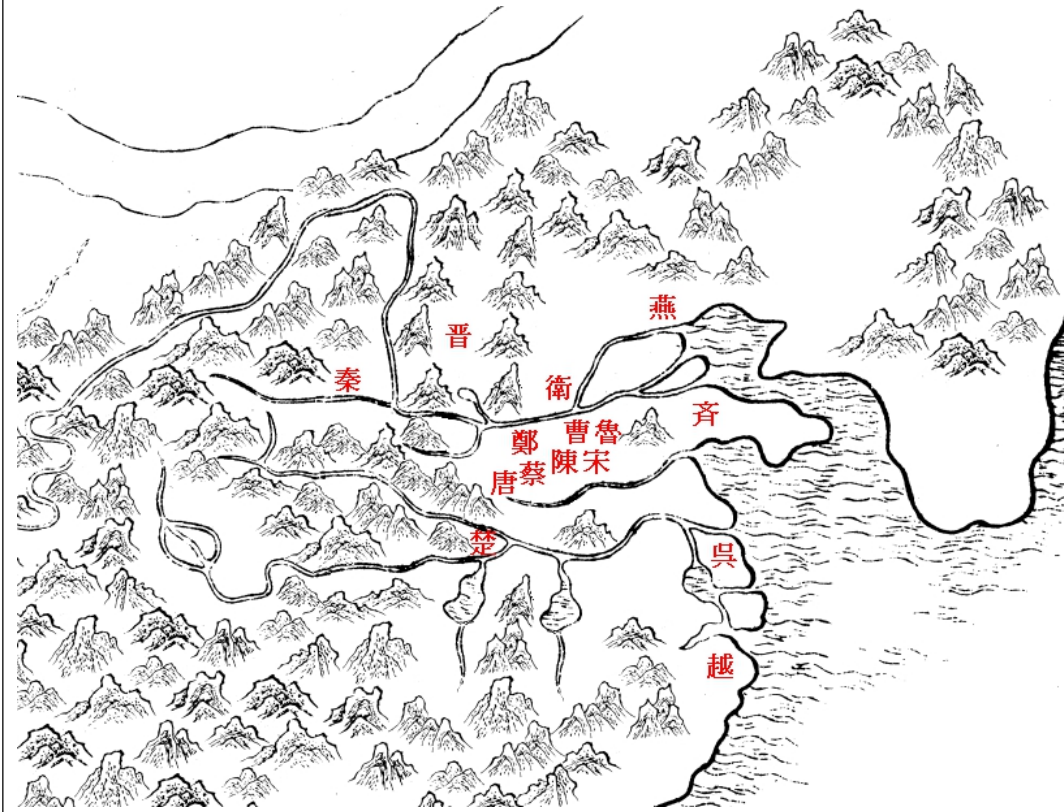
482 呉王が黄池で列国と会議しているスキに越国が呉国を攻める

478 笠沢の戦い。呉軍が越国に大敗する

475 姑蘇の戦い。呉国は、越国に攻められ、首都を落とされ、滅亡する

夫差は、越王に命乞いをするが、認められずに自殺する

春秋十二列国と孫子関連国



2. 各種の『孫子』

オリジナルの『孫子』は、『史記』の記録によると、全13篇であり、孫武が呉王の闔閭に献上したものであるとされています。もともと『孫子』は、この1つだけでしたが、現代の『孫子』は、いくつかの種類があり、それぞれ内容が微妙に異なります。それらは、大きく4つの系統に分けられます。①竹簡本『孫子』（銀雀山漢墓竹簡『孫子』）、②『魏武帝註孫子』、③『武經七書』所収『孫子』、④『十一家註孫子』の4つです。

竹漢本『孫子』は、前漢の時代のものです。1972年4月に中国の山東省臨沂県にある銀雀山漢墓から発見されました。ちなみに、このとき発見された竹簡（銀雀山漢墓竹

簡)には、孫武の兵法だけでなく、孫臏の兵法が記録されているものもありました。孫臏は、孫武の子孫で、戦国時代の斉国で軍師として活躍した人物です。銀雀山漢墓竹簡の発見によって、それまでは「『孫子』は孫臏の兵法を記録した兵書であり、孫武は架空の人物だ」という説もあったのですが、実際には『史記』の記述にあるように、2人の孫子がいいて、それぞれが兵法を残していたことが判明しました。ちなみに、孫臏の兵法に関する記録は、『孫臏兵法』として刊行されています。

その後、後漢時代に書かれた歴史書『漢書』の記録によると、「孫子の兵法」を記した書物として、『呉孫子兵法』(全82篇、図9巻)と『斉孫子』(全89篇、図4巻)の2つが出てきます。この2つの内容について、次の2つの説があります。

1つは、『呉孫子兵法』は孫武の兵法を記録したものであり、『斉孫子兵法』は孫臏の兵法を記録したものであるとする説です。隋代から唐代にかけて活動した学者の顔師古の注釈によると、『呉孫子兵法』は孫武の兵法であり、『斉孫子』は孫臏の兵法であるとされています。

もう1つは、『呉孫子兵法』と『斉孫子』はいずれも「孫子の兵法」を記録したものであり、そのうち呉国のあった地域(今の江蘇省あたり)で伝承されたものが『呉孫子兵法』であり、斉国のあった地域(今の山東省あたり)で伝承されたものが『斉孫子』であるとする説です。たとえば、『論語』にも、かつては魯国に伝わった『魯論語』(全20篇)、斉国に伝わった『斉論語』(全22篇)、孔子の旧宅から見つかった『古論語』(全21篇)の3種類があったような感じです。

現代の考え方によると、オリジナルの『孫子』13篇に対して、「孫子の兵法」を学ぶ

人たち（孫武や孫臏の後継者たち）が、孫武や孫臏の教え、ときには自分の考えを付け足していくことで、だんだんと記載量が増えていき、その結果として『呉孫子兵法』や『斉孫子』が誕生したのではないかとされています。なお、「銀雀山漢墓竹簡」に記録された「孫子の兵法」が、『呉孫子兵法』と『斉孫子』のいずれに属するのか、いずれにも属さないのか、などについては、今のところ不明です。

その後、漢代末期から三国時代初期にかけて活躍した曹操[そうそう]が、『孫子』に注釈をほどこして、『魏武帝註孫子』（『孫子略解』）を作成します。曹操によると、当時の『孫子』は「文章が雑多になっていて、世の中に出回っているものは『孫子』本来の内容がわからないものになっている」（『魏武帝註孫子』序、『孫子略解』序）という状態にありました。そこで、曹操は、当時の『孫子』から余計なものを取り去り、『孫子』をオリジナルの状態に戻すことにしました。こうして誕生したのが、『魏武帝註孫子』です。現代まで伝えられてきた『孫子』は、すべて『魏武帝註孫子』がベースになっているとされています。なお、『新訂 孫子』（金谷治、2000年）によると、『魏武帝註孫子』が「最も古くてまた最もすぐれている」とのことです。

今に伝わっている『魏武帝註孫子』は、清代に孫星衍^{そんせいえん}が「平津館叢書」に収録したものが主流です。孫星衍が言うには、宋代に刊行された『魏武帝註孫子』を収録したそうです。しかし、その原本が見つかっていないので、その真偽は不明です。ちなみに、日本に現存する清家本『魏武帝註孫子』は、遅くとも室町時代（戦国時代）のものですから、清代のものよりは古いと言えます。

現代まで伝えられてきた『孫子』のうち、確実に最古と言える（当時の原本が現存して

いる)ものは、南宋の時代に刊行された『武経七書』所収『孫子』と『十一家註孫子』の2つになります。内容は、ほとんど同じですが、小さな違いもあります。ちなみに、これらの初版は、北宋の時代に刊行されています。

以上2つのうち、『武経七書』所収『孫子』は、北宋の時代、北宋国皇帝の神宗の命令によって編集された『武経七書』に収録されている『孫子』です。神宗は、自国の軍隊が弱く、外敵に負けてばかりいるので、軍事について改革しないといけないと思いました。そこで、軍隊の幹部候補生たちが兵法を学びやすくするため、基本となる7冊の兵書を定めさせました。こうして誕生したのが、『武経七書』です。ちなみに、『武経七書』に含まれる兵書は、『孫子』『呉子』『司馬法』『李衛公問対』『尉繚子』『三略』『六韜』の7冊となっています。

いっぽう『十一家註孫子』は、北宋の時代に兵家の吉天保が、過去11人(曹操、孟氏、李筌、杜佑、杜牧、陳皞、賈林、梅堯臣、王皙、何氏(何延錫)、張預)の『孫子』の注釈を集め、編集して一冊にまとめたものです。今では失われた本からの注釈も引用されており、『孫子』研究で重視されています。

これ以降、1972年に竹簡本『孫子』が発見されるまでの『孫子』は、以上の3種類(『魏武帝註孫子』、『武経七書』所収『孫子』、『十一家註孫子』)のいずれかの系統に属すると言われています(『中国兵書通覧』(許保林、解放軍出版社、1990年)、『孫子古本研究』(李零、北京大学出版社、1995年)など)。ただし、『孫子兵法新釈』(李興斌・楊玲、齊魯書社、2001年)によると、現行の『魏武帝註孫子』は『武経七書』所収『孫子』の系統に属するとのことでした。

その他として、上記の『孫子』をベースにして、独自の解釈を加えたものもあります。

たとえば、^{りゅういん}劉寅の『孫子直解』、^{ちょうほんがく}趙本学の『孫子書校解引類』、^{さくらだけいてき}櫻田景迪の『古文孫子正文』などです。これらに共通している大きな特徴は、「九変」の内容を独自なものに変更している点です。これらの本も、『孫子』を学ぶうえで参考になります。

3. 篇題木牘から推定する『孫子』13篇のオリジナルの順序

発掘された「銀雀山漢墓竹簡」には「^{へんだいもくとく}篇題木牘＝木の板に各篇の篇名を記した目次」もあり、そのなかには『孫子』の篇題木牘もありました。その内容は、下記のとおりです。

篇題木牘 1. ①～⑮の数字は、便宜的にふったもので、項目の順番を指します。 2. □は、なんらかの文字があることは分かりますが、判読できないものを指します。□1つにつき、文字1つに相当します。 3. …は、確実な字数は不明ですが、複数の文字が欠損していることを示しています。 4. 文字を□で囲っているものは、一部が欠落していますが、そのように読めないこともないという文字を記しています。ですから、実際は違う文字である可能性もあります。 5. 空白になっているところは、文字が欠損しているところです。	⑤	④ 執	③ □ □	②	①
	⑩	⑨ 実 □	⑧ ・ 軍	⑦ 行 … 九 □ 十 五	⑥
	⑮ 七 執 三 千 …	⑭ 火 陳 □	⑬ 用 間	⑫ 九 地	⑪ □ 刑

現代まで伝えられてきた『孫子』各篇の順序は、曹操が定めたものであるとも言われて

きました。その真偽のほどは定かではありませんが、篇題木牘を見る限りでは、竹簡本『孫子』各篇の順序には、従来本『孫子』各篇の順序と異なっているところがあります。いくつか文字が失われているので、全体について確実なことは言えませんが、確実に言えることは、次の2つです。

(1) 「実虚（虚実）」と「軍争」の順序が逆転している。（参考：従来本『孫子』にある「虚実」篇は、竹簡本『孫子』では「実虚」篇となっており、「実」と「虚」が逆転しています。ちなみに、「銀雀山漢墓竹簡」では、「主客」が「客主」となっている例もあります。）

(2) 「火攻」と「用間」の順序が逆転している。

以上をふまえて、『孫子』各篇のオリジナルの順番を推定してみます。その際、前提としたのは、次の4つです。

○前提1. ここでは、オリジナルの『孫子』は全13篇であったと仮定します。その理由は、次の3つです。第一に、「銀雀山漢墓竹簡『孫子』佚文」に「（孫）子曰。古（故）試之、得而用之、無不□得矣。若□十三篇（篇）所明道言功也。誠将聞□…」とあるから。第二に、「上孫家寨漢簡『孫子』佚文」に「孫子曰。夫十三篇（篇）…」とあるから。第三に、『史記』の記述では『孫子』を「十三篇」としているから。

○前提2. 篇題木牘の全項目15個（①～⑮）のうち、①～⑥と⑧～⑭までには篇名が記され、⑦には①～⑥の6篇の字数が記され、⑮には⑧～⑭の7篇の字数が記されていたと仮定します。その理由は、⑦と⑮は数字が記してあって、他と違っており、さらに⑦と⑮を除くと残りが13個となって、ちょうど『孫子』13篇の篇数に合うからです。

○前提3. 従来本『孫子』（『魏武帝註孫子』、『武經七書』所収『孫子』、『十一家註孫子』）にある13篇が、そのまま竹簡本『孫子』にもあったと仮定します。そのうえで、篇題木牘に欠落しているところは、従来本『孫子』を参考にして補っていきます。なお、従来本『孫子』のうち、『十一家註孫子』に記された篇名が最も竹簡本『孫子』の篇名に近いので、『十一家註孫子』の篇名を主に参考としています。（参考：曹操が注釈をほどこした『孫子』として、『魏武帝註孫子』とは別に『孫子略解』もあります。『魏武帝註孫子』に記された篇名は『武經七書』所収『孫子』と同様になっていますが、『孫子略解』に記された篇名は『十一家註孫子』と同様になっています。なお、『孫子略解』は、『魏武帝註孫子』よりも注釈のボリュームが増えています。『孫子』本文にやや誤字や脱字も見られるのが残念なところです。）

○前提4. 竹簡本『孫子』は、①～⑥と⑧～⑭の2部構成であったと仮定します（ここでは便宜的に①～⑥を上篇と言ひ、⑧～⑭を下篇と言っています）。その理由は、次の2つです。第一に、篇題木牘の⑧には篇名の上に「・」が付けてあり、あたかも「ここが節目」と言わんばかりであるから。第二に、⑦と⑮には数字があり、あたかも「ここで一区切り」と言わんばかりであるから。

以下、以上にもとづいて、篇題木牘を復元してみます。

第1に、冒頭①の部分には、篇名があったとします。

その理由は、「銀雀山漢墓竹簡」の他の篇題木牘を参照すると、冒頭の部分には篇名が記されているからです。

第2に、①～⑤には、従来本『孫子』の篇名をそのまま当てはめています。ただし、「勢」と「形」の順序は逆転しています。

第3に、従来本では「勢・形」と「軍争・実虚」は連続しており、「軍争・虚実」と「地形」の間には「九変」と「行軍」の2篇があります。しかし、篇題木牘に

⑤形	④勢	③謀攻	②作戰	①計
⑩九変	⑨実虚	⑧軍争	⑦篇数と字数	⑥行軍
⑮篇数と字数	⑭火攻	⑬用間	⑫九地	⑪地形

は「勢・形」と「軍争・実虚」の間にスペースが1つあり（⑥）、「軍争・虚実」と「地形」の間にスペースが1つしかありません（⑩）。残り4篇（地形・九地・用間・火攻）は場所が定まっていますので、⑥と⑩には「九変」と「行軍」のいずれかを当てはめることになります。ここでは、「九変」に「九地」と関連した内容があることから、「九地」と同じ下篇（⑧～⑭）に入れています。その結果、「行軍」は上篇（①～⑥）に入れています。

第4に、⑦と⑮には、篇数と字数を示す記述があったと仮定します。ちなみに、⑮「七執」の「執」には、「勢」「芸」「種」といった意味があります。ですから、「七執」は「七種」と読み替えることも可能です。

以上、試みに『孫子』各篇のオリジナルの順序を推定してみました。しかし、あくまでも試案ですので、読者のみなさんも、ぜひ自分なりに考えてみてください。ちなみに、参

考までに日中の研究者の試案を紹介しておきます。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
李零氏案 ※1	計	作戰	勢	形	謀攻	行軍	軍争	実虚	九変	地形	九地	用間	火攻
浅野裕一氏案 ※2	計	作戰	謀攻	勢	形	九変	軍争	実虚	行軍	地形	九地	用間	火攻
中島悟史氏案 ※3	計	作戰	勢	謀攻	形	行軍	軍争	実虚	九変	地形	九地	用間	火陣
王正向氏案 ※4	計	謀攻	勢	形	作戰	行軍	軍争	実虚	九変	地形	九地	用間	火攻

(出典) ※1 李零『孫子古本研究』(北京大学出版社、1995年)

※2 浅野裕一『孫子』(講談社学術文庫、1997年)

※3 中島悟史『曹操注解 孫子の兵法』(朝日文庫、2004年)

※4 王正向『孫子十三篇竹簡本校理』(軍事科学出版社、2009年)

4. 各種『孫子』13篇の構成

現存する『孫子』は、いずれも全13篇ですが、2部構成になっているものもあれば、3部構成になっているものもあります。

2部構成になっているものとしては、たとえば、『孫子説』、『孫子略解』、『古文孫子正文』などがあります。

3部構成になっているものとしては、たとえば、『魏武帝註孫子』、『武經七書』所収『孫子』、『十一家註孫子』などがあります。

なお、竹簡本『孫子』が2部構成であった可能性があることは、先述のとおりです。

以上について、表にまとめると、次のとおりです。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
竹簡本『孫子』	上篇						下篇						
	計	作戦	謀攻	勢	形	行軍	軍争	実虚	九変	地形	九地	用間	火攻
『孫子略解』 『孫子説』	卷之一・卷上						卷之二・卷下						
	計	作戦	謀攻	形	勢	虚実	軍争	九変	行軍	地形	九地	火攻	用間
『古文孫子正文』	上篇									下篇			
	計	戦	攻	形	勢	虚実	争	九変	行軍	地形	九地	火	間
『魏武帝註孫子』 『武經七書』所収『孫子』	卷上					卷中				卷下			
	始計	作戦	謀攻	軍形	兵勢	虚実	軍争	九変	行軍	地形	九地	火攻	用間
『十一家註孫子』	上卷				中卷					下卷			
	計	作戦	謀攻	形	勢	虚実	軍争	九変	行軍	地形	九地	火攻	用間

ところで、試みに復元した篇題木牘では、上段5篇、中段4篇、下段4篇になっています。これは、数字の上では、『魏武帝註孫子』の上巻5篇、中巻4篇、下巻4篇の構成に通じています。また、篇題木牘では、後半が軍争篇から始まっています。『孫子略解』も、軍争篇から後半が始まっています。前後の篇数も、前半6篇、後半7篇となっており、篇題木牘と同じです。

もしかすると曹操の生きていた時代にも、上記と同様の篇題木牘が出回っており、曹操は、『魏武帝註孫子』（『孫子略解』）を作成するにあたり、その篇題木牘を参考にしながら、『孫子』各篇を3つ（もしくは2つ）に分類したのかもしれませんが。そのため、篇題木牘と『魏武帝註孫子』（『孫子略解』）の構成には、上記のような共通点があるのかもしれません。もちろん、これは、あくまでも推測です。

5. 主な参考文献紹介

これから『孫子』をさらに学んでいきたいという人は、下記の本を参考にするとよいかもしれません。

『銀雀山漢簡釋文』（呉九龍著、文物出版社、１９８５年）

１９７２年４月に発掘された銀雀山漢墓竹簡の文字を活字（現代の漢字）にしている本です。竹簡本『孫子』を学ぶにあたり、便利な資料です。

『中国兵書集成』（中国兵書集成編委員会編、解放軍出版社・江沈書社、１９８７年）

中国歴代の主要な兵書が集められています。全５０巻あり、全編が影印本です。中国の兵法を学ぶにあたり、便利な資料です。

『孫子集成』（謝祥皓・劉申寧著、齊魯書社、１９９３年）

およそ８０種類の『孫子』が収録されています。全２４巻です。『孫子』を学ぶにあたり、便利な資料です。

『孫子』（浅野裕一著、講談社学術文庫、１９９７年）

竹簡本『孫子』を底本とし、欠落部分に従来本『孫子』をあてはめた本です。

『新訂 孫子』（金谷治著、岩波文庫、２０００年）

日本で『孫子』を読むにあたり、もっともオーソドックスな本です。

『二十四史』（中華書局編集部編、中華書局、２０００年）

中国の正史がすべて収録されています。中国史のエピソードを知るにあたり、便利な資料です。

『孫子兵法新釈』（李興斌・楊玲著、齊魯書社出版、２００１年）

従来本『孫子』をベースにし、竹簡本『孫子』も参照しながら、『孫子』を解説している本です。

『曹操注解 孫子の兵法』（中島悟史著、朝日文庫、２００４年）

竹簡本『孫子』を底本としつつ、曹操による注釈を付している本です。翻訳のみで原文はありません。

『孫子十三篇総合研究』（李零著、中華書局、２００６年）

１９９５年に刊行された『孫子古本研究』と１９９７年に刊行された『呉孫子発微』を合わせて一冊にした本です。他の中国古典に引用された「孫子の兵法」も整理されており、『孫子』を学ぶにあたり、便利な資料です。

『孫子十三篇竹簡本校理』（王正向著、軍事科学出版社、２００９年）

竹簡本『孫子』について、いろいろな中国古典を参照しながら復元を試みている本です。従来本『孫子』のうち、『十一家註孫子』を比較対象に使っています。

『孫子』各種（『中国兵書集成』『孫子集成』所収）

『群書治要』（『四部叢刊』所収）

隋代に虞世南によって編集された類書（たくさんの書物から、同じ項目に属する言葉を選び出し、まとめて記録している本）です。全１６０巻です。今では失われたしまった漢籍からの引用も多くあり、貴重な資料です。唐国の二代皇帝である太宗（李世民）からも称賛されています。

『芸文類聚』（『四庫全書』所収）

唐代に歐陽詢らによって編集された類書です。全１００巻です。事項の説明だけでなく、

それに関連する詩文も一緒に掲載しているところに特色があります。もちろん、今では失われた漢籍からの引用も多くあり、貴重な資料です。

『北堂書鈔』（『四庫全書』所収）

唐代に魏徵によって編集された類書です。全50巻です。唐国の二代皇帝である太宗（李世民）の命令によって編纂された政治の参考書です。巻数も少なく、引用して記録された文章も少ないですが、参考資料として役立ちます。

『通典』（『四庫全書』所収）

唐代に杜佑によって編集された類書です。全200巻です。「三通」や「九通」の一つです。歴代の制度について、いろいろな書物から各項目に該当する言葉を引用して紹介しています。ちなみに、「九通」とは、『通典』『通志』『文献通考』『続通典』『続通志』『続文献通考』『清朝通典』『清朝通志』『清朝文献通考』の9冊を言います。そのうち、『通典』を入れて3番目までを「三通」と言います。

『太平御覧』（『四庫全書』『四部叢刊』所収）

北宋の時代に北宋国の二代皇帝の太宗（趙匡義）の命令によって、李昉など13人の学者を動員して編集された類書です。全1000巻です。太宗は1日3巻を読み、1年で全巻を読破しています。多くの資料が記録されているので、文献の研究に役立っています。

第1章 竹簡本『孫子』を復元する

【表記】について

- ①竹簡本の欠落部分に従来本『孫子』（篇名については『十一家註孫子』、本文については『魏武帝註孫子』）の該当箇所の文章をあてはめて補うという形で構成しています。
- ②竹簡本に相当するところは、一本線（ ）を引いています。この部分だけを見れば、竹簡本がどのようなものか分かります。
- ③他の中国古典や先行の研究者の考えなどを参照して修正したところは、二本線（ ）を引き、注記しています。
- ④そのままではあてはめようがなく、従来本『孫子』の文章に対して、なんらかの修正や加工を加えてあてはめているところについては、波線（~~~~~）を引き、注記しています。
- ⑤文字の欠落は□で示しています。□は文字が1つであることを示しています。
- ⑥意味の上から文字を補っているところは、[]で示しています。
- ⑦各篇の順序は、現存の「篇題木牘」の破損が多く、確実な判断ができないので、従来本の順序を採用しています。
- ⑧竹簡本の文字は、特殊な文字を除いて、すべて現代の漢字に修正しています。なお（ ）でくくっている文字は、その前の文字を通用の文字に変換したものです。
- ⑨竹簡本と従来本の異同を調べやすくするため、両者の原文を対照するかたちで掲載しています。なお、従来本としては、『魏武帝註孫子』の本文を掲載しています。その理由は、「今に伝わる『孫子』は、すべて魏武帝（曹操）が注釈したものがベースになっている」と言われているからです。

【復元】について

竹簡本『孫子』を復元するにあたっては、次のようなルールに従って復元しています。

- ①竹簡本で欠落しているところを従来本の文章で補う。
- ②従来本のうち、『魏武帝註孫子』、『武經七書』所収『孫子』、『十一家註孫子』で異なる場合には、篇名については『十一家註孫子』を優先し、本文については『魏武帝註孫子』を優先する。
- ③竹簡本に残っている文章の流れから考えて、従来本の言葉を変更したほうがよいと分かるところは、従来本の言葉を変更する。
- ④従来本の文章がそのままでは竹簡本にあてはまらない場合には、他の中国古典を参照して補う。
- ⑤あてはまる文章がないときには、従来本や他の中国古典を参照しながら、あてはまる言葉を推定する。
- ⑥竹簡本に残っている文章は、変更しない。ただし、漢字は、特殊な漢字を除いて、すべて日本の常用漢字に変更する。
- ⑦竹簡本の「形」篇については、「甲」「乙」と名付けられた2種が発掘されているが、相互に参照しあって欠落した文章を補い、1つにまとめる。互いに漢字が異なっているところは、（ ）内に他方の漢字を示して、異同を明らかにする。

なお、この試みで復元された竹簡本『孫子』は、あくまでも著者の試案です。ですから、読者のみなさんには、いずれは自分なりの復元を試みてほしいと思います。きっと『孫子』の理解を深めることができるはずです。

第 I 篇 計

【原文】

竹簡本	從來本
計	始計第一
孫子曰。兵者、国之大事也。死生之地、 存亡之道、不可不察也。故輕（經）之以 五、效（校）之以計、以索其請（情）。一 曰道、二曰天、三曰地、四曰将、五曰法。 道者、令民与上同意者也、故可与之死、可 与之生、民弗詭也。天者、陰陽寒暑時制 也。順逆、兵勝也。地者、高下広狹（狹） 遠近險易死生也。将者、知（智）信仁勇嚴 也（1）。法者、曲制官道主用也（2）。 凡此五者、将莫不聞、知之者勝、不知之者 不勝。故校之以計、而索其情。曰。主孰有 道、将孰能、天地孰得、法令執行、兵衆孰 強、士卒（3）孰練、賞（罰）孰明、吾 以此知勝負矣。将聽吾計、用之必勝、留 之。不聽（4）吾計、用之必敗、去之。計	孫子曰。兵者、国之大事、死生之地、存 亡之道、不可不察也。故經之以五事、校之 以計、而索其情。一曰道、二曰天、三曰 地、四曰将、五曰法。道者令民与上同意、 可与之死、可与之生、而不畏危也。天者、 陰陽寒暑時制也。地者、遠近險易広狹死生 也。将者、智信仁勇嚴也。法者、曲制官道 主用也。凡此五者、将莫不聞、知之者勝、 不知者不勝。故校之以計、而索其情。曰。 主孰有道、将孰有能、天地孰得、法令孰 行、兵衆孰強、士卒孰練、賞罰孰明。吾以 此知勝負矣。将聽吾計、用之必勝、留之。 将不聽吾計、用之必敗、去之。計利以聽、 乃為之勢、以佐其外。勢者因利而制權也。 兵者詭道也。故能而示之不能、用而示之不

利以聽、乃為之勢、以佐其外。勢者因利而制權也。兵者詭道也。故能而示之不能、<u>用而視（示）之不用、近而視（示）之遠、遠而視（示）之近。</u><u>故（5）利而誘之、乱而取之、実而備之、強而避之、怒而撓（撓）之、攻其無備、出其不意。</u>此兵家之勝、不可先伝也。夫未戦而廟算勝者、得算多也。未戦而廟算不勝者、得算少也。多算勝、少算不勝、而況於無算乎。吾以此觀之、勝負見矣。	用、近而示之遠、遠而示之近、利而誘之、乱而取之、実而備之、強而避之、怒而撓之、卑而驕之、佚而勞之、親而離之、攻其無備、出其不意。此兵家之勝、不可先伝也。夫未戦而廟算勝者、得算多也。未戦而廟算不勝者、得算少也。多算勝、少算不勝、而況於無算乎。吾以此觀之、勝負見矣。
---	--

【注記】

（１）『潜夫論』「勤将」には、「孫子曰。将者、智也。仁也。敬也。信也。勇也。嚴也（孫子が言いました。将（リーダー）の資質は、智です。仁です。敬です。信です。勇です。嚴です）」とあります。ちなみに、「敬」とは、「自分をひきしめること」「自分をしっかり保つこと」です。

（２）曲制官道主用の解釈について、その区切り方によって、次のような違いがあります。

第一に、「曲制官道主用（部隊の編成の方法で、主として使用しているもの）」と１つにまとめて解釈するものがあります（趙本学）。

第二に、「曲制、官道、主用（部隊の編成が秩序にかなっており、役割の分担が道理にかなっており、それぞれが職務をまっとうしている）」と３つに区切って解釈するものが

あります（張賁）。

第三に、「曲制、官、道、主用（軍隊の制度、役割の分担、糧道、軍隊の費用の管理）」と4つに区切って解釈するものがあります（曹操）。

第四に、「曲、制、官、道、主用（部隊の編制、通信の道具、役割の分担、道路、主将が管理している全軍の兵器）」と5つに区切って解釈するものがあります（施子美）。

第五に「曲、制、官、道、主、用（軍隊の編成、規律の確立、役割の分担、糧道の確保、補給の管理、物品の準備）」と6つに区切って解釈するものがあります（劉賓）。

ちなみに、『管子』「七法」には「若夫曲制時挙、不失天時、毋墮地利（もし法制を完備し、適時に施行するなら、天の時を失わず、地の利をむだにしないようにします）」とあります。また、『鶡冠子』「天則」には「法者、曲制、官備、主用也」とあり、『孫子』で言う「官道」が「官備（官制が整備されていること）」となっています。

（3）士卒は、軍人です。士卒の士は、上級の軍人です。卒は、下級の軍人です。ちなみに、孫子の時代（春秋時代）の身分制度を紹介すると、名目上は「王＝天子」が中国のトップにいましたが、実際上は「王」の下にいる「諸侯＝領主たち」が各地を支配していました。「諸侯」の下には「卿＝上流の貴族」「大夫＝中流の貴族」「士＝下流の貴族」がいて、「諸侯」に仕え、「庶＝庶民」を治めていました。しかし、世の中が乱れていくにつれ、力のある臣下が、その主君をしのぎ、権力をふるうようになっていきます。

（4）「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」では、『銀雀山漢簡釈文』にある「留之不聽」をここにあてはめています。

（5）「故」の字があるとする説もあれば、ないとする説もあります。「浅野裕一『孫子』」と「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」では、「故」の字をつけています。『北堂

書鈔』と『太平御覧』の引用にも「故」の字がついています。『銀雀山漢墓竹簡（壺）』では、「故」の字が省かれています。ちなみに、竹簡の模本を見ると、このところには、たしかに一文字分のスペースがあります。

【翻訳】

孫子が言いました。

軍事は、国の一大事です。どこが安全で、どこが危険なのか。どうすれば存続し、どうすれば滅亡するのか。そういったことについて、明らかにしないとけません。

ですから、その管理にあたっては五事を用い、その調査にあたっては七計を用いて、その実情を調べます。

五事とは、第一に道（モラル）、第二に天（タイミング）、第三に地（ポジション）、第四に将（リーダー）、第五に法（システム）です。道とは、人民を君主と同じ思いにさせるものです。ですから、人民を「君主と一緒に死のう」「君主と一緒に生きよう」という気持ちにさせることができて、人民はたがわなくなります。天とは、陰陽、寒暑、その時に見合ったことをすることです。天に従ったり、背いたりすることで、戦勝が決まります。地とは、高い、低い、広い、狭い、遠い、近い、険しい、なだらか、危険、安全といった地理のことです。将とは、知恵、信義、仁愛、勇気、威厳を身につけていないといけないものです。法とは、軍隊の編成、規律の確立、役割の分担、糧道の確保、補給の管理、物品の準備のことです。およそ以上の5つは、将軍なら聞いていることです。これを知っている人は勝ち、知らない人は負けます。ですから、その調査にあたっては七計を用いて、その実情を調べます。

七計とは、「君主は、どちらが道徳的であるか」「将軍は、どちらが有能であるか」「天の時（グッドタイミング）と地の利（ベストポジション）は、どちらが得ているか」「法令は、どちらがよく守られているか」「兵隊は、どちらが強いのか」「軍人は、どちらが訓練されているか」「賞罰は、どちらが公明正大であるか」です。私は、以上を使って勝ち負けを知ります。

将軍が私の調査方法（七計）に従うなら、その将軍を用いれば必ず勝ちますから、留任します。将軍が私の調査方法（七計）に従わないなら、その将軍を用いれば必ず負けますから、解任します。

七計を使って調査してみて、こちらが有利であり、そして将軍がそれに従うなら、そこでこちらの勢いを増す方法を使い、それによって状況がこちらにとって都合よくなるようにします。こちらの勢いを増す方法とは、どうすれば有利になるのかを考えて臨機応変に対処することです。軍事とは、いかに相手をだますかです。ですから、できるのに、できないふりをします。用いているのに、用いていないふりをします。近づいているのに、遠ざかっているように見せかけます。遠ざかっているのに、近づいているように見せかけます。そこで、利益で釣って誘い出します。混乱させて撃ちとります。敵が充実しているときは備えます。敵が強大なときは避けます。敵を怒らせて、その心を乱します。敵の備えていないところを攻めます。敵の思いもよらないところに出ます。以上は、兵家の勝ち方であり、事前に伝えられないものです。

そもそも戦う前に廟堂にこもって勝ち目を計算してみて勝てるのは、勝算が多いからです。戦う前に廟堂にこもって勝ち目を計算してみて勝てないのは、勝算が少ないからです。勝算が多ければ勝ちますし、勝算が少なければ勝てませんが、ましてや勝算がなければ勝

ちようがありません。私は以上を使って観察するわけですが、そうすれば勝ち負けが見えてきます。

第2篇 作戰

【原文】

竹簡本	從來本
<u>作戰</u> <u>孫子曰。凡用兵之法、馳車（1）千駟、革車（2）千乘、帶甲</u>十万、<u>千里而饋（糧）、則内外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金、内外騷動、不得操事者七十万家（3）、</u>然後十万之師舉矣（4）。其<u>用戰、勝久則頓（鈍）</u>兵挫銳、攻城則力屈、久暴師則国用不足。夫鈍兵挫銳、屈力殫貨、則諸侯乘其弊而<u>起、雖知（智）者、不能善其後矣。故</u>兵聞拙速、未覩巧之久也。夫兵久而国利者、<u>未有也。故</u><u>不尽於知用兵</u>之害者、則不能尽知用兵之利也。善用兵者、役不再籍、糧不三載。取用於国、因<u>（糧）於敵</u>。故軍<u>食可足也。国</u><u>之貧於師者遠者遠輸、則百姓貧、近市（師）（5）者貴壳、則財竭、則必及丘役</u>	作戰第二 孫子曰。凡用兵之法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十万、千里饋糧。内外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金、然後十万之師舉矣。其用戰也、勝久則鈍兵挫銳、攻城則力屈、久暴師則国用不足。夫鈍兵挫銳、屈力殫貨、則諸侯乘其弊而起、雖有智者、不能善其後矣。故兵聞拙速、未覩巧之久也。夫兵久而国利者、未之有也。故不尽知用兵之害者、則不能尽知用兵之利也。善用兵者、役不再籍、糧不三載。取用於国、因糧於敵。故軍食可足也。国之貧於師者遠輸、遠輸則百姓貧。近師者貴壳、貴壳則百姓財竭、財竭則急於丘役。力屈財竭中原、内虛於家。百姓之費、十去其七。公家之費、破車罷馬、甲冑矢弓、戟楯矛櫓、

<u>（６）。</u> <u>屈力中原、内虚於家。百姓之費、</u> <u>十去其六。</u> 公家之費、破車罷馬、甲冑矢 弓、戟楯矛櫓、丘牛（７）大車（８）、十 去其六。故智将務食於敵。食敵一鐘、当吾 二十鐘。 一石、当吾二十<u>石。故殺適</u> <u>（敵）</u>者怒也。取敵之利者貨也。<u>車戰</u>得車 十乘以上、賞其先得者、而更其旌旗、車雜 而乘之、<u>卒共而養之、是胃（謂）勝敵而益</u> <u>強。故</u>兵貴勝、不貴久。故知兵之将、民之 司命、国家安危之主也。	丘牛大車、十去其六。故智将務食於敵。食 敵一鐘、当吾二十鐘。 一石、当吾二十 石。故殺敵者怒也、取敵之利者貨也。車戰 得車十乘以上、賞其先得者、而更其旌旗、 車雜而乘之、卒善以養之、是謂勝敵而益 強。故兵貴勝、不貴久。故知兵之将、民之 司命、国家安危之主也。
--	--

【注記】

（１）馳車は、スピードの速い戦車です。軽車とも言います。馬が動力源です。戦車１台には、３人が乗車します。そのうち１人が御者（運転手）となり、１人が石弓を使って遠くの敵を攻撃し、１人が鎌のついた槍を使って近くの敵を攻撃します。また、戦車１台につき、歩兵７２人が護衛につきます。歩兵は、２４人ずつの３隊に分かれています。

（２）革車の意味には、「革をはって丈夫にした戦車」と「輸送車」の２つがあります。

『礼記』「明堂位」や『孟子』「尽心下」の注記には、「革車、兵車也（革車は、戦車です）」とあります。『魏武帝註孫子』の注記によると、「革車、重車也（革車は、輸送車です）」とあります。『考古質疑』によると、革車には攻車（戦闘用の車両）と守車（支援用の車両）の２つがあるとされています。ちなみに、『李衛公問対』によると、補給車

1台につき、炊子（炊事係）10人、守装（メンテナンス係）5人、厩養（雑用係）5人、樵汲（薪拾いと水汲みの担当者）5人の合計25人が所属します。

（3）「日」の後、4文字目に「内」があります。「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」によると、ここに「内外騒動、不得操事者七十万家」（『北堂書鈔』『太平御覧』にある用間篇の引用部分）をもってれば、欠落している部分の字数に合うとされています。

「中島悟史『曹操注解 孫子の兵法』」は、ここに用間篇の「内外騒動、怠於道路」をあてはめています。欠落部分の字数は約20字ですから、今は「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」の説に従います。

（4）『史記』『平津侯主父列伝』と『漢書』『嚴~~硃~~吾丘主父徐嚴終王賈伝』には、「興師十万、日費千金」とあります。また、これは用間篇にも通じるものですが、『吳越春秋』『夫差内伝・十三年』に、「臣聞興十万之衆、奉師千里、百姓之費、国家之出、日数千金。不念士民之死、而争一日之勝、臣以為危国亡身之甚」とあります。

（5）竹簡本の「近市」の「市」について、『銀雀山漢墓竹簡（壺）』は「師（軍隊）」と解釈しています。このところは、従来本でも「師」となっています。ただし、このところについて、『孫子略説』は「近於市」と記載し、王皙の注釈は「近市」としています。そのまま読むなら、「市場」の意味になります。「吳九龍『銀雀山漢簡釈文』」と「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」も「市」としています。

（6）従来本では「国之貧於師者遠輸、遠輸則百姓貧。近於師者貴売、貴売則百姓財竭、財竭則急於丘役」となっていますが、竹簡本では「国之貧於師者遠者遠輸、則百姓貧、近市（師）者貴□□□□則□及丘役」となっており、字数が違っています。ちなみに、『太平御覧』では「国之貧於師者師遠逾也。遠輸則百姓貧、近師則貴売、貴売則百姓虚、虚則

竭、竭則急於丘役」となっており、さらに字数が増えています。ですから、竹簡本で文字が失われているところに、従来本の文字をそのままあてはめることができません。

このところについて、「近市（師）者貴□□□□」を、「李零『孫子古本研究』」は「近市（師）者貴売則財竭」とし、「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」は「近市者貴売公家竭」としています。また、「則□及丘役」を、「浅野裕一『孫子』」は「則以及丘役」とし、「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」は「則必及丘役」としています。

ここでは、「李零『孫子古本研究』」と「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」の説を折衷し、「近市（師）者貴売、則財竭、則必及丘役」としています。すると、その意味が「軍隊（もしくは市場）に近い人は（政府が戦争に必要なものを買集めるので）高く売り、そのときには（政府の出費がかさむので）財布がからっぽになり、そのときには（政府は戦争に必要なものを集めるために）必ず徴用に及びます（その結果、国民の負担が大きくなります）」となり、百姓（人びと）が貧しくなる理由の分かりやすい文章になります。

ところで、竹簡本では「及丘役」となっているところが、従来本では「急丘役」となっています。『釈名』『釈言語』に「急、及也。操功之使相逮及也」とあり、「及」と「急」は同系です。ですから「及」と「急」が入れかえられたとも考えられます。

（7）丘牛とは、村落の牛です。『春秋左伝注疏』『成公元年』に、こうあります。「周礼、九夫為井、四井為邑、四邑為丘、四丘為甸、小司徒職文也。司馬法、六尺為步、步百為畝、畝百為夫、夫三為屋、屋三為井、四井為邑、四邑為丘、丘有戎馬一匹、牛三頭、是曰匹馬丘牛。四丘為甸。甸六十四井、出長轂一乘、馬四匹、牛十二頭、甲士三人、步卒七十二人、戈楯具、謂之乘馬（周礼によると、9夫が井となり、4井が邑となり、4邑が丘

となり、4丘が甸となり、小司徒（内務大臣の副官のような役職）が担当します。司馬法によると、6尺が歩となり、100歩が畝となり、100畝が夫となり、3夫が屋となり、3屋が井となり、4井が邑となり、4邑が丘となります。丘には軍馬1匹、牛3頭があります。これを匹馬丘牛と言います。4丘が甸となります。甸は64井です。長轂（戦車）1台、馬4匹、牛12頭、甲士（防具を身につけた兵士）3人、歩卒（歩兵）72人、戈や楯などの兵器を出します。これを乗馬と言います）」

ちなみに、「長轂」については、『春秋左氏伝』「昭公五年」の「長轂九百」という記述に対する杜預の注釈として、「長轂、戎車也（長轂は、戦車です）」とあります。

（8）大車とは、大きな牛車です。『論語』「為政」に「子曰、人而無信、不知其可也。大車無輶、小車無軌、其何以行之哉（先生は言いました。人として信用がないなら、なんにもできません。大車（牛車）に牛をつなぎとめる道具がなく、小車（馬車）に馬をつなぎとめる道具がなければ、どうやって牛車や馬車を動かすことができるでしょうか）」とあります。

ちなみに、『論語集註』には「大車、謂平地任載之車。輶、輶端横木、縛輶以駕牛者（大車とは、平地で荷物を載せる車を言います。輶は、車両を牛馬にひかせるための棒についている横木で、牛車をけん引する牛をつなぐものです）」という注釈があり、それに従うと「大車」は「運搬用の牛車」ということになります。

【翻訳】

孫子が言いました。

およそ用兵の原則として、馳車（快速な戦車）が1000輛、革車（丈夫な戦車もしくは

は輸送車）が１０００輛、帶甲（防具を身につけた歩兵）が１０万人となります。１００里の遠征で食料を輸送するときには、内外の費（国費や軍費）、賓客の用（外交のための接待費）、膠漆の材（兵器の材料費）、車甲の奉（戦車や防具の維持費）のため、１日に千金を費やします。内も外も騒然となり、仕事に専念できない家が合計で７０万世帯になります。そうしてはじめて１０万人の軍隊が動員できます。

軍隊を戦いに使うにあたっては、勝っても長引かせれば、兵士を疲れさせ、鋭気をくじかせます。城を攻めれば、力がへこみます。長いこと激戦をすれば、国の費用が不足します。そもそも兵士を疲れさせ、鋭気をくじかせ、力をへこませ、財産を使いつくせば、諸侯がこちらの疲弊に乗じて攻撃をしかけてきます。知恵のある人がいたとしても、善後を図れなくなります。ですから、戦争は「へたくそでもすみやかにする」という話を聞いたことがあっても、「うまくやって長引かせる」ということを見たことはありません。そもそも軍事が長引いて国が得をしたということは、いまだかつてありません。

ですから、用兵にともなう害悪をことごとく知らない人と言うと、用兵にともなう利益をことごとく知ることができません。用兵のうまい人は、徴発は二回も行いませんし、食料は三回も運びません。道具を国から出し、食料を敵から奪います。ですから、軍隊の食料が足りるようにできます。

国が軍隊のために貧しくなるのは、遠征軍が遠くに輸送するからです。そのときには、人びとは貧しくなります。軍隊（もしくは市場）に近い人は高く売り、そのときには財布がからっぽになり、そのときには必ず徴用に及びます。中原（世の中）において力をへこませ、国内では各家庭においてからっぽになります。人びとの出費のうち、６０パーセントが消耗されます。

政府関係者の出費としては、車を壊され、馬を弱らせられます。甲（よろい）、冑（かぶと）、矢、弓、戟（鎌のついた槍）、楯（普通の盾）、矛（もろ刃の槍）、櫓（大きい盾）、丘牛（村落の牛）、大車（大きい牛車）のうち、60パーセントが消耗されます。

ですから、知恵のある将軍は、つとめて敵から食料を奪います。敵から1鍾（50リットル）の食料を奪うことは、こちらにとって20鍾（1000リットル）の食料を得ることに相当します。1石（約20リットル）の飼料を奪うことは、こちらにとって20石（約400リットル）を得ることに相当します。

ですから、敵を殺すのは怒っているからですし、敵の利益を奪い取るのはもうけたいからです。戦車で戦い、敵の戦車10輦以上を獲得したら、そのうち最初に獲得した人を賞します。かくして、その旌旗（軍旗）を自軍のものに変更し、獲得した戦車は自軍に組みこんで乗用し、捕虜にした兵卒は一緒にして扶養します。これが「敵に勝って、ますます強くなる」ということです。ですから、戦争は、勝つことを大切にし、長引くことを大切にしないのです。ですから、軍事を知っている将軍は、人民の命運をあずかり、国家の安危をにぎっています。

第3篇 謀攻

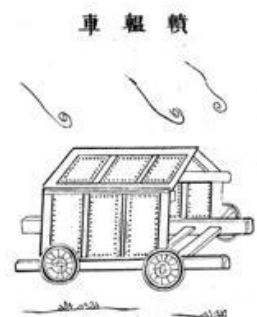
【原文】

竹簡本	從來本
謀攻 孫子曰。夫用兵之法、全國為上破國次之、全軍為上破軍次之、全旅為上破旅次之、全卒為上破卒次之、全伍為上破伍次之。是故百戰百勝、非善之善也。不戰而屈人之兵、善之善者也。故上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城。<u>〔攻〕城之法、修櫓轆輶（1）、其器械（2）、三月而止</u><u>□（3）。距闔（4）有（又）三月然後</u><u>已。將不勝其忿、而蟻附之、殺士卒三分之一、而城不拔者、此攻之（災）也。故善用兵者、誦（屈）人之兵而非戰也、拔人之城而非攻也。破人之國而非久也。必以全爭於天下、故兵不頓而利可全、此謀攻之法也。用兵之法、十則圍之、五則攻之、倍則分之（5）、敵則能戰之、少則能逃之、不</u>	謀攻第三 孫子曰。夫用兵之法、全國為上破國次之、全軍為上破軍次之、全旅為上破旅次之、全卒為上破卒次之、全伍為上破伍次之。是故百戰百勝、非善之善也。不戰而屈人之兵、善之善者也。故上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城。攻城之法、為不得已。修櫓轆輶、具器械、三月而後成、距堙又三月而後已。將不勝其忿、而蟻附之、殺士卒三分之一、而城不拔者、此攻之災也。故善用兵者、屈人之兵而非戰也。拔人之城而非攻也。毀人之國而非久也。必以全爭於天下、故兵不頓而利可全、此謀攻之法也。故用兵之法、十則圍之、五則攻之、倍則分之、敵則能戰之、少則能逃之、不若則能避之。故小敵之堅、大敵之擒也。夫將者

若則能避之。故小敵之堅、大敵之擒也。夫將者国之輔也。輔周則国必強、輔隙則国必弱。故君之<u>所以患軍</u>者三。不知軍之不可以進而謂之進、不知軍之不可以退而謂之退、是謂縻軍。不<u>知三軍</u>之事、而同三軍之政、則軍士惑矣。不知三軍之權、而同三軍之任、則軍士疑矣。三軍既惑 <u>（既）疑、諸侯之難至矣</u>、是謂乱軍引勝。故知勝有五。<u>知可而戰与不可而戰勝。知衆寡之用者勝、上下同欲者勝、以虞侍（待）不虞者勝、將能而君不御者勝。此五者、知勝之道也。故兵知皮（彼）知己、百戰不殆。</u>不知彼而知己、一勝一負。不知彼不知己、每戰必敗。	国之輔也。輔周則国必強、輔隙則国必弱。故君之所以患於軍者三。不知軍之不可以進而謂之進、不知軍之不可以退而謂之退、是謂縻軍。不知三軍之事、而同三軍之政、則軍士惑矣。不知三軍之權、而同三軍之任、則軍士疑矣。三軍既惑且疑、則諸侯之難至矣、是謂乱軍引勝。故知勝有五。知可以与戰不可以与戰者勝、識衆寡之用者勝、上下同欲者勝、以虞待不虞者勝、將能而君不御者勝。此五者、知勝之道也。故曰。知彼知己、百戰不殆。不知彼而知己、一勝一負。不知彼不知己、每戰必敗。
---	--

【注記】

（１）『武經總要』「攻城法」に輶輜のイラストがあります。その説明によると、下は空洞になっていて、上は牛の革でカバーしてあります。４つの車輪がついていて、中に１０人の兵士が入り、人力で推進して敵の城壁に近づいていきます。



（２）『芸文類聚』「居処部三・櫓」には「攻城之法、修櫓、粉楹、其器械、三月而後成」とあります。従来本には「攻城之法」に続いて「為不得已」とありますが、竹簡本に

は「為不得已」がありません。『芸文類聚』にも「為不得已」がありません。これは竹簡本と同じです。また、『銀雀山漢簡釈文』には「脩（修）器械（械）」という記載があり、「器械」を「具える」ものとしてではなく、「修める」ものとしてあついています。そこで、ここでは『芸文類聚』に従って「具器械」を「其器械」に修正しています。

ところで、「粉楯」ですが、従来本では「輶輶」となっており、『太平御覧』では「輶輶」となっています。字形は異なりますが、発音は同じ「フェンウェン」ですから、いずれも同じ兵器をさしていると考えられます。そこで、ここでは一般的な名称である「輶輶」を使用しています。

（３）「止」のあとには、１字の欠落があります。ここには、意味の上からして、「也」や「之」など、なにか区切りをつける文字があったのではないかと思います。

（４）『武経総要』「攻城法」に距堙（距堙）のイラストがあります。

その説明によると、盛り土をして山をつくっていきます。上には牛の



革で覆った小屋をつくり、土を運ぶ人を敵の攻撃から守ります。ちなみに、その使用方法ですが、敵の城内を偵察したり、敵の城壁を乗り越えたりするために使います。

（５）『史記』「淮陰侯列伝」には「十則圍之、倍則戦」とあり、『後漢書』「袁紹伝」には「十圍、五攻、敵則能戦」とあり、『晋書』「載記第十」には「十圍、五攻」とあり、『魏書』「列伝第四十二」には「十則圍之、倍則攻之」とあります。

【翻訳】

孫子が言いました。

そもそも用兵の原則としては、戦うことなく無傷のまま敵国を降伏させることが上等で、戦って敵国を降伏させるのは二番です。戦うことなく無傷のまま敵の軍団を降伏させることが上等で、戦って敵の軍団を降伏させるのは二番です。戦うことなく無傷のまま敵の旅団を降伏させることが上等で、戦って敵の旅団を降伏させるのは二番です。戦うことなく無傷のまま敵の大隊を降伏させることが上等で、戦って敵の大隊を降伏させるのは二番です。戦うことなく無傷のまま敵の小隊を降伏させることが上等で、戦って敵の小隊を降伏させるのは二番です。そういうわけで、連戦連勝することは最善ではありません。戦わないで敵の兵隊を屈服させることが最善です。

ですから、敵の策謀をうち破るのが最善です。敵の外交をうち破るのは次善です。敵の軍隊をうち破るのは三番目です。敵の城を攻めるのは最悪です。城を攻める方法としては、櫓（大きい盾）、轆轤（城を攻めるための装甲車）、その器械（城を攻めるための道具）を整備するのは、三カ月をめぐにして終了します□。距闌（敵の城内を監視するために土を盛り上げて作った見張り台）は、さらに三カ月をめぐにして完了します。将軍がイライラをこらえきれないで、蟻附（アリのように群がって城壁をよじ登ること）を命じ、兵士の3分の1を戦死させても、城が陥落しないというのは、城を攻めることにともなう災いです。ですから、用兵のうまい人は、敵の兵士を屈服させたとしても、戦ったわけではありません。敵の城を陥落させたとしても、攻めたわけではありません。敵の国を敗北させたとしても、長引かせたわけではありません。必ず無傷で勝つ方法を使って天下において争います。ですから、兵士は疲れませんし、利益は全うされます。以上が謀攻（謀略によって攻撃すること）の原則です。

用兵の原則としては、こちらの兵力が十倍のときには敵を囲みます。五倍のときには敵

を攻めます。二倍のときには敵を分けます。同等のときにはしっかりと敵と戦います。少ないときにはしっかりと敵から逃げます。かなわないときにはしっかりと敵を避けます。ですから、兵力が小さいのに強硬なら、兵力の大きい相手のえじきとなるだけです。

そもそも将軍とは、国の補佐役です。補佐がゆきとどいているときには、国は必ず強くなります。補佐にぬかりがあるときには、国は必ず弱くなります。

ですから、軍隊が君主のために悩まされる原因は3つあります。①君主が進軍すべきでないことを知らないくせに進軍を命令したり、退却すべきでないことを知らないくせに退却を命令したりするなら、軍隊の活動を阻害します。②君主が軍隊の現状について知らないくせに、将軍と同じように軍隊を管理しようとするなら、兵士たちは惑います。③君主が軍隊の戦法について知らないくせに、将軍と同じように軍隊を指揮するなら、兵士たちは疑います。全軍が惑うようになり、疑うようになったときには、諸侯からの圧力が加えられるようになります。これが「みずから軍隊を乱して、敵を勝たせる」と言うものです。

ですから、勝てることを知るためには、5つのことがあります。①敵と戦えるか、戦えないかを知っているほうが勝ちます。②多数を用いるべきか、少数を用いるべきかを分かっているほうが勝ちます。③上の者と下の者とが心を一つにしているほうが勝ちます。④準備をととのえ、相手がスキを見せるのを待つほうが勝ちます。⑤将軍が有能で、君主が現場のことによけいな口出しをしないほうが勝ちます。以上の5つのことは、勝てることを知る方法です。

ですから、「相手を知り、自分を知れば、いくら戦っても危機にみまわれることはない。相手知らなくても、自分を知っていれば、勝ったり負けたりする。相手を知らず、自分を知らなければ、戦うたびごとに必ず敗北する」と言われるのです。

第4篇 形

【原文】

竹簡本	從來本
<u>形</u> <u>孫子曰。昔善者（1）、先為不可勝、以</u> <u>（而）（2）侍（待）適（敵）之可勝。不</u> <u>可勝在己、可勝在適（敵）。故善者、能為</u> <u>不可勝、不能使敵可勝。故曰。勝可智</u> <u>（知）、而不可為也。不可勝守、可勝攻</u> <u>也。守則有余、攻則不足（3）。昔善守</u> <u>者、藏於九地之下、動於九天之上、故能自</u> <u>葆全勝也。見勝不過衆人之所智（知）、非</u> <u>善者也。戰勝而天下曰善、非善者也</u> <u>（4）。拳秋毫不為多力、視（見）日月不</u> <u>為明目、聞雷霆不為蕙（聰）耳。所胃</u> <u>（謂）善者、勝易勝者也。故善者之戰、無</u> <u>奇勝、無智名、無勇功。故其勝不貨</u> <u>（忒）。不貨（忒）者、其所錯（措）勝、</u> <u>勝敗者也。善者（5）、立於不敗之地、而</u>	軍形第四 孫子曰。昔之善戰者、先為不可勝、以待敵之可勝。不可勝在己、可勝在敵。故善戰者、能為不可勝、不能使敵之必可勝。故曰。勝可知、而不可為。不可勝者守也。可勝者攻也。守則不足、攻則有余。善守者藏於九地之下、善攻者動於九天之上。故能自保而全勝也。見勝不過衆人之所知、非善之善者也。戰勝而天下曰善、非善之善者也。故拳秋毫不為多力、見日月不為明目、聞雷霆不為聰耳。古之所謂善戰者、勝於易勝者也。故善戰者之勝也、無智名、無勇功。故其戰勝不忒。不忒者、其所措勝、勝已敗者也。故善戰者、立於不敗之地、而不失敵之敗也。是故勝兵先勝而後求戰、敗兵先戰而後求勝。善用兵者、修道而保法。故能為勝

不失敵之敗也。是故勝兵先<u>勝而後戰</u>、敗兵先戰<u>而後求勝</u>。故善者、<u>修道而保法</u>。故能為勝敗正（政）。法、一曰度、二曰量、三曰数、四曰称、五曰勝。地<u>生度、度生量、量生数、数生稱、〔稱〕生勝</u>。勝兵如以<u>鎰（鎰）稱朱（銖）、敗兵如以朱（銖）稱鎰（鎰）</u>。稱勝者戰民也、如決積水於千仞之谿者、形也。	敗之政。兵法、一曰度、二曰量、三曰数、四曰称、五曰勝。地生度、度生量、量生数、数生称、称生勝。故勝兵若以鎰称銖、敗兵若以銖称鎰。勝者之戰、若決積水於千仞之谿者、形也。
---	--

【注記】

（１）竹簡では「善」字以下が欠落し、従来のものでは「善戦者」となっています。従来のもので「善戦者」となっているところは、竹簡のこの篇では「善者」となっていますので、ここも「善者」に変更しています。

（２）形篇は、竹簡本には「甲」「乙」の２種類があります。内容は大同小異ですが、一方では「而」となり、他方では「以」となっています。ただし意味としては同じになります。

（３）『漢書』「趙充国辛慶忌伝」には「攻不足者守有余」とあり、『後漢書』「馮異伝」には「攻者不足、守者有余」とあり、『潜夫論』「救辺」には「攻常不足、而守恒有余也」とあります。

（４）竹簡では「非」字以下が欠落し、従来のものでは「非善之善者也」となっています。従来のもので「非善之善者也」となっているところは、竹簡のこの篇では「非善者也」と

なっていますので、ここも「善者」に変更しています。

(5) 上記(1)と同じ理由で「善者」に修正しています。

【翻訳】

孫子が言いました。

昔のうまい人は、まずこちらに敵の勝てない態勢を築き、そうして敵がこちらの勝てる状態になるのを待ちました。こちらに敵の勝てない態勢を築けるかどうかは、こちらの努力にかかっています。敵がこちらの勝てる状態になるかどうかは、敵の出方にかかっています。ですから、うまい人も、こちらに敵の勝てない状態を築くことはできますが、敵をこちらの勝てる状態にさせることはできません。ですから、「勝利は、知ることができても、作ることができない」と言われるのです。勝てないときは、守ります。勝てるときは、攻めます。守るときには、力に余裕が出ます。攻めるときには、力に不足が出ます。守るのがうまい人は、まるで地の下に深くもぐっているかのようにし、まるで天の上から勢いよくふってくるかのようにします。ですから、自分を保全でき、確実に勝利できるのです。

勝てると見こんでも、だれもが「勝てる」と分かるものにすぎないものは、良いものではありません。戦い勝って、みんながこちらの戦い方を「うまい」と言ってほめるものは、良いものではありません。だれでも持てる軽いものを持ちあげても、力が強いとは言えません。だれの目にも見える月や太陽を見ることができても、よく見分ける能力をもっているとは言えません。だれの耳にも聞こえる雷鳴を聞くことができても、よく聞き分ける能力をもっているとは言えません。(これと同じで、だれにもそれとわかる勝利は良いものではなく、だれにもわからない勝利が良いものなのです)。うまい人は、勝てる敵に勝ち

ます。ですから、うまい人が戦ったときには、奇抜な勝利はなく、知者という評判もなく、勇ましい功績ありません。ですから、その人が戦って勝つのは、まちがいないのです。まちがいないのは、その人が勝てるようにするにあたり、すでに負けている敵に勝つからです。ですから、うまい人は、こちらを負けない状態にして、敵が負ける状態になったところをのがしません。そういうわけで、勝てる兵隊は、まず勝てる状態にしてから戦います。負ける兵隊は、まず戦ってから勝とうとします。ですから、うまい人は、道理を身につけて、原則を守ります。ですから、「勝利をおさめ、敵を敗北させる政策」を実施できるのです。

原則として、「第一に程度をはかる。第二に物量をはかる。第三に規模をはかる。第四に優劣をはかる。第五に勝算をはかる。地形から程度が割り出される。程度から物量が割り出される。物量から規模が割り出される。規模から優劣が割り出される。優劣から勝算が割り出される」とあります。勝てる兵隊は、重いおもりを軽いおもりと比べるように優勢となります。負ける兵隊は、軽いおもりを重いおもりと比べるように劣勢となります。勝てる人が人民を戦わせる方法はと言うと、たっぷりとためた水を、一気に深い谷の底へと流すような感じになるわけですが、これが形（ありよう）というものです。

第5篇 勢

【原文】

竹簡本	從來本
<u>勢</u> <u>治衆如治寡、分数是。闘衆（1）如闘</u> <u>寡、形名是（2）。三軍之衆、可使必受敵</u> <u>而無敗、奇正是（2）。兵之所加如以段</u> <u>（礮）投卵者、虛實是（2）。凡戰者、以</u> <u>正合、以奇勝。故善出奇者、無窮如天地、</u> <u>無竭如河海。冬（終）而復始、日月是。死</u> <u>而更生、四時是也。声不過五、五声之變、</u> <u>不可勝聽也。色不過五、五色之變、不可勝</u> <u>觀也。味不過五、五味之變、不可勝嘗也。</u> <u>戰勢不過奇正、奇正之變、不可勝窮也。奇</u> <u>正環相生、如環之母（無）端、孰能窮之。</u> <u>水之疾、至於漂石者、勢也。鷺鳥之疾、至</u> <u>於毀折者、節也。是故善戰者、其勢險、其</u> <u>節短。勢如彊弩、節如發機。紛紛紜紜闘</u> <u>乱、而不可乱（3）。渾渾沌沌形圓、而不</u>	兵勢第五 孫子曰。凡治衆如治寡、分数是也。闘衆 如闘寡、形名是也。三軍之衆、可使必受敵 而無敗者、奇正是也。兵之所加如以礮投卵 者、虛實是也。凡戰者、以正合、以奇勝。 故善出奇者、無窮如天地、不竭如江海。終 而復始、日月是也。死而更生、四時是也。 声不過五、五声之變、不可勝聽也。色不過 五、五色之變、不可勝觀也。味不過五、五 味之變、不可勝嘗也。戰勢不過奇正、奇正 之變、不可勝窮也。奇正相生、如循環之無 端、孰能窮之哉。激水之疾、至於漂石者、 勢也。鷺鳥之疾、至於毀折者、節也。故善 戰者、其勢險、其節短。勢如彊弩、節如發 機。紛紛紜紜闘乱、而不可乱也。渾渾沌沌 形圓、而不可敗也。乱生於治、怯生於勇、

可敗。乱生於治、脅（怯）生於愚（勇）、 弱生於強。治乱、数也。愚（勇）脅 （怯）、執（勢）也。強弱、形也。善動適 （敵）者、刑（形）之、適（敵）必從之、 予之敵必取之。以此動之、以卒侍（待） 之。故善戰者、求之於執（勢）、弗責於 人。故能挾人而任勢。任勢者、其戰人也、 如轉木石。木石之生（性）、安則靜、危則 動、方則止、円則行。故善戰人之勢、如轉 石於千仞之山者、勢也。	弱生於強。治乱、数也。勇怯、勢也。強 弱、形也。故善動敵者、形之敵必從之、予 之敵必取之。以利動之、以本待之。故善戰 者、求之於勢、不責於人。故能挾人而任 勢。任勢者、其戰人也、如轉木石。木石之 性、安則靜、危則動、方則止、円則行。故 善戰人之勢、如轉円石於千仞之山者、勢 也。
--	---

【注記】

- （１）従来のものでは冒頭に「孫子曰凡」がありますが、竹簡本ではありません。
- （２）従来のものでは「是也」となっているところが、竹簡本では「是」になっていることから、「是」に修正しています。
- （３）「紛紛紜紜鬪乱、而不可乱也。渾渾沌沌形円、而不可敗也」について、竹簡本では「可敗」の後に「也」がないことから、ここでは「不可乱也」の「也」も削除しています。

【翻訳】

大軍を管理するにあたり、あたかも少数のようにスムーズに管理できるのは、きちんと組織だっているからです。大軍を戦わせるにあたり、あたかも少数のようにスムーズに戦

わせられるのは、命令を伝える手段がととのっているからです。全軍の兵隊が敵の攻撃を受けても絶対に負けないようにさせられるのは、奇策と正攻法とをうまく使いこなせるからです。攻撃をしかけたとき、あたかも卵に石を投げつけて割るように容易に勝てるのは、こちらの充実した力を使って敵の虚弱なところを攻めるからです。

およそ戦いにおいては、正攻法で敵にぶつかり、奇策で敵に勝つものです。ですから、うまく奇策を使いこなせる人は、天地のようにきわまりがありません。大河や大海のようにつきることがありません。終わってもまた始まるのは、まさに昼夜のくりかえしと同じです。死んでもまた生まれるのは、まさに四季のうつりかわりと同じです。音はもともと五音（宮・商・角・徴・羽）にすぎませんが、それらを組み合わせることによって無限の音を出せます。色はもともと五色（青・赤・黄・白・黒）にすぎませんが、それらを組み合わせることによって無限の色を出せます。味はもともと五味（辛・酸・鹹・苦・甘）にすぎませんが、それらを組み合わせることによって無限の味を出せます。（これらと同じように、奇策と正攻法も、組み合わせることによっていろいろな戦い方を無限に生み出せます）。戦いの勢いは、奇策と正攻法によって決まります。奇策と正攻法がもたらす変化は、どうにもきわめつくせないものです。奇策から正攻法が生まれたり、正攻法から奇策が生まれたりして、奇策と正攻法とが互いに生みあうわけですが、それは輪のようにつながっていて、つきるところがありません。これをきわめられた人は、はたしてだれかいたでしょうか。

激流が巨石をも押し流すようになるのは、勢いのたまものです。ワシやタカなどの大きな鳥が襲いかかって、小鳥をあっけなく打ち殺してしまうのは、動きのたまものです。そういうわけで、戦いのうまい人は、その勢いは強く、その動きは速いのです。勢いは、弓

を思いきり引きしぼるようなものです。動きは、タイミングをみはからって矢を放つようなものです。

ごちゃごちゃと乱闘になっても、軍隊が乱れません。ぐちゃぐちゃに陣形がくずれても、敵に敗れません。本当は治まっているけれど、乱れているように見せかけます。本当は勇ましいけれど、怯えているように見せかけます。本当は強いけれど、弱いように見せかけます。治まったり、乱れたり、組織化にかかっています。勇ましかったり、怯えたりは、勢いにかかっています。強かったり、弱かったりは、軍隊のありようにかかっています。

ですから、敵を思いどおりに動かせる人は、陽動すれば、敵がそれにひっかかります。エサを与えれば、敵がそれに食いついてきます。以上によって敵を思いどおりに動かし、こちらは兵卒を配置して敵を待ち伏せます。ですから、戦いのうまい人は、勢いを頼りにし、個人の活躍には期待しません。ですから、各人にふさわしい役割を与え、うまく勢いに乗せることができます。勢いに乗せることのできる人は、人を戦わせるにあたり、丸太や丸石をころがすようにします。木や石の性質として、平地に置けば動きませんが、急坂に置けばおのずと動きます。四角ければ動きませんが、丸ければおのずと動きます。（兵士もこれと同じで、その置かれている状況に応じて、おのずと勢いがついたり、つかなかったりするものですから、おのずと勢いがつく状況に兵士をおくようにします）。ですから、うまく人を戦わせる勢いは、高い山の上から石をころがしたときに生じる勢いと同じようなもの（おのずと生じるもの）であり、それがここで言う勢いです。

第6篇 實虛

【原文】

竹簡本	從來本
<u>實虛</u> <u>先處戰地而待（待）戰者佚（佚）、後處戰地而趨戰者勞。（1）故善戰者、致人而不致於人。能使適（敵）自至者、利之也。能使適（敵）不得至者、害之也。故敵佚能勞之、飽能飢之者、出於其所必趨也（2）。日（3）行千里而不畏、行無人之地也。攻而必取（4）、攻其所不守也。守而必固、守其所不攻也。故善攻者、適（敵）不知所守。善守者適（敵）不知其所攻。微乎微乎、至於無形。神乎神乎、至於無聲。故能為適（敵）司命。進不可迎者、衝其虛也。退（5）不可止者、遠而不可及也。故我欲戰、敵雖高壘深溝、適（敵）不得不與我戰者、攻其所必救也。我不欲戰、雖畫地而守之、適（敵）不得與我戰者、膠</u>	虛實第六 孫子曰。凡先處戰地而待敵者佚、後處戰地而趨戰者勞。故善戰者、致人而不致於人。能使敵人自至者、利之也。能使敵人不得至者、害之也。故敵佚能勞之、飽能飢之、安能動之。出其所不趨、趨其所不意。行千里而不勞者、行於無人之地也。攻而必取者、攻其所不守也。守而必固者、守其所不攻也。故善攻者、敵不知其所守。善守者、敵不知其所攻。微乎微乎、至於無形。神乎神乎、至於無聲。故能為敵之司命。進而不可禦者、衝其虛也。退而不可追者、速而不可及也。故我欲戰、敵雖高壘深溝、不得不與我戰者、攻其所必救也。我不欲戰、雖畫地而守之、敵不得與我戰者、乖其所之也。故形人而我無形、則我專而敵分。我專

其所之也。故善將者刑（形）人而無刑（形）、則我搏而適（敵）分。我搏而為一、適（敵）分而為十、是以十擊一也。我寡而適（敵）衆、能以寡擊衆（6）者、則吾之所與戰者、約矣。吾所與戰之地不可知、則適（敵）之所備者多。所備者多、則所戰者寡矣。備前者（7）後寡、（8）備左者右寡、無不備者無不寡。寡者備人者也。衆者、使人備己者也。知戰之日、知戰之地、千里而戰。不知戰之日（9）、不知戰之地、前不能救後、後不能救前、左不能救右、右不能救左、況（況）遠者數十里、近者數里乎。以吾度之、越人之兵雖多亦奚益於勝（哉）。故曰。勝可擅也。適（敵）唯（雖）衆、可毋（闕）也。故績（10）之而知動靜之理、形之而知死生之地、計之而知得失之策（11）、角之而知余不足之處。刑（形）兵之極、至於無刑（形）、〔無形〕則深間弗能規（窺）也。知（智）者弗能謀也。因刑（形）而錯勝於

為一、敵分為十、是以十攻其一也、則我衆敵寡。能以衆擊寡、則吾之所與戰者約矣。吾所與戰之地不可知。不可知則敵所備者多。敵所備者多則吾所與戰者寡矣。故備前則後寡、備後則前寡、備左則右寡、備右則左寡、無所不備則無所不寡。寡者、備人者也。衆者、使人備己者也。故知戰之地、知戰之日、則可千里而會戰。不知戰地、不知戰日、則左不能救右、右不能救左、前不能救後、後不能救前、而況遠者數十里、近者數里乎。以吾度之、越人之兵雖多亦奚益於勝哉。故曰。勝可為也。敵雖衆、可使無闕。故策之而知得失之計、作之而知動靜之理、形之而知死生之地、角之而知有余不足之處。故形兵之極、至於無形。無形則深間不能窺、智者不能謀。因形而措勝於衆、衆不能知。人皆知我所以勝之形、而莫知吾所以制勝之形。故其戰勝不復、而應形於無窮。夫兵形象水、水之形避高而趨下、兵之形避實而擊虛、水因地而制流、兵因敵而制

衆、衆不能知。人皆知我所以勝之形、而莫知吾所以<u>制刑（形）</u>。<u>所以勝者不復</u>、而応形於無窮。夫<u>兵刑（形）象水、水行辟（避）高而走下、兵勝辟（避）実撃虚。故水因地而制行、兵因敵而制勝。兵無成勢（勢）、無恒刑（形）、能与敵化之胃（謂）神。五行無恒勝、四時無常立（位）、日有短長、月有死生。・神要（12）</u>	勝。故兵無常勢、水無常形、能因敵變化而取勝者、謂之神。故五行無常勝、四時無常位、日有短長、月有死生。
--	---

【注記】

（1）従来のものでは冒頭に「孫子曰。凡」がありますが、竹簡本ではありません。

（2）従来本では「出其所不趨」となっていますが、竹簡本では「出於其所必□□」となっており、「不」と「必」が入れかわっています。竹簡本と同じように「必」としている資料としては『太平御覧』があり、「出其所必趨也」となっています。そこで、ここでは『太平御覧』を参考にして、竹簡本で欠落している「□□」のところに「趨也」をあてはめています。

（3）『商君書』「画策」に「日行千里、有必走之勢也」という表現があり、『史記』「項羽本紀」に「吾騎此馬五歳、所當無敵、嘗一日行千里、不忍殺之」という表現があり、『前漢紀』「高祖皇帝紀三」に「吾騎此馬五歳。常以一日行千里。吾不忍殺之」という表現があることから、それらを参考にして、「千里」の前の欠落部分に「日」を補っています。

す。

(4) 従来のもものでは「取」字の次に「者」がありますが、竹簡本のこの篇の他のところの記述に合わせて「者」を削除しています。

(5) 従来のもものでは「退」字の次に「而」がありますが、竹簡本のこの篇の他のところの記述に合わせて「而」を削除しています。

(6) 従来のもものでは「以衆撃寡」となっていますが、従来のもので「我衆而敵寡」となっているところが竹簡では「我寡而敵衆」となり、「衆」と「寡」が逆転していますので、「撃」の後の「寡」を「衆」に変更しています。

(7) 従来のもものでは、「備前則後寡」となっていますが、竹簡本のこの篇での書き方に合わせて「則」を「者」に変更しています。

(8) ここに従来のもものでは「備後則前寡」がありますが、従来のものにある下文の「備右則左寡」が竹簡本にはないことから、その書き方に合わせて「備後則前寡」を削除しています。

(9) ここは従来のもものでは「知戦日」となっていますが、従来のもので「知戦地」となっているところが竹簡では「知戦之地」となっていることから、それに合わせて「知戦日」を「知戦之日」に変更しています。

(10) 「績」には、成績、事績、功績といった意味があります。中国や日本の学者のなかには、ここの「績」は「蹟」のことであるとしている人もいます。「蹟」には、事蹟、形蹟、足蹟といった意味があります。その同義語として「迹」があるのですが、これには「事績（事蹟）をたどる＝調査する」という意味があります。なお、竹簡本の「績」のところは、従来本では「作」となっているのですが、ここのところについて、李筌や賈林な

どは「候＝偵察する」であるとしています。

(11) ここは従来のもものでは「策之而知得失之計」となっていますが、竹簡では「計之而知得失之□」となっています。「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」は、竹簡では最初に「計」が来ていることから、「計」と「策」が入れかわっていると考えられるとして、ここを「計之而知得失之策」と推定しています。竹簡本には従来本と比較して文字が入れかわっている例がいくつもあることから、今は「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」の説に従います。ちなみに、他書で「得失之策」という用語を使っている例としては、『戦国策』「斉策・斉宣王見顔闕」に「由此觀之、非得失之策与」とあります。

(12) 最後にある「神要」の頭に「・」が付いていますが、これは後人がメモしたことを示しているのではないかとされています。

【翻訳】

先に戦場に着いて敵を待ちうけるほうは、楽です。しかし、後から戦場に着いて急いで戦うほうは、疲れます。ですから、戦いのうまい人は、相手をコントロールしても、相手にコントロールされません。敵のほうからやってくるようにさせられるのは、敵を利でつるからです。敵がやってこられないようにさせられるのは、敵に害を与えるからです。ですから、敵が楽な状態にあるときには敵を疲れさせることができ、敵が食料に困っていないときには敵を飢えさせることができるのは、敵が（仲間を助けるために）必ず急いで向かってくる場所に出るからです。

一日に千里を行くほどのスピードで急いでもこわくないのは、だれもいないところを進むからです。攻めて必ず勝てるのは、敵が守っていないところを攻めるからです。守って

必ず負けないのは、敵が攻めてこないところを守るからです。ですから、攻めるのがうまい人は、敵がどこを守ればいいのかわからなくさせます。守るのがうまい人は、敵がどこを攻めればいいのかわからなくさせます。あまりにも微妙で、こちらの動向は敵に見えませんが、あまりにも神妙で、こちらの情報は敵に聞こえません。ですから、敵の命運を左右することができます。

こちらが進軍したとき、それを敵が迎撃できないのは、こちらが敵の弱いところをつくからです。こちらが退却したとき、それを敵が阻止できないのは、こちらが遠くて追いつけないからです。ですから、こちらが戦いたいと思えば、敵が塁を高くし、堀を深くして（守りを固めて）も、こちらと戦わざるをえなくなるのは、こちらが敵の必ず救うところを攻めるからです。こちらが戦いたくないと思えば、地面に線を引いた程度で守って（大した守りをしていなくて）も、敵をこちらと戦えなくさせられるのは、（偽装や陽動などによって）敵を思いどおりの方向に動けなくさせるからです。

ですから、うまい将軍は、相手を陽動して、こちらの実情を知られないようにしますが、そのときには、こちらは集まって一つになりますが、敵は分かれて十になります。これは、こちらは十倍の兵力を使って敵と戦うということです。こちらは少なくても敵は多くても、少数によって多数を撃破できるのは、すなわち、こちらの敵対する相手が小さくされているからです。こちらがどこで戦うつもりなのかについて知ることができなければ、敵は備えないといけなくところが多くなります。敵の備えないといけなくところが多くなれば、こちらが一度に戦う敵は少数になります。ですから、その前方を防備するなら、後方が少数となります。その左を防備するなら、右が少数となります。防備しないところがないようにするなら、どこもかしこも少数となります。少数になるのは、相手に備えるからです。

多数になるのは、相手を自分に備えさせるからです。

いつ戦うのかをわかり、どこで戦うのかをわかれば、（それにおいて兵力を集中できるので）遠いところでも敵と戦うことができます。いつ戦うことになるのかをわからず、どこで戦うのかをわからなければ、（いきなり敵と遭遇することになって）前方の部隊は後方の部隊を救えませんし、後方の部隊は前方の部隊を救えませんし、左の部隊は右の部隊を救えませんし、右の部隊は左の部隊を救えません。ましてや遠く離れた部隊やちょっと離れた部隊を救えるはずがありません。私の立場から見当をつけますに、我が宿敵である越国の兵士は、多いと言っても、どうして勝負に役立つでしょうか。ですから、「勝利は思いのまみにできる。敵が多数であっても、敵を戦闘させないようにできる」と言われるのです。

ですから（そのためにも、まず敵の実情を知る必要があるわけですが）、調査して、どのように行動し、どのように静止するのか、そのパターンを知ります。陽動して、どこが危険であり、どこが安全であるのか、その地の利を知ります。計算して、なにが得策であり、なにが失策であるのか、その内容を知ります。接触して、どこに余裕があり、どこに不足があるのか、その状況を知ります。

軍隊のありようとして最高なのは、（臨機応変にして柔軟にかたちを変えることによって）一定のかたちをとらないようにすることです。一定のかたちをとらなければ、いかにスパイでも、こちらのことをうかがい知ることができません。いくら知恵のある人でも、こちらのことをはかり知ることはできません。臨機応変にありようを決めて味方に勝利をもたらすわけですが、味方はそれを知ることができません。人びとは「どういったかたちで勝ったのか」について知ることはできますが、「どのようにしてありようを制御したの

か」について知ることはできません。ですから、このときの戦い方と勝ち方は二度と使えなくて、戦い方と勝ち方はありように応じて無数に変化します。

そもそも軍隊のありようは、水のようなものです。水の動きとしては、高いところへは向かわず、低いところへと向かいます。兵隊の勝ち方としては、敵の力の充実したところへは向かわず、敵の力の虚弱なところへと向かいます。水は地形に応じて（ありようを変えることで）スムーズに動きます。兵隊は敵状に応じて（ありようを変えることで）スムーズに勝ちます。兵隊は、一定の勢いもなければ、一定のかたちもなく、しっかりと敵情に応じて変化していくわけですが、これを「神妙」と言います。五行もつねに勝つということがありません（木は土に勝ち、火は金に勝ち、土は水に勝ち、金は木に勝ち、水は火に勝ちます）。四季もつねに変わらないということがありません（春から夏になり、夏から秋になり、秋から冬になり、冬から春になります）。太陽の出ている時間にも長短があります（夏至には太陽の出ている時間は長くなり、冬至には太陽の出ている時間は短くなります）。月の大きさにも満ち欠けがあります（新月に近づけば月は小さくなり、満月に近づけば月は大きくなります）。（このように、軍隊のかたちも一定しません）。・真髓であり、要点です。

第7篇 軍争

【原文】

竹簡本	從來本
軍争	軍争第七
<u>孫子曰。凡用兵之法、莫難於軍争</u> <u>(1)。軍争之難者、以益為直、以患為迂</u> <u>(2)。故迂其途、而誘之以利、後人發、</u> <u>先人至者、知迂(迂)直之計者也(3)。</u> <u>軍争為利、軍争為危。举軍而争利則遲不及</u> <u>(4)。委軍而争利則輜重捐。是故綦</u> <u>(卷)甲而趨利、日夜不处、倍道兼行、百</u> <u>里而争利、則擒三將軍(5)、勁者先、疲</u> <u>者後、則十一以至。五十里而争利、則厥</u> <u>(蹶)上将、法以半至。三十里而争利、則</u> <u>三分之二至。是故軍毋(無)輜重則亡、無</u> <u>糧食則亡、無委積(積)則亡。是故不知諸</u> <u>侯之謀者、不能豫交、不知山林險阻沮洳之</u> <u>刑(形)者不能行軍、不用鄉(向)道</u> <u>(導)者不能得地利。故兵以詐立、以利</u>	孫子曰。凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆、交和而舍、莫難於軍争。軍争之難者、以迂為直、以患為利。故迂其途、而誘之以利、後人發、先人至、此知迂直之計者也。軍争為利、衆争為危。举軍而争利則不及。委軍而争利則輜重捐。是故卷甲而趨、日夜不处、倍道兼行、百里而争利、則擒三將軍、勁者先、疲者後、其法十一而至。五十里而争利、則蹶上將軍、其法半至。三十里而争利、則三分之二至。是故軍無輜重則亡、無糧食則亡、無委積則亡。故不知諸侯之謀者不能豫交、不知山林險阻沮洳之形者不能行軍、不用鄉導者不能得地利。故兵以詐立、以利動、以分合為變者也。故其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、難知

動、以分合變者也。故其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、難知如陰、動如雷震。掠鄉分衆、廓地分利、縣（懸）權而動。先知迂（迂）直之道者勝、此軍爭之法也。是故軍政曰。言不相聞、故為鼓金。視不相見、故為旌旗。是故昼戰多旌旗、夜戰多鼓金。〔鼓金〕旌旗者、所以一民之耳目也（6）。民（既）已搏（專）一則勇者不得獨進、怯者不得獨退、此用衆之法也。故夜戰多鼓金（7）、昼戰多旌旗、所以變人之耳目也。三軍可奪氣、將軍可奪心。是故朝氣銳、昼氣惰、暮氣歸。善（8）用兵者、辟（避）其兌（銳）氣、擊其惰歸、此治氣者也。以治待亂、以靜待譁、此治心者也。以近待遠、以佚（佚）待勞、以飽待飢、此治力者也。無邀（邀）〔 〕（正正）之旗、勿擊堂〔堂〕之陣、此治變者也。夫善用兵者、高邱勿向（9）、倍（背）丘勿迎、詳（佯）北勿從、圜師遺關、歸師勿謁（遏）、此用衆之法也（1

如陰、動如雷震。掠鄉分衆、廓地分利、懸權而動、先知迂直之計者勝、此軍爭之法也。軍政曰。言不相聞、故為之金鼓、視不相見、故為之旌旗。夫金鼓旌旗者、所以一人之耳目也。人既專一則勇者不得獨進、怯者不得獨退、此用衆之法也。故夜戰多金鼓、昼戰多旌旗、所以變人之耳目也。三軍可奪氣、將軍可奪心。是故朝氣銳、昼氣惰、暮氣歸。善用兵者、避其銳氣、擊其惰歸、此治氣者也。以治待亂、以靜待譁、此治心者也。以近待遠、以佚待勞、以飽待飢、此治力者也。無邀正正之旗、勿擊堂堂之陣、此治變者也。故用兵之法、高陵勿向、背丘勿逆、佯北勿從、銳卒勿攻、餌兵勿食、歸師勿遏、圜師必關、窮寇勿迫、此用兵之法也。

【注記】

（1）この部分は、竹簡では失われているのですが、約16字のスペースとなっています。従来本は、「孫子曰。凡用兵之法、将受命於君、合軍聚衆、交和而舍、莫難於軍争」となっており、26字になっています。この部分は、『通典』では「用兵之法、莫難於軍争」となっており、従来本の「将受命於君、合軍聚衆、交和而舍」が削除されています。これに従って、文章を「孫子曰。凡用兵之法、莫難於軍争」に修正すると、ちょうど13字になります。「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」も同様に修正しています。

（2）『銀雀山漢墓竹簡（壺）』では「以□為直、以患」となっていますが、「吳九龍『銀雀山漢簡釈文』」は「以益為直、以患」としています。「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」も、竹簡を確認すると□のところには「益」の一部が残っているということで、「以益為直、以患」としています。『銀雀山漢墓竹簡』の模本で当該部分を確認しますと、たしかに「益」に見えます。そこで、ここでは「吳九龍『銀雀山漢簡釈文』」と「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」の説に従っています。

ところで、竹簡本では「以益（利）為直、以患□□」となっているわけですが、「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」は「□□」に「為迂」をあてはめています。この点について考えてみると、名詞の「利」には、名詞の「益」と同じ「利益」という意味があります。ですから、「利＝益」と考えることができます。そこで、従来本では「以迂為直、以患為利（益）」となっており、竹簡本では「以益（利）為直、以患□□」となっているわけですが、従来本と竹簡本では「迂」と「利＝益」が入れかわっているとも考えられます。同

様に入れかわっている例は、他にも見られます。たとえば、形篇ですが、従来本では「攻則有余、守則不足」となっているところが、竹簡本では「攻則不足、守則有余」となっており、「不足」と「有余」が入れかわっています。また、実虚（虚実）篇ですが、従来本では「我衆而敵寡」となっているところが、竹簡本では「我寡而適（敵）衆」となっており、「衆」と「寡」が入れかわっています。というわけで、ここでは「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」に従い、「迂」と「利＝益」を入れかえ、「以益為直、以患為迂」としています。

ちなみに、変更前（以迂為直、以患為利＝遠回りを近道とし、わずらいを有利とする）と変更後（以益為直、以患為迂＝有益なら直行し、心配なら迂回する）を比べてみると、変更後のほうが戦いに対して慎重であり、『孫子』の基本思想に適合しています。また、『春秋左氏伝』「宣公十二年」にある「見可而進、知難而退＝できると見たら進み、難しいと知ったら退く」という考え方にも通じるものがあります。

なお、参考までに記しておきますと、「迂直の計」は、従来本の立場で翻訳するなら「起死回生の計略」といった意味になりますが、竹簡本の立場で翻訳するなら「迂回すべきか、直行すべきかを決めるための計算」といった意味になります。

（３）『晋書』「列伝第五」の記述によると、魏晉南北朝時代の裴秀は、地図製作の要点として、「分率（比率を正確に記すこと）」「準望（方位を正確に記すこと）」「道里（距離を正確に記すこと）」「高下（高低を正確に記すこと）」「方邪（交差や傾斜を正確に記すこと）」「迂直（曲線や直線を正確に記すこと）」の６つをあげています。このように「迂直」という言葉は、『銀雀山漢墓竹簡』が埋葬された漢代に続く魏晉南北朝時代には、地理の用語としても使用されています。

(4) 『銀雀山漢墓竹簡(壺)』では「則□不及」となっています。曹操や杜佑は、「不及」の注釈として、「遲不及也(遅れて間に合わないのです)」と記しています。そこで、ここでは便宜的に「遲」をあてはめています。ちなみに、「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」は、竹簡には「力」の字が残っているとして、「則力不及」としています。なお、『漢書』「竇田灌韓伝」に「漢数千里争利、則人馬罷、虜以全制其敝、勢必危殆」という表現があり、『史記』「韓長孺列伝」に「漢数千里争利、則人馬罷、虜以全制其敝」という表現があります。ここから類推すると、「挙軍而争利則□不及」のところは、「軍隊がこぞって遠いところで有利になろうとして争うなら、戦力が弱まる」といった内容のものであったのかもしれません。

(5) 『史記』「孫子吳起列伝」には「兵法、百里而趣利者蹶上将、五十里而趣利者軍半至」とあり、『三国志』「諸葛亮伝」には「必蹶上將軍」とあります。ちなみに、上將は、大將や主將と同じ意味です。「最上の將軍」を言う場合もあります。賈林の注釈に従うなら、先鋒の將軍という意味になります。

(6) 『呂氏春秋』「審分覽・不二」に「有金鼓所以一耳也」という表現があります。

(7) 竹簡本に合わせて「金鼓」を「鼓金」に変更しました。『十一家註孫子』では、ここは「火鼓」となっています。なお、『虎鈴經』「旗幟・第六十九」に「故春秋伝曰。昼施旌旗以威其目、夜施火鼓以威其心」とあり、「火鼓」が使われています。

(8) 「一則勇者不得独進、怯者不得独退、此用衆之法也。故夜戰多鼓金、昼戰多旌旗、所以変人之耳目也。三軍可奪氣、將軍可奪心。是故朝氣鋭、昼氣惰、暮氣歸。善」のところは、竹簡では2本分にあたり、字数は66字から70字になります。ここにある従来本の「夜戰多金鼓、昼戰多旌旗」が、「昼戰多旌旗、夜戰多鼓金」として、前の行に移動し

ています。移動したことで、「夜戦多金鼓、昼戦多旌旗」の10字が消え、字数が大きく不足してしまいます。そこで、ここでは、従来本の文章を「言不相聞、故為鼓金。視不相見、故為旌旗。是故昼戦多旌旗、夜戦多鼓金」に内在する2つの機能（①人びとを一つにする、②敵を惑わす）を紹介しているものと解釈して、そのままにしています。なお、「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」は、「一則」と「故三軍」の間に『淮南子』「兵略訓」にある「勇者不得独進、怯者不得独退。止如丘山、発如風雨、所淩必破、靡不毀沮、動如一体、莫之応圉」という文章をあてはめています。

（9）竹簡本では、「此治変者（約10字の欠字）倍（背）丘勿迎」となっています。

「此治変者」の末尾には、これより前に「此治力者也」とあることから、文章の形からして当然「也」がついていたと考えられます。すると、欠字の残りは約9字です。これに関連して、『神機制敵太白陰経』に「夫善用兵者、高邱勿向、背邱勿迎」という記載があります。そこで、竹簡本の「背邱勿迎」の前に「夫善用兵者、高邱勿向」を補えば、ちょうど9字になります。ちなみに、『通典』には「故用兵之法、高陵勿向也、背丘勿迎也」という記載があります。

（10）従来本では「此治変者也。故用兵之法、①高陵勿向、②背丘勿逆、③佯北勿従、④鋭卒勿攻、⑤餌兵勿食、⑥帰師勿遏、⑦圉師必闕、⑧窮寇勿迫、此用兵之法也」となっています。竹簡本では「此治変者（約10字の欠字）①倍（背）丘勿迎、②詳（佯）北勿従、③圉師遺闕、④帰師勿謁（遏）、此用衆之法也」となっています。竹簡本には4つの原則が残っており、従来本と比べると4つの原則が不足しています。しかし、原則1つあたり4字であり、欠字部分は約10字ですから、4つすべての原則をあてはめることはできません。参考までに他の本には、どのような原則が記載されているかを下の表にまとめ

てみました。これを参考にして、読者のみなさんなりにベストチョイスを考えてみてください。

	従来本	竹簡本	『通典』	『長短経』	『太平御覧』	『武経総要』
高陵勿向	○		○		○	○
背丘勿逆	○	○	○		○	
佯北勿従	○	○	○		○	○
丘阪勿迎					○	
鋭卒勿攻	○		○	○	○	死地勿攻
餌兵勿食	○		○		○	○
帰師勿遏	○	○	○	○	○	○
困師必闘	○	○	○	○	○	困敵勿周
窮寇勿迫	○					○
上記のうち、「表現は違うけれど、意味的には通じるところがあるもの」に関しては、○の代わりに文章を入れています。						

(11) 軍争篇の全体の字数が465字であることを示しています。ところで、従来本のうち、『十一家註孫子』には、「三軍可奪氣」と「善用兵者」の前にそれぞれ「故」がついています。しかし、『魏武帝註孫子』や『武経七書』所収『孫子』にはありません。

「故」をつければ、全体の字数が467字となります。しかし、「故」を削除すれば、全体の字数が465字となります。ですから、ここでは「故」を削除しています。

【翻訳】

孫子が言いました。

およそ用兵の原則として、軍争（優位に立つための争い）ほど難しいことはありません。

軍争が難しいのは、有益なら直行し、心配なら迂回する点です。ですから、（なにか心配があるなら）その道を迂回して、利益で敵を誘導し、敵より遅れて出発し、敵より先に到着するなら、「迂直の計」を知っています。

軍争は利益となるものでもあり、軍争は危険となるものでもあります。全軍をあげて優位に立とうとして争えば、（軍隊の規模が大きくなった分だけ動きが遅くなるので）遅れて間に合いません。全軍のことを考えないで優位に立とうとして争えば、（一部の部隊しかそれについて来られないので）補給部隊が置き去りになります。

そういうわけで、①重たい装備をしまいこんで、昼も夜も休まず、ふだんの数倍のスピードで先を急ぎ、100里も離れたところで優位に立とうとして争うときには、（敗北して）全軍の将軍を捕虜にされてしまいます。強い者は先に進み、疲れた者は後に遅れ、そのときには全軍の十分の一が到達できます。②同じようにして50里ほど離れたところで優位に立とうとして争うときには、主将をつまづかせます。そのやり方では、全軍の半分が到達します。③同じようにして30里ほど離れたところで優位に立とうとして争うときには、全軍の3分の2が到着します。

そういうわけで、①軍隊に補給がないときには壊滅します。②軍隊に食料がないときには壊滅します。③軍隊に物資がないときには壊滅します。

そういうわけで、①諸国の腹の内を知らない人は、事前に諸国と外交をとりむすべません。②山林、難所、湿地、沼沢といった地形を知らない人は、軍を進められません。③現地の地理に詳しいガイドを使わない人は、地の利を得られません。

ですから、戦争は、①うまく相手をだますことによって成り立つものです。②こちらが有利だと判断することによって行動するものです。③分散したり、集合したりすることによって戦い方に変化を出すものです。

ですから、①すばやくするときは、風のようにします。②ひっそりするときには、林のようにします。③侵攻するときには、火のようにします。④動かないときには、山のようにします。⑤こちらのことを知られないようにするときには、暗雲が太陽を隠すようにします。⑥動くときには、雷のようにします。⑦食料を徴発するときには、兵隊を分けて行かせます。⑧土地を占領したときには、要所に分かれて守ります。はかりではかるようにきちんと敵の実力をはかって行動し、迂直の道（近道を遠回りに変え、遠回りを近道に変える道）を先に知っている人が勝ちます。以上が軍争の方法です。

そういうわけで、『軍政』に、こうあります。「戦場では言っても互いに聞こえない。だから、よく聞こえる鐘や太鼓をつくる。見せても互いに見えない。だから、よく見える旗や手旗をつくる」。

そういうわけで、昼に戦うときには旗や手旗を多くし、夜に戦うときには太鼓や鐘を多くします。太鼓・鐘・旗・手旗は、全員の耳目を一つにする方法です。全員の耳目が一つになれば、勇敢な者が勝手に戦いをしかけるということもなくなりますし、臆病な者が勝手に逃げ帰るということもなくなります。以上が「大軍を使う方法」です。ですから、夜に戦うときには太鼓や鐘を多くし、昼に戦うときには旗や手旗を多くするのは、敵の耳目を惑わす方法です。ですから、敵軍は気を奪えますし、敵将は心を奪えます。

そういうわけで、①最初の気力は盛んで、中間の気力は弱く、最後の気力はつきています。ですから、用兵のうまい人は、敵の気力が盛んなときは攻撃を避け、敵の気力が弱ま

ったときに攻撃します。これが「気を治める」ということです。②治まった状態にして敵が乱れるのを待ちうけ、おちついた状態にして敵がさわがしくなるのを待ちうけます。これが「心を治める」ということです。③戦場の近くにいて敵が遠くからやってくるのを待ちうけ、元気たっぷりの状態にして敵が疲れるのを待ちうけ、満足な量の食事をとって敵が飢えるのを待ちうけます。これが「力を治める」ということです。④隊列に秩序のある軍隊を迎え撃ってはいけませんし、布陣が堂々とした軍隊に攻めかかってはいけません。これが「変を治める（臨機応変に対処する）」ということです。

そもそも用兵のうまい人は、優位にいる敵とは戦いません。優勢な敵とは争いません。わざと逃げる敵は追いかけません。包囲したら逃げ道をあけます。退却している敵には近づきません。これが「兵隊を使う方法」です。

第8篇 九变

【原文】

竹簡本	從來本
九变（1） 孫子曰。凡用兵之法、将受命於君、<u>散地則無戰、輕地則無止、争地則無攻、交地則無絕、瞿（衢）地則合交、重地則掠、泛地則行、圯地則謀、死地則戰（2）</u>。途有所不由（3）、軍有所不擊、城有所不攻、地有所不爭、君命有所不受（4）。故将通於九变之利者（5）、知用兵矣。将不通九变之利、雖知地形、不能得地之利矣。治兵不知九变之術、雖知五利（6）、不能得人之用矣（7）。是故智者之慮、必雜於利害。<u>雜於利、故務可信。雜於害、故憂患可解也</u>。是故屈諸侯者以害、〔役諸侯者以業（8）〕、趨諸侯者以利。故用兵之法、無恃其不来、恃吾有以待之。無恃其<u>不攻</u>、恃吾有所<u>不可攻</u>。<u>故将有五危</u>、必死可<u>殺</u>。<u>必</u>	九变第八 孫子曰。凡用兵之法、将受命於君、合軍聚衆、圯地無舍、衢地合交、絕地無留、圯地則謀、死地則戰。途有所不由、軍有所不擊、城有所不攻、地有所不爭、君命有所不受。故将通於九变之利者、知用兵矣。将不通九变之利、雖知地形、不能得地之利矣。治兵不知九变之術、雖知五利、不能得人之用矣。是故智者之慮、必雜於利害。雜於利而務可信也。雜於害而患可解也。是故屈諸侯者以害、役諸侯者以業、趨諸侯者以利。故用兵之法、無恃其不来、恃吾有以待之。無恃其不攻、恃吾有所不可攻也。故将有五危、必死可殺、必生可虜、忿速可侮、廉潔可辱、愛民可煩。凡此五者、将之過也。用兵之災也。覆軍殺将、必以五危、不可不察

<u>生可虜。忿速可侮。潔廉可辱。愛民可煩</u>也。 (9)。凡此五者、將之過也。用兵之災也。覆軍殺將、必以五<u>危、不可不察也。</u>	
---	--

【注記】

(1) 従来本の九変篇には、「九」という数字を掲げていながら、10の原則が出てきます。それは「①圯地無舎」「②衢地交合」「③絶地無留」「④圉地則謀」「⑤死地則戦」「⑥途有所不由」「⑦軍有所不撃」「⑧城有所不攻」「⑨地有所不爭」「⑩君命有所不受」の10個です。そこで、九変の内容について、いろいろな説が出されました。主なものは、次の4つです。

第1は、九変の「九」を「数が多い」という意味でとらえ、九変を「用兵の方法は千変万化する」という意味でとらえる説です(王皙)。ちなみに、王皙の注釈には、次のようなことも紹介されています。「不知、曹公謂何為九。或曰。九地之變也(真偽は不詳ですが、曹操が九とは何だろうかと言うと、ある人は言いました。九地の變です)」

第2は、「九変篇では、本来は9つあるが、その一部として①～⑤が代表で記されているにすぎない」と考える説です(梅堯臣、張預など)。なお、梅堯臣の場合は、上下に欠文があると考えています。また、張預の場合は、「九地の變(①散地則無戦、②輕地則無止、③爭地則無攻、④交地則無絶、⑤衢地則合交、⑥重地則掠、⑦圯地則行、⑧圉地則謀、⑨死地則戦)」について言っているのが「九変」だと考えています。

ちなみに、『北堂書鈔』には「散地則無戦、輕地則無止、爭地則無攻、交地則無絶、衢地則合交、重地則掠、圯地則行、圉地則謀、死地則戦。故將通九變之利者、知用兵之法

也」とあり、「九地の変」と「九変」をつなげて考えています。また、『神機制敵太白陰経』には「故散地無戦、軽地無留、争地無攻、交地無絶、衢地無合、重地則掠、圯地則行、圉地則謀、死地則戦。是故、城有所不攻、計不合也。地有所不争、未見利也。君命有所不聽、不便事也」とあり、「五利」（ただし一部）の前に「九地の変」をもってきています。

「五利」とは、「途有所不由」「軍有所不撃」「城有所不攻」「地有所不争」「君命有所不受」の5つのことです。以上から考えると、この説は説得力があります。

なお、九地（散地、軽地、争地、交地、衢地、重地、圯地、圉地、死地の9つ）の内容については、九地篇に説明されています。

第3は、九変は①～⑨の9つを言うとする説です（賈林、何延錫など）。ちなみに、『銀雀山漢墓竹簡』「四変」によると、⑥～⑨の4つが「四変」と言われ、⑩と区別して記されています。そこでは、⑩に言う「君主の命令に逆らってよい場合」とは、⑤～⑨の4つの場合だとされています。そこから考えると、この説は説得力があります。

第4は、そもそも九変についての説明がまちがって軍争篇の末尾に移動しているとして、軍争篇の末尾から「高陵勿向」「背丘勿逆」「佯北勿従」「鋭卒勿攻」「餌兵勿食」「帰師勿遏」「圉師必闕」「窮寇勿迫」の8つをもってきて、そこに九変篇の「絶地無留」を付け足して、全部で9つとし、それを九変とする説です（劉寅、趙本学など）。

（2）九変篇は、『銀雀山漢墓竹簡』の模本を確認すると、1行あたり約28～30字の計算になります。「地則戦」が行の終わりにきているわけですが、従来本にある「孫子曰。凡用兵之法、将受命於君、合軍聚衆、泛地無舍、瞿地合交、絶地無留、圉地則謀、死地則戦」という文章の字数は37字です。1行とすると字数が多すぎますし、2行とすると字数が不足します。そこで、字数を合わせるため、試案として、次のような方法が考えられ

ます。

まず試案１として、１行とするため、本文の主旨とあまり関係のない「将受命於君、合軍聚衆」という記述を削除する方法が考えられます。こうすれば、字数が２８字になります。

次に試案２として、２行とするため、注記（１）に紹介した『北堂書鈔』や『神機制敵太白陰経』の記載を参考にして文章を付けたし、「孫子曰。凡用兵之法、将受命於君、合軍聚衆、散地則無戰、輕地則無止、争地則無攻、交地則無絶、衢地則合交、重地則掠、圯（泛）地則行、圉地則謀、死地則戰」とする方法が考えられます。こうすれば、字数が５８字になり、２行におさまる計算になります。

なお、この本では、注記（１）の第２の説（張預の説）に従い、「九変」を「九地の变」と解釈して試案２の立場をとり、『北堂書鈔』の文章をあてはめています。ただし、「圯地」については、竹簡本『孫子』「九地」篇の記述にあわせて、「泛地」に変更しています。

（３）『通典』によると、「是以途有所不由（そういうわけで、道路には使わないほうがよいものもあり）」となっており、文頭に「是以」があります。「是以」は、「是故」と同じ意味です。この『通典』の記述は、九変と五利（ただし一部）の間に「是故」をもってきている『神機制敵太白陰経』の記載に通じるものがあります。

（４）『史記』と『通典』には、孫武の発言として、「将在軍、君命有所不受」という文章が記録されています。また、『三国志』『晋書』『旧唐書』にも、「将在軍、君命有所不受」という文章が記録されています。

（５）『十一家註孫子』では、「九変之利」が「九変之地利」となっています。

(6) 五利の内容については、主として2つの説があります。1つは、「圯地(泛地)無
 舍」「衢地交合」「絶地無留」「困地則謀」「死地則戦」の5つを言うとする説です(王
 皙)。もう1つは、「途有所不由」「軍有所不擊」「城有所不攻」「地有所不爭」「君命
 有所不受」の5つを言うとする説です(賈林、曹操、劉寅、趙本学など)。

この本では、後者の説に従っています。

(7) 文中の「九変」について、曹操によると、一説では「五変」となっていたとされています。賈林は「五変」としており、「途有所不由」「軍有所不擊」「城有所不攻」「地有所不爭」「君命有所不受」の5つを指します。『太平御覧』では、「治人不知五変、雖知五利、不能得人之用矣」となっています。

九変、五利、五変、四変の一覧										
	圯地無舍	衢地交合	絶地無留	困地則謀	死地則戰	途有所不由	軍有所不擊	城有所不攻	地有所不爭	君命有所不受
九変	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
五利①						○	○	○	○	○
五利②	○	○	○	○	○					
五変						○	○	○	○	○
四変						○	○	○	○	

※「九変」は、張預の解釈に従うなら、「散地則無戦」「輕地則無止」「争地則無攻」「交地則無絶」「衢（瞿）地則合交」「重地則掠」「圯（泛）地則行」「困地則謀」「死地則戦」の9つとなります。劉寅、趙本学などの解釈に従うなら、「高陵勿向」「背丘勿逆」「絶地勿留」「佯北勿従」「鋭卒勿攻」「餌兵勿食」「帰師勿遏」「困師必闕」「窮

寇勿迫」の9つとなります。

※「五利」について、王皙は「五地之利」と解釈しています。これに従うと、「五利」の内容は、上記「五利②」となります。ちなみに、曹操、賈林、劉賓、趙本学などは、「五利①」の立場となります。

(8) 『銀雀山漢墓竹簡』の模本を確認すると、「利、故務可信」以下の改行は、次のようになっていたと推定されます。

①「利故務可信、雜於害而患可解、是故屈諸侯者以害、役諸侯者以業、趨諸侯者以利、故用兵之」(36字)

②「法、無恃其不来、恃吾有以待之、無恃其不攻、恃吾有所不可攻。故将有五」(28字)

③「危。必死可殺、必生可虜、忿速可侮、廉潔可辱、愛民可煩、凡此五者將之過」(28字)

④「用兵之災也。覆軍殺將、必以五危、不可不察也」(18字)

以上の文章では、竹簡本で欠損しているところ(下線部以外のところ)には従来本(『魏武帝註孫子』)の原文をあてはめているわけですが、注記(2)のとおり、1行あたり約28～30字であるので、①の字数がオーバーしています。どこかを削除する必要があります。

そこで、①の文章を分析してみると、冒頭の「利故務可信、雜於害而患可解」は、前の行の文章とのつながりがあるので、削除しないほうがよいでしょう。末尾の「故用兵之」は、次の行の文章とのつながりがあるので、削除しないほうがよいでしょう。残るは「是故屈諸侯者以害、役諸侯者以業、趨諸侯者以利」ですが、「是故」は接続詞なので、削除

しないほうがよいでしょう。すると、削除候補は「屈諸侯者以害」「役諸侯者以業」「趨諸侯者以利」の3つにしばられます。ここのところは、文脈からして、利害の使い方を述べているところです。ですから、「利」「害」という文字がじかに出てこない「役諸侯者以業」（6字）なら、削除しても問題ないでしょう。そこで、これを削除すれば、30字以内におさまります。ちなみに、「役諸侯者以業」は、その内容からして、「屈諸侯者以害」に対する注釈の一部だった可能性も考えられます。

（10）『十一家註孫子』には「必死可殺也。必生可虜也。忿速可侮也。廉潔可辱也。愛民可煩也」というように「也」の字があります。

【翻訳】

孫子が言いました。

およそ用兵の原則としては、将軍が君主より命令を受け、軍隊を編成し、兵隊を招集し、対峙して布陣します。（このとき）①散地では、戦ってはいけません。②輕地では、止まってはいけません。③争地では、攻めてはいけません。④交地では、道をふさがれてはいけません。⑤衢地では、諸国と親交を結びます。⑥重地では、物資を取り立てます。⑦泛地では、移動します。⑧圉地では、謀略をめぐらします。⑨死地では、戦います。（そういうわけで）1道路には使わないほうがよいものもあります。2敵軍には撃たないほうがよいものもあります。3城には攻めないほうがよいものもあります。4土地には争わないほうがよいものもあります。5君主の命令には従わないほうがよいものもあります。ですから、将軍のうちで、九変（上記①～⑨）の利点を知っている人は、用兵を知っています。将軍のうちで、九変の利点を知らない人は、地形を知っていても、地の利を得られ

ません。兵士を管理するにあたり、九変の方法を知らないなら、五利（上記①～⑤）を知っていても、人材を有効に活用できません。

そういうわけで、智者が考えるときは、必ず利害の両方について考えるのです。利点があるときには、その不利についても考えるので、事をうまく運べます。また、不利があるときには、その利点についても考えるので、心配を解消できます。

そういうわけで、諸侯を屈服させるには、害になることをします。〔諸侯を働かせるには、事業をするように仕向けます。〕諸侯を奔走させるには、利益になることで誘導します。

ですから、用兵の原則としては、①敵に侵攻されないのを期待するのではなく、敵が侵攻できない態勢をととのえることが大切です。②敵に攻撃されないのを期待するのではなく、敵が攻撃できない態勢をととのえることが大切です。

ですから、将軍にとって危険なことが、五つあります。①身の危険をかえりみないなら、殺すことができます。②身の安全ばかりを考えているなら、捕らえることができます。③怒りっぽいなら、バカにすることができます。④まじめすぎるなら、恥をかかせることができます。⑤やさしすぎるなら、わずらわせることができます。およそ以上の5つは、将軍の過ちであり、用兵の災いです。軍隊が敗れたり、将軍が殺されたりするのは、以上の五つによるので、明らかにしないといけません。

第9篇 行軍

【原文】

竹簡本	從來本
行軍 孫子曰。凡處軍、相敵、絕山依谷、視生 <u>處高、戰降無登、此處山之軍也。</u>絕水必遠 水、客絕水而來、勿迎之於水內、令半渡而 擊之、利。欲戰者、無附於水而迎客。視生 處高、無迎水流。<u>此處水上之軍也。</u>絕斥 澤、唯亟去無留。若<u>交軍斥澤之中、依水</u> 草、而背衆樹、此處斥澤之軍也。平陸處 易、右背高、前死後生、此處平陸之軍也。 <u>凡四軍之利、黃帝之所以勝四帝者也。凡軍</u> <u>喜高而惡下、貴陽而賤陰、養生處實、是為</u> <u>必勝、軍無百疾（1）。陵丘隄防、（2）</u> <u>處其陽而右背之。此兵之利、地之助也。上</u> <u>雨水、水流至、止涉待（待）其定。絕澗、</u> <u>遇（過）（3）天井、天塞、天羅、天陷、</u> <u>天隙（4）、必亟去之、勿近也。吾遠之、</u>	行軍第九 孫子曰。凡處軍、相敵、絕山依谷、視生 處高、戰降無登、此處山之軍也。絕水必遠 水、客絕水而來、勿迎之於水內、令半渡而 擊之、利。欲戰者、無附於水而迎客。視生 處高、無迎水流。此處水上之軍也。絕斥 澤、唯亟去無留。若交軍於斥澤之中、必依 水草、而背衆樹、此處斥澤之軍也。平陸處 易、右背高、前死後生、此處平陸之軍也。 凡四軍之利、黃帝之所以勝四帝也。凡軍好 高而惡下、貴陽而賤陰、養生處實、軍無百 疾、是謂必勝。丘陵隄防、必處其陽而右背 之。此兵之利、地之助也。上雨水沫至、欲 涉者、待其定也。凡地有絕澗、天井、天 牢、天羅、天陷、天隙、必亟去之、勿近 也。吾遠之、敵近之、吾迎之、敵背之。軍

敵近之。吾迎之、敵背之。軍旁有險阻、潢井、葭（葦）（5）、小林、翳澮（蒼）、可伏匿者、謹復索之、姦之所處也。敵近而靜者、恃其險也。敵遠而挑戰者欲人之進者、其所居者易利也。衆樹動者來也。衆草多障者疑也。鳥起者伏也。獸駭者覆也。塵高而銳者車來也。卑而廣者徒來也。散而條達者樵採也。少而往來者營軍者也。庫（卑）而備益者、進也。辭強而進毆（驅）者、退也。輕車先出居側（側）者陣也。無約而請和者謀也。奔走陳兵者期也。半進者誘也。杖而立者飢也。汲役先飲者渴也。見利而不進者、勞拳（倦）也。鳥集者、虛也。夜者、恐也。軍擾（擾）者、將不重也。旗動者亂也。吏怒者倦也（6）。（輒）者不反（返）其舍者、窮寇也（7）。諄諄間間、徐言人者、失其衆者也。數賞者、窘也。數罰者困也。先暴而後畏其衆者不精之至也。來委謝者欲休息也。兵怒而相迎久、而不合、又不相去也、

旁有險阻、潢井、蒹葭、林木、翳蒼者、必謹覆索之、此伏姦之所也。近而靜者恃其險也。遠而挑戰者欲人之進也。其所居易者利也。衆樹動者來也。衆草多障者疑也。鳥起者伏也。獸駭者覆也。塵高而銳者車來也。卑而廣者徒來也。散而條達者樵採也。少而往來者營軍也。辭卑而益備者進也。辭強而進驅者退也。輕車先出居其側者陣也。無約而請和者謀也。奔走而陳兵者期也。半進半退者誘也。杖而立者飢也。汲而先飲者渴也。見利而不進者勞也。鳥集者虛也。夜呼者恐也。軍擾者將不重也。旌旗動者亂也。吏怒者倦也。殺馬肉食軍無糧也。懸鉦不返其舍者窮寇也。諄諄徐與人言者失衆也。數賞者窘也。數罰者困也。先暴而後畏其衆者不精之至也。來委謝者欲休息也。兵怒而相迎久、而不合、又不相去、必謹察之。兵非貴益多、雖無武進、足以並力、料敵、取人而已。夫唯無慮而易敵者必擒於人。卒未親附而罰之則不服。不服則難用。

<u>必謹察此。兵非多益、毋武進、足以並力、</u> 料敵、取人而已。夫惟無慮而易敵者必擒於 人。卒未親附<u>而罰之、則不服、不服則難用</u> <u>也。卒已搏親而罰不行、則不用。故合之以</u> <u>交（文）、濟（齊）之以武</u>、是謂必取。令 <u>素行、以教其民者、民服。素令不行（８）</u> 以教其民則民不服。令素行者与衆相得也。	卒已親附而罰不行則不可用。故令之以文、 齊之以武、是謂必取。令素行以教其民則民 服、令不素行以教其民則民不服。令素行者 与衆相得也。
---	--

【注記】

（１）従来本では「好高而惡下、貴陽而賤陰、養生処実、軍無百疾、是謂必勝。丘陵隄防、必処其陽而右背之」となっているところが、『通典』では「喜高而惡下、貴陽而賤陰、是為必勝、軍無百疾。丘陵隄防、必処其高陽而右背之」となっており、『太平御覽』では「喜高而惡下、貴陽而賤陰、養生処実、是為必勝、軍無百疾。丘陵堤防、必処其高陽而右背也」となっています。竹簡本では「…無百疾。丘陵隄□、処其陽而右背之」となっており、一部が失われていますが、残っている文章は『通典』や『太平御覽』と同じです。

ところで、竹簡本では、「凡四軍之利、黃帝之…無百疾」となっており、文中に約２８字分の欠損があります。ここのところは『太平御覽』では「凡此四軍之利、黃帝所以勝四帝者也。凡軍喜高而惡下、貴陽而賤陰、養生処実、是為必勝、軍無百疾。丘陵堤防、必処其高陽而右背也」となっており、竹簡本の欠損しているところに該当する部分（二重線の部分）がちょうど２８字です。いっぽう『通典』では、「養生処実」という言葉がないので、それだけ字数が少なくなり、不足してしまいます。ですから、ここでは本文に『太平

御覧』の文章をあてはめています。

(2) 従来本には「防、必」とありますが、竹簡本では1文字分のスペースしかありませんので、「必」の字を削除しました。

(3) 従来本では「天井」の前に「凡地有絶澗」の5文字がありますが、竹簡本では3文字分のスペースしかありません。このところは、『通典』では「凡地有絶澗、遇天井」となっており、『太平御覧』では「絶澗、過天井」となっています。そこで、ここでは「絶澗、遇(過)」の3文字をあてはめています。

(4) 『銀雀山漢墓竹簡「孫臏兵法」』「地葆」には「五地之殺」として、「天井、天宛、天離(羅)、天(隙)、天招(陷)」の5つがあげられています。

(5) 『魏武帝註孫子』と『武經七書』所収『孫子』では「蒹葭」となっていますが、『十一家註孫子』では「葭葦」となっています。竹簡本『孫子』では「□葦」となっているわけですが、「葦」の字が出てくるのは『十一家註孫子』と同じですので、ここでは『十一家註孫子』にあわせて「葭葦」としています。

(6) 従来本では、「将不重也」と「不返其舍」の間に「旌旗動者乱也。吏怒者倦也。粟馬肉食、軍無懸缶」という文章があります。しかし、竹簡本には、約10字分のスペースしかありません。そこで、もとの意味が可能な限り残るような形で短縮しました。なお、従来本では「旌旗動者乱也」となっていますが、『太平御覧』に従って「旗動者乱也」に変更しています。

(7) このところには、『魏武帝註孫子』と『武經七書』所収『孫子』では「殺馬肉食者軍無糧也。懸缶不返其舍者窮寇也(馬を殺して食べているのは、軍隊に食料がないのです。調理器具をそのままにして、営舎に戻らないのは、おいつめられているのです)」と

なっており、2つの原則があります。しかし、『十一家註孫子』では「粟馬肉食、軍無懸缶、不返其舍者窮寇也（馬に粟を食べさせて兵士に肉を食べさせ、軍隊に調理器具がなく、営舎に戻らないのは、おいつめられているのです）」となっており、1つの原則しかありません。『通典』や『長短經』も同様に1つの原則としています。ちなみに、「窮寇」について、『逸周書』『武釈解』に「追戎無怙、窮寇不格、力倦氣竭、乃易克、武之追也（追撃は杓子定規であってはならず、窮寇は速攻しないようにし、敵の体力が衰え、氣力が尽きたときには、勝ちやすくなります。これが武力行使における追撃です）」とあり、『通典』に「武曰。山谷峻險、難以踰越、謂之窮寇（孫武は言いました。山や谷が険しく、乗り越えにくいもの、これを窮寇と言います）」とあります。

（8）従来本では「令素不行」となっていますが、竹簡本では「素」が「令」の先にきているので、「素令不行」に変更しています。

【翻訳】

孫子が言いました。

およそ状況に応じて上手に軍隊を動かし、見かけから実情を判断する方法は、次のとおりです。（まず軍隊をうまく動かす方法ですが）①険しい山を行くときは、谷にそって進みます。②安全なところを目ざし、高いところにいるようにします。③低いほうを目ざして戦い、高いほうに向かってはいけません。以上は軍隊が山岳地帯にいる場合です。①川を渡るときには、渡ったらすぐに川を離れます。②攻め手がもし兵をひきつれ川を渡って来たら、川のなかで迎撃してはいけません。③敵の半分を渡らせてから攻撃すれば、有利になります。④戦おうとする人は、川の近くにいて攻め手を迎撃してはいけません。⑤安

全なところを目ざし、高いところにいるようにして、水の流れに逆らうようにしてはいけません。以上は軍隊が河川地域にいる場合です。①塩分が多かったり、ぬかるんでいたりする土地は、すみやかに去り、とどまってははいけません。②塩分が多かったり、ぬかるんでいたりする土地で敵と戦うことになったなら、飲み水や馬草があるところにいて、林を背にするようにします。以上は軍隊が沼沢地域にいる場合です。①平坦なところでは、なだらかなところにいるようにします。②右後方が高くなるようにします。③前方が低く、後方が高くなるようにします。以上が平陸地域に軍隊がいる場合です。およそ以上4つの軍隊にとって利益となる配置に仕方は、黄帝（昔の名君）が四方の強敵に勝った方法です。

およそ軍隊は、高いところを好んで、低いところを嫌うようにします。明るいところを重んじて、暗いところを軽んじるようにします。生活しやすいようにし、高くて明るいところにいるようにします。これが必勝につながり、軍隊に病気がなくなります。丘陵や堤防のところでは、必ずからりとしたところにいて、右後方が高くなるようにします。以上は、兵士の利益となるものであり、地の利となるものです。上流が雨で、水が流れてきたとき、川を渡るのをやめ、川が落ち着くのを待ちます。絶澗（こえられない山間の溪谷）で、天井（急な斜面に囲まれたくぼ地）、天牢（山がけわしかったり、霧がかかりやすかったりなどして、入りやすいけど、出にくい土地）、天羅（草木のおい茂っている土地）、天陷（土地が低くて水がたまりやすく、ぬかるみやすい土地）、天隙（二つの山の間にあ
る狭くて通りにくい土地）に出くわしたなら、必ずそこからすみやかに立ち去り、近づいてはいけません。こちらはそこから遠ざかり、敵はそこに近づくようにします。こちらはそこを前にし、敵はそこを背にするようにします。軍隊の近くに、地形が険しかったり、水たまりやくぼ地があったり、水草が茂っていたり、ちょっとした林があったり、草がう

っそうとしていたり、伏兵が隠れられそうなら、そこを慎重に探索します。敵兵がひそんでいる可能性があります。

（次に見かけから実情を判断する方法ですが）敵が近くにいて静かなのは、地形の陰しさを頼りにしているのです。敵が遠くにいて戦いを挑んできて、こちらをおびき出そうとするのは、敵のいるところが戦いやすく有利なのです。森の木が揺れ動いているのは、敵が進軍してきているのです。たくさんの草がどこそで障害となっているのは、なにかワナがあると疑わせようとしているのです。鳥が飛び立つのは、その下に伏兵がいるのです。獣が驚いているのは、敵が包囲しようとしているのです。砂ぼこりが高くまっすぐに立ちのぼっているのは、戦車隊がやってきているのです。砂ぼこりが低くたれこんでいるのは、歩兵隊がやってきているのです。砂ぼこりがあちこちからあがり、ひよろひよろしているのは、薪を拾っているのです。砂ぼこりが少なくて、行ったり来たりしているのは、陣地を築いているのです。敵からの使者の言葉が丁寧で、敵軍が備えを増しているのは、進もうとしているのです。敵からの使者の言葉が強気で、敵軍が前に出て駆けまわっているのは、退こうとしているのです。軽戦車が先に出て、敵陣の横についているのは、布陣しているのです。約束していないのに休戦を求めてくるのは、謀略があるのです。走りまわって兵士をならべているのは、戦いを決意しているのです。敵兵が中途半端に進んでくるのは、こちらを誘い出そうとしているのです。敵兵が杖をついて立っているのは、食料が不足しているのです。水汲みの担当者が先に水を飲んでいるのは、水が不足しているのです。敵兵が有利なのに攻撃してこないのは、兵士が疲れて士気が低下しているのです。鳥が集まっているのは、そこにだれもいないのです。夜中に呼びまわっているのは、恐れているのです。軍隊が騒動しているのは、将軍がしっかりしていないのです。旗が揺れ動いてい

るのは、混乱しているのです。役人が怒っているのは、士気が低下しているのです。水汲みの人が営舎に戻らないのは、追いつめられているのです。ねんごろにためらいながらゆるやかに相手と語っているのは、人望を失っているのです。ひんぱんに賞しているのは、兵士が思いどおりに動かなくて苦しんでいるのです。ひんぱんに罰しているのは、兵士が戦おうとしないので困っているのです。先に乱暴して後で反発する相手の多いことを恐れるのは、きわめて配慮が足りないのです。贈り物をもってきて謝罪するのは、休息したがつているのです。兵士が怒って互いに反撃しあいながら、いつまでたっても決戦しようとせず、かといって退却しようとしなければ、必ず慎重に見極めないといけません。

兵隊は、兵力の多さがものをいうというものではありません。向こう見ずに突進することなくし、とりあえず力を合わせ、敵情を調査し、相手を攻略するようにすれば十分だけです。そもそもただ思慮がなく、敵を軽くみるだけなら、必ず相手に捕虜とされます。

兵卒がまだ懐いていないのに罰するときには、納得しません。納得しなければ、使いにくくなります。兵卒がすでに懐いていても罰が行われないうときには、使いません。ですから、文徳によって兵士を結集させ、武威によって兵士を整然とさせます。これが「必ず取る＝必ず攻略できる」ということです。命令がふだんから守られていて、そのうえで人民に命令を守るように教えるときには、人民は納得します。ふだんから命令が守られていなくて、それなのに人民に命令を守るように教えるときには、人民は納得しません。命令がふだんから守られていれば、みんなと心を一つにできます。

第10篇 地形

【原文】

復元案	從來本
地形（1） 孫子曰。地形 <u>有通、有掛、有支、有隘、有險、有遠。我可以往、彼可以來、曰通。居通地、先捦其地、居高陽、利糧道、以戰則利。可以往、難以返、曰掛地。掛形曰、敵無備、出而勝之。敵有備、出而不勝、難以返、不利。我出而不利、彼出而不利、曰支。支形曰、敵雖利我、我無出也。引而去也、令敵半出而擊之、利（2）。守山谷之口、界乎兩向峭絕、曰隘（5）。隘形曰、我先居之、必盈之以待敵。若敵先居之、盈而勿從、不盈而從之（2）。處高待下、處安待危、曰險（5）。險形曰、我先居之、必居高陽以待敵。若敵先居、則引而去之、勿從也（2）。與敵相去營壘之遙、曰遠（5）。夫遠形、均勢、難以挑戰、戰而不</u>	地形第十 孫子曰。地形有通者、有掛者、有支者、有險者、有險者、有遠者。我可以往、彼可以來、曰通。通形者、先居高陽、利糧道、以戰則利。可以往、難以返、曰掛。掛形者、敵無備、出而勝之、敵若有備、出而不勝、難以返、不利。我出而不利、彼出而不利、曰支。支形者、敵雖利我、我無出也。引而去之、令敵半出而擊之、利。險形者、我先居之、必盈之以待敵。若敵先居之、盈而勿從、不盈而從之。險形者、我先居之、必居高陽以待敵。若敵先居之、引而去之、勿從也。遠形者、勢均、難以挑戰、戰而不利。凡此六者、地之道也、將之至任、不可不察也。故兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者。凡此六者、非天地

利。凡此六者、地之道也。将之至任、不可不察也（2）。故兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有乱者、有北者。凡此六者非天之災、将之過也。夫勢均以一擊十、曰走。卒強吏弱、曰弛。吏強卒弱、曰陷。大吏怒而不服、遇敵懟而自敗、将不知其能、曰崩。将弱不嚴、教道不明、吏卒無常、陳兵縱橫、曰乱。将不能料敵、以少合衆、以弱擊強、兵無選鋒、曰北。凡此六者、敗之道也。将之至任、不可不察也（3）。夫地形者、兵之助也。夫料敵制勝、計極險易、利害遠近、上将之道也。知此而用戰者必勝。不知此而用、戰者必敗（2）。戰道必勝、主曰無戰、必戰。戰道不勝、主曰必戰、無戰。故進不求名、退不避罪、唯民是保而利全於主、国之宝也。視卒如嬰兒、故可与之赴深谿。視卒如愛子、故可与之俱死。厚而不能使、愛而不能全、乱而不能治、譬若驕子、不可用也。知吾卒之可以擊、而不知敵之不可擊、勝之半也。知敵之不可擊、而不知吾卒之可以擊、勝之半也。知敵之可擊、而不知地形之不可以戰、勝之半也。故知兵者、動而不迷、拳而不窮。故曰。知彼知

之災、将之過也。夫勢均、以一擊十、曰走。卒強吏弱、曰弛。吏強卒弱、曰陷。大吏怒而不服、遇敵懟而自戰、将不知其能、曰崩。将弱不嚴、教道不明、吏卒無常、陳兵縱橫、曰乱。将不能料敵、以少合衆、以弱擊強、兵無選鋒、曰北。凡此六者、敗之道也、将之至任、不可不察也。夫地形者、兵之助也。料敵制勝、計險阨遠近、上将之道也。知此而用戰者必勝、不知此而用戰者必敗。故戰道必勝、主曰無戰、必戰可也。戰道不勝、主曰必戰、無戰可也。故進不求名、退不避罪、唯民是保而利於主、国之宝也。視卒如嬰兒、故可与之赴深谿。視卒如愛子、故可与之俱死。愛而不能令、厚而不能使、乱而不能治、譬如驕子、不可用也。知吾卒之可以擊、而不知敵之不可擊、勝之半也。知敵之可擊、而不知吾卒之不可擊、勝之半也。知敵之可擊、知吾卒之可以擊、而不知地形之不可以戰、勝之半也。故知兵者、動而不迷、拳而不窮。故曰。知彼知

<u>可撃、而不知吾卒之不可撃、勝之半也。知</u> <u>敵之可撃、知吾卒之可以撃、而不知地形之</u> <u>不可以戦、勝之半也（４）。故曰。兵者、</u> <u>動而不迷、拳而不頓（２）。故曰。知己知</u> <u>彼、勝乃不殆。知天知地、勝乃可全</u> <u>（４）。</u>	己、勝乃不殆。知天知地、勝乃可全。
---	--------------------------

【注記】

（１）竹簡本では、地形篇は発見されていません。地形二篇が発見されていますが、内容は地形篇とは別物です。

ただ、地形篇に関連した文章が、『北堂書鈔』『通典』『群書治要』『虎鈴経』にあります。その文章には、従来本と同じ文章もあれば、違う文章もあるわけですが、ここではそれらの文章を参考にして、地形篇の復元を試みています。

もちろん、あくまでも著者の試案ですので、よろしければ読者のみなさんなりの復元案も考えてみてください。

（２）『通典』の文章です。

（３）『北堂書鈔』の文章です。

（４）『群書治要』の文章です。

（５）『虎鈴経』「料敵・第三十七」の文章です。その全文は、次のとおりです。「用地之法、考地之形勢有六焉。一曰通。二曰掛。三曰支。四曰隘。五曰險、六曰遠。我可以往、彼可以来、曰通。居通地、利乘高待敵、後通糧運、障其間道、絶敵之潜来、用戦則利也。

我可以往、彼難以反、曰掛。居掛地、先詳敵無備、伏兵絕其歸路、則利焉。敵有備而出、則自蹶焉。我出而不利、彼出而不利、曰支。居支地、若敵引兵而去、是誘我也、勿擊之。待其自出薄我則擊之、利焉。守山谷之口、界乎兩向峭絕、曰隘。我先居隘地、整其營陣待敵、絕衝突之患。若敵先居之、盈陣待之（言盈陣者、實陣絕隘口）。如攻不盈、則從其它攻之、利焉。處高待下、處安待危、曰險。居險地、我先居之、利以戰。若敵先居之、勒兵退、乃見其利焉。與敵相去營壘之遙、曰遠。〔居遠〕地、敵不先進、但挑戰、戰則不可進、必有伏焉。敵不戰而引退、亦不可逐、逐則不利。故古人云。用兵之道、地利為寶。此之謂也」

ちなみに、文字が欠落していると思われるところは、文中に〔 〕で示して言葉を補っています。

【翻訳】

孫子が言いました。

地形には、①通があり、②掛があり、③支があり、④隘があり、⑤險があり、⑥遠があります。①こちらも行けることができ、相手も来ることができるものは、通と言います。通の地形では、先にその土地に陣取り、高くて明るいところにいて、糧道を確保し、そうして戦えば、有利です。②行くことはできても、戻りにくいものは、掛と言います。掛の地形というのは、敵が無防備なら、出撃して勝ちます。敵に備えがあるなら、出撃しても勝たず、戻りにくく、不利です。③こちらが出撃しても不利となり、敵が出撃しても不利となるものは、支と言います。支の地形というのは、敵がこちらにとって有利になっても、こちらは出撃してはいけません。軍隊を引いて去り、敵を半分ほど出撃させて攻撃するな

ら、有利です。④山間の谷間の入り口で守りにつくことになり、どちらを向いても絶壁によってさえぎられているものは、隘と言います。隘の地形というものは、こちらが先に陣取っているなら、必ず全体を占拠して敵を待ち受けます。もし敵が先に陣取り、全体を占拠しているなら、相手にしてはいけません。全体を占拠していないなら、相手にします。

⑤高いところにいて低いところにいる敵を待ち構え、安全なところにいて危険なところにいる敵を待ち構えられるものは、險と言います。險の地形というものは、こちらが先にいるなら、必ず高くて明るいところにいて、そうして敵を待ち構えます。もし敵が先にいるなら、軍隊を引いて去り、相手にしてはいけません。⑥敵と互いに離れ、遠ざかったところに布陣しているものは、遠と言います。そもそも遠の地形は、勢いが等しいなら、戦いを挑みにくく、戦っても不利になります。およそ以上の6つは、地形に応じた方法です。

将軍のもっとも重要な任務であり、明らかにしないわけにはいきません。

ですから、兵士には、①潰走があり、②弛緩があり、③陷落があり、④崩壊があり、⑤混乱があり、⑥敗北があります。およそ以上の6つは、天によってもたらされる災いではなく、将軍の過ちです。①そもそも勢いが等しいとき、敵の10分の1の兵力で、こちらの10倍の敵と戦うものは、潰走と言います。②兵士が強く、役人が弱いものは、弛緩と言います。③役人が強く、兵士が弱いものは、陷落と言います。④上級の役人（将校）が怒って命令に従わず、敵に遭遇すると憎んで自滅し、将軍がその能力を知らないものは、崩壊と言います。⑤将軍が弱くて厳しくなく、教練の仕方が明確でなく、役人と兵卒が秩序を保たず、兵隊の布陣が気ままなものは、混乱と言います。⑥将軍が敵の実力をはかり知ることができず、小さい兵力で大きな兵力の敵と合戦し、弱い兵力で強い兵力の敵を攻撃し、兵士に精鋭がないものは、敗北と言います。およそ以上の6つは、敗北する方法

です。将軍のもっとも重要な任務であり、明らかにしないわけにはいきません。

そもそも地形は、（うまく使えばこちらを有利にできるので）兵士の助けとなるものです。そもそも敵情を調査し、勝利を確実なものとし、土地が陰しいかなだらかか、有利か不利か、遠いか近いかをとことん計ることが、上将（主将）のやり方です。これを知って戦うなら、必ず勝利します。これを知らないで戦うなら、必ず敗北します。戦いの道理からして必ず勝てるのであれば、君主が「戦うな」と言ったとしても、（現場にいる将軍の判断で）必ず戦います。戦いの道理からして勝てないのであれば、君主が「戦え」と言ったとしても、（現場にいる将軍の判断で）戦いません。ですから、進軍すべきときに進軍して、有名になることを考えません。退却すべきときに退却して、処罰されることを恐れませんが、とにかく人民は保護して、君主については利益がもたらされるようにします。まさに「国の宝」です。

兵卒をいたいけな赤ちゃんのようにみるので、兵卒と一緒に深い谷に向かうことができます。兵卒を愛する我が子のようにみるので、兵卒と一緒に死ぬことができます。大切にしても職務に努めず、大事にしても命令に従わず、軍隊を乱してどうしようもないなら、わがままな子どもと同じで、役立ちません。

こちらの兵士が攻撃に役立つことを知っていても、敵がこちらの勝ちやすい状態にないことを知らないなら、勝算は半分です。敵がこちらの勝ちやすい状態にあることを知っていても、こちらの兵士が攻撃に役立たないことを知らないなら、勝算は半分です。敵がこちらの勝ちやすい状態にあることを知り、こちらの兵士が攻撃に役立つことを知っていても、地形が戦うのに役立つことを知らないなら、勝算は半分です。ですから、こう言われるのです。軍事を知っている人は、（敵を知り、こちらを知り、地形を知っているの

行動するときには迷わず、挙兵するときには止まりません。ですから、こう言われるのです。相手を知り、自分を知っていれば、勝利はまちがいありません。天の時を知り、地の利を知っていれば、勝利はすんなりと得られます。

【原文】

竹簡本	從來本
<u>九地</u> <u>孫子曰。地形者、兵之助。故用兵有散</u> <u>（1）地、有輕地、有爭地、有交地、有瞿</u> <u>（衢）地、有重地、有泛地、有圉地、有死</u> <u>地。諸侯戰其地為散（2）。入人之地而不</u> <u>深者為輕（2）。我得亦利彼得亦利者為爭</u> <u>（2）。我可以往彼可以來者為交（2）。</u> <u>諸侯之地三屬先至而得天下之衆者為瞿</u> <u>（衢）。入人之地深倍（背）城邑多者為</u> <u>重。行山林沮澤凡難行之道者為泛（2）。</u> <u>所由入者隘所從歸者迂彼寡可以擊吾衆者為</u> <u>圉。疾則存不疾則亡者為死。是故散地則無</u> <u>戰、輕地則毋止、爭地則無攻、交地則無</u> <u>絕、衢地則合交、重地則掠、泛地則行、圉</u> <u>地則謀、死地則戰。所冒（謂）古善戰者、</u> <u>能使適（敵）人前後不相及也、貴賤不相救</u>	九地第十一 孫子曰。凡用兵之法、有散地、有輕地、 有爭地、有交地、有衢地、有重地、有圉 地、有圉地、有死地。諸侯自戰其地者為散 地。入人之地而不深者為輕地。我得亦利彼 得亦利者為爭地。我可以往彼可以來者為交 地。諸侯之地三屬、先至而得天下之衆者為 衢地。入人之地深背城邑多者為重地。山林 險阻沮澤凡難行之道者為圉地。所由入者隘 所從歸者迂彼寡可以擊吾之衆者為圉地。疾 戰則存不疾戰則亡者為死地。是故散地則無 戰、輕地則無止、爭地則無攻、交地則無 絕、衢地則合交、重地則掠、圉地則行、圉 地則謀、死地則戰。古之善用兵者、能使敵 人前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、 上下不相收、卒離而不集、兵合而不齊。合

也。卒離而不集也、兵合而不齊也（3）。

敢問。適（敵）衆以正（整）將來、侍

（待）之若何。曰奪其所愛則聽矣。兵之請

（情）主數（速）也、乘人之不給也。由不

虞之道也（4）。攻其所不戒也。凡為客之

道、深入則專、主人不克。掠於饒野、三軍

足食。謹養而勿勞、并氣積力、運兵計謀、

為不可賊（測）。投之母（無）所往、死且

不北、死焉不得、士人尽力。兵士甚陷則不

懼、無所往則固、入深則拘、無所往則闔。

是故不調而戒、不求而得、不約而親、不令

而信。禁祥去疑、至死無所之。吾士無余

財、非惡貨也。無余死、非惡壽也。令發之

日、士坐者涕霑襟、臥者涕交頤。投之無所

往者諸歲（劇）之勇也。故善用軍者辟

（譬）如衛然。衛然者、恒山之蛇也。擊其

首則尾至、擊其尾則首至、擊其中身則首尾

俱至。敢問。兵可使若衛然乎（乎）。曰。

可。越人与吳人相惡也、當其同周（舟）而

濟也、相救若左右手。是故方馬埋輪、未足

於利而動、不合於利而止。敢問。敵衆整而

將來、待之若何。曰。先奪其所愛則聽矣。

兵之情主速、乘人之不及、由不虞之道、攻

其所不戒也。凡為客之道、深入則專、主人

不克。掠於饒野、三軍足食。謹養而勿勞、

并氣積力、運兵計謀、為不可測。投之無所

往、死且不北、死焉不得、士人尽力。兵士

甚陷則不懼、無所往則固、入深則拘、不得

已則闔。是故其兵不修而戒、不求而得、不

約而親、不令而信。禁祥去疑、至死無所

之。吾士無余財、非惡貨也。無余命、非惡

壽也。令發之日、士卒坐者涕霑襟、偃臥者

涕交頤。投之無所往、諸劇之勇也。故善用

兵者、譬如率然。率然者常山之蛇也。擊其

首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱

至。敢問。可使如率然乎。曰。可。夫吳人

与越人相惡也。當其同舟濟而遇風、其相救

也如左右手。是故方馬埋輪、未足恃也。齊

勇若一、政之道也。剛柔皆得、地之理也。

故善用兵者、攜手若使一人、不得已也。將

恃也。齊勇若一、政之道也。剛柔皆得、地之理也。故善用兵者、攜手若使一人、不得已也。將軍之事、靜以幽、正以治。能愚士卒之耳目、使無之。易其事、革其謀、使民無識。易其居、迂其途、使人不得慮。帥与之期、如登高而去其梯。帥与之深入諸侯之地、殲其幾（機）、若毆（驅）群羊。驅而往、驅而來、莫知所之。聚三軍之衆、投之於險、此將軍之事也。九地之變（5）、誦（屈）信（伸）之利、人請（情）之理、不可不察也。凡為客之道、深則搏、淺則散。去國越竟（境）而師者、絕地也；四（徹）者、（衢）地也。入深者重地也。入淺者、輕地也。倍（背）固前險者圉地也。倍（背）固前適（敵）者、死地也。母（無）所往者、窮地也。是故（6）散地、吾將一其志。輕地、吾將使之（樓）。爭地、吾將使不留。交地也、吾將固其結。（衢）地也、吾將謹其恃。重地也、吾將趣其後。泛地也、吾將進其途。圉地也、吾將塞其

軍之事、靜以幽、正以治。能愚士卒之耳目、使之無知。易其事、革其謀、使人無識。易其居、迂其途、使人不得慮。帥与之期、如登高而去其梯。帥与之深入諸侯之地、而殲其機、若驅群羊。驅而往、驅而來、莫知所之。聚三軍之衆、投之於險、此將軍之事也。九地之變、屈伸之利、人情之理、不可不察也。凡為客之道、深則專、淺則散。去國越境而師者絕地也。四通者衢地也。入深者重地也。入淺者輕地也。背固前險者圉地也。無所往者死地也。是故散地吾將一其志。輕地吾將使之屬。爭地吾將趨其後。交地吾將謹其守。衢地吾將固其結。重地吾將繼其食。圉地吾將進其途。圉地吾將塞其關。死地吾將示之以不活。故兵之情、圉則禦、不得已則鬪、過則從。是故不知諸侯之謀者不能豫交。不知山林險阻沮洳之形者不能行軍。不用鄉導者不能得地利。四五者一不知、非霸王之兵也。夫霸王之兵、伐大國則其衆不得聚、威加於敵則其交不得

關。死地吾將示之以不活。故諸（7）侯之請（情）、選則禦、不得已則鬪、過則從。

是故不知諸侯之謀者不能豫交。不知山林險阻沮洳之形者不能行軍。不用鄉導者不能得地利。四五（8）者、一不智（知）、非王

霸之兵也。彼王霸之兵、伐大國則其衆不得聚、威加於敵則其交不得合。是故不爭天下之交、不養天下之權、信己之私、威加於敵。故國（9）可拔也、城可墮（隳）也。

無法之賞、無正（政）之令、犯三軍之衆、若使一人。犯之以事、勿告以言。犯之以害、勿告以利。芋之亡地然而後存、陷之死

地然後生。夫衆陷於害、然後能為敗為勝（10）。故為兵之事、在順詳敵之意、并敵一向、千里殺將、此謂（謂）巧事。是故

正（政）與（舉）之日、夷關折符、無通其使、厲于郎（廊）上、以誅其事。適（敵）

人開闔、必亟入之。先其所愛、微與之期。

踐墨隨敵、以決戰事。是故始如處女、敵人開戶、後如脫兔、敵不及拒。

合。是故不爭天下之交、不養天下之權、信己之私、威加於敵。故其城可拔、其國可隳。施無法之賞、懸無政之令、犯三軍之衆、若使一人。犯之以事、勿告以言。犯之以利、勿告以害。投之亡地然後存、陷之死地然後生。夫衆陷於害、然後能為勝敗。故為兵之事、在順詳敵之意、并敵一向、千里殺將、是謂巧能成事。是故政舉之日、夷關折符、無通其使、勵於廊廟之上、以誅其事。敵人開闔、必亟入之、先其所愛、微與之期。踐墨隨敵、以決戰事。是故始如處女、敵人開戶、後如脫兔、敵不及拒。

【注記】

(1) 竹簡を見ると、「地、有輕地」の前に約16字分の欠字があります。従来本では、「孫子曰。用兵之法、有散」となっており、明らかに字数が不足しています。この部分について、『通典』には「孫子曰。地形者、兵之助。故用兵有散」とあります。この文章で補えば、従来本よりも字数が増えて14字となり、16字に近づきます。ちなみに、この部分について、「浅野裕一『孫子』」は「孫子曰。地形者、兵之助。故用兵之法、有散」と推測しており、「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」は「孫子曰。夫地形者、兵之助也。故用兵有散」と推測しています。ここでは『通典』のままに引用し、あとは読者の判断に任せたいと思います。

(2) 「九地＝散地、輕地、争地、交地、衢地、重地、圯地、圉地、死地」について、竹簡本では、その解説部分では「地」の字が省略されています。そこで竹簡の残っていないところも、「地」の字を省略しています。なお、従来本の「圯地」は竹簡本では「泛地」になっていますので、ここでは「圯地」をすべて「泛地」に変更しています。

(3) 従来本にある「所謂古之善用兵者、能使敵人前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相收、卒離而不集、兵合而不齊。合於利而動、不合於利而止」という文章のうち、下線部のところは『銀雀山漢墓竹簡』では文字が失われています。竹簡では、下線部のところは約20字のスペースしかありません。しかし、従来本では、38字になっています。ですから、従来本には約18字の余分がある計算になります。どこかを削除する必要があります。

では、どれを削除すればよいのでしょうか。従来本の文章を分析してみますと、4つの部分に分けられます。「①所謂古之善用兵者」「②能使敵人前後不相及、衆寡不相恃、貴

賤不相救、上下不相收」「③卒離而不集、兵合而不斉」「④合於利而動、不合於利而止」の4つです。

このうち①は、全体の主語ですし、『銀雀山漢墓竹簡』にもありますから、削除しないほうがよいでしょう。④は、火攻篇にある「合於利而動、不合於利而止」と同じですし、文脈からして必要な言葉でもないので、削除してもよいでしょう。③は、②の結果です。要約すると、「②バラバラにするから、③敵軍はまとまれなくなる」ということを述べています。③は、この後に続く文章「適（敵）衆以正（整）将来、侍（待）之若何＝敵の大軍がまとまってやってきたら、どうすればよいのでしょうか」と内容が関連していますので、削除しないほうがよいでしょう。

以上のことから、まず④を削除します。しかし、残りの字数が27字で、字数オーバーですから、さらに②のうちから、いずれかを削除する必要があります。ただし、「前後不相及」は、竹簡で存在が確認されているので、削除できません。ですから、「衆寡不相恃」「貴賤不相救」「上下不相收」のうち、どれか2つを削除することになります。

そこで考察してみますと、「前後（前軍と後軍）」と「衆寡（本隊と支隊）」は、いずれも部隊編成に関することで、同じカテゴリーに分類できます。また、「貴賤（貴族と庶民）」と「上下（上官と部下）」は、いずれも上下関係に関することで、同じカテゴリーに分類できます。そこで、「衆寡不相恃」は「前後不相及」の補足説明として後から付け足されたもの、「上下不相收」は「貴賤不相救」の補足説明として後から付け足されたものと考えられることもできます。ですから、「衆寡不相恃」と「前後不相及」を削除すればよいのではないのでしょうか。

このようにすると、「前後不相及（違う場所にいる前軍と後軍が互いに連携しあえな

い)」という状態になるので「卒離而不集（兵卒は分散したときには集まらない）」という結果になり、「貴賤不相救（同じ部隊にいる貴族と庶民が互いに救援しあえない）」という状態になるので「兵合而不斉（兵士は集合したときには整わない）」という結果になるという形で、文章もきれいに整います。ただし、以上の復元案は、あくまでも試案ですので、読者のみなさまも自分なりに考えてみてください。

なお、従来本の「②能使敵人前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相收」のところですが、『銀雀山漢墓竹簡』では、「前後不相及」のところが「前後不相及也」となっており、「也」がついています。そこで、文章の形を合わせるため、他のところにも「也」をつけたほうがよいでしょう。

（４）竹簡本では、前の句に従来本にはない「也」の字がついています。そこで、句の形を整えるため、「也」の字を付け加えています。

（５）銀雀山漢墓から発掘された「地形二」篇の断片として、「九地之法、人請（情）之理、不可不」という文章があります。張預の注釈には「九地之法、不可拘泥、須識變通」とあります。

（６）竹簡本では、ここには３～４文字分のスペースがあります。しかし、従来本には「是故」の２字しかありません。

（７）竹簡本では、「侯」より前の文字が欠落しています。おそらく「諸侯」だと推定できますので、「諸」の字を付け足しています。

（８）四五の解釈について、一般的には「九地」を指すと言われています。

ただ、『魏武帝註孫子』には、「或曰。上四五事也（一説によると、上記の四つ五つのことです）」とあります。『孫子』に出てくる「四」に関連した記述としては、「四軍之

利」（行軍篇）があります。さらに『銀雀山漢墓竹簡「孫子」佚文』には、「四変」が出てきます。これは「①道路には使わないほうがよいものもある」「②敵軍には撃たないほうがよいものもある」「③城には攻めないほうがよいものもある」「④土地には争わないほうがよいものもある」の4つを指します。また、「五」に関連した記述としては、「五事」（計篇）、「此五者知勝之道也」（謀攻篇）、「五音」「五色」「五味」（勢篇）、「五行」（実虚）、「五変」「五利」「五危」（九変）、「五火」（火攻篇）、「五間」（用間篇）があります。以上のうち、地の利に関連したものとしては、「四軍之利」「四変」「五変」「五利」があります。ですから、「四つ＝四軍之利もしくは四変」「五つ＝五変もしくは五利」とも考えられます。ちなみに、『銀雀山漢墓竹簡兵法佚文』には、「四路必徹、五動必工（進路、退路、左路、右路という四つの道路は必ず確保し、進む、退く、左折する、右折する、待機するという五つの行動は必ず上手に行います）」という記述もあります。

その他、『銀雀山漢墓竹簡兵法佚文』「十問」には、「撃此者、三軍之衆分而為四五（これを攻撃するにあたっては、全軍が分かれて四つ五つとなり）」とあり、「四五」が「いくつかの」と同様の意味で使われています。ですから、「四五者、一不智（知）」について、「上述のいくつかのことについて、少しも知らなければ」という意味で解釈することも可能です。

（9）従来本では「城可拔也、国可隳也」となっているところが、竹簡本では「□可拔也、城可隳也」となっており、後文の「城」と「国」が入れかわっています。そのことから、前文も同じによように入れかわっているものと推測し、「□」に「国」をあてはめています。また、従来本では「城」の前に「其」が付いていますが、竹簡本には付いていません。で

すから、「国」にも「其」を付けていません。

(10) 竹簡本では「能為敗為」以下の文字が欠落しています。従来本には「能為将敗」とあります。そこから推測して、「勝」の字を付け足しています。

【翻訳】

孫子が言いました。

地形は、兵士の助けとなるものです。ですから、用兵にあたっては、地勢の類型として、①散地があり、②軽地があり、③争地があり、④交地があり、⑤衢地があり、⑥重地があり、⑦泛地があり、⑧圉地があり、⑨死地があります。①諸侯がみずから領土内で戦う場合、その戦場は「散地」となります。②よその土地に入ってすぐのところは「軽地」となります。③こちらが得たときには「得ても」有利となり、敵が得ても有利となるところは「争地」となります。④こちらも行きやすいし、敵も来やすいところは「交地」となります。⑤諸侯の領土が三方に接していて、先に到着すると各地の援軍を得られるところは「衢地」となります。⑥よその土地に深く入りこみ、多くの城や街を通過したところは「重地」となります。⑦山林、湖沼を行くなど、およそ通行しにくいところは「泛地」となります。⑧入っていくには狭いところを通らなければならない、退いていくには遠回りをするのではなくて、敵が少ない兵力でこちらの大軍を撃破できるところは、「圉地」となります。⑨すばやくすれば生き残れるが、すばやくしなければ全滅することになるところは「死地」となります。そういうわけで、①「散地」では、戦ってはいけません。②「軽地」では、止まってはいけません。③「争地」では、攻めてはいけません。④「交地」では、道をふさがれてはいけません。⑤「衢地」では、諸国と親交を結びます。⑥

「重地」では、物資を取り立てます。⑦「泛地」では、移動します。⑧「圉地」では、謀略をめぐらします。⑨「死地」では、戦います。

いわゆる昔の戦いのうまかった人は、敵の前軍と後軍が互いに連携できないようにさせ、敵の貴族と庶民が互いに救援できないようにさせることができました。（その結果）敵の兵卒は分散したときには集まれず、敵の兵士は集合したときには整いませんでした。ここで質問します。敵が多くて整然としており、迫って来ようとしているとき、どのようにしてこれに対処すればよいのでしょうか。回答します。先んじて敵の大事なものを奪えば、敵をこちらの思いのままに操ることができます。軍事の実情としては、すみやかであることがメインとなります。敵が想定していない点につけいります。敵が思いもよらない道を通ります。敵が警戒していないところを攻めます。

およそ敵地に攻め手のあり方としては、敵地に深く入りこんだときには結束し、守り手は勝ちません。敵国にある実り豊かな田畑の作物を刈り取り、全軍が食料を十分に持てるようにします。兵士を慎重に養って疲れさせないようにさせ、やる気をみなぎらせ、体力を充実させます。兵隊を動かして計略をめぐらし、敵の思いもよらないことをします。兵士を逃げ場のないところに行かせることで、兵士は死んでも逃げなくなります。兵士を必死にさせられないことはなく、兵士は死力を尽くします。兵士は、ひどくゆきづまれば怖いもの知らずとなり、逃げ場がなくなれば団結します。敵地に深く入りこめば結束し、どうしようもなくなれば必死に戦います。そういうわけで、その兵士は、きちんとさせなくても、おのずと気がひきしまります。求めなくても、みずから奮闘します。まとめなくても、おのずと仲良くします。命令しなくても、おのずと決まりを守ります。占いを禁じ、余計な疑念を生じさせないようにすれば、兵士たちは死ぬことになろうとも逃げないで戦

います。わが兵士が物資を軽く見るのは、価値あるものを嫌っているからではありません。死を軽く見るのは、長生きを嫌っているからではありません。決戦の命令が出された日、兵士のうち、座っている者は涙で襟をぬらし、臥している者は涙で顔をぐしょぐしょにします。しかし、兵士を逃げ場のないところ（必死に戦わなければ死ぬしかないところ）に行かせるなら、だれもが専諸や曹劌のように勇敢になります。

ですから、用兵のうまい人は、たとえば衛然のようにします。衛然とは、恒山にいる蛇のことです。頭（前軍）をたたけば、尻尾（後軍）が向かってきます。尻尾（後軍）をたたけば、頭（前軍）が向かってきます。腹（中軍）をたたけば、頭（前軍）と尻尾（後軍）が一緒に向かってきます。ここで質問します。兵士は衛然のようにさせられるのでしょうか。回答します。できます。越人と呉人は互いに憎みあっていますが、同じ船に乗って川を渡るにあたっては、まるで左右の手のように互いに助け合います。そういうわけで、馬をつなぎ、車輪を埋めて守りを固めたとしても、まだ頼りになりません。そろって勇ましくなり、みんなが一体となるのは、政道（ガバナンス）によるものです。強い者も弱い者も全員が奮闘するのは、地理（ポジション）によるものです。ですから、用兵のうまい人が、兵士を連携させて一人を使うようにさせられるのは、兵士をそうするしかない状況に追い込むからです。

将軍のすべきことは、物静かにして本心を隠し、公正にして全軍を整えます。うまく軍人の耳目をあざむき、耳目がないのと同じようにさせます（軍人が将軍にとって好都合なことだけを信じるように仕向けます）。こちらの行動を変えたり、こちらの計画を改めたりして、人に知られないようにします。陣地を変えたり、道路を遠回りにしたりして、人にさとられないようにします。軍隊をひきつれ、兵士と決戦を約束したら、高いところに

登らせてハシゴをはずすようにします。軍隊をひきつれ、兵士と一緒に諸侯の領地に侵入し、攻撃を開始したら、羊の群れをあやつるようにします。あやつるままに行かせ、あやつるままに来させ、その目的を知らせないようにします。全軍の兵士を集め、ピンチに立たせます。以上が將軍のすべきことです。九地の変（戦場は状況に応じて9つのタイプに分けられ、それぞれに最適な対処の仕方があること）、屈伸の利（状況に応じて動くべきときには動き、止まるべきときには止まること）、人情の理（人間はピンチに追いこまれると必死になり、かなりの力を出せるようになること）については、明らかにしないといけません。

およそ敵地に攻めこむ方法としては、敵地に深く入りこんでいれば（兵士は逃げ場がないので）結束しやすくなりますが、敵地に浅くしか入りこんでいなければ（兵士は逃げ帰りやすいので）離散しやすくなります。自国を離れ、国境をこえて、軍事活動を行うところは「絶地」です。四方が諸国につながっているところは「衢地」です。敵国に深く入ったところは「重地」です。敵国にちょっとしか入ってないところは「軽地」です。後方が険しく、前方が狭いところは「死地」です。逃げ場のないところは「窮地」です。そういうわけで、「散地」では、兵士の意志を一つにします。「軽地」では、兵士をつなぎとめます。「争地」では、とどこおらせないようにします。「交地」では、同盟を固めます。

「衢地」では、頼りになる相手を慎重に選びます。「重地」では、後続部隊を目的地に急がせるようにします。「泛地」では、さっさと通過するようにします。「圉地」では、（兵士を必死に戦わせるために）逃げ道をふさぐようにします。「死地」では、絶体絶命のピンチにあることを理解させます。ですから、諸侯の実情として、群[むら]がってきたとき（自国の城が他国の軍隊に包囲されたとき）には防衛します。やむをえないとき

（反撃するしか生き残る方法がないとき）には戦闘します。通り過ぎていったとき（自国の城の前を他国の軍隊が通過していったとき）には追尾します。

そういうわけで、①諸国の腹の内を知らない人は、事前に諸国と外交を取りむすべません。②山林、難所、湿地、沼沢といった地形を知らない人は、軍を進められません。③現地の地理にくわしい人間をガイドにしない人は、地の利を得られません。四つ五つのことについて少しも知らなければ、「王覇の兵（王者や覇者の軍隊）」ではありません。あの「王覇の兵」は、大国を征伐したときには、そこの兵隊は集まらなくなります。敵を威嚇したときには、そこの外交は味方を失います。そういうわけで、天下の外交をリードしようとせずとも、天下の覇権を握ろうとせずとも、自分の思いのままにできて、敵を威圧することができます。ですから、国は撃破させられますし、城は陥落させられます。法外な恩賞、規制のわくにとらわれない命令で、全軍の兵士を従わせ、まるで一人を動かすかのようにすんなりと全員を動かします。「これがすべきことだから、これをしろ」と命じて従わせ、その裏に隠された意図については教えてはいけません。「これをしないと損害をこうむるから、これをしろ」と命じて従わせ、その裏に隠された利益については教えてはいけません。兵士を滅びるほかないような状態に追いこんでこそ、兵士は生き残ることができます。兵士を死ぬほかないような状態に陥らせてこそ、兵士は生きのびることができます。そもそも兵隊は、窮地においこまれて、はじめてこちらに勝利をもたらし、敵を敗北させることができます。ですから、兵隊を動かすにあたって大切なことは、敵の考えを探り、敵の思いどおりにさせることにあります。（そうして敵が油断したところで）敵に対して力を合わせ、一丸となって向かっていき、千里もの距離を進んで敵将を殺します。これを「物事をうまくやる」と言います。

そういうわけで、軍事に関する政務が開始された日には、国境を封鎖し、入国許可証を取り消し、使者の往来を禁止します。廊上（政府内）において気持ちを奮い立たせ、軍事についてマネジメントします。敵がスキを見せたら、必ずすみやかにつけ入ります。敵の大事なところを優先し、ひそかにそこにねらいを定めます。軍事の常識に従い、敵情に応じて動き、そうして戦争を決めます。そういうわけで、始めは少女のようにふるまい、敵を油断させます。敵が油断して門戸を開いたら、逃げるウサギのようにすばやく動き、敵に対応する余裕を与えないようにします。

第 12 篇 火攻

【原文】

竹簡本	從來本
<u>火攻</u> <u>孫子曰。凡火攻有五、一曰火人、二曰火</u> <u>漬（積）、三曰火輜、四曰火庫、五曰火隊</u> <u>（1）。行火有因、因必素具。發火有時、</u> <u>起火有日。時者、天之燥也。日者、月在箕</u> <u>壁翼軫也。凡此四者、風之起日也。火發於</u> <u>內則早應之於外。火發其兵靜而勿攻。極其</u> <u>火央、可從而從之、不可從則止之。火可發</u> <u>於外、毋待（待）於內、以時發之。火發上</u> <u>風、毋攻下風。昼風久、夜風止。凡軍必知</u> <u>五火之變以數守之。故以火佐攻者明、以水</u> <u>佐攻者強。水可以絕、不可以奪。夫戰勝攻</u> <u>取而（2）得、不隨其功者凶、命之曰費留</u> <u>（3）。故曰。明主慮之、良將隨之。非利</u> <u>不動、非得不用、非危不戰。主不可以怒而</u> <u>興軍、將不可以慍（慍）戰。合於利而用、</u>	火攻第十二 孫子曰。凡火攻有五、一曰火人、二曰火 積、三曰火輜、四曰火庫、五曰火隊。行火 必有因、煙火必素具。發火有時、起火有 日。時者、天之燥也。日者、月在箕壁翼軫 也。凡此四宿者、風起之日也。凡火攻必因 五火之變而應之。火發於內則早應之於外。 火發而其兵靜者待而勿攻。極其火力、可從 而從之、不可從則止。火可發於外、無待於 內、以時發之。火發上風、無攻下風。昼風 久、夜風止。凡軍必知五火之變以數守之。 故以火佐攻者明、以水佐攻者強。水可以 絕、不可以奪。夫戰勝攻取、而不修其功者 凶、命曰費留。故曰。明主慮之、良將修 之。非利不動、非得不用、非危不戰。主不 可以怒而興師、將不可以慍而致戰。合於利

<u>不合而止。怒可復喜也。温（愠）可復説。</u> 亡国不可以復存、死者不可以復生。故明主慎之、良将警之。此安国全軍之道也。	而動、不合於利而止。怒可以復喜、愠可以復説。亡国不可以復存、死者不可以復生。故明主慎之、良将警之。此安国全軍之道也。
---	---

【注記】

（１）『通典』には「火墜」とあり、『長短經』には「火燧」とあります。『太平御覧』には「火墜」「火燧」の両方が記録されています。「火隊」「火墜」「火燧」の解釈としては、①「火隊＝隊列に火をかける」とするもの（杜牧など）、②「火隊＝兵器に火をかける」と解釈するもの（李筌、梅堯臣、張預など）、③「隊」や「燧」を「隧」の書きまちがいとして、「糧道に火をかける」とするもの（賈林、何延錫など）、④「墜」を「墮」の意味として、「敵陣に火矢などを打ちこんで火をかける」とするもの（杜佑など）、⑤「隊」を城壁の下にトンネルを掘って攻めてくる敵を解釈して、その敵に火をかけるとするもの（「李零『孫子古本研究』」など）があります。その他として、杜佑によると、「火道＝道路に火をかける」としているものもあったそうです。

ちなみに、現存する中国の文章のなかで、火矢に関する最古の記録は『魏略輯本』にある「昭以火箭逆射其雲梯（郝昭は火矢を使って敵の雲梯に反撃した）」という記述になります。

（２）ここに竹簡本では約１２文字分のスペースがありますので、従来本の１２文字をそのまま残しています。

(3) 「費留」の「費」は、「浪費」です。金品のムダ使いを言います。「留」は、「滞留」です。時間のムダ使いを言います。

【翻訳】

孫子が言いました。

火攻めには五種類あります。第一は「火人（野営中の敵に火をかける）」です。第二は「火積（敵の食料に火をかける）」です。第三は「火輜（敵の輸送車に火をかける）」です。第四は「火庫（敵の倉庫に火をかける）」です。第五は「火隊（戦闘中の敵に火をかける）」です。火を使うときには必ず条件があり、条件は必ずふだんから整えておきます。火を燃え上がらせるには、時のよしあしがあります。火を燃え広がらせるには、日のよしあしがあります。よい時は、天気が乾燥している時です。よい日は、月が箕・壁・翼・軫の位置にあるときです。この位置に月がある日は、風が吹きます。

敵の内部で火の手が上がったときには、すばやく外から攻めかかります。火が燃え上がり、敵兵が冷静なら、待機して攻めてはいけません。火を燃えるにまかせ、攻撃できそうなら攻撃し、攻撃できそうにないなら止めます。外から火をつけやすいなら、内部から火をつけるまでもなく、タイミングを見計らって火をつけます。火が風上でついたときには、風下から攻撃してはいけません。昼の風は長く吹き、夜の風はすぐ止まります。およそ軍隊は、必ず5種類の火攻めがもたらす変化を知り、火攻めのポイントをおさえて守備に役立ってます。ですから、（敵に大きな損害を与える攻撃方法として火攻めと水攻めがあるわけですが）火を用いて攻撃の助けとする場合、その威力は明らかです。水を用いて攻撃の助けとする場合、その勢いは強力です。ただし、水は、絶つことはできても、奪うことは

できません。

そもそも（火攻めや水攻めによって）戦って勝ち、攻めて取り、そして成功したとき、その成果を活用しないのは、悪い結果となります。これを名づけて「むだ使い」と言います。ですから、「賢明な君主は、これを思慮する。優良な将軍は、これを活用する」と言われるのです。利益にならないなら行動を起こしません。成功につながらないなら軍隊を使いません。危険でないなら戦争をしません。君主は敵に対して怒っているからといって、軍事を発動してはいけません。将軍は敵に対して怨みがあるからといって、戦いをしかけてはいけません。利益につながるなら軍隊を使い、利益につながらないなら止めます。そのときは怒っていても、そのうち怒りも消えて、喜ばしい気分になるものです。そのときは怨んでいても、そのうち怨みも消えて、楽しい気分になるものです。しかし、いったん滅んだ国は二度と立ち直りません。いったん死んだ人は二度と生き返りません。ですから、賢明な君主は、軽々しく開戦しないように注意し、優秀な将軍は、軽々しく戦わないように用心するのです。以上が国を安泰にし、軍を保全する方法です。

【原文】

竹簡本	從來本
<u>用間</u> <u>孫子曰。凡興師十万、出征千里、百生</u> <u>(姓)之費、公家之奉、日費千金。内外騷</u> <u>動、不得操事者七十万家(1)。</u>相守數 年、以爭一日之勝、而愛爵祿百金、不<u>知適</u> <u>(敵)之請(情)者、不仁之至也、非民之</u> <u>將也、非主之佐也。非勝之注(主)也。故</u> 明君賢將、所以動而勝人、成功出於衆者、 先知也。先知者、不可取於鬼神、<u>不可象於</u> <u>事、不可驗於度、必取於人知者。故用間有</u> <u>五。有因間、有內間、有反間、有死間、有</u> <u>生間。</u>五間俱起、莫知其道、是謂<u>神紀、人</u> <u>君之葆(宝)也。生間者、反報也(2)。</u> <u>因間者、因其鄉人而用者也。內間者、因</u> <u>其官人而用者也(3)。</u><u>反間者、因其敵間而</u> <u>用者也(3)。</u>死間者、為誑事於外、令吾	用間第十三 孫子曰。凡興師十万、出征千里、百姓之 費、公家之奉、日費千金。内外騷動、怠於 道路、不得操事者、七十万家。相守數年、 以爭一日之勝、而愛爵祿百金、不知敵之情 者、不仁之至也。非人之將也。非主之佐 也。非勝之主也。故明君賢將、所以動而勝 人、成功出於衆者、先知也。先知者、不可 取於鬼神、不可象於事、不可驗於度。必取 於人、知敵之情者也。故用間有五、有因間 (鄉間)、有內間、有反間、有死間、有生 間。五間俱起、莫知其道、是謂神紀、人君 之宝也。因間者因其鄉人而用之。內間者因 其官人而用之。反間者因其敵間而用之。死 間者為誑事於外、令吾間知之、而伝於敵間 也。生間者、反報也。故三軍之事莫親於

聞知之而傳於敵間也。故三軍之親莫親於間、賞莫厚於間、事莫密於間。非聖不能用間（4）。非仁不能使間。非密不能行間之葆（宝）。密（哉）〔密（哉）〕、毋（無）所不用間。非微不能得間之實。微哉〔微哉〕、無所不使間（5）。間事未發間、間与所告者皆死（6）。凡軍之所欲擊、城之所欲攻、人之所欲殺、必先知其守将、左右、謁者、門者、舍人之姓名、令吾間必索知之。必索敵間之来間我者、因而利之、導而舍之。故反間可得而用也。因是而知之、故鄉間、内間可得而使也。因是而知之、故死間為誑事、可使告敵。因是而知之。故生間可使如期。五間之事、必知之。知之必在於反間。故反間不可不厚也。昔殷之興也、伊摯在夏。周之興也、呂牙在殷。
□之興也、（7）（率）師比在陘（8）。·燕之興也、蘇秦在齊（9）。唯明主賢将能能以上智為間者、必成大功。此兵之要、三軍所恃而動也。

間、賞莫厚於間、事莫密於間。非聖智不能用間、非仁義不能使間、非微妙不能得間之實。微哉微哉、無所不用間也。間事未發、而先聞者、間与所告者皆死。凡軍之所欲擊、城之所欲攻、人之所欲殺、必先知其守将、左右、謁者、門者、舍人之姓名、令吾間必索知之。必索敵間之来間我者、因而利之、導而舍之。故反間可得而使也。因是而知之。故鄉間、内間可得而使也。因是而知之、故死間為誑事、可使告敵。因是而知之。故生間可使如期。五間之事、主必知之。知之必在於反間。故反間不可不厚也。昔殷之興也、伊摯在夏。周之興也、呂牙在殷。故明君賢将能以上智為間者、必成大功。此兵之要、三軍所恃而動也。

【注記】

(1) 従来本では「凡興師十万、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金。内外騷動、怠於道路、不得操事者七十万家」とありますが、『北堂書鈔』と『太平御覽』には「興師十万、出師千里、百姓之費、公家之奉、日費千金、内外騷動、不得操事者七十万家」とあることから、「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」は「怠於道路」を削除するほうがよいとの説を出しています。竹簡の画像を見てみますと、「日費千」と「知適（敵）」の間にある欠落部分の字数は、だいたい31字から33字になります。たしかに「怠於道路」を削除すれば31字になるので、今は「王正向『孫子十三篇竹簡本校理』」の説に従います。

(2) 「生間」の説明は、従来本では最後にありますが、竹簡本では最初にあります。

(3) 従来本では「用之」となっていますが、竹簡本では他の「用之」のところが「用者也」になっていますので、ここの「用之」もそれに合わせて変更しました。

(4) 従来本では「聖智」となっていますが、従来本の「仁義」のところが竹簡本では最初の「仁」だけになっていますので、それに合わせて最初の「聖」だけに変更しました。

(5) ここは、2本の竹簡にまたがって記載されています。それは次のとおりです。下線部が竹簡に残されていた部分を示し、それ以外は従来本等を参照して復元した部分になります。

1 本目「賞莫厚於間、事莫密於間、非聖不能用間、非仁不能使間、非密不能行間之葆、密哉、母所不用間、非」

2 本目「微不能獲間之實、微哉、無所不使間、間事未発間、間与所告者皆死、凡軍之所欲撃、城之所欲攻、人」

以上のうち、竹簡に残されて「密哉」には、「密哉密哉」と重ねて読むように指示する

記号が付けられています。ですから、「密哉」と文型が対応している「微哉」も、「微哉微哉」と重ねて読んだほうがよいでしょう。ちなみに、このように重ねて読む文章を重文と言います。

上記のうち、「賞莫厚於間、事莫密於間、非聖不能用間、非仁不能使間」と「間事未発間、間与所告者皆死、凡軍之所欲撃、城之所欲攻、人」は、竹簡本では失われているところを従来本の文章で補って復元しています。

その間にある「非密不能行間之葆、密哉、母所不用間、非微不能獲間之実、微哉無所不使間」（30字）は、従来本では「非微妙不能得間之実。微哉微哉、無所不用間也」（16字）となっています（微哉微哉は、重文とし、2文字と計算します）。従来本の文章をそのままあてはめると、字数が不足します。ちなみに、『太平御覧』では、「非微密者不能得間之実。微哉微哉、無所不用間也」となっています。

従来本を竹簡本と比べてみると、竹簡本の「葆」が従来本では「実」となっており、竹簡本の「密哉」が従来本では「微哉」となっています。そこで、もともと竹簡本には「～之実、微哉〔微哉〕～」と「～之葆、密哉〔密哉〕～」の2つの文章があり、「葆」「実」「密哉」「微哉」のすべてが使われていたが、『孫子』が後世に継承されていく過程で「～之葆、密哉〔密哉〕～」の一文が失われて、「～之実、微哉〔微哉〕～」だけが従来本に残ったと仮定します。実際、梅堯臣の注釈には「微之又微、則何所不知」とあり、張預の注釈には「密之又密、則事無巨細皆先知也」とあることから、もともと『孫子』には「微哉」もあれば、「密哉」もあったことが推測されます。

このように仮定し、従来本の文章を参考にして復元すると、「非微不能得間之実。微哉〔微哉〕、母所不用間」（15字）と「非密不能得間之葆。密哉〔密哉〕、母所不用間」

(15字)という2つの文章が考えられます(注:竹簡本には「也」がないので、ここでも文末に「也」をつけていません)。この場合、字数が合計で30字になり、不足を補えます。

ところで、前にある文章を見ると、「非聖不能^用間、非仁不能^使間」となっており、スパイの使用について「使」と「用」を分けて書いています。そこで、2つある「母所不用間」について、1つを「使」に変更したほうが、バランスがよくなります。そこで、「非密不能得間之葆。密哉〔密哉〕、母所不用間」は竹簡に「用」の字が残っており、修正できないので、「非微不能得間之実。微哉〔微哉〕、母所不用間」を「非微不能得間之实。微哉〔微哉〕、母所不使間」と修正します。

また、「非聖不能^用間、非仁不能^使間」では先に「用」があり、後に「使」があるので、復元した文章もそれにならって「非密不能得間之葆。密哉〔密哉〕、母所不用間。非微不能得間之实。微哉〔微哉〕、母所不使間」という順番で、先に「用」がきて、後に「使」がくるようにします。

ところで、ここでは「非密不能得間之葆」の「得」を「行」に置き換えて復元しています。その理由は、次のとおりです。すなわち、「葆」は「宝」に置き換えられるわけですが、このところで「宝」に関連したものとして、杜牧の次の注釈があります。「間亦有利於財宝。不得敵之实情。但将虚辞以赴我約。此須用心淵妙。乃能酌其情偽虚实也(スパイも財宝に利益があります。敵の实情を得られなくても、ただウソの情報を持ってきて、こちらの求めに応じて情報収集の仕事をしたように見せかけてきます。以上はよくよく洞察しないといけないところで、そうしてこそ真偽を判別できます)」

杜牧の生きた時代は、唐代の末期です。『新唐書』によると、唐代には『沈友註孫子』

も残っていました。その著者の沈友は、三国時代の呉国の人で、曹操が『孫子』を注釈したのに対抗して、別の注釈を作成しました。ですから、その『沈友註孫子』には、『魏武帝註孫子』とは違った形でオリジナルの『孫子』が保存されていたと思われます。そこには「葆（宝）」もなんらかの形で残されており、それを見た杜牧が上記のような注釈をした可能性も考えられます。この杜牧の注釈では、スパイに対する賞与として財宝をあげており、「気をつけないと、賞与（財宝）が目当てのスパイにだまされて、ウソの情報をつかまされかねない」ことが述べられています。そこで、スパイの賞与を行使することについて述べていると仮定し、ここでは「行」という動詞を使って復元しています。

ちなみに、「宝」は「宝札（密封した文書）」という使われ方もします。密封した文書（すなわち秘密の情報）を獲得できれば、相手を出し抜くことができます。そういった点では、「得（獲）」を使ってもよいかもしれません。

なお、以上の復元案は、あくまでも著者の試案ですから、読者のみなさんにもぜひ他に最適な復元がないかを考えてもらえるとよいと思います。

（６）『六韜』「龍韜・陰符」に「若符事泄、告者聞者皆誅之（もし秘密の事柄がもれたら、告げた人と聞いた人はいずれも処刑します）」とあります。

（７）ここは文字が欠落していますが、他のところを参考にして、再現しています。ただし、「師比」という人物については他の資料に記述がなく、また、「陘」がどこなのかについても特定できませんので、最初にくる国名が確定できません。ですから、ここでは「□」としています。

（８）「師比」という人物、「陘」という地名について、考えるヒントになる情報を紹介しておきます。

まず人物についてです。ここでは4人の人物が、伊尹→呂尚→ 師比→蘇秦という順番で紹介されています。ところで、中国の歴史は殷代→周代→春秋時代→戦国時代と推移するわけですが、伊尹は殷代、呂尚は周代、蘇秦は戦国時代の人物です。ですから、記述の順番からして、 師比は春秋時代の人物かもしれません。

師比の字に着目すると、 師比の「 」は「率」です。前漢時代には、「率」を「 」と記述することが多かったと言われています。ですから、率師比と書けるわけですが、率師には「軍隊を率いる＝将軍」という意味があります。ですから、率師比は、「将軍の比」と解釈することも可能です。また、師比には「おびがね＝ベルトのバックル」や「鮮卑族の別名」という意味があります。

ちなみに、名前に「比」という字のある人物で、スパイ活動で有名な人物としては、春秋時代の楚国で活躍した鬬伯比という人物がいます。この人物は、楚国の宰相で、楚国を強大国に育てあげるのに貢献した人物です。随国との戦いでは、スパイ活動を駆使して、随国を敗北させています。ただし、鬬伯比は、現代に置き換えて言うなら、「鬬」が姓（ファミリーネーム）で、「伯比」が名（ファーストネーム）です。ちなみに、牽強付会かもしれませんが、たとえば「風伯」が「風師」と言われることもあるように、「伯」と「師」が入れかわっている例もあることから、ここの「師比」を「伯比」と解釈することも可能かもしれません。

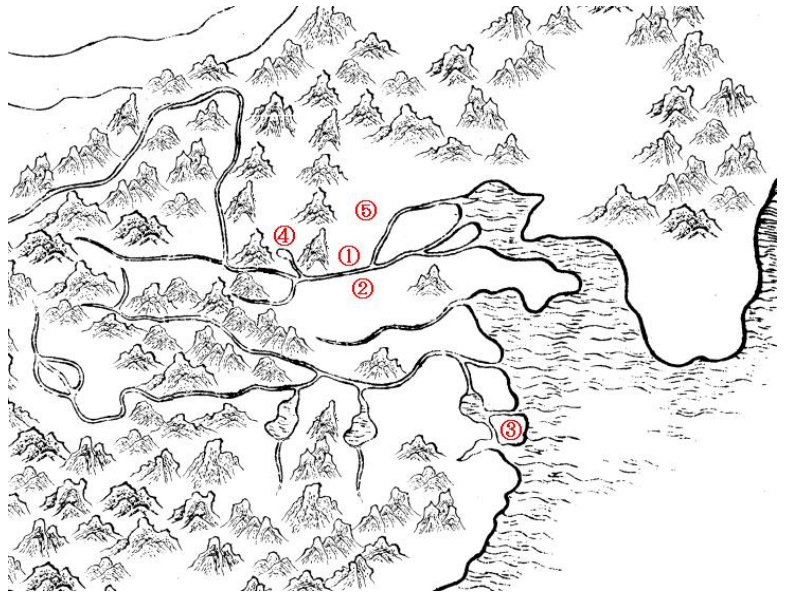
ところで、「率」の字に関連して言うと、従来本で「率然」となっているところが、竹簡本では「衛然」となっており、「率」と「衛」が入れかわっています。『銀雀山漢墓竹簡（壺）』の模本を確認すると、「率師比」の「率」と「衛然」の「衛」は、字がよく似ています。ですから、「率師比」は、もしかすると「衛師比」だったのかもしれません。

なお、春秋時代の衛国には、「褚師比」という人物がいました。

春秋時代、衛国の莊公は、君主の地位につくと、自分に冷たかった大臣たちを処罰しようと考えました。衛国の大臣だった瞞成は、先手をとって莊公を殺そうと計画し、褚師比にも計画に参加するように求めます。しかし、この計画は実現せず、瞞成と褚師比は宋国に亡命しました。これが褚師比に関する『春秋左氏伝』の記録であり、褚師比がスパイ活動で活躍した記録はありません。

その他、参考までに紹介しておきますと、『易経』では「師」の次に「比」が出てきます。続けて読むと、「戦ったあと、仲良くなる」という解釈になります。

次に地名についてです。地名が「陘」の場所には、次のようなものがあります。①春秋時代の周国の領域内にあった地名で、今の河南省博愛県の西北あたり。②春秋時代の楚国の領域内にあった地名で、今の河南省鄧城県の県境あたり。③春秋時代の呉国の領域内にあった地名で、今の江蘇省嘉興市の南あたり。④戦国時代の韓国の領域内にあった地名で、今の山西省曲沃県の県境あたり。⑤漢代の中山国の領域内にあった地名で、今の河北省定州市あたり。



このうち、①に関連して、『春秋左氏伝』「隠公十一年」に、こうあります。「王取鄆、劉、蔦、邶之田于鄭、而與鄭人蘇忿生之田、温、原、緄、樊、隰、郕、欒茅、向、盟、州、陘、隕、懷（周王は、鄭国から鄆、劉、蔦の土地を取って、鄭国に蘇忿生（周国の大臣）の土地である温、原、緄、樊、隰、郕、欒茅、向、盟、州、陘、隕、懷を与えまし

た)」

②に関連して、『春秋左氏伝』「僖公四年」に、こうあります。「公会齊侯、宋公、陳侯、衛侯、鄭伯、許男、曹伯侵蔡。蔡潰。遂伐楚、次于陘。（中略）楚屈完来盟于師。盟于召陵（魯国の君主は、齊国、宋国、陳国、衛国、鄭国、許国、曹国と連合して、楚国と友好関係にあった蔡国を攻撃しました。蔡国が敗北すると、そのまま楚国の討伐に向かい、陘の地に駐屯しました。（中略）楚国の屈完は、楚国の使者として連合軍をおとずれ、その実力を調べてみると、勝てそうになかったので、召陵において講和条約を締結しました）」

ところで、②のあたりには、西周時代の末期、胡国がありました。胡国は鄭国に攻め滅ぼされたのですが、このとき鄭国は、スパイ活動（情報操作）を使い、胡国を油断させてから奇襲し、勝利しています。これについて、『韓非子』「説難」に、こうあります。

「昔者鄭武公欲伐胡。故先以其女妻胡君以娛其意。因問於群臣、吾欲用兵、誰可伐者。大夫関其思対曰。胡可伐。武公怒而戮之、曰。胡、兄弟之國也、子言伐之何也。胡君聞之、以鄭為親己、遂不備鄭。鄭人襲胡、取之（昔、鄭国の武公は、胡国を討伐したいと思いました。そこで、娘を胡国の君主に嫁がせ、胡国を喜ばせます。それから臣下たちに質問しました。私は戦争をしたいのだが、だれを討伐すべきだろうか。大夫の関其思は、答えて言いました。胡国を討伐すべきです。武公は怒って関其思を処刑し、言いました。胡国は、兄弟の国だ。あなたはこれを討伐すべきと言うが、どういうことだ。胡国の君主は、これを聞き、鄭国は胡国の友好国だと思い、ついに鄭国を警戒しなくなります。鄭国は、胡国を襲撃し、これを占領しました）」

ちなみに、胡国には、姫姓胡国と帰姓胡国がありました。このとき滅ぼされた胡国は、

姬姓胡国です。

③に関連して、『春秋左氏伝』「定公十四年」に、こうあります。「靈姑浮以戈擊闔廬、闔廬傷將指、取其一履還、卒於涇、去樵李七里（越国の靈姑浮は戈を使って闔廬に撃ちかかり、闔廬は指を傷つけられ、その片方の靴を取られて引きあげ、涇において世を去りました。樵李から七里のところです）」

闔廬（闔閭）は、春秋時代の呉国の君主で、孫武を採用した人物です。

④に関連して、『史記』「白起王翦列伝」に、こうあります。「昭王四十三年、白起攻韓涇城、拔五城、斬首五万（秦国の昭王の四十三年に、白起は韓国の涇城を攻め、5つの城を攻略し、5万人を殺しました）」

秦国の白起は、秦国の名将で、趙国との戦い（長平の戦い）では、謀略（スパイ活動）を駆使して、趙軍を全滅させたこともある人物です。なお、白起の涇城攻略については、それに関連した記事が『戦国策』「秦策・秦攻韓困涇」、『戦国策』「韓策・秦攻涇」にもあります。ちなみに、「林秀一『戦国策』」によると、「韓策・秦攻涇」に出てくる「涇」は、②だとされています。

最後に⑤ですが、春秋時代、ここには中山国の最初の首都である顧がありました。中山国は、かつては「鮮虞（鮮子）」と呼ばれており、その構成員はもともと遊牧騎馬民族だったそうです。この鮮虞は、のちの鮮卑につながっているとも言われています。先述の師比は、鮮卑の別名でもあります。中山国は、戦国時代に入ると、いったん魏国に攻め滅ぼされるのですが、再興します。しかし、今度は趙国に攻め滅ぼされました。このときの趙国の王は、武靈王で、趙国に画期的な騎兵部隊を創設して、趙軍を強くすることに成功した人物です。

ところで、模本を確認すると、「涇」のうち、「𡿨」はきれいに残っていますが、部首「卩」のところは一部が失われています。ですから、もしかすると、部首が別のものであった可能性も否定できません。ちなみに、もし部首が「氵」なら、「涇」となります。その地名の場所としては、①今の甘肅省平涼市のあたり、②今の安徽省宣城市のあたりがあります。

また、『史記集解』「趙世家」に「徐広曰。一作陸、又作涇」という記述があります。これによると、「陸」を「涇」と書いたり、「涇」を「陸」と書いたりした例があったことがうかがえます。ですから、ここで言う「涇」は、実は「陸」という地名の場所だったのかもしれない。

(9) 「□之興也、 師比在涇。燕之興也、蘇秦在齊」という文章について、たとえば「孫武は春秋時代の人物だが、蘇秦は戦国時代の人物なので、孫武が蘇秦のことを知りえるわけがない」といった理由で、オリジナルの『孫子』にはなかったとされています。ですから、今のところ、この部分を削除するのが通例となっています。ただし、「□之興也、 師比在涇」が春秋時代のことだとすれば、孫武の時代に存在した事実となりますので、「燕之興也、蘇秦在齊」だけがオリジナルになかったことになります。ちなみに『銀雀山漢墓竹簡（壺）』の模本を見ると、「燕之興也」の頭に「・」が付いていますが、これは後人がメモしたことを示しているのではないかとされています。なお、この本では、竹簡本『孫子』の復元が目的ですので、ここの文章を残しています。

【翻訳】

孫子が言いました。

およそ開戦して10万人の兵隊を動員し、軍隊を千里の先まで行かせる場合、人民の出費、政府関係者の負担は、1日につき千金となります。内も外も騒然となり、仕事に専念できない家が合計で七十万世帯になります。敵と対峙することが数年におよんで、そうしてたった一度の決戦のチャンスを待つことになります。それなのに、（情報活動の対価とする）恩賞や百金をおしんで、敵情を知らないままにするのは、とてもひどいことです（モラルセンスがダメ）。人民の将軍としてふさわしくありません（リーダーシップがダメ）。君主の補佐役としてふさわしくありません（フォロワーシップがダメ）。勝利を思いのまみにできる人ではありません。ですから、賢明な君主や優秀な将軍が、行動を起こしたときには必ず敵に勝ち、人なみすぐれた成功をおさめられる理由は、先知（先に知ること・先に知らせること）にあります。先知にあたっては、神様のお告げに頼ることはできません。似たものから類推することはできません。法則に照らし合わせて推測することはできません。必ず人から得て、敵情を知るようにするものです。

ですから、スパイを使うにあたっては、5種類があります。因間（郷間）があります。内間があります。反間があります。死間があります。生間があります。5種類のスパイがそろって活動し、その方法を知られません。これが「神紀＝運用の秘訣」というものです。君主にとっての宝です。生間とは、情報を持ち帰ってくるスパイ活動です。因間（郷間）とは、敵国の住民を利用して、スパイ活動に行うことです。内間とは、敵国の役人を利用して、スパイ活動を行うことです。反間とは、敵国のスパイを利用して、スパイ活動を行うことです。死間とは、外部に対してウソを本当のように見せかけることを行い、こちらのスパイにウソを知らせ、敵にウソの情報をつかませるスパイ活動です。

ですから、全軍における親密さとしてはスパイよりも親密にすべきものはなく、恩賞と

してはスパイよりも手厚くすべきものではなく、仕事としてはスパイよりも秘密にすべきものはありません。聖（賢さ）がなければ、スパイをよく用いることができません。仁（良心）がなければ、スパイをよく使うことができません。綿密でなければ、スパイの賞与を正しく行使できません。なんとも綿密であってこそ、スパイの使い方がゆきとどきます。繊細でなければ、スパイの実情を正しく把握できません。なんとも繊細であってこそ、スパイの使い方がゆきとどきます。スパイした事柄について公表していないのに、そのことが聞こえてきたら、そのことをスパイした人とそのことを他人に話した人を殺します。

およそ撃破したい軍隊、攻略したい城、殺したい人などがある場合は、必ずそれを守る将軍、側近、案内係、門番、雑用係など（ターゲットに関係する人びと）の姓名を先に知り、それらの人物についてスパイに調べさせて知らせさせます。こちらに潜入している敵のスパイを必ず搜索して見つけ出し、この機に乗じてスパイを利してまるめこみ、たくみに誘導してスパイを引きとめてたぶらかします。そこで、反間が獲得できて使えるようになります。それを利用して情報を知ることができます。そこで、郷間や内間が獲得できて使えるようになります。それを利用して情報を知ることができます。そこで、死間がウソを本当だと思わせかけ、敵にウソをつかませることができません。それを利用して情報を知ることができます。そこで、生間が計画どおりに活動できるようにさせることができます。5種類のスパイ活動のことについては、必ず知っておかないといけません。知るにあたっては反間が基本となります。ですから、反間は大事にしないわけにはいきません。

昔、殷国が勃興するにあたって、伊尹が夏の地においてスパイとして活動しました。周国の勃興するにあたって、呂尚が殷の地においてスパイとして活動しました。□国が勃興するにあたって、師比が涇の地においてスパイとして活動しました。燕国が勃興するに

あたって、蘇秦が齊の地においてスパイとして活動しました。ただ聡明な君主や賢明な將軍で、すぐれた賢者をスパイとして使うことのできる人だけが、必ず大成功をおさめられます。以上は、戦争のかなめであり、全軍が動くにあたって頼りとするものです。

第2章 『武経七書』所収『孫子』と『十一家註孫子』を比較する

【原文】について

- ①『武経七書』所収『孫子』の本文と『十一家註孫子』の本文を記載しています。
- ①『武経七書』所収『孫子』と『十一家註孫子』で互いに違うところは、一本線で示しています。
- ②一方にはあるが、他方にはないところは、二本線で示しています。
- ④底本としては、『武経七書』所収『孫子』と『十一家註孫子』のいずれについても、南宋の時代に刊行されたものを使用しています。

【翻訳】について

- ①翻訳は、『十一家註孫子』を基本として翻訳しています。
- ②『武経七書』所収『孫子』にはあるけれど、『十一家註孫子』にはない言葉は、[] 内に武経七書本の訳文を記しています。
- ③『十一家註孫子』にはあるけれど、『武経七書』所収『孫子』にはない言葉は、下線を引いて示しています。
- ④武経七書本と内容が異なるところは、下線を引き、[] 内に『武経七書』所収『孫子』の翻訳を記しています。
- ⑤文字は違っても意味に大きな違いのないところは、翻訳を分けていません。
- ⑥各篇の篇名は、『武経七書』所収『孫子』のものと『十一家註孫子』のものを併記しています。

【原文】

十一家註本

計篇

孫子曰。兵者、国之大事。死生之地、存亡之道、不可不察也。故經之以五事、校之以計、而索其情。一曰道、二曰天、三曰地、四曰将、五曰法。道者、令民与上同意也。故可以与之死、可以与之生、而不畏危也。天者、陰陽寒暑時制也。地者、遠近險易広狭死生也。将者、智信仁勇嚴也。法者、曲制官道主用也。凡此五者、将莫不聞、知之者勝、不知之者不勝。故校之以計、而索其情。曰。主孰有道、将孰有能、天地孰得、法令執行、兵衆孰強、士卒孰練、賞罰孰明。吾以此知勝負矣。将聽吾計、用之必勝、留之。将不聽吾計、用之必敗、去之。計利以聽、乃為之勢、以佐其外。勢者因利而制權也。兵者詭道也。故能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、遠而示之近、利而誘之、乱而取之、実而備之、強而避之、怒而撓之、卑而驕之、佚而

武經七書本

始計第一

孫子曰。兵者、国之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也。故經之以五事、校之以計、而索其情。一曰道、二曰天、三曰地、四曰将、五曰法。道者、令民与上同意、可与之死、可与之生、而不畏危也。天者、陰陽寒暑時制也。地者、遠近險易広狭死生也。将者、智信仁勇嚴也。法者、曲制官道主用也。凡此五者、将莫不聞、知之者勝、不知之者不勝。故校之以計、而索其情。曰。主孰有道、将孰有能、天地孰得、法令執行、兵衆孰強、士卒孰練、賞罰孰明。吾以此知勝負矣。将聽吾計、用之必勝、留之。将不聽吾計、用之必敗、去之。計利以聽、乃為之勢、以佐其外。勢者因利而制權也。兵者詭道也。故能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、遠而示之近、利而誘之、乱而取之、実而備之、彊而避之、怒而撓之、卑而驕之、佚而勞

勞之、親而離之、攻其無備、出其不意。此兵家之勝、不可先伝也。夫未戦而廟算勝者、得算多也。未戦而廟算不勝者、得算少也。多算勝、少算不勝、而況於無算乎。吾以此觀之、勝負見矣。	之、親而離之、攻其無備、出其不意。此兵家之勝、不可先伝也。夫未戦而廟算勝者、得算多也。未戦而廟算不勝者、得算少也。多算勝、少算不勝、而況於無算乎。吾以此觀之、勝負見矣。
---	--

【翻訳】

孫子が言いました。

軍事は、国の一大事です。どこが安全で、どこが危険なのか。どうすれば存続し、どうすれば滅亡するのか。そういったことについて、明らかにしないとけません。

ですから、その管理にあたっては五事を用い、その比較にあたっては七計を用いて、その実情を調べます。

五事とは、第一に道（モラル）、第二に天（タイミング）、第三に地（ポジション）、第四に将（リーダー）、第五に法（システム）です。道とは、人民を君主と同じ思いにさせるものです。ですから、人民を「君主と一緒に死のう」「君主と一緒に生きよう」という気持ちにさせることができて、人民は危険を恐れなくなります。天とは、陰陽、寒暑、その時に見合ったことをすることです。地とは、遠い、近い、けわしい、なだらか、広い、狭い、危険、安全といった地理のことです。将とは、知恵、信義、仁愛、勇氣、威厳を身につけていないといけないものです。法とは、軍隊の編成、規律の確立、役割の分担、糧道の確保、補給の管理、物品の準備のことです。（訳注：一説によると、「法とは、軍隊の部分けがきっちりしており、役割の分担が正しくなされていて、それぞれにきちんと仕事をさせて、もれがないようにするもの」となっています）。およそ以上の5つは、將軍なら聞いていることです。これを知っている人は勝ち、知らない人は負けます。

ですから、その比較にあたっては七計を用いて、その実情を調べます。

七計とは、「君主は、どちらが道徳的であるか」「将軍は、どちらが有能であるか」「グッドタイミングとベストポジションは、どちらが得ているか」「法令は、どちらがよく守られているか」「兵隊は、どちらが強いのか」「軍人は、どちらが訓練されているか」「賞罰は、どちらが公明正大であるか」です。私は、以上を使って勝ち負けを知ります。

将軍が私の比較方法（七計）に従うなら、その将軍を用いれば必ず勝ちますから、留任します。将軍が私の比較方法（七計）に従わないなら、その将軍を用いれば必ず負けますから、解任します。

七計を使って比較してみて、こちらが有利であり、そして将軍がそれに従うなら、そこでこちらの勢いを増す方法を使い、それによって状況がこちらにとって都合よくなるようにします。こちらの勢いを増す方法とは、どうすれば有利になるのかを考えて臨機応変に対処することです。軍事とは、いかに相手をだますかです。ですから、①できるのに、できないふりをします。②用いているのに、用いていないふりをします。③近づいているのに、遠ざかっているように見せかけます。④遠ざかっているのに、近づいているように見せかけます。⑤利益で釣って誘い出します。⑥混乱させて撃ちとります。⑦敵が充実しているときは備えます。⑧敵が強大なときは避けます。⑨敵を怒らせて、その心を乱します。⑩敵にへりくだって、おごり高ぶらせます。⑪元気なら疲れさせます。⑫仲が良いなら離間させます。⑬敵の備えていないところを攻めます。⑭敵の思いもよらないところに出ます。以上は、兵家の勝ち方であり、事前に伝えられないものです。

そもそも戦う前に廟堂にこもって勝ち目を計算してみて勝てるのは、勝算が多いからです。戦う前に廟堂にこもって勝ち目を計算してみて勝てないのは、勝算が少ないからです。勝算が多ければ勝ちますし、勝算が少なければ勝てませんが、ましてや勝算がなければ勝ちようがありません。私は以上を使って観察するわけですが、そうすれば勝ち負けが見えてきます。

第 2 篇 作戰篇・作戰第二

【原文】

十一家註本	武經七書本
作戰篇 孫子曰。凡用兵之法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬、千里饋糧、<u>則</u>內外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金、然後十萬之師舉矣。其用戰也、勝久則鈍兵挫銳、攻城則力屈、久暴師則國用不足。夫鈍兵挫銳、屈力殫貨、則諸侯乘其弊而起、雖有智者、不能善其後矣。故兵聞拙速、未<u>睹</u>巧之久也。夫兵久而國利者、未之有也。故不盡知用兵之害者、則不能盡知用兵之利也。善用兵者、役不再籍、糧不三載。取用於國、因糧於敵。故軍食可足也。國之貧於師者遠輸、遠輸則百姓貧。近<u>於</u>師者貴売、貴売則百姓財竭、財竭則急於丘役。力屈<u>財竭</u>中原、內虛於家。百姓之費、十去其七。公家之費、破車罷馬、甲冑矢<u>弩</u>、戟楯<u>蔽</u>櫓、丘牛大車、十去其六。故智將務食於敵。食敵一鐘、當吾二十鐘。一石、當吾二十石。故殺敵者怒	作戰第二 孫子曰。凡用兵之法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬、千里饋糧、內外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金、然後十萬之師舉矣。其用戰也、勝久則鈍兵挫銳、攻城則力屈、久暴師則國用不足。夫鈍兵挫銳、屈力殫貨、則諸侯乘其弊而起、雖有智者、不能善其後矣。故兵聞拙速、未<u>覩</u>巧之久也。夫兵久而國利者、未之有也。故不盡知用兵之害者、則不能盡知用兵之利也。善用兵者、役不再籍、糧不三載。取用於國、因糧於敵。故軍食可足也。國之貧於師者遠輸、遠輸則百姓貧。近師者貴売、貴売則百姓財竭、財竭則急於丘役。力屈中原、內虛於家。百姓之費、十去其七。公家之費、破車罷馬、甲冑矢<u>弓</u>、戟楯<u>矛</u>櫓、丘牛大車、十去其六。故智將務食於敵。食敵一鐘、當吾二十鐘。一石、當吾二十石。故殺敵者怒也。取敵之利者貨

也。取敵之利者貨也。故車戦得車十乗已上、賞其先得者、而更其旌旗、車雜而乗之、卒善以養之、是謂勝敵而益強。故兵貴勝、不貴久。故知兵之將、生民之司命、国家安危之主也。

也。車戦得車十乗以上、賞其先得者、而更其旌旗、車雜而乗之、卒善以養之、是謂勝敵而益強。故兵貴勝、不貴久。故知兵之將、民之司命、国家安危之主也。

【翻訳】

孫子が言いました。

およそ用兵の原則として、馳車（快速な戦車）が１０００輛、革車（丈夫な戦車もしくは輸送車）が１０００輛、帶甲（防具を身につけた歩兵）が１０万人となります。１０００里の遠征で食料を輸送するときには、内外の費（国費や軍費）、賓客の用（外交のための接待費）、膠漆の材（兵器の材料費）、車甲の奉（戦車や防具の維持費）のため、一日に千金を費やします。そうしてはじめて１０万人の軍隊が動員できます。

軍隊を戦いに使うにあたっては、勝っても長引かせれば、兵士を疲れさせ、鋭気をくじかせます。城を攻めれば、力がへこみます。長いこと激戦をすれば、国の費用が不足します。そもそも兵士を疲れさせ、鋭気をくじかせ、力をへこませ、財産を使いつくせば、諸侯がこちらの疲弊に乗じて攻撃をしかけてきます。知恵のある人がいたとしても、善後を図れなくなります。ですから、戦争は「へたくそでもすみやかにする」という話を聞いたことがあっても、「うまくやって長引かせる」ということを見たことがありません。そもそも軍事が長引いて国が得をしたということは、いまだかつてありません。

ですから、用兵にともなう害悪をことごとく知らない人と言うと、用兵にともなう利益をことごとく知ることができません。用兵のうまい人は、徴発は二回も行いませんし、食料は三回も運びません。道具を国から出し、食料を敵から奪います。ですから、軍隊の食料が足りるようにできま

す。

国が軍隊のために貧しくなるのは、遠くに輸送するからです。遠くに輸送すれば、人民が貧しくなります。軍隊に近いところでは、物価が高騰します。物価が高騰すれば、人民の財産が尽きはてます。財産が尽きはてれば、戦争に対する負担に耐えられなくなります。中原（世の中）において力がへこみ、財産が尽きはてれば【力がへこめば】、国内では各家庭のほうでからっぽになります。人民の出費のうち、70パーセントが消耗されます。

政府関係者の出費としては、車を壊され、馬を弱らせられます。甲（よろい）、冑（かぶと）、矢、弩（いしゆみ）【弓】、戟（鎌のついた槍）、楯（普通の盾）、蔽櫓（大きい盾）【矛（もろ刃の槍）、櫓（大きい盾）】、丘牛（村落の牛）、大車（大きな馬車）のうち、60パーセントが消耗されます。

ですから、知恵のある将軍は、つとめて敵から食料を奪います。敵から1鍾（50リットル）の食料を奪うことは、こちらにとって20鍾（1000リットル）の食料を得ることに相当します。1石（約20リットル）の飼料を奪うことは、こちらにとって20石（約400リットル）を得ることに相当します。

ですから、敵を殺すのは怒っているからですし、敵の利益を奪い取るのはもうけたいからです。
ですから【すが】、戦車で戦い、敵の戦車10輛以上を獲得したら、そのうち最初に獲得した人を賞します。かくして、その旌旗（軍旗）を自軍のものに変更し、獲得した戦車は自軍に組みこんで乗用し、捕虜にした兵士は手厚く待遇して味方にします。これが「敵に勝って、ますます強くなる」ということです。ですから、戦争は、勝つことを大切にし、長引くことを大切にしないのです。ですから、軍事を知っている将軍は、人民の命運をあずかり、国家の安危をにぎっています。

第3篇 謀攻第三・謀攻篇

【原文】

十一家註本	武經七書本
謀攻篇 孫子曰。<u>凡</u>用兵之法、全国為上破国次之、全軍為上破軍次之、全旅為上破旅次之、全卒為上破卒次之、全伍為上破伍次之。是故百戰百勝、非善之善也。不戰而屈人之兵、善之善者也。故上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城。攻城之法為不得已。修櫓輶輶、具器械、三月而後成、距<u>闔</u>又三月而後已。將不勝其忿、而蟻附之、殺士三分之一、而城不拔者、此攻之災也。故善用兵者、屈人之兵而非戰也。拔人之城而非攻也。毀人之国而非久也。必以全爭於天下、故兵不頓而利可全、此謀攻之法也。<u>故</u>用兵之法、十則圍之、五則攻之、倍則分之、敵則能戰之、少則能逃之、不若則能避之。故小敵之堅、大敵之擒也。夫將者国之輔也。輔周則国必強、輔隙則国必弱。故君之所以患於軍者三。不知軍之不可以進而謂之進、不知軍之不可以退而謂之退、	謀攻第三 孫子曰。<u>夫</u>用兵之法、全国為上破国次之、全軍為上破軍次之、全旅為上破旅次之、全卒為上破卒次之、全伍為上破伍次之。是故百戰百勝、非善之善也。不戰而屈人之兵、善之善者也。故上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城。攻城之法為不得已。修櫓輶輶、具器械、三月而後成、距<u>堙</u>又三月而後已。將不勝其忿、而蟻附之、殺士<u>卒</u>三分之一、而城不拔者、此攻之災也。故善用兵者、屈人之兵而非戰也。拔人之城而非攻也。毀人之国而非久也。必以全爭於天下、故兵不頓而利可全、此謀攻之法也。用兵之法、十則圍之、五則攻之、倍則分之、敵則能戰之、少則能逃之、不若則能避之。故小敵之堅、大敵之擒也。夫將者国之輔也。輔周則国必強、輔隙則国必弱。故君之所以患於軍者三。不知軍之不可以進而謂之進、不知軍之不可以退而謂之

是謂縻軍。不知三軍之事、而同三軍之政者、則軍士惑矣。不知三軍之權、而同三軍之任、則軍士疑矣。三軍既惑且疑、則諸侯之難至矣、是謂乱軍引勝。故知勝有五。知可以戰与不可以戰者勝、識衆寡之用者勝、上下同欲者勝、以虞待不虞者勝、將能而君不御者勝。此五者、知勝之道也。故曰。知彼知己者、百戰不殆。不知彼而知己、一勝一負。不知彼知己、每戰必殆。

退、是謂縻軍。不知三軍之事、而同三軍之政、則軍士惑矣。不知三軍之權、而同三軍之任、則軍士疑矣。三軍既惑且疑、則諸侯之難至矣、是謂乱軍引勝。故知勝有五。知可以与戰不可以与戰者勝、識衆寡之用者勝、上下同欲者勝、以虞待不虞者勝、將能而君不御者勝。此五者、知勝之道也。故曰。知彼知己、百戰不殆。不知彼而知己、一勝一負。不知彼知己、每戰必敗。

【翻訳】

孫子が言いました。

およそ用兵の原則としては、戦うことなく無傷のままで敵国を降伏させることが上等で、戦って敵国を降伏させるのは二番です。戦うことなく無傷のままで敵の軍団を降伏させることが上等で、戦って敵の軍団を降伏させるのは二番です。戦うことなく無傷のまま敵の旅団を降伏させることが上等で、戦って敵の旅団を降伏させるのは二番です。戦うことなく無傷のまま敵の大隊を降伏させることが上等で、戦って敵の大隊を降伏させるのは二番です。戦うことなく無傷のまま敵の小隊を降伏させることが上等で、戦って敵の小隊を降伏させるのは二番です。そういうわけで、連戦連勝することは最善ではありません。戦わないで敵の兵隊を屈服させることが最善です。

ですから、敵の策謀をうち破るのが最善です。敵の外交をうち破るのは次善です。敵の軍隊をうち破るのは三番目です。敵の城を攻めるのは最悪です。城を攻める原則としては、やむをえないときに攻めるようにします。櫓（大きい盾）と轆轤（城を攻めるための装甲車）を整備し、器械（城を攻めるための道具）を準備するのは、三カ月かかってから完成します。距闔（敵の城内を監視す

るために土を盛り上げて作った見張り台）は、さらに三カ月かかってから完了します。将軍がイライラをこらえきれないで、蟻附（アリのように群がって城壁をよじ登ること）を命じ、兵士の3分の1を戦死させても、城が陥落しないというのは、城を攻めることにともなう災いです。ですから、用兵のうまい人は、敵の兵士を屈服させたとしても、戦ったわけではありません。敵の城を陥落させたとしても、攻めたわけではありません。敵の国を敗北させたとしても、長引かせたわけではありません。必ず無傷で勝つ方法を使って天下において争います。ですから、兵士は疲れませんし、利益は全うされます。以上が謀攻（謀略によって攻撃すること）の原則です。

ですから、用兵の原則としては、こちらの兵力が十倍のときには敵を囲みます。五倍のときには敵を攻めます。二倍のときには敵を分けます。同等のときにはしっかりと敵と戦います。少ないときにはしっかりと敵から逃げます。かなわないときにはしっかりと敵を避けます。ですから、兵力が小さいのに強硬なら、兵力の大きい相手のえじきとなるだけです。

そもそも将軍とは、国の補佐役です。補佐がゆきとどいているときには、国は必ず強くなります。補佐にぬかりがあるときには、国は必ず弱くなります。

ですから、軍隊が君主のために悩まされる原因は3つあります。①君主が進軍すべきでないことを知らないくせに進軍を命令したり、退却すべきでないことを知らないくせに退却を命令したりするなら、軍隊の活動を阻害します。②君主が軍隊の現状について知らないくせに、将軍と同じように軍隊を管理しようとするなら、兵士たちは惑います。③君主が軍隊の戦法について知らないくせに、将軍と同じように軍隊を指揮するなら、兵士たちは疑います。全軍が惑い、疑うようになったときには、諸侯からの圧力が加えられるようになります。これが「みずから軍隊を乱して、敵を勝たせる」と言うものです。

ですから、勝てることを知るためには、5つのことがあります。①敵と戦えるか、戦えないかを

知っているほうが勝ちます。②多数を用いるべきか、少数を用いるべきかを分かっているほうが勝ちます。③上の者と下の者とが心をつにしているほうが勝ちます。④準備をととのえ、相手がスキを見せるのを待つほうが勝ちます。⑤将軍が有能で、君主が現場のことによけいな口出しをしないほうが勝ちます。以上の5つのことは、勝てることを知る方法です。

ですから、「相手を知り、自分を知れば、いくら戦っても危機にみまわれることはない。相手知らなくても、自分を知っていれば、勝ったり負けたりする。相手を知らず、自分を知らなければ、戦うたびごとに必ず危機にみまわれる【敗北する】」と言われるのです。

【原文】

十一家註本	武經七書本
形篇 孫子曰。昔之善戰者、先為不可勝、以待敵之可勝。不可勝在己、可勝在敵。故善戰者、能為不可勝、不能使敵之可勝。故曰。勝可知、而不可為。不可勝者守也。可勝者攻也。守則不足、攻則有余。善守者藏於九地之下、善攻者動於九天之上。故能自保而全勝也。見勝不過衆人之所知、非善之善者也。戰勝而天下曰善、非善之善者也。故拳秋毫不為多力、見日月不為明目、聞雷霆不為聰耳。古之所謂善戰者、勝於易勝者也。故善戰者之勝也、無智名、無勇功。故其戰勝不忒。不忒者、其所措<u>必</u>勝、勝已敗者也。故善戰者、立於不敗之地、而不失敵之敗也。是故勝兵先勝而後求戰、敗兵先戰而後求勝。善用兵者、修道而保法。故能為勝敗之政。兵法、一曰度、二曰量、三曰數、四曰稱、五曰勝。地生度、度生量、量生數、數生稱、稱生勝。故勝兵	軍形第四 孫子曰。昔之善戰者、先為不可勝、以待敵之可勝。不可勝在己、可勝在敵。故善戰者、能為不可勝、不能使敵之<u>必</u>可勝。故曰。勝可知、而不可為。不可勝者守也。可勝者攻也。守則不足、攻則有余。善守者藏於九地之下、善攻者動於九天之上。故能自保而全勝也。見勝不過衆人之所知、非善之善者也。戰勝而天下曰善、非善之善者也。故拳秋毫不為多力、見日月不為明目、聞雷霆不為聰耳。古之所謂善戰者、勝於易勝者也。故善戰者之勝也、無智名、無勇功。故其戰勝不忒。不忒者、其所措勝、勝已敗者也。是故善戰者、立於不敗之地、而不失敵之敗也。是故勝兵先勝而後求戰、敗兵先戰而後求勝。善用兵者、修道而保法。故能為勝敗之政。兵法、一曰度、二曰量、三曰數、四曰稱、五曰勝。地生度、度生量、量生數、數生稱、稱生勝。故勝兵

若以鎡称銖、敗兵若以銖称鎡。勝者之戦民也、
若決積水於千仞之谿者、形也。

若以鎡称銖、敗兵若以銖称鎡。勝者之戦、若決
積水於千仞之谿者、形也。

【翻訳】

孫子が言いました。

昔の戦いのうまかった人は、まずこちらに敵の勝てない態勢を築き、そうして敵がこちらの勝てる状態になるのを待ちました。こちらに敵の勝てない態勢を築けるかどうかは、こちらの努力にかかっています。敵がこちらの勝てる状態になるかどうかは、敵の出方にかかっています。ですから、いくら戦いのうまい人でも、こちらに敵の勝てない状態を築くことはできますが、敵をこちらの【必ず】勝てる状態にさせることはできません。ですから、「勝利は、知ることができても、作ることができない」と言われるのです。勝てないときは、守ります。勝てるときは、攻めます。守るのは、こちらの実力が足りないからです。攻めるのは、こちらの実力が余っているからです。守るのがうまい人は、まるで地の下に深くもぐっているかのようにします。攻めるのがうまい人は、まるで天の上から勢いよくふってくるかのようにします。ですから、自分を保全できて、確実に勝利できるのです。

勝てると見こんでも、だれもが「勝てる」と分かるものにすぎないものは、最善ではありません。戦い勝って、みんながこちらの戦い方を「うまい」と言ってほめるものは、最善ではありません。ですから、だれでも持てる軽いものを持ちあげても、力が強いとは言えません。だれの目にも見える月や太陽を見ることができても、よく見分ける能力をもっているとは言えません。だれの耳にも聞こえる雷鳴を聞くことができても、よく聞き分ける能力をもっているとは言えません。（これと同じで、だれにもそれとわかる勝利は最善ではなく、だれにもわからない勝利が最善なのです）。昔の戦いがうまかった人は、勝てる敵に勝ったものです。ですから、戦いのうまい人が勝っても、

知者という評判もなく、勇ましい功績ありません。ですから、その人が戦って勝つのは、まちがいないのです。まちがいないのは、その人が **「必ず」** 勝てるようにするにあたり、すでに負けている敵に勝つからです。ですから、戦いのうまい人は、こちらを負けない状態にして、敵が負ける状態になったところをのがしません。そういうわけで、勝てる兵隊は、まず必ず勝てる状態にしてから、敵と戦おうとします。反対に負ける兵隊は、まず戦いを始めてから、敵に勝とうとします。用兵のうまい人は、道理を身につけて、原則を守ります。ですから、「勝利をおさめ、敵を敗北させる政策」を実施できるのです。

兵法に「第一に程度をはかる。第二に物量をはかる。第三に規模をはかる。第四に優劣をはかる。第五に勝算をはかる。地形から程度が割り出される。程度から物量が割り出される。物量から規模が割り出される。規模から優劣が割り出される。優劣から勝算が割り出される」とあります。ですから、勝てる軍隊は、重いおもりを軽いおもりと比べるように優勢となります。負ける軍隊は、軽いおもりを重いおもりと比べるように劣勢となります。**勝てる人が人民を戦わせる方法はと言うと**
「勝てる人が戦うときには」、たっぴりとためた水を、一気に深い谷の底へと流すような感じになるわけですが、これが形（ありよう）というものです。

第5篇 勢篇・兵勢第五

【原文】

十一家註本	武經七書本
勢篇 孫子曰。凡治衆如治寡、分數是也。鬪衆如鬪寡、形名是也。三軍之衆、可使必受敵而無敗者、奇正是也。兵之所加如以礮投卵者、虛實是也。凡戰者、以正合、以奇勝。故善出奇者、無窮如天地、不竭如江<u>河</u>。終而復始、日月是也。死而<u>復</u>生、四時是也。聲不過五、五聲之變、不可勝聽也。色不過五、五色之變、不可勝觀也。味不過五、五味之變、不可勝嘗也。戰勢不過奇正、奇正之變、不可勝窮也。奇正相生、如循環之無端、孰能窮之。激水之疾、至於漂石者、勢也。鷲鳥之疾、至於毀折者、節也。<u>是</u>故善戰者、其勢險、其節短。勢如彊弩、節如發機。紛紛紜紜鬪亂、而不可亂<u>也</u>。渾渾沌沌形圓、而不可敗<u>也</u>。亂生於治、怯生於勇、弱生於<u>強</u>。治亂、數也。勇怯、勢也。<u>強</u>弱、形也。故善動敵者、形之敵必從之、予之敵必取之。以利動之、	兵勢第五 孫子曰。凡治衆如治寡、分數是也。鬪衆如鬪寡、形名是也。三軍之衆、可使必受敵而無敗者、奇正是也。兵之所加如以礮投卵者、虛實是也。凡戰者、以正合、以奇勝。故善出奇者、無窮如天地、不竭如江<u>海</u>。終而復始、日月是也。死而<u>更</u>生、四時是也。聲不過五、五聲之變、不可勝聽也。色不過五、五色之變、不可勝觀也。味不過五、五味之變、不可勝嘗也。戰勢不過奇正、奇正之變、不可勝窮也。奇正相生、如循環之無端、孰能窮之<u>哉</u>。激水之疾、至於漂石者、勢也。鷲鳥之疾、至於毀折者、節也。故善戰者、其勢險、其節短。勢如彊弩、節如發機。紛紛紜紜鬪亂、而不可亂。渾渾沌沌形圓、而不可敗。亂生於治、怯生於勇、弱生於<u>彊</u>。治亂、數也。勇怯、勢也。<u>彊</u>弱、形也。故善動敵者、形之敵必從之、予之敵必取之。以利動之、以<u>本</u>待

以 <u>卒</u> 待之。故善戦者、求之於勢、不責於人。故能捫人而任勢。任勢者、其戦人也、如転木石。木石之性、安則静、危則動、方則止、円則行。故善戦人之勢、如転 <u>円</u> 石於千仞之山者、勢也。	之。故善戦者、求之於勢、不責於人。故能捫人而任勢。任勢者、其戦人也、如転木石。木石之性、安則静、危則動、方則止、円則行。故善戦人之勢、如転石於千仞之山者、勢也。
--	--

【翻訳】

孫子が言いました。

大軍を管理するにあたり、あたかも少数のようにスムーズに管理できるのは、きちんと組織だっているからです。大軍を戦わせるにあたり、あたかも少数のようにスムーズに戦わせられるのは、命令を伝える手段がととのっているからです。全軍の兵隊が敵の攻撃を受けても絶対に負けないようにさせられるのは、奇策と正攻法とをうまく使いこなせるからです。攻撃をしかけたとき、あたかも卵に石を投げつけて割るように容易に勝てるのは、こちらの充実した力を使って敵の虚弱なところを攻めるからです。

およそ戦いにおいては、正攻法で敵にぶつかり、奇策で敵に勝つものです。ですから、うまく奇策を使いこなせる人は、天地のようにきわまりがありません。大河【大河や大海】のようにつぎることがありません。終わってもまた始まるのは、まさに昼夜のくりかえしと同じです。死んでもまた生まれるのは、まさに四季のうつりかわりと同じです。音はもともと五音（宮・商・角・徴・羽）にすぎませんが、それらを組み合わせることによって無限の音を出せます。色はもともと五色（青・赤・黄・白・黒）にすぎませんが、それらを組み合わせることによって無限の色を出せます。味はもともと五味（辛・酸・鹹・苦・甘）にすぎませんが、それらを組み合わせることによって無限の味を出せます。（これらと同じように、奇策と正攻法も、組み合わせることによっていろいろな戦い方を無限に生み出せます）。戦いの勢いは、奇策と正攻法によって決まります。奇策と正攻

法がもたらす変化は、どうにもきわめつくせないものです。奇策から正攻法が生まれたり、正攻法から奇策が生まれたりして、奇策と正攻法とが互いに生みあうわけですが、それは輪のようにつながっていて、つきるところがありません。これをきわめられた人は、はたしてだれかいたでしょうか。

ごうごうと流れる水がすさまじくて、巨大な岩をもおし流すようになるのは、勢いのたまものです。ワシやタカなどの大きな鳥が襲いかかって、小鳥をあっけなく打ち殺してしまうのは、動きのたまものです。そういうわけで【ですから】、戦いのうまい人は、その勢いは強く、その動きは速いのです。勢いは、弓を思いきり引きしぼるようなものです。動きは、タイミングをみはからって矢を放つようなものです。

ごちゃごちゃと乱闘になっても、軍隊が乱れません。ぐちゃぐちゃに陣形がくずれても、敵に敗れません。本当は治まっているけれど、乱れているように見せかけます。本当は勇ましいけれど、怯えているように見せかけます。本当は強いけれど、弱いように見せかけます。治まったり、乱れたり、分数にかかっています。勇ましかったり、怯えたりは、兵勢にかかっています。強かったり、弱かったりは、軍形にかかっています。

ですから、敵を思いどおりに動かせる人は、陽動すれば、敵がそれにひっかかります。エサを与えれば、敵がそれに食いついてきます。利益によって敵を思いどおりに動かし、こちらは兵卒【主力】を配置して敵を待ち伏せます。ですから、戦いのうまい人は、勢いを頼りにし、個人の活躍には期待しません。ですから、各人にふさわしい役割を与え、うまく勢いに乗せることができます。勢いに乗せることのできる人は、人を戦わせるにあたり、丸太や丸石をころがすようにします。木や石のもともとの性質として、平地に置けば動きませんが、急坂に置けばおのずと動きます。四角ければ動きませんが、丸ければおのずと動きます。（兵士もこれと同じで、その置かれている状況

に応じて、おのずと勢いがついたり、つかなかったりするものですから、おのずと勢いがつく状況に兵士をおくようにします）。ですから、うまく人を戦わせる勢いは、高い山の上から丸石〔石〕をころがしたときに生じる勢いと同じようなもの（おのずと生じるもの）であり、それがここの言う勢いです。

第 6 篇 虚実篇・虚実第六

【原文】

十一家註本	武經七書本
虚実篇 孫子曰。凡先処戦地而待敵者佚、後処戦地而趨戦者勞。故善戦者、致人而不致於人。能使敵人自至者、利之也。能使敵人不得至者、害之也。故敵佚能勞之、飽能饑之、安能動之。出其不趨、趨其所不意。行千里而不勞者、行於無人之地也。攻而必取者、攻其所不守也。守而必固者、守其所不攻也。故善攻者、敵不知其所守。善守者、敵不知其所攻。微乎微乎、至於無形。神乎神乎、至於無声。故能為敵之司命。進而不可禦者、衝其虚也。退而不可追者、速而不可及也。故我欲戦、敵雖高壘深溝、不得不与我戦者、攻其所必救也。我不欲戦、画地而守之、敵不得与我戦者、乖其所之也。故形人而我無形、則我專而敵分。我專為一、敵分為十、是以十攻其一也、則我衆而敵寡。能以衆擊寡者、則吾之所与戦者、約矣。吾所与戦之地不可知。不	虚実第六 孫子曰。凡先処戦地而待敵者佚、後処戦地而趨戦者勞。故善戦者、致人而不致於人。能使敵人自至者、利之也。能使敵人不得至者、害之也。故敵佚能勞之、飽能飢之、安能動之。出其不趨、趨其所不意。行千里而不勞者、行於無人之地也。攻而必取者、攻其所不守也。守而必固者、守其所不攻也。故善攻者、敵不知其所守。善守者、敵不知其所攻。微乎微乎、至於無形。神乎神乎、至於無声。故能為敵之司命。進而不可禦者、衝其虚也。退而不可追者、速而不可及也。故我欲戦、敵雖高壘深溝、不得不与我戦者、攻其所必救也。我不欲戦、雖画地而守之、敵不得与我戦者、乖其所之也。故形人而我無形、則我專而敵分。我專為一、敵分為十、是以十攻其一也、則我衆敵寡。能以衆擊寡者、則吾之所与戦者、約矣。吾所与戦之地不可知。不

可知則敵所備者多。敵所備者多則吾所与戰者寡矣。故備前則後寡、備後則前寡、備左則右寡、備右則左寡、無所不備則無所不寡。寡者、備人者也。衆者、使人備己者也。故知戰之地、知戰之日、則可千里而会戰。不知戰地、不知戰日、則左不能救右、右不能救左、前不能救後、後不能救前、而況遠者数十里、近者数里乎。以吾度之、越人之兵雖多亦奚益於勝敗哉。故曰。勝可為也。敵雖衆、可使無鬪。故策之而知得失之計、作之而知動靜之理、形之而知死生之地、角之而知有余不足之处。故形兵之極、至於無形。無形則深間不能窺、智者不能謀。因形而錯勝於衆、衆不能知。人皆知我所以勝之形、而莫知吾所以制勝之形。故其戰勝不復、而忘形於無窮。夫兵形象水、水之形避高而趨下、兵之形避實而擊虛、水因地而制流、兵因敵而制勝。故兵無常勢、水無常形、能因敵变化而取勝者、謂之神。故五行無常勝、四時無常位、日有短長、月有死生。

可知則敵所備者多。敵所備者多則吾所与戰者寡矣。故備前則後寡、備後則前寡、備左則右寡、備右則左寡、無所不備則無所不寡。寡者、備人者也。衆者、使人備己者也。故知戰之地、知戰之日、則可千里而会戰。不知戰地、不知戰日、則左不能救右、右不能救左、前不能救後、後不能救前、而況遠者数十里、近者数里乎。以吾度之、越人之兵雖多亦奚益於勝哉。故曰。勝可為也。敵雖衆、可使無鬪。故策之而知得失之計、作之而知動靜之理、形之而知死生之地、角之而知有余不足之处。故形兵之極、至於無形。無形則深間不能窺、智者不能謀。因形而措勝於衆、衆不能知。人皆知我所以勝之形、而莫知吾所以制勝之形。故其戰勝不復、而忘形於無窮。夫兵形象水、水之形避高而趨下、兵之形避實而擊虛、水因地而制流、兵因敵而制勝。故兵無常勢、水無常形、能因敵变化而取勝者、謂之神。故五行無常勝、四時無恒位、日有短長、月有死生。

【翻訳】

孫子が言いました。

先に戦場に到着して敵を待ちうけるほうは、楽です。しかし、後から戦場に到着して急いで戦うほう
は、疲れます。ですから、戦いのうまい人は、相手をコントロールしても、相手にコントロールさ
れません。敵のほうからやってくるようにさせられるのは、敵を利でつるからです。敵がやってこ
られないようにさせられるのは、敵に害を与えるからです。ですから（このように敵をうまくコン
トロールできるので）、敵が楽な状態にあるときには、敵を疲れさせることができます。敵が食料
に困っていないときには、敵を飢えさせることができます。敵が固く守って動かないときは、敵を
動かすことができます。

敵の進軍していないところに出向き、敵の思いもよらないところに進軍します。千里の遠くまで
行っても疲れなないのは、だれもいないところを進むからです。攻めて必ず勝てるのは、敵が守って
いないところを攻めるからです。守って必ず負けないのは、敵が攻めてこないところを守るからで
す。ですから、攻めるのがうまい人は、敵がどこを守ればいいのかわからなくさせます。守るのが
うまい人は、敵がどこを攻めればいいのかわからなくさせます。あまりにも微妙でこちらの動向は
敵に見えませんが、あまりにも神妙でこちらの情報は敵に聞こえませんが、敵の命運を左右
することができます。

こちらが進軍したとき、それを敵が防ぎきれないのは、こちらが敵の弱いところをつくからです。
こちらが退却したとき、それを敵が追撃しきれないのは、こちらがすばやくて追いつけないからで
す。ですから、こちらが戦いたいと思えば、いくら敵が壘を高くし、堀を深くして（守りを固め
て）も、こちらと戦わざるをえなくなるのは、こちらが敵の必ず救うところを攻めるからです。こ
ちらが戦いたくないと思えば、地面に線を引いた程度で守って（大した守りをしていなくて）も、
敵をこちらと戦えなくさせられるのは、（偽装や陽動などによって）敵の向かう先をまちがわせる
からです。

ですから、相手を陽動して、こちらの実情を知られないようにすれば、こちらは兵力を集中でき、敵の兵力は分散されます。こちらが集中して一つとなり、敵が分散して十になるということは、こちらは十倍の兵力を使って敵と戦うということです。そうなれば、こちらは多くて敵は少なくなります。多数を使って少数を攻撃できれば、こちらが戦う相手は小さく縮まります。（そのためにも）こちらがどこで戦うつもりなのか、敵に知られてはいけません。知らなければ、敵の備えないといけないうところが多くなります。敵の備えないといけないうところが多くなれば、こちらが戦う相手は少数になります。ですから、その前方を防備すれば、後方が必ず少数となります。その後方を防備すれば、前方が少数となります。その左を防備すれば、右が必ず少数となります。その右を防備すれば、左が少数となります。防備しないところがないようにすれば、どこもかしこも少数となります。少数になるのは、相手に備えるからです。多数になるのは、相手を自分に備えさせるからです。

ですから、どこで戦うのかをわかり、いつ戦うのかをわかれば、（それにおけて兵力を集中できるので）遠いところでも敵と戦うことができます。どこで戦うのかをわからず、いつ戦うのかをわからなければ、（いきなり敵と遭遇することになって）左の部隊は右の部隊を救えませんが、右の部隊は左の部隊を救えませんが、前方の部隊は後方の部隊を救えませんが、後方の部隊は前方の部隊を救えませんが、ましてや遠く離れた部隊やちょっと離れた部隊を救えるはずがありません。私の立場から見当をつけますに、我が宿敵である越国の兵は、多いと言っても、どうして勝負【勝利】に役立つでしょうか。ですから、「勝利は作ることができる。敵が多数であっても、敵を戦闘させないようにできる」と言われるのです。

ですから（そのためにも、まず敵の実情を知る必要があるわけですが）、①分析して、どうすれば敵が成功し、どうすれば敵が失敗するのか、その仕組みを知ります。②挑発して、どのように行

動し、どのように静止するのか、そのパターンを知ります。③陽動して、どこが危険であり、どこが安全であるのか、その地の利を知ります。④試しに攻撃して、どこに余裕があり、どこに不足があるのか、その状況を知ります。

ですから、軍隊のありようとして最高なのは、（臨機応変にして柔軟にかたちを変えることによって）一定のかたちをとらないようにすることです。一定のかたちをとらなければ、いかにスパイでも、こちらのことをうかがい知ることができません。いくら知恵のある人でも、こちらのことは知り知ることはできません。臨機応変にありようを決めて味方に勝利をもたらすわけですが、味方はそれを知ることができません。人びとは「どういったかたちで勝ったのか」について知ることはできますが、「どのようなかたちで勝てるようになったのか」について知ることはできません。ですから、このときの戦い方と勝ち方は二度と使えなくて、戦い方と勝ち方はありように応じて無数に変化します。

そもそも軍隊のありようは、水のようなものです。水のありようとしては、高いところへは向かわず、低いところへと向かいます。それと同じように、軍隊のありようとしても、敵の力の充実したところへは向かわず、敵の力の虚弱なところへと向かいます。水は地形に応じてかたちを変えることによってスムーズに流れていきます。それと同じように、軍隊も敵の状態に応じてかたちを変えることによってスムーズに勝ちます。ですから、軍隊には一定の勢いがなく、水には一定のかたちがないのです。 敵の変化に応じて勝利を取得することができるわけですが、こういったことができるのを「神妙」と言います。ですから、五行もつねに勝つということがありません（木は土に勝ち、火は金に勝ち、土は水に勝ち、金は木に勝ち、水は火に勝ちます）。 四季もつねに変わらないということがありません（春から夏になり、夏から秋になり、秋から冬になり、冬から春になります）。太陽の出ている時間にも長短があります（夏至には太陽の出ている時間は長くなり、冬

至には太陽の出ている時間は短くなります）。月の大きさにも満ち欠けがあります（新月に近づけば月は小さくなり、満月に近づけば月は大きくなります）。（このように、軍隊のかたちも一定しません）。

【原文】

十一家註本	武經七書本
軍争篇 孫子曰。凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆、交和而舍、莫難於軍争。軍争之難者、以迂為直、以患為利。故迂其途、而誘之以利、後人發、先人至、此知迂直之計者也。<u>故</u>軍争為利、<u>軍</u>争為危。拳軍而争利則不及。委軍而争利則輜重捐。是故卷甲而趨、日夜不處、倍道兼行、百里而争利、則擒三將軍、勁者先、疲者後、其法十一而至。五十里而争利、則蹶上將軍、其法半至。三十里而争利、則三分之二至。是故軍無輜重則亡、無糧食則亡、無委積則亡。故不知諸侯之謀者不能豫交、不知山林險阻沮洳之形者不能行軍、不用鄉導者不能得地利。故兵以詐立、以利動、以分合為變者也。故其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、難知如陰、動如雷震。掠鄉分衆、廓地分守、懸權而動、先知迂直之計者勝、此軍争之法也。軍政曰。言不相聞、	軍争第七 孫子曰。凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆、交和而舍、莫難於軍争。軍争之難者、以迂為直、以患為利。故迂其途、而誘之以利、後人發、先人至、此知迂直之計者也。軍争為利、<u>衆</u>争為危。拳軍而争利則不及。委軍而争利則輜重捐。是故卷甲而趨、日夜不處、倍道兼行、百里而争利、則擒三將軍、勁者先、疲者後、其法十一而至。五十里而争利、則蹶上將軍、其法半至。三十里而争利、則三分之二至。是故軍無輜重則亡、無糧食則亡、無委積則亡。故不知諸侯之謀者不能豫交、不知山林險阻沮洳之形者不能行軍、不用鄉導者不能得地利。故兵以詐立、以利動、以分合為變者也。故其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、難知如陰、動如雷震。掠鄉分衆、廓地分守、懸權而動、先知迂直之計者勝、此軍争之法也。軍政曰。言不相聞、

故為金鼓、視不相見、故為旌旗。夫金鼓旌旗者、所以一人之耳目也。人既專一則勇者不得独進、怯者不得独退、此用衆之法也。故夜戰多火鼓、昼戰多旌旗、所以變人之耳目也。故三軍可奪氣、將軍可奪心。是故朝氣銳、昼氣惰、暮氣歸。故善用兵者、避其銳氣、擊其惰歸、此治氣者也。以治待乱、以静待譁、此治心者也。以近待遠、以佚待勞、以飽待飢、此治力者也。無邀正正之旗、勿擊堂堂之陣、此治變者也。故用兵之法、高陵勿向、背丘勿逆、佯北勿從、銳卒勿攻、餌兵勿食、歸師勿遏、圉師必闕、窮寇勿迫、此用兵之法也。

故為之金鼓、視不相見、故為之旌旗。夫金鼓旌旗者、所以一人之耳目也。人既專一則勇者不得独進、怯者不得独退、此用衆之法也。故夜戰多金鼓、昼戰多旌旗、所以變人之耳目也。三軍可奪氣、將軍可奪心。是故朝氣銳、昼氣惰、暮氣歸。善用兵者、避其銳氣、擊其惰歸、此治氣者也。以治待乱、以静待譁、此治心者也。以近待遠、以佚待勞、以飽待飢、此治力者也。無邀正正之旗、勿擊堂堂之陣、此治變者也。故用兵之法、高陵勿向、背丘勿逆、佯北勿從、銳卒勿攻、餌兵勿食、歸師勿遏、圉師必闕、窮寇勿迫、此用兵之法也。

【翻訳】

孫子が言いました。

用兵の原則としては、將軍が君主より命令を受け、軍隊を編成し、兵隊を招集し、対峙して布陣します。このとき軍争（優位に立つために争うこと）ほど難しいことはありません。軍争が難しいのは、遠回りを近道とし、わずらいを有利とする点です。ですから、わざと遠回りして、利益で敵を誘導し、敵より遅れて出発し、敵より先に到着するようにします。これが「迂直の計」を知っているということです。

ですから、軍争は利益にもなり、軍争は危険にもなります【軍争は利益につながりますが、衆争

（みんながこぞって争うこと）は危険につながります】。全軍をあげて優位に立とうとして争えば、

（軍隊の規模が大きくなった分だけ動きが遅くなるので）敵に遅れをとります。全軍のことを考えないで優位に立とうとして争えば、（一部の部隊しかそれについて来られないので）補給部隊が置き去りになります。そういうわけで、①重たい装備をしまいこんで、昼も夜も休まず、ふだんの数倍のスピードで先を急ぎ、百里も離れたところで優位に立とうとして争うときには、（敗北して）全軍の將軍を捕虜にされてしまいます。強い者は先に着けますが、疲れた者は遅れます。そのやり方では、着いて来られるのは全軍の十分の一です。②もし同じようにして五十里ほど離れたところで優位に立とうとして争うなら、主將をつまづかせます。そのやり方では、着いて来られるのは全軍の半分だけです。③もし同じようにして三十里ほど離れたところで優位に立とうとして争うなら、着いて来られるのは全軍の三分の二だけです。そういうわけで、①軍隊に補給がないときには壊滅します。②軍隊に食料がないときには壊滅します。③軍隊に物資がないときには壊滅します。

ですから、①諸国の腹の内を知らない人は、事前に諸国と親交をとりむすべません。②山林、難所、湿地、沼沢といった地形を知らない人は、軍を進められません。③現地の地理に詳しいガイドを使わない人は、地の利を得られません。

ですから、戦争は、①うまく相手をだますことによって成り立つものです。②こちらが有利だと判断することによって行動するものです。③分散したり、集合したりすることによって戦い方に無限の変化を出すものです。

ですから、①すばやくするときは、風のようにします。②ひっそりするときには、林のようにします。③侵攻するときには、火のようにします。④動かないときには、山のようにします。⑤こちらのことを知られないようにするときには、暗雲が太陽を隠すようにします。⑥動くときには、雷のようにします。⑦食料を徴発するときには、兵隊を分けて行かせます。⑧土地を占領したときには、要所に分かれて守ります。はかりではかるようにきちんと敵の実力をはかって行動し、迂直の計

（近道を遠回りに変え、遠回りを近道に変える方法）を先に知っている人が勝ちます。以上が優位に立つために争う方法です。

『軍政』に、こうあります。「戦場では言っても互いに聞こえない。だから、よく聞こえる鐘や太鼓をつくる。見せても互いに見えない。だから、よく見える旗や手旗をつくる」。そもそも鐘・太鼓・旗・手旗の四つは、全員の耳目を一つにする方法です。全員の耳目が一つになれば、勇敢な者が勝手に戦いをしかけるということもなくなりますし、臆病な者が勝手に逃げ帰るということもなくなります。以上が「大軍を使う方法」です。ですから、夜に戦うときには火[鐘]や太鼓を多くし、昼に戦うときには旗や手旗を多くするのは、敵の耳目を惑わす方法です。ですから、敵軍は気を奪えますし、敵将は心を奪えます。そういうわけで、①最初の気力は盛んで、中間の気力は弱く、最後の気力はつきています。ですから[すが]、用兵のうまい人は、敵の気力が盛んなときは攻撃を避け、敵の気力が弱まったときに攻撃します。これが「気を治める」ということです。②治まった状態にして敵が乱れるのを待ちうけ、おちついた状態にして敵がさわがしくなるのを待ちうけます。これが「心を治める」ということです。③戦場の近くにいて敵が遠くからやってくるのを待ちうけ、元気たっぷりの状態にして敵が疲れるのを待ちうけ、満足な量の食事をとって敵が飢えるのを待ちうけます。これが「力を治める」ということです。④隊列に秩序のある軍隊を迎え撃ってはいけませんし、布陣が堂々とした軍隊に攻めかかってはいけません。これが「変を治める（臨機応変に対処する）」ということなのです。

ですから、用兵の原則としては、①優位にいる敵とは戦ってはいけません。②優勢な敵とは争ってはいけません。③わざと逃げる敵は追いかけてはいけません。④精鋭は攻めてはいけません。⑤おとりには食いついてはいけません。⑥退却している敵には近づきすぎてはいけません。⑦包囲したら逃げ道をあけてあげます。⑧追いつめられた敵はさらに追いつめてはいけません。これが用兵

の原則です。

第8篇 九变篇・九变第八

【原文】

十一家註本

九变篇

孫子曰。凡用兵之法、将受命於君、合軍聚衆、圯地無舍、衢地交合、絕地無留、圉地則謀、死地則戰。塗有所不由、軍有所不擊、城有所不攻、地有所不爭、君命有所不受。故将通於九变之地利者、知用兵矣。将不通於九变之利者、雖知地形、不能得地之利矣。治兵不知九变之術、雖知五利、不能得人之用矣。是故智者之慮、必雜於利害。雜於利而務可信也。雜於害而患可解也。是故屈諸侯者以害、役諸侯者以業、趨諸侯者以利。故用兵之法、無恃其不来、恃吾有以待也。無恃其不攻、恃吾有所不可攻也。故将有五危、必死可殺也。必生可虜也。忿速可侮也。廉潔可辱也。愛民可煩也。凡此五者、将之過也。用兵之災也。覆軍殺将、必以五危、不可不察也。

武經七書本

九变第八

孫子曰。凡用兵之法、将受命於君、合軍聚衆、圯地無舍、衢地合交、絕地無留、圉地則謀、死地則戰。途有所不由、軍有所不擊、城有所不攻、地有所不爭、君命有所不受。故将通於九变之利者、知用兵矣。将不通九变之利、雖知地形、不能得地之利矣。治兵不知九变之術、雖知五利、不能得人之用矣。是故智者之慮、必雜於利害。雜於利而務可信也。雜於害而患可解也。是故屈諸侯者以害、役諸侯者以業、趨諸侯者以利。故用兵之法、無恃其不来、恃吾有以待之。無恃其不攻、恃吾有所不可攻也。故将有五危、必死可殺、必生可虜、忿速可侮、廉潔可辱、愛民可煩。凡此五者、将之過也。用兵之災也。覆軍殺将、必以五危、不可不察也。

【翻訳】

孫子が言いました。

およそ用兵の原則としては、将軍が君主より命令を受け、軍隊を編成し、兵隊を招集し、対峙して布陣します。このとき、①「圯地（通行しにくいところ）」では野営してはいけません。②「衢地（各国に隣接したところ）」では各国と親交を結びます。③「絶地（敵地の奥深くに入ったところ）」では駐留してはいけません。④「圉地（少しの敵に攻められただけでも負けるところ）」では謀略をめぐらします。⑤「死地（敵に勝たないと全滅するところ）」では戦います。（戦争となれば、道路を使い、軍隊を撃ち、城を攻め、土地を争い、君主の命令に従うのが当たり前ですが）、⑥道路には使わないほうがよいものもあり、⑦敵軍には撃たないほうがよいものもあり、⑧城には攻めないほうがよいものもあり、⑨土地には争わないほうがよいものもあり、⑩君主の命令には従わないほうがよいものもあります。ですから、将軍のうちで、「九変の地利（臨機応変に行うことによって得られる地の利）」 [「九変の利（臨機応変に行うことによって得られるメリット）」]

に精通している人は、用兵を知っています。将軍のうちで、「九変の利（臨機応変に行うことによって得られるメリット）」に精通していない人は、地形を知っていても、地の利を得られません。兵士を管理するにあたり、「九変の術（臨機応変に行う方法）」を知らないなら、「五利（融通をきかせることによって得られるメリット）」を知っていても、人を有効に活用できません。

そういうわけで、智者が考えるときは、必ず利害の両方について考えるのです。利点があるときには、その不利についても考えるので、事をうまく運べます。また、不利があるときには、その利点についても考えるので、心配を解消できます。そういうわけで、諸侯を屈服させるには、害になることをします。諸侯を働かせるには、事業をするように仕向けます。諸侯を奔走させるには、利益になることで誘導します。

ですから、用兵の原則としては、①敵に侵攻されないのを期待するのではなく、敵が侵攻できない態勢をととのえることが大切です。②敵に攻撃されないのを期待するのではなく、敵が攻撃でき

ない態勢をととのえることが大切です。

ですから、将軍にとって危険なことが、五つあります。①身の危険をかえりみないなら、殺すことができます。②身の安全ばかりを考えているなら、捕らえることができます。③怒りっぽいなら、バカにすることができます。④まじめすぎるなら、恥をかかせることができます。⑤やさしすぎるなら、わずらわせることができます。およそ以上の5つは、将軍の過ちであり、用兵の災いです。軍隊が敗れたり、将軍が殺されたりするのは、以上の五つによるので、明らかにしないといけません。

【原文】

十一家註本	武經七書本
行軍篇 孫子曰。凡处軍、相敵、絶山依谷、視生处高、戰隆無登、此处山之軍也。絶水必遠水、客絶水而来、勿迎之於水内、令半<u>渡</u>而擊之、利。欲戰者、無附於水而迎客。視生处高、無迎水流。此处水上之軍也。絶斥沢、<u>惟</u>亟去無留。若交軍於斥沢之中、必依水草、而背衆樹、此处斥沢之軍也。平陸处易、右背高、前死後生、此处平陸之軍也。凡此四軍之利、黃帝之所以勝四帝也。凡軍好高而惡下、貴陽而賤陰、養生<u>而</u>处实、軍無百疾、是謂必勝。丘陵隄防、必处其陽而右背之。此兵之利、地之助也。上雨水沫至、欲涉者、待其定也。凡地有絶澗、天井、天牢、天羅、天陷、天隙、必亟去之、勿近也。吾遠之、敵近之、吾迎之、敵背之。軍<u>行</u>有險阻、潢井、<u>葭葦</u>、<u>山林</u>、翳薈者、必謹覆索之、此伏姦之所<u>处</u>也。<u>敵</u>近而靜者恃其險也。遠而挑戰者欲	行軍第九 孫子曰。凡处軍、相敵、絶山依谷、視生处高、戰隆無登、此处山之軍也。絶水必遠水、客絶水而来、勿迎之於水内、令半<u>濟</u>而擊之、利。欲戰者、無附於水而迎客。視生处高、無迎水流。此处水上之軍也。絶斥沢、<u>唯</u>亟去無留。若交軍於斥沢之中、必依水草、而背衆樹、此处斥沢之軍也。平陸处易、右背高、前死後生、此处平陸之軍也。凡此四軍之利、黃帝之所以勝四帝也。凡軍好高而惡下、貴陽而賤陰、養生处实、軍無百疾、是謂必勝。丘陵隄防、必处其陽而右背之。此兵之利、地之助也。上雨水沫至、欲涉者、待其定也。凡地有絶澗、天井、天牢、天羅、天陷、天隙、必亟去之、勿近也。吾遠之、敵近之、吾迎之、敵背之。軍<u>旁</u>有險阻、潢井、<u>葭葦</u>、<u>林木</u>、翳薈者、必謹覆索之、此伏姦之所也。近而靜者恃其險也。遠而挑戰者欲人之進

人之進也。其所居易者利也。衆樹動者來也。衆草多障者疑也。鳥起者伏也。獸駭者覆也。塵高而銳者車來也。卑而廣者徒來也。散而条達者樵採也。少而往來者營軍也。辭卑而益備者進也。辭彊而進驅者退也。輕車先出居其側者陣也。無約而請和者謀也。奔走而陳兵車者期也。半進半退者誘也。杖而立者飢也。汲而先飲者渴也。見利而不進者勞也。鳥集者虛也。夜呼者恐也。軍擾者將不重也。旌旗動者亂也。吏怒者倦也。粟馬肉食、軍無懸缶、不返其舍者窮寇也。諄諄翕翕徐與人言者失衆也。數賞者窘也。數罰者困也。先暴而後畏其衆者不精之至也。來委謝者欲休息也。兵怒而相迎久、而不合、又不相去、必謹察之。兵非益多也、惟無武進、足以並力、料敵、取人而已。夫惟無慮而易敵者必擒於人。卒未親附而罰之則不服。不服則難用也。卒已親附而罰不行則不可用也。故令之以文、齊之以武、是謂必取。令素行以教其民則民服、令不素行以教其民則民不服。令素行者與衆相得也。

也。其所居易者利也。衆樹動者來也。衆草多障者疑也。鳥起者伏也。獸駭者覆也。塵高而銳者車來也。卑而廣者徒來也。散而条達者樵採也。少而往來者營軍也。辭卑而益備者進也。辭強而進驅者退也。輕車先出居其側者陣也。無約而請和者謀也。奔走而陳兵者期也。半進半退者誘也。杖而立者飢也。汲而先飲者渴也。見利而不進者勞也。鳥集者虛也。夜呼者恐也。軍擾者將不重也。旌旗動者亂也。吏怒者倦也。殺馬肉食者軍無糧也。懸缶不返其舍者窮寇也。諄諄徐與人言者失衆也。數賞者窘也。數罰者困也。先暴而後畏其衆者不精之至也。來委謝者欲休息也。兵怒而相迎久、而不合、又不相去、必謹察之。兵非貴益多、唯無武進、足以並力、料敵、取人而已。夫唯無慮而易敵者必擒於人。卒未親附而罰之則不服。不服則難用。卒已親附而罰不行則不可用。故令之以文、齊之以武、是謂必取。令素行以教其民則民服、令不素行以教其民則民不服。令素行者與衆相得也。

【翻訳】

孫子が言いました。

およそ状況に応じて上手に軍隊を動かし、見かけから実情を判断する方法は、次のとおりです。

(まず軍隊をうまく動かす方法ですが) ①険しい山を行くときは、谷にそって進みます。②安全なところを目ざし、高いところに野営します。③高いところで戦うなら、高いほうに向かってはいけません。以上は軍隊が山岳地帯にいる場合です。①川を渡るときには、渡ったらすぐに川を離れます。②攻め手がもし兵をひきつれ川を渡って来たら、川のなかで迎撃してはいけません。③敵の半分を渡らせてから攻撃すれば、有利になります。④戦おうとする人は、川の近くにいて攻め手を迎撃してはいけません。⑤安全なところを目ざし、高いところにいるようにして、水の流れに逆らうようにしてはいけません。以上は軍隊が河川地域にいる場合です。①塩分が多かったり、ぬかるんでいたたりする土地は、すみやかに去り、とどまてはいけません。②塩分が多かったり、ぬかるんでいたたりする土地で敵と戦うことになったなら、飲み水や馬草があるところにいて、林を背にするようにします。以上は軍隊が沼沢地域にいる場合です。①平坦なところでは、なだらかなところにいるようにします。②右後方が高くなるようにします。③前方が低く、後方が高くなるようにします。以上が平陸地域に軍隊がいる場合です。およそ以上4つの軍隊にとって利益となる配置に仕方は、黄帝(昔の名君)が四方の強敵に勝った方法です。

およそ軍隊は、高いところを好んで、低いところを嫌うようにします。明るいところを重んじて、暗いところを軽んじるようにします。生活しやすいようにして、高くて明るいところにいるようにします。軍隊に病気がないようにします。これを「必ず勝つ」と言います。丘陵や堤防のところでは、必ずからりとしたところにいて、右後方が高くなるようにします。以上は兵士の利益となるものであり、地の利となるものです。上流が雨で、水が泡立って流れてくるとき、川を渡ろうとする人は、川の流れが落ち着くのを待ちます。およそ土地には絶澗(こえられない山間の溪谷)、天井(急な斜面に囲まれたくぼ地)、天牢(山がけわしかったり、霧がかかりやすかったりなどして、

入りやすいけど、出にくい土地）、天羅（草木のおい茂っている土地）、天陷（土地が低くて水がたまりやすく、ぬかるみやすい土地）、天隙（二つの山の間に狭くて通りにくい土地）があります。必ずそこからすみやかに立ち去り、近づいてはいけません。こちらはそこから遠ざかり、敵はそこに近づくようにします。こちらはそこを前にし、敵はそこを背にするようにします。軍隊が進んでいて【軍隊の近くに】、地形が険しかったり、水たまりやくぼ地があったり、水草が茂っていたり、山林【森林】があったり、草がうっそうとしている場所があれば、必ずそこを慎重に探索します。以上は伏兵の隠れている可能性があります。

（次に見かけから実情を判断する方法ですが）敵が近くにいて静かなのは、地形の険しさを頼りにしているのです。敵が遠くにいて戦いを挑んでくるのは、こちらをおびき出そうとしているのです。敵が身を隠すもののない平原にいるのは、そこが有利なのです。森の木が揺れ動いているのは、敵が進軍してきているのです。たくさんの草がどこそで障害となっているのは、なにかワナがあると疑わせようとしているのです。鳥が飛び立つのは、その下に伏兵がいるのです。獣が驚いているのは、敵が包囲しようとしているのです。砂ぼこりが高くまっすぐに立ちのぼっているのは、戦車隊がやってきているのです。砂ぼこりが低くたれこんでいるのは、歩兵隊がやってきているのです。砂ぼこりがあちこちからあがり、ひよろひよろしているのは、薪を拾っているのです。砂ぼこりが少なくて、行ったり来たりしているのは、陣地を築いているのです。敵からの使者の言葉が丁寧で、敵軍が備えを増しているのは、進もうとしているのです。敵からの使者の言葉が強気で、敵軍が前に出て駆けまわっているのは、退こうとしているのです。軽戦車が先に出て、敵陣の横についているのは、布陣しているのです。約束していないのに休戦を求めてくるのは、謀略があるのです。走りまわって戦車【兵士】をならべているのは、戦いを決意しているのです。敵兵が進んだり、退いたりしているのは、こちらを誘い出そうとしているのです。敵兵が杖をついて立っているのは、食

料が不足しているのです。水を汲んできて、先を争って飲むのは、水が不足しているのです。敵兵が有利なのに攻撃してこないのは、兵士が疲れているのです。鳥が集まっているのは、そこにだれもいないのです。夜中に呼びまわっているのは、恐れているのです。軍隊が騒動しているのは、將軍がしっかりしていないのです。旗が揺れ動いているのは、混乱しているのです。役人が怒っているのは、士気が低下しているのです。馬に粟を食べさせて兵士に肉を食べさせ、軍隊に調理器具がなく[馬を殺して食べているのは、軍隊に食料がないのです。調理器具をそのままにして]、営舎に戻らないのは、おいつめられているのです。ねんごろにためらいながらゆるやかに相手と語っているのは、人望を失っているのです。ひんぱんに賞しているのは、兵士が思いどおりに動かなくて苦しんでいるのです。ひんぱんに罰しているのは、兵士が戦おうとしないので困っているのです。先に乱暴して後で反発する相手の多いことを恐れるのは、きわめて配慮が足りないのです。贈り物をもってきて謝罪するのは、休息したがつているのです。兵士が怒って互いに反撃しあいながら、いつまでたっても決戦しようとせず、かといって退却しようとしなければなら、必ず慎重に見極めないといけません。

兵隊は、兵力の多さがものをいう[兵力を多くすることを大切にする]というものではありません。[ただ]向こう見ずに突進することをなくし、とりあえず力を合わせ、敵情を調査し、相手を攻略するようにすれば十分なだけです。そもそもただ思慮がなく、敵を軽くみるだけなら、必ず相手に捕虜とされます。

兵卒がまだ懐いていないのに罰するときには、納得しません。納得しなければ、使いにくくなります。兵卒がすでに懐いていても罰が行われないうときには、使えなくなります。ですから、文徳によって兵士を命令に従わせ、武威によって兵士に秩序を保たせます。これが「必ず取る＝必ず攻略できる」ということです。命令がふだんから守られていて、そのうえで人民に命令を守るように教

えるときには、人民は納得します。命令がふだんから守られていなくて、それなのに人民に命令を守るように教えるときには、人民は納得しません。命令がふだんから守られていれば、みんなと心を一つにできます。

【原文】

十一家註本

地形篇

孫子曰。地形有通者、有挂者、有支者、有隘者、有險者、有遠者。我可以往、彼可以來、曰通。通形者、先居高陽、利糧道、以戰則利。可以往、難以返、曰挂。挂形者、敵無備、出而勝之、敵若有備、出而不勝、難以返、不利。我出而不利、彼出而不利、曰支。支形者、敵雖利我、我無出也。引而去之、令敵半出而擊之、利。隘形者、我先居之、必盈之以待敵。若敵先居之、盈而勿從、不盈而從之。險形者、我先居之、必居高陽以待敵。若敵先居之、引而去之、勿從也。遠形者、勢均、難以挑戰、戰而不利。凡此六者、地之道也、將之至任、不可不察也。故兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者。凡此六者、非天之災、將之過也。夫勢均、以一擊十、曰走。卒強吏弱、曰弛。吏強卒弱、曰陷。大吏怒而不服、遇敵懟而自戰、將

武經七書本

地形第十

孫子曰。地形有通者、有掛者、有支者、有隘者、有險者、有遠者。我可以往、彼可以來、曰通。通形者、先居高陽、利糧道、以戰則利。可以往、難以返、曰掛。掛形者、敵無備、出而勝之、敵若有備、出而不勝、難以返、不利。我出而不利、彼出而不利、曰支。支形者、敵雖利我、我無出也。引而去之、令敵半出而擊之、利。隘形者、我先居之、必盈之以待敵。若敵先居之、盈而勿從、不盈而從之。險形者、我先居之、必居高陽以待敵。若敵先居之、引而去之、勿從也。遠形者、勢均、難以挑戰、戰而不利。凡此六者、地之道也、將之至任、不可不察也。故兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者。凡此六者、非天地之災、將之過也。夫勢均、以一擊十、曰走。卒強吏弱、曰弛。吏強卒弱、曰陷。大吏怒而不服、遇敵懟而自戰、將

不知其能、曰崩。将弱不嚴、教道不明、吏卒無常、陳兵縱横、曰乱。将不能料敵、以少合衆、以弱擊強、兵無選鋒、曰北。凡此六者、敗之道也、将之至任、不可不察也。夫地形者、兵之助也。料敵制勝、計險阨遠近、上将之道也。知此而用戰者必勝、不知此而用戰者必敗。故戰道必勝、主曰無戰、必戰可也。戰道不勝、主曰必戰、無戰可也。故進不求名、退不避罪、唯人是保而利合於主、国之宝也。視卒如嬰兒、故可与之赴深谿。視卒如愛子、故可与之俱死。厚而不能使、愛而不能令、乱而不能治、譬若驕子、不可用也。知吾卒之可以擊、而不知敵之不可擊、勝之半也。知敵之可擊、而不知吾卒之不可擊、勝之半也。知敵之可擊、知吾卒之可以擊、而不知地形之不可以戰、勝之半也。故知兵者、動而不迷、拳而不窮。故曰。知彼知己、勝乃不殆。知天知地、勝乃不窮。

将不知其能、曰崩。将弱不嚴、教道不明、吏卒無常、陳兵縱横、曰乱。将不能料敵、以少合衆、以弱擊強、兵無選鋒、曰北。凡此六者、敗之道也、将之至任、不可不察也。夫地形者、兵之助也。料敵制勝、計險阨遠近、上将之道也。知此而用戰者必勝、不知此而用戰者必敗。故戰道必勝、主曰無戰、必戰可也。戰道不勝、主曰必戰、無戰可也。故進不求名、退不避罪、唯民是保而利於主、国之宝也。視卒如嬰兒、故可与之赴深谿。視卒如愛子、故可与之俱死。愛而不能令、厚而不能使、乱而不能治、譬如驕子、不可用也。知吾卒之可以擊、而不知敵之不可擊、勝之半也。知敵之可擊、而不知吾卒之不可擊、勝之半也。知敵之可擊、知吾卒之可以擊、而不知地形之不可以戰、勝之半也。故知兵者、動而不迷、拳而不窮。故曰。知彼知己、勝乃不殆。知天知地、勝乃可全。

【翻訳】

孫子が言いました。

地形には、①通じたもの、②引っ掛けられるもの、③支えられたもの、④狭いもの、⑤険しいもの、⑥遠いものがあります。①こちらも行くことができ、相手も来ることができるものは、「通じ

たもの」と言います。通じた地形では、先に高くて明るい場所に陣取り、糧道を確保し、そうして戦えば、有利です。②行くことができて、戻りにくいものは、「引っ掛けられるもの」と言います。引っ掛けられる地形では、敵が無防備なら、出撃して勝ちます。敵にもし備えがあるなら、出撃しても勝たず、戻りにくく、不利です。③こちらが出撃すると不利となり、相手も出撃すると不利となるものは、「支えられたもの」と言います。支えられた地形では、敵がこちらにとって有利でも、こちらは出撃してはいけません。軍隊を引いてそこを去り、敵を半分ほど出撃させて攻撃すると、有利です。④狭い地形では、こちらが先に陣取っているなら、必ず全体を占拠して敵を待ち受けます。もし敵が先に陣取り、全体を占拠しているなら、相手にしてはいけません。全体を占拠していないなら、相手にします。⑤険しい地形では、こちらが先に陣取っているなら、必ず高くて明るいところに陣取り、そうして敵を待ち構えます。もし敵が先に陣取っているなら、軍隊を引いて去り、相手にしてはいけません。⑥遠い地形では、勢いが等しいなら、戦いを挑みにくいです。戦っても不利になります。およそ以上の6つは、地形に応じた方法です。将軍のもっとも重要な任務であり、明らかにしないわけにはいきません。

ですから、兵士には、①潰走するものがあり、②弛緩するものがあり、③陷落するものがあり、④崩壊するものがあり、⑤混乱するものがあり、⑥敗北するものがあります。およそ以上の6つは、天〔天地〕によってもたらされる災いではなく、将軍の過ちです。①そもそも勢いが等しいとき、敵の十分の一の兵力で、こちらの十倍の敵と戦うのは、潰走と言います。②兵卒が強く、役人が弱いのは、弛緩と言います。③役人が強く、兵卒が弱いのは、陷落と言います。④上級の役人（将校）が怒って命令に従わず、敵に遭遇すると憎しみから勝手に戦い、将軍がその能力を知らないのは、崩壊と言います。⑤将軍が弱くて威厳がなく、教練の仕方が明確でなく、役人と兵卒が秩序を保たず、兵士の布陣が気ままなのは、混乱と言います。⑥将軍が敵の実力をはかり知ることができ

ず、小さい兵力で大きな兵力の敵と合戦し、弱い兵力で強い兵力の敵を攻撃し、兵士に精鋭がいなのは、敗北と言います。およそ以上の6つは、敗北する方法です。将軍のもっとも重要な任務であり、明らかにしないわけにはいきません。

そもそも地形は、（うまく使えばこちらを有利にできるので）兵士の助けとなるものです。敵情を調査し、勝利を確実なものとし、土地の難度や遠近を計ることが、上等な将軍のやり方です。これを知って戦いに入る人は、必ず勝利します。これを知らないで戦いに入る人は、必ず敗北します。ですから、①戦いの道理からして必ず勝てるのであれば、君主が「戦うな」と言ったとしても、（現場にいる将軍の判断で）戦ってかまいません。②戦いの道理からして勝てないのであれば、君主が「戦え」と言ったとしても、（現場にいる将軍の判断で）戦わなくてかまいません。ですから、進軍すべきときに進軍して、有名になることを考えません。退却すべきときに退却して、処罰されることを恐れませんが、とにかく人民は保護して、利益が君主にもたらされる【君主の利益をはかる】ようにします。まさに「国の宝」です。

兵卒をいたいけな赤ちゃんのようにみるので、兵卒と苦楽を共にすることができます。兵卒を愛する我が子のようにみるので、兵卒と生死を共にすることができます。大切にしても職務に努めず、大事にしても命令に従わず【大切にしても職務に努めず、大事にしても命令に従わず】、軍隊を乱してどうしようもないなら、そのような兵卒は「わがままな子供」と同じで、ものの役には立ちません。

こちらの兵卒が攻撃に役立つことをわかっている、敵がこちらの勝ちやすい状態にないことをわかっていないなら、勝算は半分です。敵がこちらの勝ちやすい状態にあることをわかっている、こちらの兵卒が攻撃に役立たないことをわかっていないのなら、勝算は半分です。敵がこちらの勝ちやすい状態にあることをわかっていて、こちらの兵卒が攻撃に役立つことをわかっている、地

形がこちらに有利でないことをわかっていないなら、勝算は半分です。ですから、軍事をよくわかっていてる將軍は、（敵を知り、こちらを知り、地形を知っているの）①行動するときには、迷うことはありません。②挙兵するときには、ゆきづまることがありません。ですから、「相手を知り、自分を知っていれば、勝利はまちがいない。天の時を知り、地の利を知っていれば、勝利はすんなりと得られる **〔完全なものとなる〕**」と言われるのです。

【原文】

十一家註本	武經七書本
九地篇 孫子曰。用兵之法、有散地、有輕地、有爭地、有交地、有衢地、有重地、有圯地、有困地、有死地。諸侯自戰其地為散地。入人之地而不深者為輕地。我得<u>則</u>利彼得亦利者為爭地。我可以往彼可以來者為交地。諸侯之地三屬先至而得天下之衆者為衢地。入人之地深背城邑多者為重地。<u>行</u>山林險阻沮洳凡難行之道者為圯地。所由入者隘所從歸者迂彼寡可以擊吾之衆者為困地。疾戰則存不疾戰則亡者為死地。是故散地則無戰、輕地則無止、爭地則無攻、交地則無絕、衢地則合交、重地則掠、圯地則行、困地則謀、死地則戰。<u>所謂</u>古之善用兵者、能使敵人前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相收、卒離而不集、兵合而不齊。合於利而動、不合於利而止。敢問。敵衆整而將來、待之若何。曰。先奪其所愛則聽矣。兵之情主速、乘人之不及、	九地第十一 孫子曰。用兵之法、有散地、有輕地、有爭地、有交地、有衢地、有重地、有圯地、有困地、有死地。諸侯自戰其地<u>者</u>為散地。入人之地而不深者為輕地。我得<u>亦</u>利彼得亦利者為爭地。我可以往彼可以來者為交地。諸侯之地三屬先至而得天下之衆者為衢地。入人之地深背城邑多者為重地。山林險阻沮洳凡難行之道者為圯地。所由入者隘所從歸者迂彼寡可以擊吾之衆者為困地。疾戰則存不疾戰則亡者為死地。是故散地則無戰、輕地則無止、爭地則無攻、交地則無絕、衢地則合交、重地則掠、圯地則行、困地則說（謀）、戎（死）地則戰。古之善用兵者、能使敵人前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相收、卒離而不集、兵合而不齊。合於利而動、不合於利而止。敢問。敵衆整而將來、待之若何。曰。先奪其所愛則聽矣。兵之情主速、乘

由不虞之道、攻其所不戒也。凡為客之道、深入則專、主人不克。掠於饒野、三軍足食。謹養而勿勞、併氣積力、運兵計謀、為不可測。投之無所往、死且不北、死焉不得、士人尽力。兵士甚陷則不懼、無所往則固、深入則拘、不得已則鬪。是故其兵不修而戒、不求而得、不約而親、不令而信。禁祥去疑、至死無所之。吾士無余財、非惡貨也。無余命、非惡壽也。令癸之日、士卒坐者涕霑襟、偃臥者涕交頤。投之無所往者諸歲之勇也。故善用兵者、譬如率然。率然者常山之蛇也。擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至。敢問。兵可使如率然乎。曰。可。夫吳人与越人相惡也。当其同舟而濟遇風、其相救也如左右手。是故方馬埋輪、未足恃也。齊勇若一、政之道也。剛柔皆得、地之理也。故善用兵者、攜手若使一人、不得已也。將軍之事、靜以幽、正以治。能愚士卒之耳目、使之無知。易其事、革其謀、使人無識。易其居、迂其途、使人不得慮。帥与之期、如登高而去其梯。帥与之深入諸侯之地、而癸其機、焚舟破釜、若

人之不及、由不虞之道、攻其所不戒也。凡為客之道、深入則專、主人不克。掠於饒野、三軍足食。謹養而勿勞、並氣積力、運兵計謀、為不可測。投之無所往、死且不北、死焉不得、士人尽力。兵士甚陷則不懼、無所往則固、入深則拘、不得已則鬪。是故其兵不修而戒、不求而得、不約而親、不令而信。禁祥去疑、至死無所之。吾士無余財、非惡貨也。無余命、非惡壽也。令癸之日、士卒坐者涕霑襟、偃臥者涕交頤。投之無所往者歲之勇也。故善用兵者、譬如率然。率然者常山之蛇也。擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至。敢問。可使如率然乎。曰。可。夫吳人与越人相惡也。当其同舟濟而遇風、其相救也如左右手。是故方馬埋輪、未足恃也。齊勇若一、政之道也。剛柔皆得、地之理也。故善用兵者、攜手若使一人、不得已也。將軍之事、靜以幽、正以治。能愚士卒之耳目、使之無知。易其事、革其謀、使人無識。易其居、迂其途、使人不得慮。帥与之期、如登高而去其梯。帥与之深入諸侯之地、而癸其機、若驅群羊。驅

驅群羊。驅而往、驅而來、莫知所之。聚三軍之衆、投之於險、此謂將軍之事也。九地之變、屈伸之利、人情之理、不可不察。凡為客之道、深則專、淺則散。去國越境而師者絕地也。四達者衢地也。入深者重地也。入淺者輕地也。背固前隘者困地也。無所往者死地也。是故散地吾將一其志。輕地吾將使之屬。爭地吾將趨其後。交地吾將謹其守。衢地吾將固其結。重地吾將繼其食。圯地吾將進其塗。困地吾將塞其闕。死地吾將示之以不活。故兵之情、困則禦、不得已則鬪、過則從。是故不知諸侯之謀者不能預交。不知山林險阻沮洳之形者不能行軍。不用鄉導者不能得地利。四五者不知一、非霸王之兵也。夫霸王之兵、伐大國則其衆不得聚、威加於敵則其交不得合。是故不爭天下之交、不養天下之權、信己之私、威加於敵。故其城可拔、其國可隳。施無法之賞、懸無政之令、犯三軍之衆、若使一人。犯之以事、勿告以言。犯之以利、勿告以害。投之亡地然後存、陷之死地然後生。夫衆陷於害、然後能為勝敗。故為兵之事、在於順詳敵

而往、驅而來、莫知所之。聚三軍之衆、投之於險、此將軍之事也。九地之變、屈伸之利、人情之理、不可不察也。凡為客之道、深則專、淺則散。去國越境而師者絕地也。四通者衢地也。入深者重地也。入淺者輕地也。背固前隘者困地也。無所往者死地也。是故散地吾將一其志。輕地吾將使之屬。爭地吾將趨其後。交地吾將謹其守。衢地吾將固其結。重地吾將繼其食。圯地吾將進其途。困地吾將塞其闕。死地吾將示之以不活。故兵之情、困則禦、不得已則鬪、過則從。是故不知諸侯之謀者不能豫交。不知山林險阻沮洳之形者不能行軍。不用鄉導者不能得地利。四五者一不知、非霸王之兵也。夫霸王之兵、伐大國則其衆不得聚、威加於敵則其交不得合。是故不爭天下之交、不養天下之權、信己之私、威加於敵。故其城可拔、其國可隳。施無法之賞、懸無政之令、犯三軍之衆、若使一人。犯之以事、勿告以言。犯之以利、勿告以害。投之亡地然後存、陷之死地然後生。夫衆陷於害、然後能為勝敗。故為兵之事、在順詳敵之意、并敵一向、千

之意、并敵一向、千里殺將、此謂巧能成事者
也。是故政舉之日、夷関折符、無通其使、勵於
廊廟之上、以誅其事。敵人開闔、必亟入之、先
其所愛、微与之期。踐墨隨敵、以決戰事。是故
始如処女、敵人開戸、後如脱兔、敵不及拒。

里殺將、是謂巧能成事。是故政舉之日、夷関折
符、無通其使、勵於廊廟之上、以誅其事。敵人
開闔、必亟入之、先其所愛、微与之期。踐墨隨
敵、以決戰事。是故始如処女、敵人開戸、後如
脱兔、敵不及拒。

【翻訳】

孫子が言いました。

用兵の原則として、地勢の類型には、①散地があり、②輕地があり、③争地があり、④交地があり、⑤衢地があり、⑥重地があり、⑦圯地があり、⑧圉地があり、⑨死地があります。①諸侯がみずから領土内で戦う場合、その戦場は「散地」となります。②よその土地に入ってすぐのところは「輕地」となります。③こちらが得たときには〔得ても〕有利となり、敵が得ても有利となるところは「争地」となります。④こちらも行きやすいし、敵も来やすいところは「交地」となります。⑤諸侯の領土が三方に接していて、先に到着すると各地の援軍を得られるところは「衢地」となります。⑥よその土地に深く入りこみ、多くの城や街を通過したところは「重地」となります。⑦山林、難所、湖沼、河川を行くなど、およそ通行しにくいところは「圯地」となります。⑧入っていくには狭いところを通らなければならず、退いていくには遠回りをしなければならなくて、敵が少ない兵力でこちらの大軍を撃破できるところは、「圉地」となります。⑨すばやく戦えば生き残れるが、すばやく戦わなければ全滅することになるところは「死地」となります。そういうわけで、①「散地」では、戦ってはいけません。②「輕地」では、止まってはいけません。③「争地」では、攻めてはいけません。④「交地」では、道をふさがれてはいけません。⑤「衢地」では、諸国と親交を結びます。⑥「重地」では、物資を取り立てます。⑦「圯地」では、移動します。⑧「圉地」

では、謀略をめぐらします。⑨「死地」では、戦います。

いわゆる昔の戦いのうまかった人は、敵の前軍と後軍が互いに連携できないようにさせ、敵の本隊と支隊が互いに協力できないようにさせ、敵の貴族と庶民が互いに救援できないようにさせ、敵の上官と部下とが互いに結束できないようにさせました。（その結果）敵の兵卒は分散したときには集まれず、敵の兵士は集合したときには整いませんでした。有利なときには動き、不利なときには止まりました。ここで質問します。敵が多くて整然としており、迫って来ようとしているとき、どのようにしてこれに対処すればよいのでしょうか。回答します。先んじて敵の大事なものを奪えば、敵をこちらの思いのままに操ることができます。軍事の実情としては、すみやかであることがメインとなります。敵が想定していない点につけいり、敵が思いもよらない道を通り、敵が警戒していないところを攻めます。

およそ攻め手のあり方としては、敵地に深く入りこんだときには結束し、守り手は勝ちません。敵国にある実り豊かな田畑の作物を刈り取り、全軍が食料を十分に持てるようにします。兵士を慎重に養って疲れさせないようにさせ、やる気をみなぎらせ、体力を充実させます。兵隊を動かして計略をめぐらし、敵の思いもよらないことをします。兵士を逃げ場のないところに行かせることで、兵士は死んでも逃げなくなります。兵士を必死にさせられないことはなく、兵士は死力を尽くします。兵士は、ひどくゆきづまれば怖いもの知らずとなり、逃げ場がなくなれば団結します。敵地に深く入りこめば【入りこむのが深ければ】結束し、どうしようもなくなれば必死に戦います。そういうわけで、その兵士は、きちんとさせなくても、おのずと気がひきしまります。求めなくても、みずから奮闘します。まとめなくても、おのずと仲良くします。命令しなくても、おのずと決まりを守ります。占いを禁じ、余計な疑念を生じさせないようにすれば、兵士たちは死ぬことになろうとも逃げないで戦います。わが兵士が物資を投げ出すのは、価値あるものを嫌っているからではあ

りません。命を投げ出すのは、長生きを嫌っているからではありません。決戦の命令が出された日、軍人のうち、座っている者は涙で襟をぬらし、臥している者は涙で顔をぐしょぐしょにします。しかし、兵士を逃げ場のないところ（必死に戦わなければ死ぬしかないところ）に行かせるなら【れば】、だれもが専諸や曹藺のように勇敢になります。

ですから、用兵のうまい人は、たとえば率然のようにします。率然とは、常山にいる蛇のことです。頭（前軍）をたたけば、尻尾（後軍）が向かってきます。尻尾（後軍）をたたけば、頭（前軍）が向かってきます。腹（中軍）をたたけば、頭（前軍）と尻尾（後軍）が一緒に向かってきます。ここで質問します。兵士は率然のようにさせられるのでしょうか。回答します。できます。そもそも呉人と越人は互いに憎みあっていますが、同じ船に乗っているときに嵐にあえば、まるで左右の手のように互いに助け合います。そういうわけで、馬をつなぎ、車輪を埋めて守りを固めたとしても、まだ頼りになりません。そろって勇ましくなり、みんなが一体となるのは、政道（ガバナンス）によるものです。強い者も弱い者も全員が奮闘するのは、地理によるものです。ですから、用兵のうまい人が、兵士を連携させて一人を使うようにさせられるのは、兵士をそうするしかない状況に追い込むからです。

将軍のすべきことは、物静かにして本心を隠し、公正にして全軍を整えます。うまく軍人の耳目をあざむき、余計なことを知られないようにします。こちらの行動を変えたり、こちらの計画を改めたりして、人に知られないようにします。陣地を変えたり、道路を遠回りにしたりして、人にされないようにします。総司令官は、兵士と一緒に覚悟を決め、高いところに登り、ハシゴをはずすようにします。総司令官は、兵士と一緒に諸侯の領地に侵入し、戦端を開きます。船を燃やし、調理器具を処分し（戦って勝つしか生き残る方法がない状態に兵士をおとしいれ）、羊の群れをあやつるようにし、あやつるままに行かせ、あやつるままに来させ、その行き先を知らせないように

します。全軍の兵士を集め、ピンチに立たせます。以上が將軍のすべきことというものです。九地の変（戦場は状況に応じて9つのタイプに分けられ、それぞれに最適な対処の仕方があること）、屈伸の利（状況に応じて動くべきときには動き、止まるべきときには止まること）、人情の理（人間はピンチに追いこまれると必死になり、かなりの力を出せるようになること）については、明らかにしないといけません。

およそ攻め手のあり方としては、敵地に深く入りこんでいけば（兵士は逃げ場がないので）結束しやすくなりますが、敵地に浅くしか入りこんでいなければ（兵士は逃げ帰りやすいので）離散しやすくなります。自国を離れ、国境をこえて、軍事活動を行うところは「絶地」です。四方が諸国につながっているところは「衢地」です。敵国に深く入ったところは「重地」です。敵国にちょっとしか入ってないところは「輕地」です。後方が険しく、前方が狭いところは「圉地」です。逃げ場のないところは「死地」です。そういうわけで、「散地」では、兵士の意志を一つにします。

「輕地」では、兵士をつなぎとめます。「争地」では、後続部隊を急がせます。「交地」では、守りを固めます。「衢地」では、同盟を固めます。「重地」では、食料の補充がとぎれないようにします。「圯地」では、さっさと通過するようにします。「圉地」では、（兵士を必死に戦わせるために）逃げ道をふさぐようにします。「死地」では、絶体絶命のピンチにあることを理解させます。ですから、軍事の実情として、包囲されたときには防衛します。やむをえないときには戦闘します。通過していったときには追尾します。

そういうわけで、①諸国の腹の内を知らない人は、事前に諸国と外交をとりおすべません。②山林、難所、湿地、沼沢といった地形を知らない人は、軍を進められません。③現地の地理にくわしい人間をガイドにしない人は、地の利を得られません。四つ五つのこと（九変）について1つを

【少しも】知らなければ、「霸王の兵」ではありません。そもそも霸王の兵は、大国を征伐したと

きには、その兵隊は集まらなくなります。敵を威嚇したときには、その外交は味方を失います。

そういうわけで、天下の外交をリードしようとせずとも、天下の覇権を握ろうとせずとも、自分の思いのままにできて、敵を威圧することができます。ですから、その城は撃破させられますし、その国は陥落させられます。法外な恩賞を与え、規制のわくにとらわれない命令を出し、全軍の兵士を従わせ、まるで一人を動かすかのようにすんなりと全員を動かします。「これがすべきことだから、これをしろ」と命じて従わせ、その裏に隠された意図については教えてはいけません。「これが利益になるから、これをしろ」と命じて従わせ、その裏に隠された損害については教えてはいけません。兵士を滅びるほかないような状態に投げこんでこそ、兵士は生き残ることができます。兵士を死ぬほかないような状態に陥らせてこそ、兵士は生きのびることができます。そもそも兵隊は、窮地においこまれてこそ、こちらに勝利をもたらし、敵を敗北させることができます。ですから、兵隊を動かすにあたって大切なことは、敵の考えを探り、敵の思いどおりにさせることにあります。

（そうして敵が油断したところで）敵に対して力を合わせ、一丸となって向かっていき、千里もの距離を進んで敵将を殺します。これを「うまくやることによって成功できる者である」と言います。

そういうわけで、軍事に関する政務が開始された日には、国境を封鎖し、入国許可証を取り消し、使者の往来を禁止します。廊廟（表御殿）において気持ちを奮い立たせ、軍事についてマネジメントします。敵がスキを見せたら、必ずすみやかにつけ入ります。敵の大事なところを優先し、ひそかにそこにねらいを定めます。軍事の常識に従い、敵情に応じて動き、そうして争いごとを決めます。そういうわけで、始めは少女のようにふるまい、敵を油断させます。敵が油断して門戸を開いたら、逃げるウサギのようにすばやく動き、敵に対応する余裕を与えないようにします。

【原文】

十一家註本	武經七書本
火攻篇 孫子曰。凡火攻有五、一曰火人、二曰火積、三曰火輜、四曰火庫、五曰火隊。行火必有因、煙火必素具。發火有時、起火有日。時者、天之燥也。日者、月在箕壁翼轸也。凡此四宿者、風起之日也。凡火攻必因五火之變而忘之。火發於內則早忘之於外。火發兵靜者待而勿攻。極其火力、可從<u>而</u>從之、不可從<u>而</u>止。火可發於外、無待於內、以時發之。火發上風、無攻下風。昼風久、夜風止。凡軍必知<u>有</u>五火之變以數守之。故以火佐攻者明、以水佐攻者強。水可以絕、不可以奪。夫戰勝攻取、而不修其功者凶、命曰費留。故曰。明主慮之、良將修之。非利不動、非得不用、非危不戰。主不可以怒而興師、將不可以慍而致戰。合於利而動、不合於利而止。怒可以復喜、慍可以復<u>悅</u>。亡國不可以復存、死者不可以復生。故明<u>君</u>慎之、良將警之。此安國全軍	火攻第十二 孫子曰。凡火攻有五、一曰火人、二曰火積、三曰火輜、四曰火庫、五曰火隊。行火必有因、煙火必素具。發火有時、起火有日。時者、天之燥也。日者、月在箕壁翼轸也。凡此四宿者、風起之日也。凡火攻必因五火之變而忘之。火發於內則早忘之於外。火發<u>而其</u>兵靜者待而勿攻。極其火力、可從<u>則</u>從之、不可從<u>則</u>止。火可發於外、無待於內、以時發之。火發上風、無攻下風。昼風久、夜風止。凡軍必知五火之變以數守之。故以火佐攻者明、以水佐攻者強。水可以絕、不可以奪。夫戰勝攻取、而不修其功者凶、命曰費留。故曰。明主慮之、良將修之。非利不動、非得不用、非危不戰。主不可以怒而興師、將不可以慍而致戰。合於利而動、不合於利而止。怒可以復喜、慍可以復<u>說</u>。亡國不可以復存、死者不可以復生。故明<u>主</u>慎之、良將警之。

之道也。

此安国全軍之道也。

【翻訳】

孫子が言いました。

火攻めには五種類あります。第一は「火人（野営中の敵に火をかける）」です。第二は「火積（敵の食料に火をかける）」です。第三は「火輜（敵の輸送車に火をかける）」です。第四は「火庫（敵の倉庫に火をかける）」です。第五は「火隊（戦闘中の敵に火をかける）」です。火を使うときには必ず条件があります。火をつけるものは必ずふだんから整えておきます。火を燃え上がらせるには、時のよしあしがあります。火を燃え広がらせるには、日のよしあしがあります。よい時は、天気が乾燥している時です。よい日は、月が箕・壁・翼・軫の位置にあるときです。この位置に月がある日は、風が吹きます。

およそ火攻めは、必ず5種類の火攻め（火人、火積、火輜、火庫、火隊）がもたらす変化に応じて、こちらの対応を決めます。（火攻めをしかけて）敵の内部で火の手が上がったときには、すばやく外から攻めかかります。火が燃え上がり【火が燃え上がっても】、敵兵が冷静なら、待機して攻めてはいけません。火を燃えるにまかせ、攻撃できそうなら攻撃し、攻撃できそうにないなら止めます。外から火をつけやすいなら、内部から火をつけるまでもなく、タイミングを見計らって火をつけます。火が風上でついたときには、風下から攻撃してはいけません。昼の風は長く吹き、夜の風はすぐ止まります。およそ軍隊は、必ず5種類の火攻めがもたらす変化を知り、火攻めのポイントをおさえて守備に役立てます。ですから、（敵に大きな損害を与える攻撃方法として火攻めと水攻めがあるわけですが）火を用いて攻撃の助けとする場合、その威力は明らかです。水を用いて攻撃の助けとする場合、その勢いは強力です。ただし、水は、絶つことはできても、奪うことはできません。

そもそも（火攻めや水攻めによって）戦って勝ち、攻めて取ったとしても、兵士の功績を正に評価しないのは、悪い結果となります。これを名づけて「むだ使い」と言います。ですから、「賢明な君主は、これを思慮する。優良な将軍は、これを評価する」と言われるのです。（1）利益にならないなら行動を起こしません。成功につながらないなら軍隊を使いません。危険でないなら戦争をしません。君主は敵に対して怒っているからといって、戦争を始めてはいけません。将軍は敵に対して怨みがあるからといって、戦いをしかけてはいけません。利益につながるなら動き、利益につながらないなら止めます。そのときは怒っていても、そのうち怒りも消えて、喜ばしい気分になるものです。そのときは怨んでいても、そのうち怨みも消えて、楽しい気分になるものです。しかし、いったん滅んだ国は二度と立ち直りません。いったん死んだ人は二度と生き返りません。ですから、賢明な君主は、軽々しく開戦しないように注意し、優秀な将軍は、軽々しく戦わないように用心するのです。以上が国を安泰にし、軍を保全する方法です。

（1）明代の劉寅の説に従って訳しています。

【原文】

十一家註本	武經七書本
用間篇	用間第十三
孫子曰。凡興師十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金。內外騷動、怠於道路、不得操事者、七十萬家。相守數年、以爭一日之勝、而愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之至也。非人之將也。非主之佐也。非勝之主也。故明君賢將、所以動而勝人、成功出於衆者、先知也。先知者、不可取於鬼神、不可象於事、不可驗於度。必取於人、知敵之情者也。故用間有五、有因間（鄉間）、有內間、有反間、有死間、有生間。五間俱起、莫知其道、是謂神紀、人君之寶也。因間者因其鄉人而用之。內間者因其官人而用之。反間者因其敵間而用之。死間者為誑事於外、令吾間知之、而佞於敵間也。生間者、反報也。故三軍之事、莫親於間、賞莫厚於間、事莫密於間。非聖智不能用間、非仁義不能使間、非微妙不能得間之實。微哉微哉、無所不	孫子曰。凡興師十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金。內外騷動、怠於道路、不得操事者、七十萬家。相守數年、以爭一日之勝、而愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之至也。非人之將也。非主之佐也。非勝之主也。故明君賢將、所以動而勝人、成功出於衆者、先知也。先知者、不可取於鬼神、不可象於事、不可驗於度。必取於人、知敵之情者也。故用間有五、有因間（鄉間）、有內間、有反間、有死間、有生間。五間俱起、莫知其道、是謂神紀、人君之寶也。因間者因其鄉人而用之。內間者因其官人而用之。反間者因其敵間而用之。死間者為誑事於外、令吾間知之、而佞於敵間也。生間者、反報也。故三軍之事、莫親於間、賞莫厚於間、事莫密於間。非聖智不能用間、非仁義不能使間、非微妙不能得間之實。微哉微哉、無所不

用間也。間事未発、而先聞者、間与所告者皆死。凡軍之所欲撃、城之所欲攻、人之所欲殺、必先知其守将、左右、謁者、門者、舍人之姓名、令吾間必索知之。必索敵人之間来間我者、因而利之、導而舍之。故反間可得而使也。因是而知之。故郷間、内間可得而使也。因是而知之、故死間為誑事、可使告敵。因是而知之。故生間可使如期。五間之事、主必知之。知之必在於反間。故反間不可不厚也。昔殷之興也、伊摯在夏。周之興也、呂牙在殷。故惟明君賢将能以上智為間者、必成大功。此兵之要、三軍之所恃而動也。

用間也。間事未発、而先聞者、間与所告者皆死。凡軍之所欲撃、城之所欲攻、人之所欲殺、必先知其守将、左右、謁者、門者、舍人之姓名、令吾間必索知之。必索敵間之来間我者、因而利之、導而舍之。故反間可得而使也。因是而知之。故郷間、内間可得而使也。因是而知之、故死間為誑事、主必曰敵。因是而知之。故生間可使如期。五間之事、主必知之。知之必在於反間。故反間不可不厚也。昔殷之興也、伊摯在夏。周之興也、呂牙在殷。故明君賢将能以上智為間者、必成大功。此兵之要、三軍所恃而動也。

【翻訳】

孫子が言いました。

およそ開戦して10万人の兵隊を動員し、軍隊を千里の先まで行かせる場合、人民の出費、政府関係者の負担は、1日につき千金となります。内も外も騒然となり、輸送に疲れ、仕事に専念できない家が合計で七十万世帯になります。敵と対峙することが数年におよんで、そうしてたった一度の決戦のチャンスを待つことになります。それなのに、（情報活動の対価とする）恩賞や百金をおしんで、敵情を知らないままにするのは、とてもひどいことです。人民の将軍としてふさわしくありません。君主の補佐役としてふさわしくありません。勝利を思いのままにできる人ではありません。ですから、賢明な君主や優秀な将軍が、行動を起こしたときには必ず敵に勝ち、人なみすぐれ

た成功をおさめられる理由は、先知（先に知ること・先に知らせること）にあります。先知にあたっては、神様のお告げに頼ることはできません。似たものから類推することはできません。法則に照らし合わせて推測することはできません。必ず人から得て、敵情を知るようにするものです。

ですから、スパイを使うにあたっては、5種類があります。因間（郷間）があります。内間があります。反間があります。死間があります。生間があります。5種類のスパイがそろって活動し、その方法を知られません。これが「神紀＝運用の秘訣」というものです。君主にとっての宝です。因間（郷間）とは、敵国の住民を利用して、スパイ活動に行うことです。内間とは、敵国の役人を利用して、スパイ活動を行うことです。反間とは、敵国のスパイを利用して、スパイ活動を行うことです。死間とは、外部に対してウソを本当のように見せかけることを行い、こちらのスパイにウソを知らせ、敵にウソの情報をつかませるスパイ活動です。生間とは、情報を持ち帰ってくるスパイ活動です。

ですから、全軍における仕事としてはスパイよりも親密にすべきものではなく、恩賞としてはスパイよりも手厚くすべきものではなく、仕事としてはスパイよりも秘密にすべきものではありません。すぐれた知恵のある人でなければ、スパイをよく用いることができません。人情と義理のある人でなければ、スパイをよく使うことができません。繊細な人でなければ、スパイのもたらした情報の真偽をよく判断できません。なんとも目立たないものですが、スパイ活動はあらゆる場面で使われます。スパイした事柄について、公表するより先に聞き知っている人がいたなら、そのことをスパイした人とそのことを他人に話した人を殺します。

およそ撃破したい軍隊、攻略したい城、殺したい人などがある場合は、必ずそれを守る将軍、側近、案内係、門番、雑用係など（ターゲットに関係する人びと）の姓名を先に知り、それらの人物についてスパイに調べさせて知らせさせます。こちらに潜入している敵のスパイを必ず搜索して見

つけ出し、この機に乗じてスパイを利してまるめこみ、たくみに誘導してスパイを引きとめてたぶらかします。そこで、反間が獲得できて使えるようになります。それを利用して情報を知ることができます。そこで、郷間や内間が獲得できて使えるようになります。それを利用して情報を知ることができます。そこで、死間がウソを本当だと見せかけ、敵にウソをつかませることができます
【君主は必ず（敵をあざむくため、その死間のことを）敵だと言います】。それを利用して情報を知ることができます。そこで、生間が計画どおりに活動できるようにさせることができます。5種類のスパイ活動のことについては、君主は必ず知っておかないといけません。知るにあたっては反間が基本となります。ですから、反間は大事にしないわけにはいきません。

昔、殷国が勃興するにあたって、名臣の伊尹が夏国に潜入してスパイとして活動しました。周国が勃興するにあたって、名臣の呂尚が殷国に潜入してスパイとして活動しました。ですから、ただ聡明な君主や賢明な將軍で、すぐれた賢者をスパイとして使うことのできる人だけが【は】、必ず大成功をおさめられます。以上は、戦争のかなめであり、全軍が動くにあたって頼りとするものです。

第3章 『魏武帝註孫子』を読む

【原文】について

- ①平津館本『魏武帝註孫子』を底本とし、清家本『魏武帝註孫子』も参照しています。
- ②清家本『魏武帝註孫子』と文字が異なっているところで、意味が大きく変わるところは、一本線で示し、[]内に清家本の文字を記しています。
- ③清家本『魏武帝註孫子』を参照するにあたり、明らかに誤字と分かるところ（たとえば清家本で誤字が指摘されているところ）は、修正しています。
- ④特殊な漢字を除いて、漢字は基本的に常用漢字に変更しています。

【注釈】について

- ①平津館本『魏武帝註孫子』と清家本『魏武帝註孫子』にある曹操の注釈は、()内に記しています。
- ②平津館本の注釈と清家本の注釈が異なっているところは、一本線で示し、まず平津館本の注釈を記し、その後で清家本の注釈を[]内に記しています。
- ③『十一家註孫子』にある曹操の注釈は、[]内に記しています。
- ④『魏武帝註孫子』の注釈と『十一家註孫子』の注釈が同じ場合は、その注釈を()内に記し、二重線で示しています。
- ⑤『魏武帝註孫子』の注釈と『十一家註孫子』の注釈が異なっているところは、()内に『魏武帝註孫子』の注釈を記し、[]内に『十一家註孫子』の注釈を記すという形で、両方の注釈を併記しています。

【翻訳】について

①翻訳は、注釈を役立てるため、ほぼ直訳しています。

②平津館本と清家本で大きく異なるところは、一本線で示し、まず平津館本の翻訳を記し、その後で清家本の翻訳を〔 〕内に記しています。

③注釈のところは、『魏武帝註孫子』の注釈を主体とし、『十一家註孫子』の注釈で補う形で翻訳しています。

④『十一家註孫子』の注釈で補って翻訳しているところは、その翻訳を〔 〕内に記しています。

⑤『魏武帝註孫子』の注釈と『十一家註孫子』の注釈が異なる場合は、一本線で示し、〔 〕内に『十一家註孫子』の注釈の翻訳を記しています。

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
始計第一（計者、選將量敵度地料卒計於廟堂也） 孫子曰。兵者、國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也。故經之以五事、校之以計、而索其情（謂下五事七計、求彼我之情也）。一曰道（謂導之以教令）、二曰天、三曰地、四曰將、五曰法。道者令民與上同意、可與之死、可與之生、而不畏危也。天者、陰陽寒暑時制也（順天行誅、因陰陽四時之制。故司馬法曰、冬夏不興師、所以兼愛吾民也）。地者、遠近險易廣狹死生也。將者、智信仁勇嚴也（將宜五德備也）。法者、曲制官道主用也（曲制者、部曲旗幟金鼓之制也。官者、百官之分也。道者、糧路也。主用者、主軍費用也）。凡此五者、將莫不聞、知之者勝、不知者不勝。故校之以計、而索其情（同聞五者、將知其變極、則勝也。索其情者、勝負之情）。曰。主孰有道、將孰有能（道	計篇〔計者、選將量敵度地料卒遠近險易計於廟堂也〕 孫子曰。兵者、國之大事。死生之地、存亡之道、不可不察也。故經之以五事、校之以計、而索其情〔謂下五事七計、求彼我之情也〕。一曰道、二曰天、三曰地、四曰將、五曰法。道者、令民與上同意也。故可以與之死、可以與之生、而不畏危也〔謂導之以教令。危者、危疑也〕。天者、陰陽寒暑時制也〔順天行誅、因陰陽四時之制。故司馬法曰、冬夏不興師、所以兼愛民也〕。地者、遠近險易廣狹死生也〔言以九地形勢不同、因時制利也。論在九地篇中〕。將者、智信仁勇嚴也〔將宜五德備也〕。法者、曲制官道主用也〔部曲旗幟金鼓之制也。官者、百官之分也。道者、糧路也。主者、主軍費用也〕。凡此五者、將莫不聞、知之者勝、不知者不勝。故校之以計、而索其情。曰。主孰有道〔道德、

德、智能)、天地孰得(天時、地利)、法令孰行(設而不犯、犯而必誅)、兵衆孰強、士卒孰練、賞罰孰明。吾以此知勝負矣(以七事計之、知勝負矣)。將聽吾計、用之必勝、留之。將不聽吾計、用之必敗、去之(不能定計、則退去之)。計利以聽、乃為之勢、以佐其外(常法之外)。勢者因利而制權也(制由觀也、權因事制也)。兵者詭道也(無常形、以詭詐為道)。故能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、遠而示之近(欲進[退]而治去[其]道、若韓信之襲安邑、陳舟臨晉、而渡於夏陽也)、利而誘之、乱而取之、實而備之(敵治實、須備之)、強而避之(避其所長)、怒而撓之、卑而驕之、佚而勞之(以利勞之)、親而離之(以間離之)、攻其無備、出其不意(擊其懈怠、出其空虛)。此兵家之勝、不可先傳也(傳、泄也)。夫未戰而廟算勝者、得算多也。未戰而廟算不勝者、得算少也。多算勝、少算不勝、而況於無算乎。吾以此觀之、勝負見矣。

智能]、將孰有能、天地孰得[天時、地利]、法令孰行[設而不犯、犯而必誅]、兵衆孰強、士卒孰練、賞罰孰明。吾以此知勝負矣[以七事計之、知勝負矣]。將聽吾計、用之必勝、留之。將不聽吾計、用之必敗、去之[不能定計、則退而去也]。計利以聽、乃為之勢、以佐其外。勢者因利而制權也[制由權也、權因事制也]。兵者詭道也[兵無常形、以詭詐為道]。故能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、遠而示之近、利而誘之、乱而取之、實而備之[敵治實、須備之也]、強而避之[避其所長也]、怒而撓之[待其衰懈也]、卑而驕之、佚而勞之[以利勞之]、親而離之[以間離之]、攻其無備、出其不意[擊其懈怠、出其空虛]。此兵家之勝、不可先傳也[傳、洩也。兵無常勢、水無常形、臨敵變化、不可先傳也。故料敵在心、察機在目也]。夫未戰而廟算勝者、得算多也。未戰而廟算不勝者、得算少也。多算勝、少算不勝、而況於無算乎。吾以此觀之、勝負見矣[以吾道觀之矣]。

始計第一（計とは、将軍を選抜し、敵情を推量し、地理を測定し、兵士を調査し、〔土地の距離、地形の難度について〕廟堂において計画することです）

孫子が言いました。軍事は、国にとって大きな事です。どこが安全で、どこが危険なのか、どうすれば存続し、どうすれば滅亡するのか、これについて明らかにしないといけません。ですから、これを管理するには五事を用い、これを比較するには計を用いて、その実情を調べます（下記の五事と七計を言っており、相手と自分の実情を求めるのです）。第一は道です（兵士を教令によって導きます）。第二に天です。第三に地です。第四に将です。第五に法です。道とは、人民を君主と同じ思いにさせ、君主と共に死ぬようにさせ、君主と共に生きるようにさせて、危険を恐れなくさせるものです〔兵士を教令によって導きます。危険とは、不安のことです〕。天とは、陰陽、寒暑、時制です（天に従って処刑を行い、陰陽と四季の制度にもとづきます。ですから、『司馬法』は「冬と夏に戦争をしないのは、〔わが〕人民を愛する方法です」と言っているのです）。地とは、遠近、險易、広狭、死生です〔言っているのは、九地の形勢が同じでないことによって、時に応じて有利になるようにするということです。九地篇のなかで論じています〕。将とは、智、信、仁、勇、嚴です（将軍は、5つの徳を身につけておくべきです）。法とは、曲制、官、道、主用です（曲制とは、編成、旗や小旗を使った目に見える信号、鐘や太鼓を使った耳に聞こえる信号の制度です。官とは、役人たちの役割分担です。道とは、糧道です。主用とは、軍隊の費用を管理することです）。およそ以上の5つは、将軍なら聞かないことのないことです。これを知っている人は勝ち、これを知らない人は勝ちません。ですから、これを比較するには計を用いて、その実情を調べます（5つについて同じように聞いているとは、将軍がその十分な応用を知り、そのときには勝つということです。その実情を調べるとは、勝ち負けの実情のことです）。それについて言います。君主はどちらが有道か〔道徳と知能です〕。将軍はどちらが有能か（道徳と知能です）。天地はど

ちらが得ているか（天の時と地の利です）。法令はどちらがよく守られているか（法令を設定したら守らせます。守らないなら必ず処刑します）。兵隊はどちらが強い。軍人は、どちらが訓練されているか。賞罰はどちらが公明であるか。私は、以上を使って勝ち負けを知ります（以上の七事を使って比較し、勝ち負けを知ります）。将軍が私の比較方法（七計）に従うなら、その将軍を用いれば必ず勝ちますから、留任します。将軍が私の比較方法（七計）に従わないなら、その将軍を用いれば必ず負けますから、解任します（七計による比較を定められないときには、その将軍を辞めさせます）。七計を使って比較してみて、こちらが有利であり、そして将軍がそれに従うなら、そこで勢いづけることを行い、それによって状況がこちらにとって都合よくなるようにします（いつもと同じ方法とは別のものです）。勢いづけることとは、こちらが有利になるように臨機応変の謀略を決めることです（決めるのは、観察してから決めます〔決めるとは、臨機応変の謀略によって決めます〕。臨機応変の謀略は、事情に応じて決めます）。軍事とは、相手をだます方法です（〔軍事には〕一定のありようがなく、そうしてだますことを方法とします）。こちらの勢いを増す方法とは、どうすれば有利になるのかを考えて臨機応変に対処することです。軍事とは、いかに相手をだますかです。ですから、できるのにできないふりをし、用いているのに用いていないふりをし、近づいているのに遠ざかっているように見せかけ、遠ざかっているのに、近づいているように見せかけ（進みたいとき〔退きたいとき〕には、帰り道〔その道〕を整備します。たとえば、韓信が安邑を襲撃したとき、船を臨晋にならべて、夏用に渡ったみたいなものです）、利益で釣って誘い出し、混乱させて撃ちとり、敵が充実しているときは備え（敵が整然として充実しているなら、それに備えるべきです）、敵が強大なときは避け（敵の長所を避けます）、敵を怒らせてその心を乱し〔敵が衰えて気がゆるむのを待ちます〕、敵にへりくだっておごり高ぶらせ、元気なら疲れさせます（利益を使って疲れさせます）、仲が良いなら離間させ（スパイを使って離間させます）、

敵の備えていないところを攻め、敵の思いもよらないところに出ます（敵が油断しているところを攻撃し、敵が警戒していないところに出ます）。以上が兵家の勝ち方であり、事前に伝えてはいけません（伝えるとは、もらすことです。〔兵士には一定の勢いがなく、水には一定のありようがなく、敵に臨んで変化し、先に伝えられません。ですから、敵を調べて知るは心にかかっており、機を察して知るは目にかかっているのです〕）。そもそも戦う前に廟堂にこもって勝ち目を計算してみても勝てるのは、勝算が多いからです。戦う前に廟堂にこもって勝ち目を計算してみても勝てないのは、勝算が少ないからです。勝算が多ければ勝ちますし、勝算が少なければ勝てませんが、ましてや勝算がなければ勝ちようがありません。私は以上を使って観察するわけですが、そうすれば勝ち負けが見えてきます〔孫子のやり方を使って観察します〕。

第 2 篇 作戰篇・作戰第二

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
作戰第二（欲戰、必先算其費、務因糧於敵） 孫子曰。凡用兵之法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬（馳車、輕車也。駕駟馬。革車、重車也）、千里饋糧。內外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金、然後十萬之師舉矣（購賞猶在外）。其用戰也、勝久則鈍兵挫銳、攻城則力屈（鈍、弊也。屈、盡也）、久暴師則國用不足。夫鈍兵挫銳、屈力殫貨、則諸侯乘其弊而起、雖有智者、不能善其後矣。故兵聞拙速、未覩巧之久也（雖拙、有以速勝。未覩、言無也）。夫兵久而國利者、未之有也。故不尽知用兵之害者、則不能盡知用兵之利也。善用兵者、役不再籍、糧不三載（籍、猶賦也。言初賦民便取勝、不復歸國發兵也。始載[用]糧、後遂因食於敵、還兵入國、不復以糧迎之也）。取用於國、因糧於敵。故軍食可足也（兵甲戰具、取用於國中、糧食則因敵也）。國之貧於師者遠	作戰篇〔欲戰、必先算其費、務因糧於敵也〕 孫子曰。凡用兵之法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬〔馳車、輕車也。駕駟馬。革車、重車也。言萬騎之重。車駕四馬、率三萬軍、養二人主炊家子、一人主保固守衣裝、廐二人主養馬、凡五人。步兵十人重以大車駕牛。養二人主炊家子、一人主守衣裝、凡三人也。帶甲十萬士卒數也〕、千里饋糧〔越境千里〕。則內外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金、然後十萬之師舉矣〔謂購賞猶在外也〕。其用戰也、勝久則鈍兵挫銳、攻城則力屈〔鈍、弊也。屈、盡也〕、久暴師則國用不足。夫鈍兵挫銳、屈力殫貨、則諸侯乘其弊而起、雖有智者、不能善其後矣。故兵聞拙速、未睹巧之久也〔雖拙、有以速勝。未覩者、言其無也〕。夫兵久而國利者、未之有也。故不尽知用兵之害者、則不能盡知用兵之利也。善用兵者、役不再籍、糧不三載

輸、遠輸則百姓貧。近師者貴売、貴売則百姓財竭（軍行已出界、近於師者貧財、皆貴売、則百姓虛竭也）、財竭則急於丘役。力屈財竭中原、內虛於家。百姓之費、十去其七（丘、十六井也）。公家之費、破車罷馬、甲冑矢弓、戟楯矛櫓、丘牛大車、十去其六（丘謂丘邑之牛、大車乃長轂車也）。故智將務食於敵。食敵一鐘、當吾二十鐘。一石、當吾二十石（豆、豆稭也。禾、禾稭也。石、百二十斤也。轉輸之法、費二十石乃得一石）。故殺敵者怒也（威怒以致敵）、取敵之利者貨也（軍無財士不來、軍無賞士不往）。車戰得車十乘以上、賞其先得者、而更其旌旗（與吾同也）、車雜而乘之（不獨任也）、卒善以養之、是謂勝敵而益強（益己之強）。故兵貴勝、不貴久（久則不利。兵猶火也、不戢將自焚）。故知兵之將、民之司命、國家安危之主也。

〔籍、猶賦也。言初賦民便取勝、不復歸國發兵也。始用糧、後遂因食於敵、還兵入國、不復以糧迎之也〕。取用於國、因糧於敵。故軍食可足也。國之貧於師者遠輸、遠輸則百姓貧。近於師者貴売、貴売則百姓財竭、財竭則急於丘役。力屈財竭中原、內虛於家。百姓之費、十去其七〔百姓財殫盡而兵不解、則運糧尽力於原野也。十去其七者所破費〕。公家之費、破車罷馬、甲冑矢弩、戟楯蔽櫓、丘牛大車、十去其六〔丘牛謂丘邑之牛、大車乃長轂車也〕。故智將務食於敵。食敵一鐘、當吾二十鐘。一石、當吾二十石〔六斛四為鍾。豆、豆稭也。禾、禾稭也。石、百二十斤也。轉輸之法、費二十石乃得一石。一云：音忌、豆也。七十斤為一石。當吾二十、言遠費也〕。故殺敵者怒也〔威怒以致敵〕、取敵之利者貨也〔軍無財士不來、軍無賞士不往〕。故車戰得車十乘已上、賞其先得者〔以車戰能得敵車十乘已上、賞賜之。不言車戰得車十乘已上者賞之、而言賞得者何。言欲開示賞其所得車之卒也。陳車之法、五車為隊、僕射

	一人、十車為官、卒長一人、車滿十乘、将吏二人。因而用之。故別言賜之、欲使将恩下及也。 或曰。言使自有車十乘已上与敵戰、但取其有功者賞之、其十乘已下、雖一乘独得、余九乘皆賞之、所以率進勵士也〕、而更其旌旗〔<u>与吾同也</u>〕、車雜而乘之〔<u>不独任也</u>〕、卒善以養之、是謂勝敵而益強。故兵貴勝、不貴久〔久則不利。兵猶火也、不戢将自焚也〕。故知兵之将、生民之司命、国家安危之主也〔将賢則国安也〕。
--	---

【翻訳】

作戦第二（戦おうとするときには、必ず先にどれだけの費用が必要になるかを計算し、努めて敵から食料を奪います）

孫子が言いました。およそ用兵の原則として、馳車が１０００輛、革車が１０００輛、帶甲が１０万人となります（馳車は戦車です。４頭の馬が引っぱります。革車は輸送車です）〔騎兵１万あたりの輸送車について言うと、車両は４頭の馬が引っぱり、三万人を引きつれることになります。１車あたり、炊事係２人が炊事を担当し、雑用係１人が衣類や装備のメンテナンスを担当し、飼育係２人が馬の世話を担当します。全部で５人です。歩兵１９人あたりの輸送車は、大きな荷車を牛に引っぱらせます。炊事係２人が炊事を担当し、雑用係１人が衣類や装備のメンテナンスを担当します。全部で３人です。帶甲１０万は、士卒の人数です〕。１０００里の遠征で食料を輸送します〔国境を越えて１０００里を走ります〕。内外の出費、賓客の費用、膠漆の材料、車甲の維持のた

め、一日に千金を費やします。そうしてはじめて10万人の軍隊が動員できます（恩賞の費用については、やはりこれとは別にあります【ということです】）。軍隊を戦いに使うにあたっては、勝っても長引かせれば、兵士を鈍らせ、鋭気をくじかせます。城を攻めれば、力が屈します（鈍るとは、疲れることです。屈するとは、なくなることです）。長いこと激戦をすれば、国の費用が不足します。そもそも兵士を鈍らせ、鋭気をくじかせ、力を屈し、財産を使いつくせば、諸侯がこちらの疲弊に乗じて攻撃をしかけてきます。知恵のある人がいたとしても、善後を図れなくなります。ですから、戦争は「へたくそでもすみやかにする」という話を聞いたことがあっても、「うまくやって長引かせる」ということを見たことがありません（下手くそであっても、すばやくすることによって勝つことがあります。見たことがない【と】は、【それが】ないことを言います）。そもそも軍事が長引いて国が得をしたということは、いまだかつてありません。ですから、用兵の害をことごとく知らない人と言うと、用兵の利をことごとく知ることができません。用兵の上手な人は、徴発は二回も行いませんし、食料は三回も運びません（徴発とは、徴用みたいなものです。言っているのは、こういうことです。最初に人民を徴用し、そこで勝利を得たら、再び国に帰らず、兵士を出します。最初に食料を徴発したら【はじめて食料を使ったら】、その後は敵から食料を奪い、兵士を戻して入国したら、再び食料を準備しません）。道具を国から出し、食料を敵から奪います。ですから、軍隊の食料が足りるようにできます（防具と武器は、国内で用意します。食料はというと、敵から手に入れます）。国が軍隊のために貧しくなるのは、遠くに輸送するからです。遠くに輸送すれば、人民が貧しくなります。軍隊に近いところでは、物価が高騰します。物価が高騰すれば、人民の財産が尽きはてます（軍隊が進んで国境を出たとき、軍隊に近いところでは物資に乏しくなし、だれもが高く売ります。そのときには人民がからっぽになり、尽きはてます）。財産が尽きはてれば、丘役（地域に割り当てられる負担）に耐えられなくなります。中原（世の中）におい

て力が屈し、財産が尽きはてれば、国内では各家庭のほうでからっぽになります。人民の出費のうち、70パーセントが消耗されます（丘とは、16の町です）〔人民の財産がすべて尽きはてても兵士が戦場から帰れないときには、食料の運搬のために野原で力を費やすことになります。70パーセントの費用を浪費します〕。政府関係者の出費としては、車を壊され、馬を弱らせられます。

甲（よろい）、冑（かぶと）、矢、弓、戟（鎌のついた槍）、楯（普通の盾）、矛（もろ刃の槍）、櫓（大きい盾）、丘牛（村落の牛）、大車（大きな馬車）のうち、60パーセントが消耗されます（丘〔丘牛〕とは、町や村の牛です。大車は、兵車となる馬車です）。ですから、知恵のある將軍は、つとめて敵から食料を奪います。敵から1鍾（50リットル）の食料を奪うことは、こちらにとって20鍾（1000リットル）の食料を得ることに相当します。1石（約20リットル）の飼料を奪うことは、こちらにとって20石（約400リットル）を得ることに相当します〔6斛4斗が1鍾となります〕（■は、豆殻です。■は、稻わらです。1石は、120斤です。輸送の原則として、20石の費用を使って、1石の物資を運べます）〔一説によると、■の発音は忌と同じで、豆のことです。70斤が1石となります。こちらの20石に相当するとは、遠くに運搬するときの費用を言います〕。ですから、敵を殺すのは怒っているからです（激しく怒ることで敵をコントロールします）、敵の利益を奪い取るのはもうけたいからです（軍隊に財産がなければ兵士が来ませんし、軍隊に恩賞がなければ兵士が行きません）、戦車で戦い、敵の戦車10輦以上を獲得したら、そのうち最初に獲得した人を賞します〔戦車で戦うことによって敵の戦車10輦以上を獲得したら、恩賞を与えます。「戦車で戦い、敵の戦車10輦以上を獲得したら、賞する」と言わないで、「獲得した人を賞する」と言っているのは、なぜでしょうか。言っていることは、敵の戦車を獲得した兵士を賞することを知らせたいということです。戦車隊の編成方法は、5輦の戦車が隊となり、僕射（指揮官）1人がつきます。10輦の戦車が官となり、卒長（指揮官）1人がつきます。

戦車 10 輦以上になると、将吏（将校と役人）2 人がつきます。それを利用して使用します。ですから、恩賞を与えることを別に言い、将軍による恩恵を下にまで及ばせようしているのです。ある人は、こう言っています。ここで言っていることは、こういうことです。すなわち、10 輦よりも多い戦車をひきいて敵と戦ったときには、ただ功績のあった人だけを選んで賞します。10 輦よりも少ない戦車をひきいて敵と戦ったときには、1 輦の戦車が戦果をあげたなら、その戦車に所属する兵士だけでなく、残り 9 輦の戦車に所属する兵士も含めて全員を賞します。それは、みずから先頭に立って進み、兵士をやる気にさせるためです」。かくして、その旌旗（軍旗）を変更し（自軍と同じにします）、獲得した戦車は自軍に組みこんで乗用し（一人に任せません）、捕虜にした兵士は手厚く待遇して味方にします。これが「敵に勝って、ますます強くなる」ということです（自分の強さを増します）。ですから、戦争は、勝つことを大切にし、長引くことを大切にしないのです（長引けば、不利です。軍事は、火のようなものです。やめないと、自分を焼くことになってしまいます）。ですから、軍事を知っている将軍は、人民の命運をあずかり、国家の安危をにぎっています〔将軍が賢明であれば、国は安全です〕。

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
謀攻第三 <u>（欲攻敵、必先謀）</u> 孫子曰。夫用兵之法、全國為上破國次之 <u>（興師深入、長驅拒其都邑、絕其內外、敵拳國來服為上。以兵擊破得之、為次也）</u>、全軍為上破軍次之 <u>（司馬法曰、萬二千五百人為軍）</u>、全旅為上破旅次之 <u>（五百人為旅）</u>、全卒為上破卒次之 <u>（自校以上至百人也）</u>、全伍為上破伍次之 <u>（百人以下至五人）</u>。是故百戰百勝、非善之善也。不戰而屈人之兵、善之善者也 <u>（未戰而敵自屈服）</u>。故上兵伐謀 <u>（敵始有謀、伐之易也）</u>、其次伐交 <u>（交、將合也）</u>、其次伐兵 <u>（兵形已成也）</u>、其下攻城 <u>（敵國已收外糧城守、攻之為下也）</u>。攻城之法為不得已。修櫓轆轤、具器械、三月而後成、距堙又三月而後已 <u>（修、治也。櫓、大楯也。轆轤者其下四輪、從中推之至城下也。具、備也。器械者、機關攻守之總名、飛樓雲梯之屬也。距堙者、踊土稍高而前以附其城</u>	謀攻篇 <u>〔欲攻敵、必先謀〕</u> 孫子曰。凡用兵之法、全國為上破國次之 <u>〔興師深入、長驅拒其都邑、絕其內外、敵拳國來服為上。以兵擊破得之、為次也〕</u>、全軍為上破軍次之 <u>〔司馬法曰、一萬二千五百人為軍〕</u>、全旅為上破旅次之 <u>〔五百人為旅〕</u>、全卒為上破卒次之 <u>〔一校以上至一百人也〕</u>、全伍為上破伍次之。是故百戰百勝、非善之善也 <u>〔未戰而戰自屈勝善也〕</u>。不戰而屈人之兵、善之善者也 <u>〔未戰而敵自屈服〕</u>。故上兵伐謀 <u>〔敵始有謀、伐之易也〕</u>、其次伐交 <u>〔交、將合也〕</u>、其次伐兵 <u>〔兵形已成也〕</u>、其下攻城 <u>〔敵國已收外糧城守、攻之為下攻也〕</u>。攻城之法為不得已。修櫓轆轤、具器械、三月而後成、距闔又三月而後已 <u>〔修、治也。櫓、大楯也。轆轤者、轆牀也。轆牀其下四輪、從中推之至城下也。具、備也。器械者、機關攻守之總名、飛樓雲梯之屬也。距闔者、踊</u>

也）。將不勝其忿、而蟻附之、殺士卒三分之一、而城不拔者、此攻之災也（將忿、不待攻城器成而使士卒緣城而上、如蟻之緣牆、必殺傷士卒也）。故善用兵者、屈人之兵而非戰也。拔人之城而非攻也。毀人之國而非久也（毀滅人國、不久露師）。必以全爭於天下、故兵不頓而利可全、此謀攻之法也（不與敵戰而必完全得之。立勝於天下、則不頓兵挫銳）。故用兵之法、十則圍之（以十敵一則圍之、是謂將智勇等而兵利鈍均也。若主弱客強。操所以倍兵圍下邳生擒呂布也）、五則攻之（以五敵一、則三術為正、二術為奇）、倍則分之（以二敵一、則一術為正、一術為奇）、敵則能戰之（己與敵人衆等、善者猶當設奇伏以勝之）、少則能逃之（高壁堅壘、勿與戰也）、不若則能避之（引兵避之）。故小敵之堅、大敵之擒也（小不能當大也）。夫將者國之輔也。輔周則國必強（將周密、謀不泄）、輔隙則國必弱（形見外也）。故君之所以患於軍者三。不知軍之不可以進而謂之進、不知軍之不可以退而謂之退、是謂縻軍（縻、御也）。不知三

士稍高而前以附其城也〕。將不勝其忿、而蟻附之、殺士三分之一、而城不拔者、此攻之災也〔將忿、不待攻城器而使士卒緣城而上、如蟻之緣牆、必殺傷士卒也〕。故善用兵者、屈人之兵而非戰也。拔人之城而非攻也。毀人之國而非久也〔毀滅人國、不久露師也〕。必以全爭於天下、故兵不頓而利可全、此謀攻之法也〔不與敵戰而必完全得之。立勝於天下、不頓兵血刃也〕。故用兵之法、十則圍之〔以十敵一則圍之、是謂將智勇等而兵利鈍均也。若主弱客強。操所以倍兵圍下邳生擒呂布也〕、五則攻之〔以五敵一、則三術為正、一術為奇〕、倍則分之〔以二敵一、則一術為正、一術為奇〕、敵則能戰之〔己與敵人衆等、善者猶當設伏奇以勝之〕、少則能逃之〔高壁堅壘、勿與戰也〕、不若則能避之〔引兵避之也〕。故小敵之堅、大敵之擒也〔小不能當大也〕。夫將者國之輔也。輔周則國必強〔將周密、謀不泄〕、輔隙則國必弱〔形見於外也〕。故君之所以患於軍者三。不知軍之不可以進而謂之進、不知軍之不可以退而謂

軍之事、而同三軍之政、則軍士惑矣（軍容不入国、国容不入軍、礼不可以治兵）。不知三軍之權、而同三軍之任、則軍士疑矣（不得其人也）。三軍既惑且疑、則諸侯之難至矣、是謂乱軍引勝（引、奪也）。故知勝有五。知可以与戰不可以与戰者勝、識衆寡之用者勝、上下同欲者勝（君臣同欲）、以虞待不虞者勝、将能而君不御者勝（司馬法曰、進退惟時、無曰寡人）。此五者、知勝之道也（此上五事也）。故曰。知彼知己、百戰不殆。不知彼而知己、一勝一負。不知彼不知己、每戰必敗。

之退、是謂糜軍（糜、御也）。不知三軍之事、而同三軍之政者、則軍士惑矣〔軍容不入国、国容不入軍、礼不可以治兵也〕。不知三軍之權、而同三軍之任、則軍士疑矣〔不得其人意〕。三軍既惑且疑、則諸侯之難至矣、是謂乱軍引勝〔引、奪也〕。故知勝有五。知可以与戰与不可以戰者勝、識衆寡之用者勝、上下同欲者勝〔君臣同欲〕、以虞待不虞者勝、将能而君不御者勝〔司馬法曰、進退惟時、無曰寡人也〕。此五者、知勝之道也〔此上五事也〕。故曰。知彼知己者、百戰不殆。不知彼而知己、一勝一負。不知彼不知己、每戰必殆。

【翻訳】

謀攻第三（敵を攻めようとするにあたっては、必ず先に謀ります）

孫子が言いました。そもそも用兵の原則としては、国を保全することが上等で、国を撃破することは二番です（戦争を始め、敵国に深く入り、遠征して敵国の首都や町を包囲し、敵国の内外の通行を遮断し、敵国が国をあげて降伏してくるのが最上となります。兵士を使って敵国を撃破して獲得するのは、二番となります）。軍を保全することが上等で、軍を撃破することは二番です（『司馬法』に「1万2千人が軍となります」とあります）。旅を保全することが上等で、旅を撃破することは二番です（500人が旅となります）。卒を保全することが上等で、卒を撃破することは二番です（校（部隊の単位）より上で100人までです）。伍を保全することが上等で、伍を撃破す

ることは二番です（100人より下で5人までです）。そういうわけで、百戦百勝は最善ではありません〔いまだ戦わないで戦っておのずから屈して勝つのが善です〕。戦わないで相手の兵隊を屈服させることが最善です（まだ戦っていないのに敵が自分から屈服することです）。ですから、上等の軍事は謀略を打破することです（敵が謀りはじめたばかりのときは、これを打破することは簡単です）。その次は外交を打破することです（外交とは、同盟しようとすることです）。その次は兵士を打破することです（兵士のありようが整っている場合です）。その下は城を攻めることです（敵国が城外の食料を城内に収蔵し、城が守られているとき、城を攻めるのは最低となります）。城を攻める原則としては、やむをえないときに攻めるようにします。櫓と轆轤を修め、器械を具えるのは、三カ月かかってから完成します。距堙は、さらに三カ月かかってから完了します（修めるとは、整備することです。櫓は、大きな楯です。轆轤は〔轆牀です。轆牀は〕下に4つの車輪があり、その中に入って押しながら城壁の下まで到達します。具えるとは、準備することです。器械は、攻めたり守ったりする装置をまとめて言ったもので、飛樓や雲梯などのことを言います。距堙は、土を突き固めて盛り上げて進み、そうして敵の城壁にくっつけます）。将軍がイライラをこらえきれなくて、蟻附（アリののように群がって城壁をよじ登ること）を命じ、兵士の3分の1を戦死させても、城が陥落しないというのは、城を攻めることにともなう災いです（将軍がイライラして、攻撃の道具が完成するのを〔城を攻撃する道具を〕待たないで、兵士を城壁にとりつかせて、蟻が壁を登るように登らせるなら、必ず兵士を殺したり、傷つけたりすることになります）。ですから、用兵の上手な人は、相手の兵士を屈服させたとしても、戦ったわけではありません。相手の城を陥落させたとしても、攻めたわけではありません。相手の国を滅亡させたとしても、長引かせたわけではありません（相手の国を潰滅させるにあたり、軍隊を長いこと戦場におらせません）。必ず無傷で勝つ方法を使って天下において争います。ですから、兵士は疲れませんし、利益は全うされま

す。以上が謀攻（謀略によって攻撃すること）の原則です（敵と戦わないで敵に完勝します。天下に勝利をおさめたときには、兵士を疲れさせて鋭気をくじかせたりしません〔をおさめ、兵士を疲れさせて刃を血でぬらしたりしません〕）。ですから、用兵の原則としては、こちらの兵力が十倍のときには敵を囲みます（兵力が十倍のときには敵を囲むとは、將軍の知恵と勇気が等しくて兵士の強弱が同じであるときのことを言っています。守り手が弱く、攻め手が強いといった場合です。私（曹操）が数倍の兵力を使って下邳を包囲し、呂布を生け捕りにした方法です）。五倍のときには敵を攻めます（5を使って1に敵対するときには、3つの部隊が通常部隊となり、2つ〔1つ〕の部隊が奇襲部隊となります）。二倍のときには敵を分けます（2を使って1に敵対するときには、1つの部隊が通常部隊となり、1つの部隊が奇襲部隊となります）。同等のときにはしっかりと敵と戦います（自分と相手の兵隊が等しいとき、上手な人はやはり奇襲や伏兵〔伏兵や奇襲〕を用意して敵に勝ちます）。少ないときにはしっかりと敵から逃げます（防壁を高くし、防塁を堅くし、戦ってはいけません）。かなわないときにはしっかりと敵を避けます（兵士をひきつけて敵を避けます）。ですから、兵力が小さいのに強硬なら、兵力の大きい相手のえじきとなるだけです（小は大に立ち向かえません）。そもそも將軍とは、国の補佐役です。補佐がゆきとどいているときには、国は必ず強くなります（將軍が緻密なら、謀略がもれません）。補佐にぬかりがあるときには、国は必ず弱くなります（ありようが外に見えます）。ですから、軍隊が君主のために悩まされる原因は3つあります。君主が進軍すべきでないことを知らないくせに進軍を命令し、退却すべきでないことを知らないくせに退却を命令することは、「軍隊を拘束する」と言います（拘束するとは、制御することです）。軍隊の活動を阻害します。②君主が軍隊の現状について知らないくせに、將軍と同じように軍隊を管理しようとするなら、兵士たちは惑います（軍隊のありようは政治に適用されず、政治のありようは軍隊に適用されず、礼儀作法は軍隊を管理することに使えません）。君主

が軍隊の戦法について知らないくせに、将軍と同じように軍隊を指揮するなら、兵士たちは疑います（ふさわしい人 [その人の心] を得ていないのです）。全軍が惑い、疑うようになったときには、諸侯からの圧力が加えられるようになります。これを「軍を乱し、勝ちを引く」と言います（引くとは、なくすことです）。ですから、勝てることを知るためには、5つのことがあります。敵と戦えるか、戦えないかを知っているほうが勝ちます。多数を用いるべきか、少数を用いるべきかを分かっているほうが勝ちます。上と下が心を一つにしているほうが勝ちます（君主と臣下が望みを同じにします）。準備をととのえ、相手がスキを見せるのを待つほうが勝ちます。将軍が有能で、君主が現場を制御しないほうが勝ちます（『司馬法』に「進退はタイミングを見計らって行うことが大切であり、私（君主）に報告しなくてよい」とあります）。以上の5つのことは、勝てることを知る方法です（上記の5つのことをさします）。ですから、「相手を知り、自分を知れば、いくら戦っても危機にみまわれることはない。相手知らなくても、自分を知っていれば、勝ったり負けたりする。相手を知らず、自分を知らなければ、戦うたびごとに必ず敗北する」と言われるのです。

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
軍形第四（<u>軍之形也。我動彼応、両敵相察情也</u>） 孫子曰。昔之善戰者、先為不可勝、以待敵之可勝。不可勝在己（<u>守固備也</u>）、可勝在敵（<u>自修治、以待敵之虚懈</u>）。故善戰者、能為不可勝、不能使敵之必可勝。故曰。勝可知（<u>見成形也</u>）、而不可為（<u>敵有備故也</u>）。不可勝者守也（<u>蔵形也</u>）。可勝者攻也（<u>敵攻己、乃可勝</u>）。守則不足、攻則有余（<u>吾所以守者、力不足。所以攻者、力有余</u>）。善守者蔵於九地之下、善攻者動於九天之上。故能自保而全勝也（<u>喻其深微</u>）。見勝不過衆人之所知、非善之善者也（<u>当見未萌</u>）。戰勝而天下曰善、非善之善者也（<u>争鋒者也</u>）。故拳秋毫不為多力、見日月不為明目、聞雷霆不為聰耳（<u>易見聞也</u>）。古之所謂善戰者、勝於易勝者也（<u>原微易勝、攻其可勝、不攻其不可勝</u>）。故善戰者之勝也、無智名、無勇功	形篇〔<u>軍之形也。我動彼応、両敵相察情也</u>〕 孫子曰。昔之善戰者、先為不可勝、以待敵之可勝。不可勝在己、可勝在敵〔<u>自修理、以待敵之虚懈也</u>〕。故善戰者、能為不可勝、不能使敵之可勝。故曰。勝可知〔<u>見成形也</u>〕、而不可為〔<u>敵有備故也</u>〕。不可勝者守也〔<u>蔵形也</u>〕。可勝者攻也〔<u>敵攻己、乃可勝</u>〕。守則不足、攻則有余〔<u>吾所以守者、力不足也。所以攻者、力有余也</u>〕。善守者蔵於九地之下、善攻者動於九天之上〔<u>因山川丘陵之固者、蔵於九地之下。因天時之变者、動於九天之上</u>〕。故能自保而全勝也。見勝不過衆人之所知、非善之善者也〔<u>当見未萌</u>〕。戰勝而天下曰善、非善之善者也〔<u>争鋒也</u>〕。故拳秋毫不為多力、見日月不為明目、聞雷霆不為聰耳〔<u>易見聞也</u>〕。古之所謂善戰者、勝於易勝者也〔<u>原微易勝、攻其可勝、不攻其不可勝也</u>〕。故善戰者之勝也、無智名、無勇功

功（敵兵形未成、勝之無赫赫之功）。故其戰勝不忒。不忒者、其所措勝、勝已敗者也（察敵必可敗、不差忒）。故善戰者、立於不敗之地、而不失敵之敗也。是故勝兵先勝而後求戰、敗兵先戰而後求勝（有謀与無慮也）。善用兵者、修道而保法。故能為勝敗之政（用兵者、先修治、為不可勝之道、保法度、不失敵之敗乱也）。兵法、一曰度、二曰量、三曰数、四曰称、五曰勝（勝敗之政、用兵之法、当以此五事称量、知敵之情）。地生度（因地形勢而度之）、度生量、量生数（知其遠近広狭、知其人数也）、数生称（称量己与敵孰愈也）、称生勝（称量之、故知其勝負所在也）。故勝兵若以鎰称銖、敗兵若以銖称鎰（輕不能挙重也）。勝者之戰、若決積水於千仞之谿者、形也（八尺曰仞。決水千仞、其勢疾也）。

〔敵兵形未成、勝之無赫赫之功也〕。故其戰勝不忒。不忒者、其所措必勝、勝已敗者也〔察敵必可敗、不差忒也〕。故善戰者、立於不敗之地、而不失敵之敗也。是故勝兵先勝而後求戰、敗兵先戰而後求勝〔有謀与無慮也〕。善用兵者、修道而保法。故能為勝敗之政〔善用兵者、先自修治、為不可勝之道、保法度、不失敵之敗乱也〕。兵法、一曰度、二曰量、三曰数、四曰称、五曰勝〔勝敗之政、用兵之法、当以此五事称量、知敵之情〕。地生度〔因地形勢而度之〕、度生量、量生数〔知其遠近広狭、知其人数也〕、数生称〔称量己与敵孰愈也〕、称生勝〔称量之数、知其勝負所在〕。故勝兵若以鎰称銖、敗兵若以銖称鎰〔輕不能挙重也〕。勝者之戰民也、若決積水於千仞之谿者、形也〔八尺曰仞。決水千仞、其高勢疾也〕。

【翻訳】

軍形第四（軍隊の態勢です。こちらが動けば、相手が応じます。両者があい対し、互いに実情を明らかにします）

孫子が言いました。昔の戦いの上手な人は、まずこちらに敵の勝てない態勢を築き、そうして敵

がこちらの勝てる状態になるのを待ちました。こちらに敵の勝てない態勢を築けるかどうかは、こちらの努力にかかっています（守って固く備えます）。敵がこちらの勝てる状態になるかどうかは、敵の出方にかかっています（みずから態勢を整え、そして敵が油断するのを待ちます）。ですから、いくら戦いの上手な人でも、こちらに敵の勝てない状態を築くことはできますが、敵をこちらの必ず勝てる状態にさせることはできません。ですから、「勝利は、知ることができる（できあがった態勢を見ます）。しかし、作ることができない」と言われるのです（敵に備えがあるからです）。勝てないときは、守ります（態勢を隠します）。勝てるときは、攻めます（敵がこちらを攻めるなら、勝てます）。守るときは、こちらの実力が足りないときです。攻めるときは、こちらの実力が余っているときです（自分が守る理由は、実力が足りないからです。攻める理由は、実力が余っているからです）。守るのがうまい人は、まるで地の下に深くもぐっているかのようになります。攻めるのがうまい人は、まるで天の上から勢いよくふってくるかのようになります〔山河、丘陵の要害に乗るのが、まるで地の下に深くもぐっているかのようにするということです。天の時の変化に乗るのが、まるで天の上から勢いよくふってくるようにするということです〕。ですから、自分を保全できて、確実に勝利できるのです（例えを使って、深遠で目立たない教えを言っています）。勝てると見こんでも、だれもが「勝てる」と分かるものにすぎないものは、最善ではありません（なんらかの徴候が出てくる前に見こむべきです）。戦い勝って、みんながこちらの戦い方を「うまい」と言ってほめるものは、最善ではありません（戦場で戦闘する場合です）。ですから、軽いものを持ちあげても、力が強いとは言えません。月や太陽を見ることができても、よく見分ける能力をもっているとは言えません。雷鳴を聞くことができても、よく聞き分ける能力をもっているとは言えません（見聞きしやすいからです）。昔のいわゆる戦いの上手な人は、勝てる敵に勝ったものです（目立たないけれど勝ちやすいところがないかを調べ、勝てそうなら攻め、勝てそうに

ないなら攻めません）。ですから、戦いの上手な人が勝っても、知者という評判もなく、勇ましい功績ありません（敵兵の態勢が整わないときに勝つので、輝かしい功績がないのです）。ですから、その人が戦って勝つのは、まちがいないのです。まちがいないのは、その人が勝てるようにするにあたり、すでに負けている敵に勝つからです（敵が必ず敗北するところを明らかにすれば、まちがいありません）。ですから、戦いの上手人は、こちらを負けない状態にして、敵が負ける状態になったところをのがしません。そういうわけで、勝てる兵隊は、まず必ず勝てる状態にしてから、敵と戦おうとします。反対に負ける兵隊は、まず戦いを始めてから、敵に勝とうとします（一方は謀略があり、他方は思慮がないのです）。用兵の上手な人は、道理を身につけて、原則を守ります。ですから、「勝利をおさめ、敵を敗北させる政策」を実施できるのです（用兵〔の上手な人〕は、まず〔みずから〕態勢を整え、敵がこちらに勝てなくするための方策を実行し、規律を保ち、敵が無秩序になって混乱しているところをのがさないようにします）。兵法に、こうあります。第一に程度をはかります。第二に物量をはかります。第三に規模をはかります。第四に優劣をはかります。第五に勝算をはかります（「勝利をおさめ、敵を敗北させる政策」や用兵の原則としては、この5つを使って計算し、敵情を知るようにすべきです）。地形から程度が割り出され（地形や地勢に応じて見当をつけます）、程度から物量が割り出され、物量から規模が割り出され（その遠さ、近さ、広さ、狭さを知り、その人数を知ります）、規模から優劣が割り出され（こちらと敵はどちらがすぐれているかを計算します）、優劣から勝算が割り出します（計算するので〔計算の結果〕、その勝敗のゆくえを知ることができます）。ですから、勝てる軍隊は、重いおもりを軽いおもりと比べるように優勢となります。負ける軍隊は、軽いおもりを重いおもりと比べるように劣勢となります（天秤ではかったとき、軽いものは、重いものを上げられません）。勝てる人が戦うときには、たっぷりとためた水を、一気に千仞の谷の底へと流すような感じになるわけですが、これが形（態

勢) というものです (8 尺が 1 仞です。水を千仞の谷の底へと流すなら、その [高い] 勢いは速くなります)。

第5篇 兵勢第五・勢篇

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
兵勢第五（用兵任勢也） 孫子曰。凡治衆如治寡、分數是也（部曲為分、什伍為數）。鬪衆如鬪寡、形名是也（旌旗曰形、金鼓曰名）。三軍之衆、可使必受敵而無敗者、奇正是也（先出合戰為正、後出為奇）。兵之所加如以礮投卵者、虛實是也（以至實、擊至虛也）。凡戰者、以正合、以奇勝（正者當敵、奇者從旁擊不備也）。故善出奇者、無窮如天地、不竭如江海。終而復始、日月是也。死而復生、四時是也。聲不過五、五聲之變、不可勝聽也。色不過五、五色之變、不可勝觀也。味不過五、五味之變、不可勝嘗也（以喻奇正之無窮也）。戰勢不過奇正、奇正之變、不可勝窮也。奇正相生、如循環之無端、孰能窮之哉。激水之疾、至於漂石者、勢也。鷲鳥之疾、至於毀折者、節也（發起擊敵也）。故善戰者、其勢險（險、疾也）、其節短（短、近也）。勢如彊	勢篇〔用兵任勢也〕 孫子曰。凡治衆如治寡、分數是也〔部曲為分、什伍為數〕。鬪衆如鬪寡、形名是也〔旌旗曰形、金鼓曰名〕。三軍之衆、可使必受敵而無敗者、奇正是也〔先出合戰為正、後出為奇〕。兵之所加如以礮投卵者、虛實是也〔以至實、擊至虛〕。凡戰者、以正合、以奇勝〔正者當敵、奇者從旁擊不備也〕。故善出奇者、無窮如天地、不竭如江河。終而復始、日月是也。死而復生、四時是也。聲不過五、五聲之變、不可勝聽也。色不過五、五色之變、不可勝觀也。味不過五、五味之變、不可勝嘗也〔自無窮如天地已下。以喻奇正之無窮也〕。戰勢不過奇正、奇正之變、不可勝窮也。奇正相生、如循環之無端、孰能窮之。激水之疾、至於漂石者、勢也。鷲鳥之疾、至於毀折者、節也〔發起擊敵〕。是故善戰者、其勢險〔險、猶疾也〕、其節短〔短、近

弩、節如発機（在度不遠、発則中也）。紛紛紜紜鬪乱、而不可乱也（乱旌旗以示敵、以金鼓齊之也）。渾渾沌沌形円、而不可敗也（卒騎転也、形円者、出入有道、齊整也）。乱生於治、怯生於勇、弱生於強（皆毀形匿情也）。治乱、数也（以部曲分名数为之、故不可乱也）。勇怯、勢也。強弱、形也（形勢所宜）。故善動敵者、形之敵必從之（見羸形也）、予之敵必取之（以利誘敵、敵遠離其壘、而以便勢擊其空虚孤特也）。以利動之、以本待之（以利動敵也）。故善戰者、求之於勢、不責於人。故能招人而任勢（專任權也）。任勢者、其戰人也、如転木石。木石之性、安則静、危則動、方則止、円則行（任自然勢也）。故善戦人之勢、如転円石於千仞之山者、勢也。

也】。勢如彊弩、節如発機〔在度不遠、発則中也〕。紛紛紜紜鬪乱、而不可乱也。渾渾沌沌形円、而不可敗也〔旌旗乱也、示敵若乱、以金鼓齊之。卒騎転也、形円者、出入有道、齊整也〕。乱生於治、怯生於勇、弱生於強〔皆毀形匿情也〕。治乱、数也〔以部曲分名数为之、故不乱也〕。勇怯、勢也。強弱、形也〔形勢所宜〕。故善動敵者、形之敵必從之〔見羸形也〕、予之敵必取之〔以利誘敵、敵遠離其壘、而以便勢擊其空虚孤特也〕。以利動之、以卒待之〔以利動敵也〕。故善戰者、求之於勢、不責於人。故能招人而任勢〔求之於勢者、專任權也。不責於人者權変明也〕。任勢者、其戦人也、如転木石。木石之性、安則静、危則動、方則止、円則行〔任自然勢也〕。故善戦人之勢、如転円石於千仞之山者、勢也。

【翻訳】

兵勢第五（用兵は勢いに任せます）

孫子が言いました。大軍を管理するにあたり、あたかも少数のようにスムーズに管理できるのは、分数によるものです（部曲（部隊編成の大きな単位）が分となり、什伍（部隊編成の小さな単位）が数となります）。大軍を戦わせるにあたり、あたかも少数のようにスムーズに戦わせられるのは、

形名によるものです（旗と小旗（視覚的に信号を出す手段）は形と言ひ、鐘と太鼓（聴覚的に信号を出す手段）は名と言ひます）。全軍の兵隊が敵の攻撃を受けても絶対に負けないようにさせられるのは、奇正によるものです（先に出て合戦するものが正となり、後に出るものが奇となります）。攻撃をしかけたとき、あたかも卵に石を投げつけて割るように容易に勝てるのは、虚実によるものです（最高に充実した力を使い、最高に虚弱なところを攻撃します）。およそ戦いにおいては、正によってぶつかり、奇によって勝つものです（正とは、まともに敵に当たるものです。奇とは、横から敵が備えていないところを攻撃するものです）。ですから、うまく奇策を使いこなせる人は、天地のようにきわまりがありません。大河や大海のようにつぎることがありません。終わってもまた始まるのは、まさに昼夜のくりかえしと同じです。死んでもまた生まれるのは、まさに四季のうつりかわりと同じです。音はもともと五音（宮・商・角・徴・羽）にすぎませんが、それらを組み合わせることによって無限の音を出せます。色はもともと五色（青・赤・黄・白・黒）にすぎませんが、それらを組み合わせることによって無限の色を出せます。味はもともと五味（辛・酸・鹹・苦・甘）にすぎませんが、それらを組み合わせることによって無限の味を出せます〔「天地のようにきわまりがありません」のところより下は〕（例えを使って、奇正が無限であることを言っているのです）。戦いの勢いは、奇正にすぎません。奇正のもたらす変化は、どうにもきわめつくせないものです。奇正は互いに生みあうわけですが、それは輪のようにつながっていて、尽きるところがありません。これをきわめられた人は、はたしてだれかいたでしょうか。激流がどっと流れ、岩石を押し流してしまうのは、勢いです。ワシやタカなどがさっと動き、あっけなく小鳥を打ち殺してしまうのは、節です（行動を起こし、敵を攻撃します）。ですから、戦いの上手な人は、その勢いは陰しく（陰しいとは、速いことです）、その節は短いのです（短いとは、間髪をいれないことです）。勢いは、弓を引きしぼるようなものです。節は、矢を放つようなものです（計算して遠く

ないなら、発射したときには命中します）。ごちゃごちゃと乱闘になっても、軍隊が乱れません

（旗やと小旗を乱して敵に見せ 〔旗や小旗が乱れているのは、敵に乱れているように見せかけているのであり〕、鐘と太鼓を使って隊列を整えます）。ぐちゃぐちゃと円形になっても、敵に敗れません（兵士と騎兵が方向転換する場合です。円形になるとは、出入りが道理にかなない、整然として

いることです）。本当は治まっているけれど、乱れているように見せかけます。本当は勇ましいけれど、怯えているように見せかけます。本当は強いけれど、弱いように見せかけます（いづれもありようをくずして、実情を隠すことです）。治まったり、乱れたり、分数にかかっています（部隊ごとに名簿を分けてつくるので、乱すことができないのです 〔乱れないのです〕）。勇ましかったり、怯えたりは、兵勢にかかっています（形勢からそうなります）。ですから、敵を上手に動かせる人は、陽動すれば、敵がそれにひっかかります（ありようを弱そうに見せます）、エサを与えれば、敵がそれに食いついてきます（利益を使って敵を誘い、敵が陣地を遠く離れたら、こちらに好都合な情勢に乗じて、敵が油断して単独になっているところを攻撃します）。利益によって敵を思いどおりに動かし、こちらは主力を配置して敵を待ち伏せます（利益を使って敵を動かします）。ですから、戦いのうまい人は、勢いを頼りにし、個人の活躍には期待しません。ですから、各人にふさわしい役割を与え、うまく勢いに乗せることができます 〔勢いを頼りするとは〕（もっぱら臨時の方法に任せるということです） 〔個人の活躍に期待しないとは、臨機応変の方法が分かっているということです〕。勢いに乗せることのできる人は、人を戦わせるにあたり、丸太や丸石をころがすようにします。木や石のもともとの性質として、平地に置けば動きませんが、急坂に置けばおのずと動きます。四角ければ動きませんが、丸ければおのずと動きます（自然の勢いに任せます）。ですから、うまく人を戦わせる勢いは、千仞の山の上から丸石をころがしたときに生じる勢いと同じようなもの（おのずと生じるもの）であり、それがここで言う勢いです。

第6篇 虚実第六・虚実篇

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
虚実第六 <u>（能虚実彼己也）</u> 孫子曰。凡先処戦地而待敵者佚 <u>（力有余也）</u>、後処戦地而趨戦者勞。故善戦者、致人而不致於人。能使敵人自至者、利之也 <u>（誘之以利）</u>。能使敵人不得至者、害之也 <u>（出其所必趨、攻其所必救）</u>。故敵佚能勞之 <u>（以事煩之）</u>、飽能飢之 <u>（絶其糧道）</u>、安能動之 <u>（攻其所愛、出其必趨、使敵不得不救也）</u>。出其所不趨、趨其所不意。行千里而不勞者、行於無人之地也 <u>（出空擊虚、擊其不意）</u>。攻而必取者、攻其所不守也。守而必固者、守其所不攻也。故善攻者、敵不知其所守。善守者、敵不知其所攻 <u>（情不泄也）</u>。微乎微乎、至於無形。神乎神乎、至於無声。故能為敵之司命。進而不可禦者、衝其虚也。退而不可追者、速而不可及也 <u>（卒往進攻其虚懈、退又疾也）</u>。故我欲戦、敵雖高壘深溝、不得不与我戦者、攻其所必救也	虚実篇 <u>〔能虚実彼己也〕</u> 孫子曰。凡先処戦地而待敵者佚 <u>〔力有余也〕</u>、後処戦地而趨戦者勞。故善戦者、致人而不致於人。能使敵人自至者、利之也 <u>〔誘之以利也〕</u>。能使敵人不得至者、害之也 <u>〔出其所必趨、攻其所必救〕</u>。故敵佚能勞之 <u>〔以事煩之〕</u>、飽能饑之 <u>〔絶其糧道以饑之〕</u>、安能動之 <u>〔攻其所必愛、出其所必趨、則使敵不得不救也〕</u>。出其所不趨、趨其所不意 <u>〔使敵不得相往而救之也〕</u>。行千里而不勞者、行於無人之地也 <u>〔出空擊虚、避其所守、擊其不意〕</u>。攻而必取者、攻其所不守也。守而必固者、守其所不攻也。故善攻者、敵不知其所守。善守者、敵不知其所攻 <u>〔情不泄也〕</u>。微乎微乎、至於無形。神乎神乎、至於無声。故能為敵之司命。進而不可禦者、衝其虚也。退而不可追者、速而不可及也 <u>〔卒往進攻其虚懈、退又疾也〕</u>。故我欲戦、敵

（絕糧道、守歸路、而攻其君主也）。我不欲戰、雖画地而守之（軍不欲煩）、敵不得与我戰者、乖其所之也（乖、戾也。戾其道、示以利害、使敵疑也）。故形人而我無形、則我專而敵分。我專為一、敵分為十、是以十攻其一也、則我衆敵寡。能以衆擊寡、則吾之所与戰者約矣。吾所与戰之地不可知。不可知則敵所備者多。敵所備者多則吾所与戰者寡矣。故備前則後寡、備後則前寡、備左則右寡、備右則左寡、無所不備則無所不寡。寡者、備人者也。衆者、使人備己者也（形藏敵疑、則分離其衆、以備我也）。故知戰之地、知戰之日、則可千里而会戰（以度量知空虚会戰之日）。不知戰地、不知戰日、則左不能救右、右不能救左、前不能救後、後不能救前、而況遠者数十里、近者数里乎。以吾[吳]度之、越人之兵雖多亦奚益於勝哉（吳越讎国也）。故曰。勝可為也。敵雖衆、可使無鬪。故策之而知得失之計、作之而知動靜之理、形之而知死生之地、角之而知有余不足之处（角、量也）。故形兵之極、至於無形。無形則深間不能

雖高壘深溝、不得不与我戰者、攻其所必救也〔絕其糧道、守其歸路、攻其君主也〕。我不欲戰、画地而守之〔軍不欲煩也〕、敵不得与我戰者、乖其所之也〔乖、戾也。戾其道、示以利害、使敵疑也〕。故形人而我無形、則我專而敵分。我專為一、敵分為十、是以十攻其一也、則我衆而敵寡。能以衆擊寡者、則吾之所与戰者、約矣。吾所与戰之地不可知。不可知則敵所備者多。敵所備者多則吾所与戰者寡矣〔形藏敵疑、則分離其衆備我也。言少而易擊也〕。故備前則後寡、備後則前寡、備左則右寡、備右則左寡、無所不備則無所不寡。寡者、備人者也。衆者、使人備己者也。故知戰之地、知戰之日、則可千里而会戰〔以度量知空虚会戰之日〕。不知戰地、不知戰日、則左不能救右、右不能救左、前不能救後、後不能救前、而況遠者数十里、近者数里乎。以吾度之、越人之兵雖多亦奚益於勝敗哉〔越人相聚紛然無知也。或曰。吳越讎国也〕。故曰。勝可為也。敵雖衆、可使無鬪。故策之而知得失之計、作之而知動靜之理、形之而

窺、智者不能謀。因形而措勝於衆、衆[之]不能知（因敵形而立勝）。人皆知我所以勝之形、而莫知吾所以制勝之形（不以一形勝万形。故制勝者、人皆知吾所以勝、莫知吾因敵形而制勝也）。故其戰勝不復、而応形於無窮（不重複、動而応之也）。夫兵形象水、水之形避高而趨下、兵之形避実而撃虚、水因地而制流、兵因敵而制勝。故兵無常勢、水無常形、能因敵变化而取勝者、謂之神（勢盛必衰、形露必敗、故能因敵变化、取勝若神）。故五行無常勝、四時無常位、日有短長、月有死生（兵無常勢、盈縮隨敵）。

知死生之地、角之而知有余不足之处[角、量也]。故形兵之極、至於無形。無形則深間不能窺、智者不能謀。因形而錯勝於衆、衆不能知[因敵形而立勝]。人皆知我所以勝之形、而莫知吾所以制勝之形[不以一形之勝万形。或曰。不備知也。制勝者、人皆知吾所以勝、莫知吾因敵形制勝也]。故其戰勝不復、而応形於無窮[不重複、動而応之也]。夫兵形象水、水之形避高而趨下、兵之形避実而撃虚、水因地而制流、兵因敵而制勝。故兵無常勢、水無常形、能因敵变化而取勝者、謂之神[勢盛必衰、形露必敗、故能因敵变化、取勝若神]。故五行無常勝、四時無常位、日有短長、月有死生[兵無常勢、盈縮隨敵]。

【翻訳】

虚実第六（自他に対して虚実を使いこなすことです）

孫子が言いました。先に戦場に着いて敵を待ちうけるほうは、楽です（力に余裕があります）、後から戦場に着いて急いで戦うほうは、疲れます。ですから、戦いの上手な人は、相手をコントロールしても、相手にコントロールされません。敵のほうからやってくるようにさせられるのは、敵を利するからです（敵を誘うのに利益を使います）。敵がやってこれないようにさせられるのは、敵を害するからです（敵の必ず駆けつけるところに出て、敵の必ず救うところを攻めます）。です

から、敵が楽なら疲れさせられ（仕事をさせてわずらわせます）、敵が満腹なら飢えさせられ（敵の糧道を絶ちます）〔そして敵を飢えさせます〕、敵が安らいでいるなら動かします（敵の大事なところ〔必ず大事にするところ〕を攻め、敵の必ず駆けつけるところに出て、〔つまり〕敵を救いに行くしかなくさせます）。敵の向かっていないところに出向き、敵の思いもよらないところに向かいます〔敵が互いに往来して救援しあえないようにさせます〕。千里の遠くまで行っても疲れないのは、だれもいないところを進むからです（敵のいないところに出て、〔敵の守っているところを避け〕敵の思いもよらないところを攻撃します）。攻めて必ず勝てるのは、敵が守っていないところを攻めるからです。守って必ず負けないのは、敵が攻めてこないところを守るからです。ですから、攻めるのが上手な人は、敵がどこを守ればいいのかわからなくさせます。守るのが上手な人は、敵がどこを攻めればいいのかわからなくさせます（実情は、もらしません）。あまりにも微妙でこちらの動向は敵に見えません。あまりにも神妙でこちらの情報は敵に聞こえません。ですから、敵の命運を左右することができます。こちらが進軍したとき、それを敵が防ぎきれないのは、こちらが敵の弱いところをつくからです。こちらが退却したとき、それを敵が追撃しきれないのは、こちらがすばやくて追いつけないからです（兵卒が行進し、敵の油断しているところを攻撃し、退くときもすばやくします）。ですから、こちらが戦いたいと思えば、いくら敵が壘を高くし、堀を深くしても、こちらと戦わざるをえなくなるのは、こちらが敵の必ず救うところを攻めるからです（糧道を絶ち、帰路を守り、かくして敵の君主を攻めます）。こちらが戦いたくないと思えば、地面に線を引いた程度で守って（大した守りをしていなくて）も〔軍隊は煩わしさを望みません〕、敵をこちらと戦えなくさせられるのは、（偽装や陽動などによって）敵の向かう先をまちがわせるからです（まちがわせるとは、食い違わせることです。その道を食い違わせ、利害を示し、敵を疑わせます）。ですから、敵情をあらわにして、こちらは実情を隠すようにすれば、こちらは集中で

きて、敵は分散します。こちらが集中して一つとなり、敵が分散して十になるということは、こちららは10の兵力を使って1の敵を攻撃するということです。そのときには、こちらは多くて敵は少なくなります。多数を使って少数を攻撃できれば、こちらが戦う相手は小さく縮まります。こちらが相手と戦う場所は知られてはいけません。知られなければ、敵の備えないといけないところが多くなります。敵の備えないといけないところが多くなれば、こちらが戦う相手は少数になります

〔ありようが隠され、敵が疑えば、その兵隊を分散させ、そうしてこちらに備えます。少なくて攻撃しやすいことを言っています〕。ですから、その前方を防備すれば、後方が必ず少数となります。その後方を防備すれば、前方が少数となります。その左を防備すれば、右が必ず少数となります。その右を防備すれば、左が少数となります。防備しないところがないようにすれば、どこもかしこも少数となります。少数になるのは、相手に備えるからです。多数になるのは、相手を自分に備えさせるからです（ありようが隠され、敵が疑えば、その兵隊を分散させ、そうしてこちらに備えます）。ですから、どこで戦うのかをわかり、いつ戦うのかをわかれば、千里の先でも敵と戦うことができます（計算によって、敵のいないところ、戦うことになる日を知ります）。どこで戦うのかをわからず、いつ戦うのかをわからなければ、左の部隊は右の部隊を救えませんし、右の部隊は左の部隊を救えませんし、前方の部隊は後方の部隊を救えませんし、後方の部隊は前方の部隊を救えません。ましてや遠いところでは数十里のところにいる友軍、近いところでは数里のところにいる友軍を救えるはずがありません。私（孫子） 〔呉国〕の立場から見当をつけますに、我が宿敵である越国の兵は、多いと言っても、どうして勝つために役立つでしょうか〔越国の人民は、烏合の衆であり、無知です。ある人は、こう言っています〕（呉国と越国は互いに憎みあっている国です）。

ですから、「勝利は作ることができる。敵が多数であっても、敵を戦闘させないようにできる」と言われるのです。ですから、分析して、どうすれば敵が成功し、どうすれば敵が失敗するのか、そ

の仕組みを知ります。挑発して、どのように行動し、どのように静止するのか、そのパターンを知ります。陽動して、どこが危険であり、どこが安全であるのか、その地の利を知ります。比較して、どこに余裕があり、どこに不足があるのか、その状況を知ります（比較するとは、はかることです）。ですから、軍隊のありようとして最高なのは、一定のかたちをとらないようにすることです。一定のかたちをとらなければ、スパイは窺い知ることができません。知者は謀り知ることができません。ありように応じて兵隊に勝利をもたらすわけですが、兵隊【これ】はそれを知ることができません（敵のありように応じて勝利をおさめます）。人びとは「どういったかたちで勝ったのか」について知ることはできますが、「どのようなかたちで勝てるようになったのか」について知ることはできません（一つのパターンを使ってあらゆるパターンに勝とうとするわけではありません）

【ある人は「つぶさに知らないのです」と言っています】（ですから、勝利をつかんだなら、他人はだれもがこちらの勝ち方を知っても、こちらが敵のありように応じて勝利をつかんだということを知らないのです）。ですから、このときの戦い方と勝ち方は二度と使えなくて、ありように応じて無数に変化します（繰り返さず、動いて状況に応じます）。そもそも兵隊のありようは、水のようなものです。水のありようとしては、高いところへは向かわず、低いところへと向かいます。軍隊のありようとしては、敵の力の充実したところへは向かわず、敵の力の虚弱なところへと向かいます。水は地形に応じてかたちを変えることによって流れを決めます。軍隊は敵の状態に応じてかたちを変えることによって勝ちを決めます。ですから、軍隊には一定の勢いがなく、水には一定のかたちがないのです。敵の変化に応じて勝利を取得することができるわけですが、こういったことができるのを「神妙」と言います（勢いが盛んなら、必ず衰えます。ありようがあらわなら、必ず敗れます。ですから、敵の変化に応じて、神様のように勝利を取得します）。ですから、五行もつねに勝つということがありません。四季もつねに変わらないということがありません。太陽の出て

いる時間にも長短があります。月の大きさにも満ち欠けがあります（軍事は一定の勢いをもたず、敵に応じて伸びたり縮んだりします）。

第7篇 軍争第七・軍争篇

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
軍争第七 <u>（兩軍争勝）</u> 孫子曰。凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆（聚國人、結行伍、選部曲、起營陳也）、交和而舍（<u>軍門為和門、左右為旗門、以車為營曰轅門、以人為營曰人門、兩軍相對為交和</u>）、莫難於軍争（從始受命、至於交和、軍争為難也）。軍争之難者、以迂為直、以患為利（<u>示以遠、邇其道里、先敵至也</u>）。故迂其途（<u>迂其途者、示之遠也</u>）、而誘之以利、後人發、先人至（<u>明於度数、先知遠近之計</u>）、此知迂直之計者也。軍争為利、衆争為危（<u>善者則以利、不善者則以危</u>）。舉軍而争利則不及（<u>遲、不及也</u>）。委軍而争利則輜重捐（<u>置輜重、則恐捐棄也</u>）。是故卷甲而趨、日夜不處（<u>不得休息</u>）、倍道兼行、百里而争利、則擒三將軍（<u>百里争利、非也、三將軍皆以為擒</u>）、勁者先、疲者後、其法十一而至。五十里而争利、則蹶上將軍、其法半至	軍争篇 <u>〔兩軍争勝〕</u> 孫子曰。凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆〔聚國人、結行伍、選部曲、起營為軍陳也〕、交和而舍〔<u>軍門為和門、左右為旗門、以車為營曰轅門、以人為營曰人門、兩軍相對為交和</u>〕、莫難於軍争〔從始受命、至於交和、軍争難也〕。軍争之難者、以迂為直、以患為利〔<u>示以遠、速其道里、先敵至也</u>〕。故迂其途、而誘之以利、後人發、先人至、此知迂直之計者也〔<u>迂其途者、示之遠也。後人發、先人至者、明於度数、先知遠近之計也</u>〕。故軍争為利、軍争為危〔<u>善者則以利、不善者則以危</u>〕。舉軍而争利則不及〔<u>遲、不及也</u>〕。委軍而争利則輜重捐〔<u>置輜重、則恐捐棄也</u>〕。是故卷甲而趨、日夜不處〔<u>不得休息罷也</u>〕、倍道兼行、百里而争利、則擒三將軍〔<u>百里而争利、非也、三將軍皆以為擒</u>〕、勁者先、疲者後、其法十一而至。五十里

（蹶、猶挫也）。三十里而爭利、則三分之二至
（道近而至者多、故無死敗）。是故軍無輜重則
亡、無糧食則亡、無委積則亡 （無此三者、亡之
道也）。故不知諸侯之謀者不能豫交 （不知敵情
者、不能結交）、不知山林險阻沮洳之形者不能
行軍 （高而崇者為山、衆樹聚者為林、坑塹者為
險、一高一下者為阻、水草漸洳者為沮、衆水所
歸而不流者為洳）、不用鄉導者不能得地利。故
兵以詐立、以利動、以分合為變者也 （兵一分一
合、以敵為變）。故其疾如風 （擊空虛也）、其
徐如林 （不見利也）、侵掠如火 （疾也）、不動
如山 （守也）、難知如陰、動如雷震。掠鄉分衆
（因敵制勝）、廓地分利 （廣地以分敵利）、懸
權而動 （量敵而動）、先知迂直之計者勝、此軍
爭之法也。軍政曰。言不相聞、故為之金鼓、視
不相見、故為之旌旗。夫金鼓旌旗者、所以一人
之耳目也。人既專一則勇者不得獨進、怯者不得
獨退、此用衆之法也。故夜戰多火鼓、昼戰多旌
旗、所以變人之耳目也。三軍可奪氣、將軍可奪
心。是故朝氣銳、昼氣惰、暮氣歸。善用兵者、

而爭利、則蹶上將軍、其法半至 〔蹶、猶挫
也〕。三十里而爭利、則三分之二至 〔道近至者
多、故無死敗也〕。是故軍無輜重則亡、無糧食
則亡、無委積則亡 〔無此三者、亡之道也〕。故
不知諸侯之謀者不能豫交 〔不知敵情謀者、不能
結交也〕、不知山林險阻沮洳之形者不能行軍
〔高而崇者為山、衆樹所聚者為林、坑塹者為
險、一高一下者為阻、水草漸洳者為沮、衆水所
歸而不流者為洳。不先知軍之所撓及山川之形
者、則不能行師〕、不用鄉導者不能得地利。故
兵以詐立、以利動、以分合為變者也 〔兵一分一
合、以敵為變也〕。故其疾如風 〔擊空虛也〕、
其徐如林 〔不見利也〕、侵掠如火 〔疾也〕、不
動如山 〔守也〕、難知如陰、動如雷震。掠鄉分
衆 〔因敵而制勝也〕、廓地分守 〔分敵利也〕、
懸權而動 〔量敵而動也〕、先知迂直之計者勝、
此軍爭之法也。軍政曰。言不相聞、故為金鼓、
視不相見、故為旌旗。夫金鼓旌旗者、所以一人
之耳目也。人既專一則勇者不得獨進、怯者不得
獨退、此用衆之法也。故夜戰多火鼓、昼戰多旌

避其鋭気、撃其惰帰、此治気者也。以治待乱、以静待譁、此治心者也。以近待遠、以佚待勞、以飽待飢、此治力者也。無邀正正之旗、勿擊堂堂之陣、此治変者也（正正者、整齐也。堂堂者、大也）。故用兵之法、高陵勿向、背丘勿逆、佯北勿従、鋭卒勿攻、餌兵勿食、帰師勿遏、圉師必闕（<u>司馬法曰、圉其三面、闕其一面。所以示生路也</u>）、窮寇勿迫、此用兵之法也。	旗、所以変人之耳目也。故三軍可奪気〔左氏言一鼓作気、再而衰三而竭〕、將軍可奪心。是故朝気鋭、昼気惰、暮気帰。故善用兵者、避其鋭気、撃其惰帰、此治気者也。以治待乱、以静待譁、此治心者也。以近待遠、以佚待勞、以飽待飢、此治力者也。無邀正正之旗、勿擊堂堂之陣、此治変者也〔正正、整齐也。堂堂、大也〕。故用兵之法、高陵勿向、背丘勿逆、佯北勿従、鋭卒勿攻、餌兵勿食、帰師勿遏、圉師必闕〔<u>司馬法曰、圉其三面、闕其一面。所以示生路也</u>〕、窮寇勿迫、此用兵之法也。
--	---

【翻訳】

軍争第七（両軍が勝利を争います）

孫子が言いました。用兵の原則としては、將軍が君主より命令を受け、軍隊を編成し、兵隊を招集し（**国民を集め、編成を組み、部隊を選び、陣地を築きます**〔**兵營を立ち上げて陣地をつくりま**す〕）、交和して布陣します（**軍門が和門となり、左右が旗門となり、戦車を使って陣地を作ること**は轅門と言い、**人を使って陣地を作ること**を人門と言い、**両軍が対峙していることが交和となります**）、このとき優位に立つための争いほど難しいことはありません（**最初に命令を受けてから、敵と対峙するに至るまで、軍争が難しいものとなります**）。優位に立つための争いが難しいのは、遠回りを近道とし、わずらいを有利とする点です（**遠ざかっているように見せ、その道のりを**近く**し**〔**急ぎ**〕、**敵に先んじて到着します**）。ですから、わざと遠回りして（**その道を遠回りにするの**

は、敵に遠ざかっているように見せるためです）、利益で敵を誘導し、敵より遅れて出発し、敵より先に到着するようにします（数字を明らかにし、遠近の計算を先に知っているのです）。これが「迂直の計」を知っているということです〔その道を遠回りにするのは、敵に遠ざかっているように見せるためです。敵より遅れて出発し、敵より先に到着する人は、数字を明らかにし、遠近の計算を先に知っています〕。優位に立つために争うことは利益となりますが、みんながこぞって争うことは危険となります（上手な人はと言うと、利益になるほうを使います。上手でない人はと言うと、危険になるほうを使います）。全軍をあげて優位に立とうとして争えば、及びません（遅れることが、及ばないということです）。全軍のことを考えないで優位に立とうとして争えば、補給部隊が置き去りになります（補給部隊を置き去りにするときには、放棄される恐れがあります）。そういうわけで、重たい装備をしまいこんで、昼も夜も落ち着かず（休息できません〔できず、疲れます〕）、ふだんよりも数倍のスピードで先を急ぎ、百里も離れたところで優位に立とうとして争うときには、（敗北して）全軍の将軍を捕虜にされてしまいます（百里の距離のところで優位に立とうとして争うのは、ダメです。全軍の将軍がすべて捕虜にされます）。強い者は先に着けますが、疲れた者は遅れます。そのやり方では、着いて来られるのは全軍の十分の一です。もし同じようにして五十里ほど離れたところで優位に立とうとして争うなら、主将をつまづかせます。そのやり方では、着いて来られるのは全軍の半分だけです（つまづかせるとは、ちょうどくじかせるようなものです）。もし同じようにして三十里ほど離れたところで優位に立とうとしてして争うなら、着いて来られるのは全軍の三分の二だけです（道のりが近ければ、到達できる人は多くなります。ですから、戦死や敗北がなくなります）。そういうわけで、軍隊に補給がないときには壊滅します。軍隊に食料がないときには壊滅します。軍隊に物資がないときには壊滅します（この3つは、滅びの道です）。ですから、諸国の腹の内を知らない人は、事前に親交をとりむすべません（敵の実情

〔と計画〕を知らない人は、親交をとりおすべません）、山林、陰阻、沮沢といった地形を知らない人は、軍を進められません（高くてそびえているものが山となります。たくさん木が集まっているものが林となります。穴や溝があるものが険となります。高くなったり、低くなったりするのが阻となります。水草があり、湿気があるものが沮となります。たくさん水が流れてきて、流れていかないものが沢となります）〔軍隊の陣取っているところと山と川の地形を先に知らないなら、軍隊を動かさません〕。現地の地理に詳しいガイドを使わない人は、地の利を得られません。ですから、軍事は、うまく相手をだますことによって成り立つものです。こちらが有利だと判断することによって行動するものです。分散したり、集合したりすることによって戦い方に無限の変化を出すものです（兵士は分散したり、集合したりし、そうして敵に応じて変化します）。ですから、その速さは風のようにあり（敵のいないところを攻撃するのです）、そのゆるやかさは話のようであり（有利ではないのです）、侵攻するときは火のようであり（速いのです）、動かないときは山のようであり（守るのです）、知りがたさは影のようであり、動きは雷のようです。集落を略奪するときは兵隊を分け（敵に応じて勝利をおさめます）、土地を占領したときは利益を分け（占領地を広げて戦利品を分けあいます）、はかりにかけて動き（敵情を計算して動きます）、迂直の計を先に知っている人が勝ちます。以上が優位に立つために争う方法です。『軍政』に「言っても互いに聞こえない。だから、鐘や太鼓をつくる。見せても互いに見えない。だから、旗や手旗をつくる」とあります。そもそも鐘・太鼓・旗・手旗の4つは、全員の耳目を一つにする方法です。全員の耳目が一つになれば、勇敢な者が勝手に戦いをしかけるということもなくなりますし、臆病な者が勝手に逃げ帰るということもなくなります。以上が兵隊を使う方法です。ですから、夜に戦うときには火や太鼓を多くし、昼に戦うときには旗や手旗を多くするのは、敵の耳目を惑わす方法です。敵軍は気を奪えますし〔『春秋左氏伝』に「士気をふるわすために太鼓を打ち鳴らすとき、1回目の

太鼓で士気が高まり、2回目の太鼓で士気が弱まり、3回目の太鼓で士気がなくなります」とあります]、敵将は心を奪えます。そういうわけで、朝の気力は盛んで、昼の気力は弱く、夕方の気力はつきています。用兵の上手な人は、敵の気力が盛んなときを避け、敵の気力が弱ったときに攻撃します。これが「気を治める」ということです。治まった状態にして敵が乱れるのを待ちうけ、落ち着いた状態にして敵がさわがしくなるのを待ちうけます。これが「心を治める」ということです。戦場の近くにいて敵が遠くからやってくるのを待ちうけ、元気たっぷりの状態にして敵が疲れるのを待ちうけ、満足な量の食事をとって敵が飢えるのを待ちうけます。これが「力を治める」ということです。隊列に正々とした軍隊を迎え撃ってはいけませんし、布陣が堂々とした軍隊に攻めかかってはいけません。これが「変を治める」ということです（正々としたとは、整然としていることです。堂々としたとは、大きいことです）。ですから、用兵の原則としては、高いところの敵は向かってはならず、丘を背にしている敵は迎えてはならず、わざと逃げる敵は追いかけてはならず、精鋭は攻めてはならず、おとりは食いついてはならず、退却している敵は近づきすぎてはならず、包囲された敵軍は逃げ道をあけてやり（『司馬法』に「三方を囲み、一方をあけます。逃げ道を示すだけです」とあります）、追いつめられた敵はさらに追いつめてはいけません。これが用兵の原則です。

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
九变第八（变其正、得其所用有九） 孫子曰。凡用兵之法、将受命於君、合軍聚衆、圯地無舍（無所依也。水毀曰圯）、衢地合交（結諸侯也。衢地、四通之地）、絕地無留（無久止也）、圉地則謀（發奇謀也）、死地則戰（殊死戰也）。途有所不由（險難之地、所不當從）、軍有所不擊（軍雖可擊、以地險難留之、失前利、若得之、則利薄。困窮之兵、必死戰也）、城有所不攻（城小而固、糧饒、不可攻。操所以置華費而深入徐州、得十四鼎也）、地有所不爭、君命有所不受。故将通於九变之利者、知用兵矣。将不通九变之利、雖知地形、不能得地之利矣。治兵不知九变之術、雖知五利、不能得人之用矣（謂下五事）。是故智者之慮、必雜於利害（在利思害、在害思利也）。雜於利而務可信也。雜於害而患可解也。是故屈諸侯者以害（害其所惡也）、役諸侯者以業（業、事	九变篇〔变其正、得其所用有九也〕 孫子曰。凡用兵之法、将受命於君、合軍聚衆、圯地無舍〔無所依也。水毀曰圯〕、衢地交合〔結諸侯也〕、絕地無留〔無久止也〕、圉地則謀〔發奇謀也〕、死地則戰〔殊死戰也〕。塗有所不由〔險難之地、所不當從。不得已從之、故為变〕、軍有所不擊〔軍雖可擊、以地險難久留之、失前利、若得之、則利薄。困窮之兵、必死戰也〕、城有所不攻〔城小而固、糧饒、不可攻也。操所以置華費而深入徐州、得十四鼎也〕、地有所不爭〔小利之地方爭得而失之則不爭也〕、君命有所不受〔苟便於事、不拘於君命也〕。故将通於九变之地利者、知用兵矣。将不通於九变之利者、雖知地形、不能得地之利矣。治兵不知九变之術、雖知五利、不能得人之用矣〔謂下五事也。九变一云五变〕。是故智者之慮、必雜於利害〔在利思害、在害思利。当難行

也。使其煩勞、若彼入我出、彼出我入也）、趨諸侯者以利（令自来也）。故用兵之法、無恃其不来、恃吾有以待之、無恃其不攻、恃吾有所不可攻也。故將有五危、必死可殺（勇無慮也）、必生可虜（見利畏怯不進）、忿速可侮（忿疾急之人、可怒侮而致之）、廉潔可辱（廉潔之人、可汗辱而致之）、愛民可煩（出其所必趨、愛民者、必倍道兼行以救之、則煩勞也）。凡此五者、將之過也。用兵之災也。覆軍殺將、必以五危、不可不察也。

權也〕。雜於利而務可信也〔計敵不能依五地為我害、所務可信也〕。雜於害而患可解也〔既參於利、則亦計於害、雖有患可解也〕。是故屈諸侯者以害〔害其所惡也〕、役諸侯者以業〔業、事也。使其煩勞、若彼入我出、彼出我入也〕、趨諸侯者以利〔令自来也〕。故用兵之法、無恃其不来、恃吾有以待也。無恃其不攻、恃吾有所不可攻也〔安不忘危、常設備也〕。故將有五危、必死可殺也〔勇無慮也。必欲死闘、不可曲撓、可以奇伏中之〕。必生可虜也〔見利畏怯不進也〕。忿速可侮也〔疾急之人、可忿怒侮而致之也〕。廉潔可辱也〔廉潔之人、可汗辱致之也〕。愛民可煩也〔出其所必趨、愛民者、則必倍道兼行以救之、則煩勞也〕。凡此五者、將之過也。用兵之災也。覆軍殺將、必以五危、不可不察也。

【翻訳】

九変第八（通常のやり方を変えることでうまくいくようになるというものが、9つあります）

孫子が言いました。およそ用兵の原則としては、将軍が君主より命令を受け、軍隊を編成し、兵隊を招集し、対峙して布陣します。①圯地では野営してはならず（よるべきがありません。ぬかるんでいるのを圯と言います）、②衢地では親交を結び（諸侯と結びます。衢地は、四方が各国に通じ

ている土地です）、③絶地では駐留してはならず（長いこと止まってははいけません）、④圯地では謀り（奇策を出します）、⑤死地では戦います（いつもにも増して必死に戦います）。⑥道路には使わないほうがよいものがあり（狭くて困難な土地は、通らないほうがよいところです）〔やむをえず通るなら、わざといつもと違うことをします〕、⑦敵軍には撃たないほうがよいものがあり（敵軍は、撃ちやすくても、陰しく困難なところを選んで〔長いこと〕陣取っているなら、先の利益が失われています。もしそこを得たときには、利益は薄いです。おいつめられた兵士は、必ず必死に戦います）、⑧城には攻めないほうがよいものがあり（城が小さくても堅固であり、食料が豊富なら、攻めてはいけません。私（曹操）が華県と費県をそっちのけにして徐州に深く入り、14県を得た理由です）、⑨土地には争わないほうがよいものがあり〔利点の少ない土地は、せっかく争奪して獲得したのに失ったときには、争奪しません〕、⑩君主の命令には従わないほうがよいものがあります〔もし任務の遂行に好都合なら、君主の命令にこだわられません〕。ですから、將軍のうちで、「九変の利（①～⑨のように臨機応変に行うことによって得られるメリット）」に精通している人は、用兵を知っています。將軍のうちで、「九変の利（①～⑨のように臨機応変に行うことによって得られるメリット）」に精通していない人は、地形を知っていても、地の利を得られません。兵士を管理するにあたり、「九変の術（①～⑨のように臨機応変に行う方法）」を知らないなら、「五利（⑤～⑩のように融通をきかせることによって得られるメリット）」を知っていても、人を有効に活用できません（下の5つのことを言います）〔九変は、五変とされているものもあります〕。そういうわけで、智者が考えるときは、必ず利害をまじえます（利益があるときには損害を考え、損害があるときには利益を考えます）〔困難に直面したら、臨時の方法を実行します〕。利益をまじえることで、事をうまく運べます〔敵が五地をよりどころとしてこちらの損害となることができなくする方法を考えることで、事をうまく運べるようになります〕。損害をまじえること

で、心配を解消できます〔すでに利益があると分かったときには、損害についても計算するなら、わずらいがあっても解消できます〕。そういうわけで、諸侯を屈させるには、害を使います（害は相手の嫌うものです）。諸侯を働かせるには、事を使います（業は、事柄です。相手をわずらわせて疲れさせます。たとえば、相手が入ったら、こちらは出ます。相手が出たら、こちらは入ります）。諸侯を赴かせるには、利を使います（自分から来させます）。ですから、用兵の原則としては、敵に侵攻されないのを期待するのではなく、いつでも敵の進攻に対応できる態勢にあることを頼りとします。敵に攻撃されないのを期待するのではなく、敵の攻撃できない状態にあることを頼りとします〔安全でも危険を忘れず、常に備えを設けるのです〕。ですから、将軍にとって危険なことが、五つあります。身の危険をかえりみないなら、殺すことができます（勇敢でも思慮がありません）〔必ず死闘しようとして、その意志をだれにも曲げられないことから、奇襲や伏兵によって倒せます〕。身の安全ばかりを考えているなら、捕らえることができます（利益を見ても恐れて進みません）。怒りっぽいなら、バカにすることができます（すぐに怒る人は、ひどく侮辱して〔性急な人は、激怒させて侮辱して〕コントロールすることができます）。まじめすぎるなら、恥をかかせることができます（無欲で真面目な人は、汗をかくほどの恥をかかせてコントロールすることができます）。やさしすぎるなら、わずらわせることができます（相手の必ず向かってくるところに出ます。人民を大切にすることは、必ずふだんよりも数倍のスピードで先を急いできて救おうとします。そのときには、わずらわされて疲れます）。およそ以上の5つは、将軍の過ちであり、用兵の災いです。軍隊が敗れたり、将軍が殺されたりするのは、以上の五つによるので、明らかにしないといけません。

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
行軍第九 <u>（挾便利而行也）</u> 孫子曰。凡處軍、相敵、絕山依谷 <u>（近水草便利也）</u>、視生處高 <u>（生、陽也）</u>、戰隆無登 <u>（無迎高也）</u>、此處山之軍也。絕水必遠水 <u>（引敵使渡）</u>、客絕水而來、勿迎之於水內、令半渡而擊之、利 <u>（半渡、勢不併、故可敗）</u>。欲戰者、無附於水而迎客 <u>（附、近也）</u>。視生處高 <u>（水上当處其高。前向水、後依高而處）</u>、無迎水流 <u>（恐漑我也）</u>。此處水上之軍也。絕斥沢、唯亟去無留。若交軍於斥沢之中、必依水草、而背衆樹 <u>（不得已與敵會於斥沢之中）</u>、此處斥沢之軍也。平陸處易 <u>（車騎之利）</u>、右背高、前死後生 <u>（戰便也）</u>、此處平陸之軍也。凡四軍之利、黃帝之所以勝四帝也 <u>（黃帝始立、四方諸侯亦稱帝、以此四地勝之）</u>。凡軍好高而惡下、貴陽而賤陰、養生處實、軍無百疾、是謂必勝 <u>（恃實滿也、向水草、放牧也）</u>。丘陵隄防、必處其陽而	行軍篇 <u>〔挾便利而行也〕</u> 孫子曰。凡處軍、相敵、絕山依谷 <u>〔近水草便利也〕</u>、視生處高 <u>〔生者、陽也〕</u>、戰隆無登 <u>〔無迎高也〕</u>、此處山之軍也。絕水必遠水 <u>〔引敵使渡〕</u>、客絕水而來、勿迎之於水內、令半渡而擊之、利。欲戰者、無附於水而迎客 <u>〔附、近也〕</u>。視生處高 <u>〔水上亦當處其高。前向水、後當依高而處〕</u>、無迎水流 <u>〔恐漑我也〕</u>。此處水上之軍也。絕斥沢、惟亟去無留。若交軍於斥沢之中、必依水草、而背衆樹 <u>〔不得已與敵會於斥沢中〕</u>、此處斥沢之軍也。平陸處易 <u>〔車騎之利也〕</u>、右背高、前死後生 <u>〔戰便也〕</u>、此處平陸之軍也。凡此四軍之利、黃帝之所以勝四帝也 <u>〔黃帝始立、四方諸侯無不稱帝、以此四地勝之〕</u>。凡軍好高而惡下、貴陽而賤陰、養生而處實、軍無百疾、是謂必勝 <u>〔恃滿實、養生、向水草、可放牧畜乘。實猶高也〕</u>。丘陵隄防、必處

右背之。此兵之利、地之助也。上雨水沫至、欲涉者、待其定也（恐半渡而水遽漲也）。凡地有絕澗、天井、天牢、天羅、天陷、天隙、必亟去之、勿近也（山水深大者、為絕澗。四方高、中央下者、為天井。深山所過、若蒙籠者、為天牢。可以羅絕人者、為天羅。地形陷者、為天陷。澗道迫狹、深数丈者、為天隙）。吾遠之、敵近之、吾迎之、敵背之（用兵常遠六害、令敵近背之、則我利敵凶）。軍旁有險阻、潢井、蒹葭、林木、翳薈者、必謹覆索之、此伏姦之所也（險者、一高一下之地。阻者、多水也。潢者、池也。井者、下也。蒹葭者、衆草所聚也。林木者、衆木所居也。翳薈者可以屏蔽之處也。此以上論地形、以下相敵情也）。近而靜者恃其險也。遠而挑戰者欲人之進也。其所居易者利也。衆樹動者來也（斬伐樹木、除道也）。衆草多障者疑也（結草為障、欲使我疑）。鳥起者伏也（下有伏兵）。獸駭者覆也（敵弘陳張翼、來覆我也）。塵高而銳者車來也。卑而弘者徒來也。散而條達者樵採也。少而往來者營軍也。辭卑而

其陽而右背之。此兵之利、地之助也。上雨水沫至、欲涉者、待其定也〔恐半涉而水遽漲也〕。凡地有絕澗、天井、天牢、天羅、天陷、天隙、必亟去之、勿近也〔山深水大者、為絕澗。中方高、中央下、為天井。深山所過、若蒙籠者、為天牢。可以羅絕人者、為天羅。地形陷者、為天陷。山澗道迫狹、地形深数尺長数丈者、為天隙〕。吾遠之、敵近之、吾迎之、敵背之〔用兵常遠六害、今敵近背之、則我利敵凶〕。軍行有險阻、潢井、葭葦、山林、翳薈者、必謹覆索之、此伏姦之所處也〔險者、一高一下之地。阻者、多水也。潢者、池也。井者、下也。葭葦者、衆草所聚。山林者、衆木所居也。翳薈者可屏蔽之處也。此以上論地形、以下相敵情也〕。敵近而靜者恃其險也。遠而挑戰者欲人之進也。其所居易者利也〔所居利也〕。衆樹動者來也〔斬伐樹木、除道進來、故動〕。衆草多障者疑也〔結草為障、欲使我疑也〕。鳥起者伏也〔鳥起其上、下有伏兵〕。獸駭者覆也〔敵弘陳張翼、來覆我也〕。塵高而銳者車來也。卑而弘者

益備者進也（其使來辭卑、使間視之、敵人增備也）。辭強而進驅者退也（詭詐也）。輕車先出居其側者陣也（陳兵欲戰也）。無約而請和者謀也。奔走而陳兵者期也。半進半退者誘也。杖而立者飢也。汲而先飲者渴也。見利而不進者勞也（士卒疲勞也）。鳥集者虛也。夜呼者恐也（軍士夜呼、將不勇也）。軍擾者將不重也。旌旗動者亂也。吏怒者倦也。殺馬肉食軍無糧也。懸鉦不返其舍者窮寇也。諄諄徐與人言者失衆也（諄諄、語兒。、失志兒）。數賞者窘也。數罰者困也。先暴而後畏其衆者不精之至也（先輕敵、後聞其衆、則心惡之也）。來委謝者欲休息也。兵怒而相迎久、而不合、又不相去、必謹察之（備奇伏也）。兵非貴益多（權力均也）、雖無武進（未見便也）、足以並力、料敵、取人而已（廝養足也）。夫唯無慮而易敵者必擒於人。卒未親附而罰之則不服。不服則難用。卒已親附而罰不行則不可用。故令之以文、齊之以武（文、仁也。武、法也）、是謂必取。令素行以教其民則民服、令不素行以教其民則民不服。令

徒來也。散而彛達者樵採也。少而往來者營軍也（其使來辭卑、使間視之、敵人增備也）。辭卑而益備者進也。辭彊而進驅者退也。輕車先出居其側者陣也。無約而請和者謀也。奔走而陳兵者期也。半進半退者誘也。杖而立者飢也。汲而先飲者渴也。見利而不進者勞也（士卒之疲勞也）。鳥集者虛也。夜呼者恐也（軍士夜呼、將不勇也）。軍擾者將不重也。旌旗動者亂也。吏怒者倦也。粟馬肉食、軍無懸缶、不返其舍者窮寇也。諄諄翕翕徐與人言者失衆也（諄諄、語貌。翕翕、失志貌）。數賞者窘也。數罰者困也。先暴而後畏其衆者不精之至也（先輕敵、後聞其衆、則心惡之也）。來委謝者欲休息也。兵怒而相迎久、而不合、又不相去、必謹察之（備奇伏也）。兵非益多也（權力均也。一云。兵非貴益多）、惟無武進（未見便也）、足以並力、料敵、取人而已（廝養足也）。夫唯無慮而易敵者必擒於人。卒未親附而罰之則不服。不服則難用也。卒已親附而罰不行則不可用也（恩信已洽、若無刑罰、則驕惰難用也）。故令之以文、

素行者与衆相得也。	齊之以武〔 <u>文、仁也。武、法也</u> 〕、是謂必取。 令素行以教其民則民服、令不素行以教其民則民不服。令素行者与衆相得也。
-----------	--

【翻訳】

行軍第九（好都合で有利なところを選んで行きます）

孫子が言いました。およそ状況に応じて上手に軍隊を動かし、見かけから実情を判断するにあたり、険しい山を行くときは、谷にそって進みます（水や草が近くにあり、便利です）。安全なところを目ざし、高いところにいるようにします（安全なところは、明るいところ）。高いところで戦うなら、高いほうに向かってはいけません（高いところにいる敵を迎え撃ってはいけません）。以上は軍隊が山岳地帯にいる場合です。川を渡るときには、渡ったらすぐに川を離れます（敵を引き付けて渡らせます）。攻め手がもし兵をひきつれ川を渡って来たら、川のなかで迎撃してはいけません。敵の半分を渡らせてから攻撃すれば、有利になります（半分だけが渡っていきるときには、勢いが合わないで、敗北させられます）。戦おうとする人は、川に付いて攻め手を迎撃してはいけません（付くとは、近くにいうことです）。安全なところを目ざし、高いところにいるようにして（水のあるところでは高いところにいるようにします。前方は水に向かい、後方は高いところに陣取っているようにします）、水の流れに逆らうようにしてはいけません（こちらを水攻めにされる恐れがあります）。以上は軍隊が河川地域にいる場合です。塩分が多かったり、ぬかるんでいたりする土地は、すみやかに去り、とどまてはいけません。もし塩分が多かったり、ぬかるんでいたりする土地で敵と戦うことになったなら、水や馬のあるところにて、たくさんの木を背にするようにします（塩分が多かったり、ぬかるんでいたりする土地でやむをえずに敵と戦う場合です）。以上は軍隊が沼沢地域にいる場合です。平坦なところでは、なだらかなところにいるよう

にします（戦車や騎兵に有利となります）。右後方が高くなるようにします。前方が低く、後方が高くなるようにします（戦うのに便利です）。以上が平陸地域に軍隊がいる場合です。およそ上記の四軍の利は、黄帝（昔の名君）が四帝に勝った方法です（黄帝が即位したばかりのとき、四方の諸侯も帝王を名乗りました〔四方の諸侯で帝王を名乗らないものはいませんでした〕。黄帝は、以上の4つの地の利を得る方法を使って四方の諸侯に勝ちました）。およそ軍隊は、高いところを好んで、低いところを嫌うようにします。明るいところを重んじて、暗いところを軽んじるようにします。生活しやすいようにし、高くて明るいところにいるようにします。軍隊に病気がないようにします。これを「必ず勝つ」と言います（充実を頼りとします）〔生活しやすいようにするとは（水や草が目の前にあり、放牧して）〔乗馬を養うことです。実のところとは、高いところと同じです〕。丘陵や堤防のところでは、必ずからりとしたところにいて、右後方が高くなるようにします。以上は兵の利であり、地の助けです。上流が雨で、水が泡立って流れてくるとき、川を渡ろうとする人は、川の流れが落ち着くのを待ちます（半分が渡ったところで、いきなり増水する恐れがあります）。およそ土地には絶澗、天井、天牢、天羅、天陷、天隙については、必ずそこからすみやかに立ち去り、近づいてはいけません（山と川が深くて大きいものは、絶澗となります。四方が高く〔中が四角で高く〕、中央が低いものは、天井となります。山奥を通過していて、草木がおいしげっているものは、天牢となります。人が進むのを邪魔するものは、天羅となります。地形がへこんでいるものは、天陷となります。谷川と道が近くて狭く、谷の深さが数丈であるもの〔山の谷川と道が近くて狭く、地形の深さが数尺で、長さが数丈のもの〕は、天隙となります）。こちらはそこから遠ざかり、敵はそこに近づくようにします。こちらはそこを前にし、敵はそこを背にするようにします（用兵は六害を常に遠ざけるようにします。敵を六害に近づけたり、背にさせたりすれば〔今、敵が六害に近づいたり、六害を背にしたりしているときには〕、こちらには有利で、敵

には不利です）。軍隊の近くに險阻、潢井、蒹葭、林木、翳薈があれば、必ずそこを慎重に探索します。以上は伏兵を隠せるところです（險は、高かったり低かったりする土地です。阻は、たくさんの川です。潢は、池です。井は、低地です。蒹葭は、たくさんの草が集まっているところです。林木〔山林〕は、たくさんの木があるところです。翳薈は、身を隠せる場所です。以上は地形を論じており、以下は見かけから敵情を判断することです）。敵が近くにいて静かなのは、地形の陰しさを頼りにしているのです。敵が遠くにいて戦いを挑んでくるのは、こちらをおびき出そうとしているのです。敵が身を隠すものがない平原にいるのは、そこが有利なのです〔陣取っているところが有利なのです〕。森の木が揺れ動いているのは、敵が進軍してきているのです（樹木を伐採し、道を切り開き）〔進んで来ているので、動くのです〕。たくさんの草がどこそで障害となっているのは、疑わせようとしているのです（草をおすんで障害をつくり、こちらを疑わせようとしているのです）。鳥が飛び立つのは、伏兵がいるのです〔その上に鳥が飛び立っているなら〕（その下に伏兵がいます）。獣が驚いているのは、敵が包囲しようとしているのです（敵が羽を広げるように布陣し、こちらを包囲しようと近づいてきているのです）。砂ぼこりが高くまっすぐに立ちのぼっているのは、戦車隊がやってきているのです。砂ぼこりが低くたれこんでいるのは、歩兵隊がやってきているのです。砂ぼこりがあちこちからあがり、ひよろひよろしているのは、薪を拾っているのです。砂ぼこりが少なくて、行ったり来たりしているのは、陣地を築いているのです。敵からの使者の言葉が丁寧で、敵軍が備えを増しているのは、進もうとしているのです（その使者が来て、言葉が丁寧なのは、使者がこちらをスパイし、敵兵が備えを増しているのです）。敵からの使者の言葉が強気で、敵軍が前に出て駆けまわっているのは、退こうとしているのです（だましです）。軽戦車が先に出て、敵陣の横についているのは、布陣しているのです（兵士をならべ、戦おうとしているのです）。約束していないのに休戦を求めてくるのは、謀略があるのです。走りまわって兵

士をならべているのは、戦いを決意しているのです。敵兵が進んだり、退いたりしているのは、こちらを誘い出そうとしているのです。敵兵が杖をついて立っているのは、食料が不足しているのです。水を汲んできて、先を争って飲むのは、水が不足しているのです。敵兵が有利なのに攻撃してこないのは、疲れているのです（**兵士が疲労しているのです**）。鳥が集まっているのは、そこにだれもいないのです。夜中に呼びまわっているのは、恐れているのです（**軍人が夜中に呼びまわるのは、将軍が勇ましくないのです**）。軍隊が騒動しているのは、将軍がしっかりしていないのです。旗が揺れ動いているのは、混乱しているのです。役人が怒っているのは、士気が低下しているのです。馬を殺して食べているのは、軍隊に食料がないのです。調理器具をそのままにし、営舎に戻らないのは、おいつめられているのです。ねんごろにためらいながらゆるやかに相手と語っているのは、人望を失っているのです。こんこんと親しげに人々と語らっているのは、人望を失っているのです（**ねんごろなのは、語る様子です。ためらうのは、失意の様子です**）。ひんぱんに賞しているのは、苦しんでいるのです。ひんぱんに罰しているのは、困っているのです。先に乱暴して後で反発する相手の多いことを恐れるのは、きわめて配慮が足りないのです（**先に敵を軽んじ、後で敵の多さを聞いたときには、それをいやに思います**）。贈り物をもってきて謝罪するのは、休息したがつているのです。兵士が怒って互いに反撃しあいながら、いつまでたっても決戦しようとせず、かといって退却しようもしないなら、必ず慎重に見極めないといけません（**奇策や伏兵を用意しているのです**）。軍事は、兵力を多くすることを大切にするというものではありません（**権力が等しい場合です**）〔一説によると、**軍事は兵力を多くすることを大切にするというものではないとあります**〕。勇ましく進むことがないとしても（**いまだ都合のよい機会があらわれないのです**）、足りていて、そこで力を合わせ、敵情を調査し、相手を攻略するだけです（**雑兵が足りているのです**）。そもそもただ思慮がなく、敵を軽くみるだけなら、必ず相手に捕虜とされます。兵卒がまだ懐い

ていないのに罰するときには、納得しません。納得しなければ、使いにくくなります。兵卒がすでに懐いていても罰が行われないうときには、使えなくなります〔恩恵と信用が全軍にゆきわたったあと、もし刑罰がないときには、おごり高ぶり、怠ける人は使いにくくなります〕。ですから、命令するには文を使い、整然とさせるには武を使います（文は仁です。武は法です）。これが「必ず取る＝必ず攻略できる」ということです。命令がふだんから守られていて、そのうえで人民に命令を守るように教えるときには、人民は納得します。命令がふだんから守られていなくて、それなのに人民に命令を守るように教えるときには、人民は納得しません。命令がふだんから守られていれば、みんなと心を一つにできます。

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
地形第十 <u>（欲戰、審地形以立勝也）</u> 孫子曰。地形有通者、有掛者、有支者、有隘者、有險者、有遠者 <u>（此六者、地之形也）</u>。我可以往、彼可以來、曰通。通形者、先居高陽、利糧道、以戰則利 <u>（寧致人、無致於人）</u>。可以往、難以返、曰掛。掛形者、敵無備、出而勝之、敵若有備、出而不勝、難以返、不利。我出而不利、彼出而不利、曰支。支形者、敵雖利我、我無出也。引而去之、令敵半出而擊之、利。隘形者、我先居之、必盈之以待敵。若敵先居之、盈而勿從、不盈而從之 <u>（隘、兩山之間通谷也。敵勢不得撓我也。我先居之、必前齊隘口、陳而守之、以出奇也。敵若先居此地、齊口陳、勿從也。即半隘陳者從之、而与敵共此利也）</u>。險形者、我先居之、必居高陽以待敵。若敵先居之、引而去之、勿從也 <u>（地險隘、尤不可致於人）</u>。遠形者、勢均、難以挑戰、戰而不利	地形篇 <u>〔欲戰、審地形以立勝也〕</u> 孫子曰。地形有通者、有挂者、有支者、有隘者、有險者、有遠者 <u>〔此六者、地之形也〕</u>。我可以往、彼可以來、曰通。通形者、先居高陽、利糧道、以戰則利 <u>〔寧致人、無致於人〕</u>。可以往、難以返、曰挂。挂形者、敵無備、出而勝之、敵若有備、出而不勝、難以返、不利。我出而不利、彼出而不利、曰支。支形者、敵雖利我、我無出也。引而去之、令敵半出而擊之、利。隘形者、我先居之、必盈之以待敵。若敵先居之、盈而勿從、不盈而從之 <u>〔隘形者、兩山間通谷也。敵勢不得撓我也。我先居之、必前齊隘口、陳而守之、以出奇也。敵若先居此地、齊口陳、勿從也。即半隘陳者從之、而与敵共此利也〕</u>。險形者、我先居之、必居高陽以待敵。若敵先居之、引而去之、勿從也 <u>〔地形險隘、尤不可致於人〕</u>。遠形者、勢均、難以挑戰、戰而不利

（挑戰者、延敵也）。凡此六者、地之道也、將之至任、不可不察也。故兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者。凡此六者、非天地之災、將之過也。夫勢均、以一擊十、曰走（不料力也）。卒強吏弱、曰弛（吏不能統卒、故弛壞）。吏強卒弱、曰陷（吏強欲進、卒弱輒陷、敗也）。大吏怒而不服、遇敵懟而自戰、將不知其能、曰崩（大吏、小將也。大將怒之、心不懟服、忿而赴敵、不量輕重、則必崩壞）。將弱不嚴、教道不明、吏卒無常、陳兵縱橫、曰亂（為將若此、亂之道也）。將不能料敵、以少合衆、以弱擊強、兵無選鋒、曰北（其勢若此、必走之兵也）。凡此六者、敗之道也、將之至任、不可不察也。夫地形者、兵之助也。料敵制勝、計險阨遠近、上將之道也。知此而用戰者必勝、不知此而用戰者必敗。故戰道必勝、主曰無戰、必戰可也。戰道不勝、主曰必戰、無戰可也。故進不求名、退不避罪、唯民是保而利於主、國之寶也。視卒如嬰兒、故可與之赴深谿。視卒如愛子、故可與之俱死。愛而不能令、厚而不能使、

利〔挑戰者、延敵也〕。凡此六者、地之道也、將之至任、不可不察也。故兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者。凡此六者、非天之災、將之過也。夫勢均、以一擊十、曰走〔不料力〕。卒強吏弱、曰弛〔吏不能統、故弛壞〕。吏強卒弱、曰陷〔吏強欲進、卒弱輒陷、敗也〕。大吏怒而不服、遇敵懟而自戰、將不知其能、曰崩〔大吏、小將也。大將怒之、而不懟服、忿而赴敵、不量輕重、則心崩壞〕。將弱不嚴、教道不明、吏卒無常、陳兵縱橫、曰亂〔為將若此、亂之道也〕。將不能料敵、以少合衆、以弱擊強、兵無選鋒、曰北〔其勢若此、必走之兵也〕。凡此六者、敗之道也、將之至任、不可不察也。夫地形者、兵之助也。料敵制勝、計險阨遠近、上將之道也。知此而用戰者必勝、不知此而用戰者必敗。故戰道必勝、主曰無戰、必戰可也。戰道不勝、主曰必戰、無戰可也。故進不求名、退不避罪、唯人是保而利合於主、國之寶也。視卒如嬰兒、故可與之赴深谿。視卒如愛子、故可與之俱死。厚而不能使、愛而不能令、

乱而不能治、譬如驕子、不可用也（恩不可專用、罰不可独任）。知吾卒之可以撃、而不知敵之不可撃、勝之半也。知敵之可撃、而不知吾卒之不可撃、勝之半也。知敵之可撃、知吾卒之可以撃、而不知地形之不可以戦、勝之半也。故知兵者、動而不迷、挙而不窮。故曰。知彼知己、勝乃不殆。知天知地、勝乃可全。

乱而不能治、譬若驕子、不可用也〔恩不可專用、罰不可独任。若驕子之喜怒対目、還害而不可用也〕。知吾卒之可以撃、而不知敵之不可撃、勝之半也。知敵之可撃、而不知吾卒之不可撃、勝之半也。知敵之可撃、知吾卒之可以撃、而不知地形之不可以戦、勝之半也〔勝之半者、未可知也〕。故知兵者、動而不迷、挙而不窮。故曰。知彼知己、勝乃不殆。知天知地、勝乃不窮。

【翻訳】

地形第十（戦おうとするときには、地形を明らかにして勝利を確立します）

孫子が言いました。地形には、通じたものがあり、引っ掛けられるものがあり、支えられたものがあり、狭いものがあり、険しいものがあり、遠いものがあります（以上の6つは、地形です）。こちらに行くことができ、相手も来ることができるものは、「通じたもの」と言います。通じた地形では、先に高くて明るい場所に陣取り、糧道を確保し、そうして戦えば、有利です（相手をコントロールしても、相手からコントロールされません）。行くことができても、戻りにくいものは、「引っ掛けられるもの」と言います。引っ掛けられる地形では、敵が無防備なら、出撃して勝ちます。敵にもし備えがあるなら、出撃しても勝たず、戻りにくく、不利です。こちらが出撃すると不利となり、相手も出撃すると不利となるものは、「支えられたもの」と言います。支えられた地形では、敵がこちらにとって有利でも、こちらは出撃してはいけません。軍隊を引いてそこを去り、敵を半分ほど出撃させて攻撃すると、有利です。狭い地形では、こちらが先に陣取っているなら、

必ず全体を占拠して敵を待ち受けます。もし敵が先に陣取り、全体を占拠しているなら、相手にしてはいけません。全体を占拠していないなら、相手にします（狭い〔地形〕とは、二つの山の間で谷となっているところです。敵は勢いとして、こちらと乱戦するしかありません。こちらが先に陣取っているなら、必ず前衛部隊は狭いところの入り口にならんで布陣して守り、そこで奇襲部隊を出撃させます。敵がもし先のその場所に陣取り、狭いところの入り口にならんで布陣しているなら、相手にしてはいけません。そのとき狭いところに半分だけ布陣しているなら、相手にして、敵と同じように布陣して地の利を得ます）。険しい地形では、こちらが先に陣取っているなら、必ず高く明るいところに陣取り、そうして敵を待ち構えます。もし敵が先に陣取っているなら、軍隊を引いて去り、相手にしてはいけません（地形が険しくて狭いときには、とりわけ相手をコントロールできません）。遠い地形では、勢いが等しいなら、戦いを挑みにくいです。戦っても不利になります（戦いを挑むなら、敵を引き入れます）。およそ以上の6つは、地形に応じた方法です。将軍のもっとも重要な任務であり、明らかにしないわけにはいきません。ですから、兵士には、潰走するものがあり、弛緩するものがあり、陥落するものがあり、崩壊するものがあり、混乱するものがあり、敗北するものがあります。およそ以上の6つは、天地によってもたらされる災いではなく、将軍の過ちです。そもそも勢いが等しいとき、敵の十分の一の兵力で、こちらの十倍の敵と戦うのは、潰走と言います（力量を調査していないのです）。兵卒が強く、役人が弱いのは、弛緩と言います（役人が兵士を統制できないので〔役人が統制できないので〕、弛緩して崩壊します）。役人が強く、兵卒が弱いのは、陥落と言います（役人が強引に進撃を望み、兵士が弱くてすぐに劣勢に陥るなら、敗北します）。上級の役人が怒られても命令に従わず、敵に遭遇すると憎しみから勝手に戦い、将軍がその能力を知らないのは、崩壊と言います（上級の役人とは、将校です。大將が将校を怒っても、将校は心では納得せず〔将校は納得せず〕、腹立たしく思って敵に立ち向かい、楽勝で

きるか苦戦するかを計算しないときには、必ず〔中心が〕崩壊します）。将軍が弱くて威厳がなく、教練の仕方が明確でなく、役人と兵卒が秩序を保たず、兵士の布陣が気ままなのは、混乱と言います（将軍となり、このようであるなら、軍隊を混乱へと導きます）。将軍が敵の実力をはかり知ることができず、小さい兵力で大きな兵力の敵と合戦し、弱い兵力で強い兵力の敵を攻撃し、兵士に精鋭がないのは、敗北と言います（その勢いがこのようであるなら、必ず兵士が敗走することになります）。そもそも地形は、兵士の助けとなるものです。敵情を調査し、勝利を確実なものとし、土地の難度や遠近を計ることが、上等な将軍のやり方です。これを知って戦いに入る人は、必ず勝利します。これを知らないで戦いに入る人は、必ず敗北します。ですから、戦いの道理からして必ず勝てるのであれば、君主が「戦うな」と言ったとしても、戦ってかまいません。戦いの道理からして勝てないのであれば、君主が「戦え」と言ったとしても、戦わなくてかまいません。ですから、進軍すべきときに進軍して、有名になることを考えません。退却すべきときに退却して、処罰されることを恐れませんが、とにかく人民は保護して、君主の利益をはかるようにします。まさに「国の宝」です。兵卒をいたいけな赤ちゃんのようにみるので、兵卒と苦楽を共にすることができます。兵卒を愛する我が子のようにみるので、兵卒と生死を共にすることができます。大事にしても命令に従わず、大切にしても職務に努めず、軍隊を乱してどうしようもないなら、そのような兵卒は「わがままな子ども」と同じで、ものの役には立ちません（賞は、特定の人だけに用いてはいけません。罰は、特定の人だけに任せてはいけません）〔たとえば、わがままな子どもが感情のままに向き合い、害になることを繰り返すようなもので、ものの役に立ちません〕。こちらの兵卒が攻撃に役立つことをわかっているのに、敵がこちらの勝ちやすい状態にないことをわかっていないなら、勝算は半分です。敵がこちらの勝ちやすい状態にあることをわかっているのに、こちらの兵卒が攻撃に役立たないことをわかっていないのなら、勝算は半分です。敵がこちらの勝ちやすい状態にある

ことをわかっていて、こちらの兵卒が攻撃に役立つことをわかっていても、地形がこちらに有利でないことをわかっていないなら、勝算は半分です〔勝算が半分ということは、どうなるかまだ分からないということです〕。ですから、軍事をよくわかっている将軍は、行動するときには、迷うことはありません。挙兵するときには、ゆきづまることはありません。ですから、「相手を知り、自分を知っていれば、勝利はまちがいない。天の時を知り、地の利を知っていれば、勝利は完全なものとなる」と言われるのです。

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
九地第十一 <u>（欲戰之地有九）</u> 孫子曰。凡用兵之法、有散地、有輕地、有爭地、有交地、有衢地、有重地、有圯地、有困地、有死地。諸侯自戰其地者為散地 <u>（士卒戀土、道近易散）</u>。入人之地而不深者為輕地 <u>（士卒皆輕返也）</u>。我得亦利彼得亦利者為爭地 <u>（可以少勝衆、弱擊強）</u>。我可以往彼可以來者為交地 <u>（道正相交錯也）</u>。諸侯之地三屬 <u>（我與敵相當、而旁有他國也）</u>、先至而得天下之衆者為衢地 <u>（先至得其國助）</u>。入人之地深背城邑多者為重地 <u>（難返之地）</u>。山林險阻沮洳凡難行之道者為圯地 <u>（少固也）</u>。所由入者隘所從歸者迂彼寡可以擊吾之衆者為困地。疾戰則存不疾戰則亡者為死地 <u>（前有高山、後有大水、進則不得、退則有礙）</u>。是故散地則無戰、輕地則無止、爭地則無攻 <u>（不當攻、當先至為利）</u>、交地則無絕 <u>（相及屬也）</u>、衢地則合交 <u>（結諸侯也）</u>、重地則掠	九地篇 <u>〔欲戰之地有九〕</u> 孫子曰。用兵之法、有散地、有輕地、有爭地、有交地、有衢地、有重地、有圯地、有困地、有死地 <u>〔此九地之名也〕</u>。諸侯自戰其地為散地 <u>〔士卒戀土、道近易散〕</u>。入人之地而不深者為輕地 <u>〔士卒皆輕返也〕</u>。我得則利彼得亦利者為爭地 <u>〔可以少勝衆、弱擊強〕</u>。我可以往彼可以來者為交地 <u>〔道正相交錯也〕</u>。諸侯之地三屬 <u>〔我與敵相當、而旁有他國也〕</u>、先至而得天下之衆者為衢地 <u>〔先至得其國助〕</u>。入人之地深背城邑多者為重地 <u>〔難返之地〕</u>。行山林險阻沮洳凡難行之道者為圯地 <u>〔少固也〕</u>。所由入者隘所從歸者迂彼寡可以擊吾之衆者為困地。疾戰則存不疾戰則亡者為死地 <u>〔前有高山、後有大水、進則不得、退則有礙〕</u>。是故散地則無戰、輕地則無止、爭地則無攻 <u>〔不當攻、當先至為利也〕</u>、交地則無絕 <u>〔相及屬也〕</u>、衢地則合交

（蓄積糧食）、圯地則行（無稽留也）、圉地則謀（發奇謀也）、死地則戰（殊死戰也）。古之善用兵者、能使敵人前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相收、卒離而不集、兵合而不齊。合於利而動、不合於利而止（暴之使離、乱之使不齊、動兵而戰）。敢問。敵衆整而将来、待之若何（或人問之）。曰。先奪其所愛則聽矣（奪其所恃之利。若先捭利地、則我所欲必得也）。兵之情主速、乘人之不及、由不虞之道、攻其所不戒也。凡為客之道、深入則專、主人不克。掠於饒野、三軍足食。謹養而勿勞、并氣積力、運兵計謀、為不可測（養士氣、并兵力、為不可測度之計）。投之無所往、死且不北、死焉不得（士死、安不得也）、士人尽力（在難地心并也）。兵士甚陷則不懼（士陷在死地、則意專不懼）、無所往則固、入深則拘（拘、專也）、不得已則鬪（人窮則死戰也）。是故其兵不修而戒、不求而得、不約而親、不令而信（不求索其意、而自得也）。禁祥去疑、至死無所之（禁妖祥之言、去疑惑之計）。吾士無

〔結諸侯也〕、重地則掠〔蓄積糧食也〕、圯地則行〔無稽留也〕、圉地則謀〔發奇謀也〕、死地則戰〔殊死戰也〕。所謂古之善用兵者、能使敵人前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相收、卒離而不集、兵合而不齊。合於利而動、不合於利而止〔暴之使離、乱之使不齊、動兵而戰〕。敢問。敵衆整而将来、待之若何〔或問也〕。曰。先奪其所愛則聽矣〔奪其所恃之利。若先捭利地、則我所欲必得也〕。兵之情主速、乘人之不及、由不虞之道、攻其所不戒也〔孫子忝難以覆陳兵情也〕。凡為客之道、深入則專、主人不克。掠於饒野、三軍足食。謹養而勿勞、并氣積力、運兵計謀、為不可測〔養士併氣運兵、為不可測度之計〕。投之無所往、死且不北、死焉不得〔士死、安不得也〕、士人尽力〔在難地心并也〕。兵士甚陷則不懼、無所往則固、深入則拘〔拘、縛也〕、不得已則鬪〔人窮則死戰也〕。是故其兵不修而戒、不求而得、不約而親、不令而信〔不求索其意、而自得力也〕。禁祥去疑、至死無所之〔禁妖祥之言、去

余財、非惡貨也。無余命、非惡壽也（皆焚燒物、非惡貨之多。棄財致死、不得已也）。令癸之日、士卒坐者涕霑襟、偃臥者涕交頤（皆持必死之計）。投之無所往、諸劒之勇也。故善用兵者、譬如率然。率然者常山之蛇也。擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至。敢問。可使如率然乎。曰。可。夫吳人与越人相惡也。当其同舟濟而遇風、其相救也如左右手。是故方馬埋輪、未足恃也（方馬、縛馬也。埋輪、恃不動也。此言專難不如權巧。故曰。雖方馬埋輪、不足恃也）。齊勇若一、政之道也。剛柔皆得、地之理也（強弱、勢也）。故善用兵者、攜手若使一人、不得已也（齊一兒）。將軍之事、靜以幽、正以治（謂清淨、幽深、平正也）。能愚士卒之耳目、使之無知（愚、誤也。民可與樂成、不可與慮始）。易其事、革其謀、使人無識。易其居、迂其途、使人不得慮。帥与之期、如登高而去其梯。帥与之深入諸侯之地、而癸其機、若驅群羊。驅而往、驅而來、莫知所之（一其心也）。聚三軍之衆、投之於險（險、難也）、此

疑惑之計。一本作至死無所災。吾士無余財、非惡貨也。無余命、非惡壽也〔皆燒焚財物、非惡貨之多也。棄財致死者、不得已也〕。令癸之日、士卒坐者涕霑襟、偃臥者涕交頤〔皆持必死之計〕。投之無所往者諸劒之勇也。故善用兵者、譬如率然。率然者常山之蛇也。擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至。敢問。兵可使如率然乎。曰。可。夫吳人与越人相惡也。当其同舟而濟遇風、其相救也如左右手。是故方馬埋輪、未足恃也〔方、縛馬也。埋輪、示不動也。此言專難不如權巧。故曰。雖方馬埋輪、不足恃也〕。齊勇若一、政之道也。剛柔皆得、地之理也〔強弱、一勢也〕。故善用兵者、攜手若使一人、不得已也〔齊一貌〕。將軍之事、靜以幽、正以治〔謂清淨、幽深、平正〕。能愚士卒之耳目、使之無知〔愚、誤也。民可與樂成、不可與慮始〕。易其事、革其謀、使人無識。易其居、迂其途、使人不得慮。帥与之期、如登高而去其梯。帥与之深入諸侯之地、而癸其機、焚舟破釜、若驅群羊。驅而往、驅而來、莫

將軍之事也。九地之變、屈伸之利、人情之理、不可不察也（人情見利而進、遭害而退）。凡為客之道、深則專、淺則散。去國越境而師者絕地也。四通者衢地也。入深者重地也。入淺者輕地也。背固前隘者圉地也。無所往者死地也。是故散地吾將一其志。輕地吾將使之屬（使相交屬）。爭地吾將趨其後（地利在前、當速進其後）。交地吾將謹其守。衢地吾將固其結。重地吾將繼其食（掠彼也）。圯地吾將進其塗（疾過也）。圉地吾將塞其關（以一其心）。死地吾將示之以不活（勵士心也）。故兵之情、圉則禦（相持禦也）、不得已則鬪（勢有不得已者）、過則從（陷之甚過、則從計也）。是故不知諸侯之謀者不能豫交。不知山林險阻沮洳之形者不能行軍。不用鄉導者不能得地利（上已陳此三事、而復云者、力惡不能用兵、故復言也）。四五者一不知、非霸王之兵也（四五者謂九地之利害。或曰。上四五事也）。夫霸王之兵、伐大國則其衆不得聚、威加於敵則其交不得合。是故不爭天下之交、不養天下之權、信己之私、威加於敵

知所之〔一其心也〕。聚三軍之衆、投之於險〔險、難也〕、此謂將軍之事也。九地之變、屈伸之利、人情之理、不可不察〔人情見利而進、見害而退〕。凡為客之道、深則專、淺則散。去國越境而師者絕地也。四通者衢地也。入深者重地也。入淺者輕地也。背固前隘者圉地也。無所往者死地也。是故散地吾將一其志。輕地吾將使之屬〔使相及屬〕。爭地吾將趨其後〔利地在前、當速進其後也〕。交地吾將謹其守。衢地吾將固其結。重地吾將繼其食〔掠彼也〕。圯地吾將進其塗〔疾過去也〕。圉地吾將塞其關〔以一士心也〕。死地吾將示之以不活〔勵志也〕。故兵之情、圉則禦〔相持禦也〕、不得已則鬪〔勢有不得已也〕、過則從〔陷之甚過、則從計也〕。是故不知諸侯之謀者不能預交。不知山林險阻沮洳之形者不能行軍。不用鄉導者不能得地利〔上已陳此三事、而復云者、力惡不能用兵、故復言之〕。四五者不知一、非霸王之兵也〔謂九地之利害。或曰。上四五事也〕。夫霸王之兵、伐大國則其衆不得聚、威加於敵則其交不得

（交者、不結成天下諸侯之權也。絕天下之交、奪天下之權、故威得伸而自私）。故其城可拔、其國可隳。施無法之賞、懸無政之令（言軍法令豫施懸之。司馬法曰、見敵作誓、瞻功作賞）、犯三軍之衆、若使一人（犯、用也。言明賞罰、雖用衆、若使一人）。犯之以事、勿告以言（兵尚詐）。犯之以利、勿告以害（勿使知害）。投之亡地然後存、陷之死地然後生。夫衆陷於害、然後能為勝敗（必殊死戰。或在死亡之地亦有敗者。孫臏曰。兵恐不投之於死地也）。故為兵之事、在順詳〔佯〕敵之意（佯、愚也。或曰。彼欲進、設伏而退。彼欲去、開而擊之）、并敵一向、千里殺將（先示之以間空虛弱之處、敵則并向而利之、雖千里、可擒其將也）、是謂巧能成事（是成事之巧也）。是故政舉之日、夷關折符、無通其使（謀定、則閉關梁、絕其符信、勿使通使）、勵於廊廟之上、以誅其事（誅、治也）。敵人開闔（敵有間隙、當急入之也）、必亟入之、先其所愛（挾便利也）、微與之期（後人發、先人至）。踐墨隨敵、以決戰事（行踐規

合。是故不爭天下之交、不養天下之權、信己之私、威加於敵〔霸者、不結成天下諸侯之權也。絕天下之交、奪天下之權、故己威得伸而自私〕。故其城可拔、其國可隳。施無法之賞、懸無政之令〔軍法令不預施懸之。司馬法曰、見敵作誓、瞻功行賞之謂也〕、犯三軍之衆、若使一人〔犯、用也。言明賞罰、雖用衆、若使一人也〕。犯之以事、勿告以言。犯之以利、勿告以害〔勿使知害〕。投之亡地然後存、陷之死地然後生〔必殊死戰。在亡地無敗者。孫臏曰。兵恐不投之死地也〕。夫衆陷於害、然後能為勝敗。故為兵之事、在於順詳敵之意〔佯、愚也。或曰。彼欲進、設伏而退。欲去、開而擊之〕、并敵一向、千里殺將〔并兵向敵、雖千里、能擒其將也〕、此謂巧能成事者也〔是成事巧也。一作是巧攻成事〕。是故政舉之日、夷關折符、無通其使〔謀定、則閉關、以絕其符信、勿通其使〕、勵於廊廟之上、以誅其事〔誅、治也〕。敵人開闔〔敵有間隙、當急入之也〕、必亟入之、先其所愛〔挾便利也〕、微與之期〔後人

<u>矩無常也</u> ）。是故始如処女、敵人開戸、後如脱兔、敵不及拒（ <u>処女示弱、脱兔往疾</u> ）。	<u>発、先人至</u> 〕。踐墨隨敵、以決戰事〔 <u>行踐規矩無常也</u> 〕。是故始如処女、敵人開戸、後如脱兔、敵不及拒〔 <u>処女示弱、脱兔往疾也</u> 〕。
--	--

【翻訳】

九地第十一（戦おうとする土地には9種類があります）

孫子は言いました。およそ用兵の方法として、散地があり、軽地があり、争地があり、交地があり、衢地があり、重地があり、圯地があり、圉地があり、死地があります〔以上は九地の名称です〕。諸侯がみずからその土地で戦うのは、散地となります（士卒が故郷を恋しがり、道のりが近く、逃げやすいです）。他人の土地に入っても、深くないのは、軽地となります（士卒は全員が帰りやすいのです）。こちらが得ても利となり、相手が得ても利となるのは、争地となります（少数を使って多数に勝利し、弱者を使って強者を撃破できます）。こちらが行くことができ、相手が来ることができるのは、交地となります（道がちょうど互いに交錯しているのです）。諸侯の領地が三方に接し（こちらと敵が互いにぶつかって、その横に他国があるのです）、先に到着すると天下の人びとを味方にできるのは、衢地となります（先に到着し、隣国の援助を得ます）。他人の土地に入ることが深く、城と村を背にすることが多いのは、重地となります（帰りにくい土地です）。山林、險阻、沮沢など、行きにくい道は、圯地となります（少し固いのです）。入り口は狭く、帰り道は遠回りとなり、相手が少数でもこちらの大軍を撃破できるのは、圉地となります。すばやく戦えば生き残れますが、すばやく戦わなければ滅びるのは、死地となります（前方には高い山があり、後方には大きな川があり、進めば成功せず、退けば邪魔されます）。そういうわけで、散地ならば戦ってはいけません。軽地ならば止まってはいけません。争地ならば攻めてはいけません（攻めるべきでなく、先に到着してこそ利となります）、交地ならば断絶してはいけません（互いに連

携できるようにするのです）、衝地ならば親交を結びます（諸侯と結ぶのです）、重地ならば略奪します（食料を蓄積します）、圯地ならば行きます（とどまることがないようにするのです）、圉地ならば謀ります（奇策を出すのです）、死地ならば戦います（いつもにも増して必死に戦うのです）。昔の用兵の上手な人は、敵の前軍と後軍が互いに連携できないようにさせ、敵の本隊と支隊が互いに協力できないようにさせ、敵の貴族と庶民が互いに救援できないようにさせ、敵の上官と部下とが互いに結束できないようにさせました。（その結果）敵の兵卒は分散したときには集まらず、敵の兵士は集合したときには整いませんでした。有利なときには動き、不利なときには止まりました（敵を驚かせてバラバラにさせ、敵を乱して整わないようにさせ、兵士を動かして戦います）。ここで質問します。敵が多くて整っていて、やって来ようとしているとき、どのように対処すればよいのでしょうか（ある人が質問しました）。答えます。まず相手の大事にしているものを奪えば、相手は思いのままにできます（相手が頼みとしている利点を奪います。先に陣取ると有利となる土地などはと言うと、こちらが必ず得ておきたいところです）。軍事の実情はスピードをメインとし、他人の及ばないところに乗り、思いもよらない道を通り、相手の警戒していないところを攻めます〔孫子は、難事に上手に対応することを通じて、軍事の実情をくりかえし述べているのです〕。およそ攻め手としてのあり方は、深く入れば結束し、守り手は勝ちません。実り豊かな田畑において略奪し、全軍が食料を十分に持てるようにします。慎重に養って疲れさせてはならず、やる気をみなぎらせ、力を蓄えます。兵隊を動かして計略をめぐらし、思いもよらないことをします（士気を養い、兵力をあわせ〔士卒を養い、氣力を合わせ、兵士を動かし〕、推測できない計略を行います）。兵士を逃げ場のないところに投げこめば、死んでも逃げず、死ぬ気にさせられないことはなく（兵士の死ぬ気は、どうして得られないでしょうか）、兵士は力を尽くします（難しいところであって、心が一つになるのです）。兵士はひどく陥れば恐れず（兵士は死地に陥れば、意

志が一つになって恐れませんが）、逃げ場がなければ団結し、入りこむのが深ければつなぎとめられ（つなぎとめられるとは、結束することです）〔つなぎとめられるとは、拘束されることです〕、やむをえなければ戦います（人は窮すれば必死に戦うものです）。そういうわけで、その兵士は、きちんとさせなくても引きしまり、求めなくても奮闘し、まとめなくても仲良くし、命令しなくても決まりを守ります（その意思を取り結ぼうとしたくても、おのずと〔力を〕得られるのです）。迷信を禁じ、疑念を去り、死ぬことになっても逃げないようにします（災難や幸運を予言する発言を禁じ、疑わしくて人を惑わす計略を去ります）〔「死ぬことになっても災いとなることはありません」としているものもあります〕。わが軍の兵士が財産をおしまないのは、価値あるものを嫌っているからではありません。命をおしまないのは、長生きを嫌っているからではありません。（だれもが物資を焼却するのは、財産の多いことを嫌っているのではありません。財産を捨て、死ぬ気になるのは、やむをえないからです）。決戦の命令が出された日、軍人のうち、座っている者は襟を涙でぬらし、臥せている者は顔を涙でぬらします（だれもが必ず死ぬという計算をしているのです）。兵士を逃げ場のないところに投げこむなら、だれもが専諸や曹劌のように勇敢になります。ですから、用兵の上手な人は、たとえば率然のようにします。率然は常山の蛇です。その頭をたたけば、尾が向かってきます。その尾をたたけば、頭が向かってきます。その腹をたたけば、頭と尾が一緒に向かってきます。ここで質問します。率然のようにさせられるでしょうか。答えます。できます。そもそも呉人と越人は互いに憎んでいます。同じに船に乗って渡っているとき、嵐にあえば、左右の手のように助けあいます。そういうわけで、馬をならべ、車輪を生めても、頼みとするには足りません（馬をならべるとは、馬を縛ることです。車輪を埋めるとは、動かないようにするためです〔動かないことを示すものです〕）。これが言っているのは、困難だらけのときには巧妙な策謀をめぐらすにこしたことはないということです。ですから、「馬をならべ、車輪を生めても、

頼みとするには足りません」と言うのです）。そろって勇ましくなり、みんなが一つになるのは、政道によるものです。堅かろうが柔かろうがどちらにしても成功するのは、地理によるものです（強弱は、勢いです）。ですから、用兵の上手な人が、手をたずさえて一人を使うように全員を動かすのは、そうするしかなくさせるからです（一つにそろっているのは、見た目です）。将軍のすべきことは、物静かにして本心を隠し、公正にして全軍を整えます（清らかで汚れないこと、静かで奥深いこと、公平で公正であることを言っているのです）。軍人の耳目をあざむき、兵士を無知にさせます（あざむくとは、まちがわせることです。人民は、一緒に成果を楽しめますが、一緒に初動を考えられません）。こちらの行動を変え、こちらの計画を改め、人に知られないようにします。陣地を変え、道路を遠回りにし、人にさとられないようにします。総司令官は、兵士と一緒に覚悟を決め、高いところに登り、ハシゴをはずすようにします。総司令官は、兵士と一緒に諸侯の領地に侵入し、戦端を開きます。羊の群れをあやつるようにし、あやつるままに行かせ、あやつるままに来させ、その行き先を知らせないようにします（その心を一つにするのです）。全軍の兵隊を集め、兵士を窮地に投げこみます（窮地とは、困難です）。以上が将軍のすべきことです。九地の変、屈伸の利、人情の理については、明らかにしないといけません（人情としては、利益と見れば進み、損害に出くわせば〔損害と見れば〕退きます）。およそ攻め手のあり方としては、深ければ結束し、浅ければ離散します。国を離れ、国境を越えて、軍事活動を行うなら、絶地です。四方が通じているなら、衢地です。入りこむのが深いなら、重地です。入りこむのが浅いなら、軽地です。後方が険しく、前方が狭いなら、困地です。逃げ場がないなら、死地です。そういうわけで、散地では、兵士の意志を一つにします。軽地では、兵士をつなぎとめます（互いに交流〔連携〕させるのです）。争地では、後続部隊を急がせます（有利な地点が目の前にあるなら、その後続部隊を急いで進ませます）。交地では、守りを固めます。衢地では、同盟を固めます。重地では、食料

の補充がとぎれないようにします（敵地を略奪するのです）。圯地では、先に進みます（すばやく通り過ぎるのです）。圉地では、逃げ道をふさぐようにします（そうして〔兵士の〕心を一つにします）。死地では、絶体絶命のピンチにあることを理解させます（士気〔志気〕を奮い立たせるのです）。ですから、軍事の実情として、包囲されたときには防衛します（互いにふんばって守るのです）。やむをえないときには戦闘します（勢いとしてやむをえないものがあるのです）。過剰なときには従順になります（兵士を窮地に陥らせる度合いが過剰であれば、こちらの思わくどおりに動きます）。そういうわけで、諸国の腹の内を知らない人は、事前に諸国と外交を取りおすべません。山林、難所、湿地、沼沢といった地形を知らない人は、軍を進められません。現地の地理に詳しい人間をガイドにしない人は、地の利を得られません（この3つについて先述していながら、ここでまた言っているのは、用兵できないことを努めて憎むので、また言うのです）。四つ五つのことについて少しも知らないなら、「霸王の兵」ではありません（四つ五つのことは、九地の利害を言います。ある人は、上の四つ五つのことだと言っています）。そもそも霸王の兵は、大国を征伐したときには、その兵隊は集まらなくなります。敵を威嚇したときには、その外交は味方を失います。そういうわけで、天下の外交をリードしようとせずとも、天下の覇権を握ろうとせずとも、自分の思いのままにできて、敵を威圧することができます（外交〔覇権〕とは、世界各国の思わくを成就させないことです。天下の外交を絶ち、天下の覇権を奪うので、威嚇はうまくいって
〔自分の威厳が確立して〕自分の思うままになります）。ですから、その城は撃破させられますし、その国は陥落させられます。法外な恩賞を与え、規制のわくにとらわれない命令を出し（言っているのは、軍隊の法令としては前もって与えたり出したりしないということです。『司馬法』に「敵がいたら決戦を誓い、功績があれば恩賞を与える」とあります）、全軍の兵隊を犯すにあたり、まるで一人を使っているかのようにします（犯すとは、用いることです。言っているのは、賞罰を明

らかにすれば、多数を用いていても、まるで一人を使っているようにスムーズに動かせるということです）。兵士を使うときには仕事だけを伝えて、説明を告げてはいけません（軍事ではだますことを重視します）。兵士を使うときには利益だけを伝えて、損害を告げてはいけません（損害を知らせてはいけません）。兵士を滅びるほかないような状態に投げこんでこそ、生き残ることができます。兵士を死ぬほかないような状態に陥らせてこそ、生きのびることができます〔必ずこれまでになく必死に戦うなら、窮地にあっても敗北することがありません。孫臏は「軍事では死地に投げこまないことを懸念する」と言っています〕。そもそも兵隊は、害に陥ってこそ、勝敗を決することができます（必ずこれまでになく必死に戦います。場合によっては、窮地や死地にあっても敗北することもあります。孫臏は「兵士はひょっとしたら死地に投げこまないかもしれない」と言っています）。ですから、兵士を動かすにあたってすべきことは、素直にやって敵の心理をだますことにあります（だますとは、実情をわからなくなくさせることです。ある人が言うには、相手が進みたがっているなら、伏兵をひそませて退きます。相手が去りたがっているなら、逃げ道を与えて追撃します）、敵を一つにさせて特定の方向に行かせれば、千里もの遠いところでも敵将を殺せます（敵に対して先にスキのあるところを示します。敵はと言うと、その方向に集中して、そこを有利だと思います〔兵力を合わせ、敵に向かいます〕。すると、千里もの通いところでも、敵将を捕虜にできます）。これを「うまくやることによって成功できる」と言います（物事を達成する巧みさです）〔「巧みに攻撃して物事を成功させます」としているものもあります〕。そういうわけで、軍事に関する政務が開始された日には、国境を封鎖し、入国許可証を取り消し、使者の往来を禁止します（謀略が定まれば、関所を封鎖し、〔そして〕その通信を途絶させ、使者を通行させてはいけません〔相手の使者を通してはいけません〕）、「廊廟＝表御殿」において気持ちを奮い立たせ、軍事について責めます（責めるとは、管理することです）。敵が門戸を開いたら、必ずすみや

かにつけいります（敵にすきがあれば、急いで入りこむべきです）。敵の大事なところを優先し（便利をよりどころとします）、ひそかにそこにねらいを定めます（相手よりの後から出発し、相手よりも先に到着します）。軍事の常識に従い、敵情に応じて動き、そうして争いごとを決めます（軍事の常識に従うのは、臨機応変にします）。そういうわけで、始めは少女のようにふるまい、敵が門戸を開いたら、逃げるウサギのように動き、敵に対応する余裕を与えないようにします（少女とは、弱さを示しています。逃げるウサギとは、行くのが速いことです）。

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
火攻第十二（以火攻、当挹時日） 孫子曰。凡火攻有五、一曰火人、二曰火積、三曰火輜、四曰火庫、五曰火隊。行火必有因（因姦人也）、煙火必素具（燒具也）。發火有時、起火有日。時者、天之燥也。日者、月在箕壁翼軫也。凡此四宿者、風起之日也。凡火攻必因五火之變而應之。火發於內則早應之於外（以兵應之）。火發而其兵靜者待而勿攻。極其火力、可從而從之、不可從而止（見可而進、知難而退）。火可發於外、無待於內、以時發之。火發上風、無攻下風（不便也）。昼風久、夜風止（數當然也）。凡軍必知五火之變以數守之。故以火佐攻者明（取勝明也）、以水佐攻者強。水可以絕、不可以奪（水但能絕敵糧道、分敵軍、不可奪敵蓄積）。夫戰勝攻取、而不修其功者凶、命曰費留（若水之留不復還。或曰。賞不以時、但費留也。賞善不踰月）。故曰。明主慮	火攻篇〔以火攻人、当挹時日也〕 孫子曰。凡火攻有五、一曰火人、二曰火積、三曰火輜、四曰火庫、五曰火隊。行火必有因〔因姦人〕、煙火必素具〔煙火、燒具也〕。發火有時、起火有日。時者、天之燥也〔燥者旱也〕。日者、月在箕壁翼軫也。凡此四宿者、風起之日也。凡火攻必因五火之變而應之。火發於內則早應之於外〔以兵應之也〕。火發兵靜者待而勿攻。極其火力、可從而從之、不可從而止〔見可而進、知難而退〕。火可發於外、無待於內、以時發之。火發上風、無攻下風〔不便也〕。昼風久、夜風止〔數當然也〕。凡軍必知有五火之變以數守之。故以火佐攻者明、以水佐攻者強。水可以絕、不可以奪〔火佐者取勝明也。水佐者但可以絕敵道分敵軍、不可以奪敵蓄積〕。夫戰勝攻取、而不修其功者凶、命曰費留〔若水之留不復還也。或曰。賞不以時、但費留

之、良将修之。非利不動、非得不用、非危不戰
（不得已而用兵）。主不可以怒而興師、将不可
以慍而致戰。合於利而動、不合於利而止（不以
己之喜怒用兵）。怒可以復喜、慍可以復説。亡
国不可以復存、死者不可以復生。故明主慎之、
良将警之。此安国全軍之道也。

也。賞善不踰日也〕。故曰。明主慮之、良将修
之。非利不動、非得不用、非危不戰〔不得已而
用兵〕。主不可以怒而興師、将不可以慍而致
戰。合於利而動、不合於利而止〔不以己之喜怒
而用兵也〕。怒可以復喜、慍可以復悦。亡国不
可以復存、死者不可以復生。故明君慎之、良将
警之。此安国全軍之道也。

【翻訳】

火攻第十二（火を使って〔相手を〕攻めるなら、日時を選ぶべきです）

孫子が言いました。火攻めには五種類あります。第一は火人です。第二は火積です。第三は火輜
です。第四は火庫です。第五は火隊です。火を使うときには必ず条件があります（悪者を利用する
のが条件です）。火をつけるものは必ずふだんから整えておきます（〔火をつけるものは〕火攻め
の道具です）。火を燃え上がらせるには、時のよしあしがあります。火を燃え広がらせるには、日
のよしあしがあります。よい時は、天氣が乾燥している時です〔乾燥は、天地がからからになって
いる状態です〕。よい日は、月が箕・壁・翼・軫の位置にあるときです。この位置に月がある日は、
風が吹きます。およそ火攻めは、必ず5種類の火攻めがもたらす変化に応じて、こちらの対応を決
めます。敵の内部で火の手が上がったときには、すばやく外から応じます（兵士を使って応じま
す）。火が燃え上がっても、敵兵が冷静なら、待機して攻めてはいけません。火を燃えるにまかせ、
攻撃できそうなら攻撃し、攻撃できそうにないなら止めます（可能と見れば進み、困難と分かれば
退きます）。外から火をつけやすいなら、内部から火をつけるまでもなく、タイミングを見計らっ
て火をつけます。火が風上でついたときには、風下から攻撃してはいけません（不便です）。昼の

風は長く吹き、夜の風はすぐ止まります（法則として、そのようになっているのです）。およそ軍隊は、必ず5種類の火攻めがもたらす変化を知り、火攻めのポイントをおさえて守備に役立てます。ですから、火を用いて攻撃の助けとするなら、明白です（勝利をつかめるのが明白です）。水を用いて攻撃の助けとするなら、しかし、水は、絶つことはできても、奪うことはできません（水攻めは、ただ敵の糧道を絶ち、敵軍を分散させられるだけで、敵の備蓄している物資を奪えません）

〔火攻めを補助的に使うものは、勝利をつかめるのが明白です。水攻めを補助的に使うものは、ただ敵の通路を絶ち、敵の軍隊を分散させられるだけで、敵の備蓄している物資を奪えません〕。そもそも戦って勝ち、攻めて取ったとしても、その成果を活用できないのは、悪い結果となります。これを名づけて「費留」と言います（水が滞留して二度と戻らないようなものです。ある人は、こう言っています。タイミングよく賞しないのは、ただ費留（むだ使い）になるだけです。賞するときは、一か月以内に〔その日のうちに〕賞するのがよいです）。ですから、「賢明な君主は、これを思慮する。優良な將軍は、これを活用する」と言われるのです。利益にならないなら行動を起こしません。成功につながらないなら軍隊を使いません。危険でないなら戦争をしません（やむをえないときに軍隊を動員します）。君主は敵に対して怒っているからといって、戦争を始めてはいけません。將軍は敵に対して怨みがあるからといって、戦いをしかけてはいけません。利益につながるなら動き、利益につながらないなら止めます（自分の喜びや怒りの感情によって軍隊を動員しません）。そのときは怒っていても、そのうち怒りも消えて、喜ばしい気分になるものです。そのときは怨んでいても、そのうち怨みも消えて、楽しい気分になるものです。しかし、いったん滅んだ国は二度と立ち直りません。いったん死んだ人は二度と生き返りません。ですから、賢明な君主は、軽々しく開戦しないように注意し、優秀な將軍は、軽々しく戦わないように用心するのです。以上が国を安泰にし、軍を保全する方法です。

【原文】

『魏武帝註孫子』	『十一家註孫子』
用間第十三（戰必先用間、以知敵情） 孫子曰。凡興師十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金。內外騷動、怠於道路、不得操事者、七十萬家（古者、八家為鄰、一家從軍、七家奉之。言十萬之師舉、不事耕稼者七十萬家）。相守數年、以爭一日之勝、而愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之至也。非人之將也。非主之佐也。非勝之主也。故明君賢將、所以動而勝人、成功出於衆者、先知也。先知者、不可取於鬼神（不可禱祀而求）、不可象於事（不可以事類求）、不可驗於度（不可以事數度）。必取於人、知敵之情者也（因人間也）。故用間有五、有因間（鄉間）、有內間、有反間、有死間、有生間。五間俱起、莫知其道、是謂神紀、人君之寶也（因時任用五間也）。因間者因其鄉人而用之。內間者因其官人而用之。反間者因其敵間而用之。死間者為誑事於外、令吾間知之、	用間篇〔戰必先用間諜、以知敵之情實也〕 孫子曰。凡興師十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金。內外騷動、怠於道路、不得操事者、七十萬家〔古者、八家為鄰、一家從軍、七家奉之。言十萬之師舉、不事耕稼者七十萬家〕。相守數年、以爭一日之勝、而愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之至也。非人之將也。非主之佐也。非勝之主也。故明君賢將、所以動而勝人、成功出於衆者、先知也。先知者、不可取於鬼神、不可象於事〔不可禱祀而求、亦不可以事類求也〕、不可驗於度〔不可以事數度也〕。必取於人、知敵之情者也〔因人也〕。故用間有五、有因間〔鄉間〕、有內間、有反間、有死間、有生間。五間俱起、莫知其道、是謂神紀、人君之寶也〔同時任用五間也〕。因間者因其鄉人而用之。內間者因其官人而用之。反間者因其敵間而用之。死間者為誑事於外、令吾間知

而伝於敵間也。生間者、反報也。故三軍之事、莫親於間、賞莫厚於間、事莫密於間。非聖智不能用間、非仁義不能使間、非微妙不能得間之實。微哉微哉、無所不用間也。間事未発、而先聞者、間与所告者皆死。凡軍之所欲撃、城之所欲攻、人之所欲殺、必先知其守將、左右、謁者、門者、舍人之姓名、令吾間必索知之。必索敵間之来間我者、因而利之、導而舍之。故反間可得而使也（舍、居止也）。因是而知之。故郷間、内間可得而使也。因是而知之、故死間為誑事、可使告敵。因是而知之。故生間可使如期。五間之事、主必知之。知之必在於反間。故反間不可不厚也。昔殷之興也、伊摯在夏（伊尹也）。周之興也、呂牙在殷（呂望也）。故明君賢將能以上智為間者、必成大功。此兵之要、三軍所恃而動也。

之、而伝於敵間也。生間者、反報也。故三軍之事、莫親於間、賞莫厚於間、事莫密於間。非聖智不能用間、非仁義不能使間、非微妙不能得間之實。微哉微哉、無所不用間也。間事未発、而先聞者、間与所告者皆死。凡軍之所欲撃、城之所欲攻、人之所欲殺、必先知其守將、左右、謁者、門者、舍人之姓名、令吾間必索知之。必索敵人之間来間我者、因而利之、導而舍之。故反間可得而使也（舍、居止也）。因是而知之、故死間為誑事、可使告敵。因是而知之。故生間可使如期。五間之事、主必知之。知之必在於反間。故反間不可不厚也。昔殷之興也、伊摯在夏〔伊摯、伊尹也〕。周之興也、呂牙在殷〔呂牙、太公也〕。故惟明君賢將能以上智為間者、必成大功。此兵之要、三軍之所恃而動也。

【翻訳】

用間第十三（戦うにあたっては、必ず先にスパイを使い、そうして敵情を知ります）

孫子が言いました。およそ開戦して10万人の兵隊を動員し、軍隊を千里の先まで行かせる場合、人民の出費、政府関係者の負担は、1日につき千金となります。内も外も騒然となり、輸送に疲れ、

仕事に専念できない家が合計で七十万世帯になります（昔は、8つの家がグループとなり、1つの家が従軍し、残り7つの家が費用を負担しました。10万人の軍隊を動員するということは、生業に専念できないのが70万家となります）。敵と対峙することが数年におよんで、そうしてたった一度の決戦のチャンスを待つことになります。それなのに、恩賞や百金をおしんで、敵情を知らないままにするのは、とてもひどいことです。人民の将軍としてふさわしくありません。君主の補佐役としてふさわしくありません。勝利を思いのままにできる人ではありません。ですから、賢明な君主や優秀な将軍が、行動を起こしたときには必ず敵に勝ち、人なみすぐれた成功をおさめられる理由は、先知（先に知ること・先に知らせること）にあります。先知にあたっては、神様から教えてもらうべきではありません（神様を祭って啓示を与えてもらうことで知ろうとしてはいけません）。物事から類推すべきではありません（物事の類似を使って知ろうとしてはいけません）〔神様を祭って啓示を与えてもらうことで知ろうとしてはいけませんし、物事の類似を使って知ろうとしてもいけません〕。法則から確認すべきではありません（物事の法則を使って知ろうとしてはいけません）。必ず人から得て、敵情を知るようにするものです（人を頼りとするのです）。ですから、スパイを使うにあたっては、5種類があります。因間（郷間）があります。内間があります。反間があります。死間があります。生間があります。5種類のスパイがそろって活動し、その方法を知られません。これが「神紀＝運用の秘訣」というものです。君主にとっての宝です（その時の状況に応じて〔同時に〕5種類のスパイを任用します）。因間（郷間）とは、敵国の住民を利用して、スパイ活動を行うことです。内間とは、敵国の役人を利用して、スパイ活動を行うことです。反間とは、敵国のスパイを利用して、スパイ活動を行うことです。死間とは、外部に対してウソを本当のように見せかけることを行い、こちらのスパイにウソを知らせ、敵にウソの情報をつかませるスパイ活動です。生間とは、情報を持ち帰ってくるスパイ活動です。ですから、全軍における仕

事としてはスパイよりも親密にすべきものではなく、恩賞としてはスパイよりも手厚くすべきものではなく、仕事としてはスパイよりも秘密にすべきものではありません。聖智でなければ、スパイをよく用いることができません。仁義でなければ、スパイをよく使うことができません。微妙でなければ、スパイのもたらした情報の真偽をよく判断できません。なんとも目立たないものですが、スパイ活動はあらゆる場面で使われます。スパイした事柄について、公表するより先に聞き知っている人がいたなら、そのことをスパイした人とそのことを他人に話した人を殺します。およそ撃破したい軍隊、攻略したい城、殺したい人などがある場合は、必ずそれを守る將軍、側近、案内係、門番、雑用係などの姓名を先に知り、それらの人物についてスパイに調べさせて知らせさせます。こちらに潜入している敵のスパイを必ず搜索して見つけ出し、この機に乗じてスパイを利してまるめこみ、たくみに誘導してスパイを引きとめてたぶらかします（引きとめるとは、滞在させることです）。そこで、反間が獲得できて使えるようになります。それを利用して情報を知ることができます。そこで、郷間や内間が獲得できて使えるようになります。それを利用して情報を知ることができます。そこで、死間がウソを本当だと見せかけ、敵にウソをつかませることができます。それを利用して情報を知ることができます。そこで、生間が計画どおりに活動できるようにさせることができます。5種類のスパイ活動のことについては、君主は必ず知っておかないといけません。知るにあたっては反間が基本となります。ですから、反間は大事にしないわけにはいきません。昔、殷国が勃興するにあたって、伊摯が夏国に潜入してスパイとして活動しました（伊尹です〔伊摯は、伊尹です〕）。周国が勃興するにあたって、呂牙が殷国に潜入してスパイとして活動しました（呂望です〔呂牙は、太公望です〕）。ですから、聡明な君主や賢明な將軍で、すぐれた賢者をスパイとして使うことのできる人は、必ず大成功をおさめられます。以上は、軍事のかなめであり、全軍が動くにあたって頼りとするものです。

